
魔法少女リリカル マギカ（第2話）緊急指令 鹿目まどかを抹殺せよ！！

気導士

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカル マギカ（第2話）緊急指令 鹿目まどかを抹殺せよ！！

【Nコード】

N3195Y

【作者名】

気導士

【あらすじ】

この作品は、「魔法少女リリカル マギカ（第1話）魔法少女大決戦（改）」の続編となっております。先にそちらの方をお読みください。

（この前作は2011/8/1に修正・加筆済）

宇宙を進行する数億人の鹿目まどか軍団！！

鹿目まどかの、目的は「魔女」と呼称される全ての者を消し去る事。

止められなければ、全宇宙が「血溜まり」と化す！！
。 出撃する時空管理局のA・M・F・（アンチ・マドカ・フォース）

だが、高町なのは達は、鹿目まどか軍団の恐るべき戦闘力の前に
全滅の危機に。

その時、降臨するは、正義を愛する魔女の守護者たる、全宇宙最
強の魔女！！

「我が名は、サリー・ザ・マジシャン！ 鹿目まどか！
貴様は、このワシが殺してくれる！！ 今日、ここだな！！」

はたして、消滅するのは「魔法少女」か、それとも「魔女」か？！
走れ、ほむらよ、まどかの、もとへ！！

まどかを、戦いの運命から救い出せ！！
死闘の果てに、少女たちの、たどりつく未来は？！

「バイバイ！！ ——！」

次回、魔法少女リリカル マギカ

第2話 《緊急指令 鹿目まどかを 抹殺せよ！！》
に、ご期待ください。

リリカル マギカル 希望を胸に！！！！

この作品はnovelistにも投稿してあります。

「原作追記します」

Kanon・AIR・エンジェル・ビーツ！・宇宙戦艦ヤマト・ト
ップをねええ！ガンバスター・ガンダム・シリーズ・伝説巨神イデ
オン・サイボーグ009・超電磁ロボコンバトラV・超電磁マシ
ーンボルテス5・闘将ダイモス・勇者ライディーン・超合体魔術ロ
ボギンガイザー・超電磁大戦ビクトリーファイブ・冥王計画ゼオラ
イマー・装甲騎兵ボトムズ・はじめの一步・ダンボール戦機・新世
紀エヴァンゲリオン・グレンダイザー・ゲッターロボG・マジンカ
イザー・超獣機神ダンクーガBURN・デモンベイン・ドラゴンボ
ール・ドラゴンクエストダイの大冒険・聖闘士星矢・仮面ライダー

シリーズ・ウルトラマンシリーズ・特撮戦隊シリーズ・うる星やつ
ら・勝海舟・同人PCゲームマジカルバトルアリーナ

プロローグ（前書き）

時として、歴史的事実は複数の顔を持つ。

ここに関係者だけしか、知らない歴史から抹消された真実が有る。

それは、ミッドチルダの暦で、新暦0078年のことだった。

ブローグ

「きゃああああああああつ！！！！」

高町なのはは、苦戦していた。

なのはの、バリアジャケット（魔導師用戦闘防護服）の中でも、最も防御性能が高いと

言われるエクシードモードのジャケットが、ひどく破損してボロボロの状態である。

何箇所か、鋭い刃物で切り裂かれた様な傷痕があり、ある箇所は焼け焦げた様な痕があった。

ここは漆黒の宇宙空間。『地球』に良く似た惑星の周辺。

高町なのはに高速で接近する者がいる。

「たあああああああー！！」

以前に『美樹さやか』が使用していたモノと同じ魔力剣を手にした『鹿目まどか』が、

なのはに襲い掛かってきた。

「くっ！！」

まどかの攻撃は、受けてくださいと言わんばかりの、悪く言えば、戦いの初心者丸出しの、素直な上段斬り――

なのはは、レイジングハートで、『鹿目まどか』の魔力剣を防御する。

レイジングハートと魔力剣が、激しい火花を散らした。

しかし今度は、なのはを、『杏子の槍』を持った『別の鹿目まどか』が中距離から、

多節槍で攻撃してくる

——この攻撃も、多節槍を引き伸ばしての、直線的な単なる突きだった。

高町なのはが、二枚の防御魔法シールドを展開し、

『二人の鹿目まどか』の攻撃を何とか、防御していると、彼女の、背後から、射撃魔法の閃光が迫る！

「ぐふっ！！？」

背後からの、射撃魔法を背中にもろに受けた、なのはは、苦痛に顔を歪める。

なのはが、振り向くと、『バマミのマスケット銃』を構えた、『もう一人の鹿目まどか』が彼女を狙っていた。

高町なのはの目の前には、『3人の鹿目まどか』、いや数億人の鹿目まどか軍団』がいた。

『さやか剣』を持つ『鹿目まどか』が、なのはにその剣先を向ける。

だが、格闘戦が可能な距離ではない。

しかし、いやな予感がしたなのはは、咄嗟に防御シールドを再展開する。

……と、剣を持つまどかが、剣の引き金状の部分に指をかけ、トリガーを引くと、

——剣の根元で、小さい爆発が起きると同時に、剣の刃が、ミサイルのように飛び出した。

なのはを目掛けて、飛んできた剣の刃は、なのはの防御シールドに当たって跳ね返される。

攻撃を防がれた『鹿目まどか』は剣の柄の中からマガジンを引き出し、

新しいマガジンを剣に装填して再度トリガーを引いた。

すると、液体金属状のモノが剣の柄から出てきて

硬い長剣の形に凝固する。

——そして剣を持ち直した『鹿目まどか』が、その剣を上方に高く掲げると、

——それを合図に、なのはの近くにいる数百人の『鹿目まどか』が魔法の詠唱を開始する。

「来たれ！ さくらカード！！」

まどか達が詠唱すると、彼女達の頭上からカードの様な物体が出現した。

「契約のもと、まどかが命じる……ミラー！！！」

詠唱が完了すると、まどか達の足元には、星型を中心とした、未知の魔法陣が形成される。

「?!」

なのはの目前で、数百人の『鹿目まどか』が、なのはと全く同じ姿に変身した。

フェイトや八神はやての姿に変身した、まどか達もいる。

数百人の『高町なのは』が、なのは本人に対して、手にしたレイジングハートを向ける。

「『デイベイン・バスタ——ッッ!!!!!!!!」

数百人の『高町なのは』が同時に魔力砲撃を放った。

なのはを襲う巨大な桜色の砲弾。

「ぐううう——ッ!!!!」

この集中砲火を、高町なのはは、防御シールド全開でなんとか耐えた。

しかし次の砲撃にも耐えられるのか、なのはにも自信はなかった。

外見が全く同じであっても、所詮は模造品、コピーなのである。本物の高町なのはと同じ能力を持っている訳ではない。

だが、『塵も積もれば山となる』の諺ことわざが有るように、数百人のコピーなのはの、集中砲火は、オリジナルを超える破壊力を持っていた。

自分に向けて、レイジングハートを向ける
自分と全く同じ姿をした『数百人の鹿目まどか軍団』。

それは、高町なのはにとって、まさに『悪夢』としか言いようがない。

「どうして……」

どうして、こんな事に？」

なのはの、発した疑問は、
凍りついた宇宙空間に虚しく消えていった。

話は、10年以上前に、さかのぼる。

多次元宇宙のかなた。

本来、そこには何もなければよかった。

そこは宇宙ではない虚数空間。

宇宙から別の宇宙へ移動する場合はそこを通る。

しかし、その場所はどんな次元船の航行ルートでもない。
また時空管理局の次元艦の定期パトロールのコースでもなかった。

だが、その空間を突き進む物体が有る。
それはピンク色の光の矢の大集団だった。

矢を構成している魔力の波長が適合していないのか――
虚数空間では光の矢の群れは、比較的ゆっくりと進行している。

長い時間・長い年月をかけて、虚数空間を進行してきた光の矢は、
ついにある宇宙に侵入した。

通常の宇宙空間に入った光の矢の集団は、急激に速度を増し、
光に近いスピードで、ある恒星系に侵入していく。

さらに、光の矢の集団は、ある惑星を目指して進行する。
その惑星は、いくつかの宇宙に存在する『地球』と言う名称の惑
星に似ていた。

惑星に接近した光の矢の集団は、奇妙な金属音を発した直後、
それぞれが、全く同じ姿の少女に変化した。

少女の外見は地球の感覚で言えば14～15歳。
ピンク色のかわいい服装を着ている。

惑星を取り囲む少女達は、数億人はいると思われた。

彼女らは、口を開かないが、自分の意思を、
ある種の間精神波で周囲に放射した。

もし、ある程度の魔力資質が有り、『念話』と呼ばれる魔法能力
を持った者が

近くにいれば、彼女らの意思を言葉として聞く事が出来ただろう。

「私の名は、鹿目まどか。」

私の願いは、全ての宇宙にいる、全ての魔女を、消し去る事！！

私の、この手で……！！」

惑星に降下していく、数億人の少女達！

彼女の名は、鹿目まどか。

魔女を滅ぼす者。

第1章 異変

高次元世界。そこには、意外と数多くの高次元生命体が存在している。

彼らは、サイコ・マテリアルという疑似物質でモノを造り、それを素材として、町を造った。そこには、『人の生活』が有る。

ただ、様々な時代の、多様な惑星の文化が混在しているのでこの町は、お世辞にも整理されたきれいな町並みではなかった。

鹿目まどかと、美樹さやかは、この町の喫茶店『マギア』でウエートレスをしていた。

まどかには、魔女が生まれないように、因果律の調整をすると言う、

重要な役割が有ったのだが、魔法少女の因果の変動を感じない限り、今はやる事がないため、意外とヒマだったのである。

それは『あちら側』での曉美ほむら達の活動が順調である証拠でもあった。

喫茶店『マギア』に、初代リインフォースが、あわてて、飛び込んできた。

「あ——いらっしやいませ、リインさん」

「お久しぶりー」

ウエートレス用の赤を基調にしたとてもかわいいユニフォームを着ている——まどかと、さやかは、のん気に挨拶する。

「それどころじゃありません！」

初代リインフォースは、大声でそう言つと、魔法で『ビジョン・スクリーン』を造りだした。

「う？ うええええ？！」

スクリーンの映像を覗き込んだまどかが、素つとん狂な声をあげる。

「こ、これは？」

さやかも、息をのんだ。

虚数空間の海に浮かぶ、時空管理局本局では、警報アラームが鳴りっぱなしだった。

騒音で隣の人との会話が困難だったほどである。

それは、複数の惑星から、緊急連絡と、救助を求める通信が入っていたためだった。

「いったい何があったんですか？」

緊張した面持ちで、フェイト執務官は、義理の兄である

クロノ・ハラウン提督に尋ねた。

「今、詳細を確認中だが、魔導師、いや、魔法少女と思われる大軍団が、いくつかの惑星を襲撃して、多数の被害者を出していると言っ報告が入った。

被害者は、いづれも、跡形もなく消滅させられている、とのことだ」

クロノの説明に誰もが驚愕する。

「消滅？」

声をあげたのは、高町なのは一等空尉である。

「そして被害者には、共通点がある。

全員が女性である事と、高い魔力資質を持つ者である事。

さらには、被害者の属する民族、あるいは居住している惑星において、

魔法を使える女性の事を、『魔女』と呼称している点だ」

「???！」

このクロノの解説に一番反応したのは、フェイトであった。

「フェイト、何か、心当たりが有るのか？」

クロノは、確認のためフェイトに質問した。

「前に聞いた事があるんです、第137管理外世界にいる、魔法少女である暁美ほむらさんから。」

彼女の友人だった、鹿目まどかさんは、昔、異星人インキュベーターと、魔法少女の契約をする際、ある願い事をしたと。

その願い事とは、全ての宇宙に存在する全ての魔女を、自分の手で消し去る事だったと」

フェイトは、友の事を思い出すかのように、皆にそう話した。

「ま、まさか、その願いが叶った、言うんか?!」

半信半疑ながら、そう聞いたのは、フェイトや、なのはの、友人である八神はやて特別捜査官である。

「それは分からないけど、ほむら達の説明によると、インキュベーターが

少女の願いを叶える事が、魔法少女誕生の原因になるんだって。

まどかさんの願い事によって、魔法少女のルールが一部変更されたけど、

インキュベーターはどんな願いも、その内容に係わらず現実化させてしまうそうよ」

フェイトは、暁美ほむら達の説明を思い出しながら、解説した。

「ヴェロツサが言うとな、どんな気持ちも、どんな願いも、

強くなりすぎれば、裏返ってしまうつて。

しかし、願いを叶える代わりに、いたいけな少女に大変なリスクを負わせるとは、インキュベーターとか言うヤツラ、まるで、昔話に出てくる悪魔やな」

ヴェロツサとは管理局の中でも腕利きの査察官で、はやてを妹のように大切にしてくれている人物である。

「でも、最近では、ほむらさんの努力でその契約前に全ての秘密とリスクを相手に説明する事をインキュベーターに約束させたそうよ」

フェイトが、補足説明を追加する。

「まあ、あの子、怒らせたなら、おっかなそうやし。
——異星人を、びびらすくらいに」

「とにかく、まどかちゃんが、事件の原因なら、私達で止めないと」

「なのはの言う通りだ。」

これより管理局は、A・M・F・

アンチ・魔法少女・フォースを編成し、事にあたる」

クロノが、話のまとめに入ろうとする。

「でも、A・M・F・って別の意味が有ったんじゃない？」

なのはが、クロノに質問する。

「JS事件は、全て過去の話で、もう良いだろって事らしい」

A・M・F・とは、本来、アンチ・マギリング・フィールドの略であつた。

これは、魔力結合を阻害して、魔法の使用を出来なくするエネルギー・フィールドである。

JS事件と言うのは、新暦0075年に、天才技術者でもある広域次元犯罪者ジェイル・スカリエッティが起こした大規模テロ事件の事である。

問題のA・M・F・は、ジェイル・スカリエッティが造った無人戦闘メカに搭載されていたモノで、事件当時、管理局の魔導師部隊は苦戦を強いられた。

「ところで、ティアナやスバル達に連絡は？」

なのはが、フェイトに、かつての教え子達の状況を確認した。苦戦を予想した、なのはは、念のため、戦力を充実させようと考えていたのだが――

「ティアナ達は、例のマリアージュ事件への対処のため、ミッドチルダで活動しているの。」

エリオとキャロも、スバルに呼ばれて、向こうへ行くって、さっき、私に連絡がきたわ」

マリアージュ事件とは、いくつかの次元世界で、古代遺跡や歴史の研究者、

あるいはその関係者を狙って起きている連続殺人事件である。

この事件は、現在、

元機動六課のフォワードの4人組――

ティアナ・スバル・エリオ・キャロが中心になって対応している。

「まあ、今回は戦闘エリアが宇宙空間になりそうだし、

陸戦魔導師のあの子達に来てもらっても、

危険な目に合わせるだけになりそうな気も、するよ」

なのはは、本当は、多少残念な気もしていたが、すぐに頭を切り換えていた。

「そうだね。

ここは、私達が頑張ろう」

フェイトも、なのはを元気づけるように、そう言った。

「そうやな。

今回は、もうすぐ、私の頼もしい騎士達も合流出来そうやし」

「鬼に金棒。はやてにヴォルケン！」

ほむら達の世界での魔獣との戦いを、思い出したなのはは、思わず、変な言葉をつぶやいた。

「なんや、それ?!」

「あ、それと、ほむらちゃん達への連絡は？」

なのはが大事な事を思い出し、クロノに確認する。

「連絡は、こちらですが、

彼女達、魔法少女の参戦は認められない」

「クロノ！ どうして？！」

フェイトは、思わず大声を出していた。

「フェイト、君だったらどうする？」

「自分の親友と本気で戦えるのか？」

「！！
そ、それは……」

「そういう事だ。」

自分達の世界を守るため、今も頑張つて戦っているであろう彼女達に、

「君らの友人を倒すのを手伝ってくれ、とは言えないさ」

「……分かりました。」

「じゃあ、連絡と説明は、お願いします」

フェイトはやっと納得したようだった。

「じゃ、行くか？」

はやては、わざと明るい声で、二人に声をかけた。

「行こう、フェイトちゃん！」

「うん、行こう、なのは」

宇宙戦用装備を受け取りに行くのは達。

第2章 合流

「マギカ宇宙の『地球』と呼ばれる惑星上。

ここは、魔法少女連合会の秘密基地の一つ。

時空管理局とのリアルタイム通信が可能な専用通信ルームである。

暁美ほむらが、クロノ・ハラOWN提督に、噛み付いていた。

「どうして、私達が戦闘に参加しては、いけないんですか?!

相手は、あの、まどかなんですよ!!」

「さっきから説明しているだろう!!」

君達をかつての友人と戦わせたくは、ないんだ。

だが、彼女の行動によって今も被害者は増え続けている。

誰かが彼女を止めるしかないんだ」

「だったら!!!!」

「とにかく、君達の参戦は拒否する!!
以上だ!!」

「ブッッン　!!」

音声と映像が途切れる。

時空管理局側で一方的に、通信回線を切ったようだ。

「ほむら……」

「暁美さん……」

佐倉杏子と巴マミが、声をかけたが、ほむらは、何も答えない。

「……………」

唇をかみ、悔しそうな、ほむら。

マミも、杏子も、何を言っただい、分からなかった。

クロノの言葉は、そのまま、二人のほむらに対する気持ちでもある。

ほむらに向かって、

「まどかと、戦え」

なんて言えない――

そんな事を言える者は、どこにもいなかったのだ。

なのはと、はやては、クロノが艦長を務めるLS級次元艦へ乗り込むべく、管理局の内部通路を走っていた。

「はーやてー!」

横の通路から、守護騎士ヴォルケンリッターの一人、
鉄槌の騎士ヴィータが元気に走ってくる。

ヴィータの着ている服装は、赤を基調としたゴスロリ調に近い
デザインの『騎士服』と呼ばれる物である。

外見上は、地球の小学生ぐらいにしか見えないヴィータに
良く似合っていた。

ヴィータは、走り寄ると、そのまま、はやてに抱きついた。

「こ、こら！ ヴィータ！

急いで出撃せなあかん時に、何ふざけとるんや？！」

はやては、一応怒った口調でそう言ったが、顔は笑っている。

「ごめん、はやて。

でも、任務が長引いて、久しぶりだから、嬉しくて、つい」

「我らが主の、おっしゃる通りだ。
ちゃんとせんか！ ヴィータ！」

ヴォルケンリッターのリーダー格である烈火の将シグナムが
ヴィータをたしなめた。

「うー。

わ、分かったよ、シグナム」

「お久しぶりです、シグナム」

なのはが、シグナムに挨拶する。

「ああ、高町一等空尉も、元気そうで、なによりだ」

シグナムの服装は、まさに剣の騎士と呼ぶに相応しい、
やはり赤を基調としたプロテクター・タイプの騎士服である。

彼女は、いわゆるアネゴ肌と言う感じの美しくも逞しい女性剣士で、

実際、若い管理局員には、ファンも多い。

「ほんと、JS事件直後の、なのはちゃんは、ボロボロの状態で、主治医の私は、心配で、心配で、何日眠れぬ夜をすごした事か」

ヴォルケンリッターの中で、治癒魔法とサポート系魔法を担当する湖の騎士シャマルは、機動六課時代、所属隊員の健康管理を職務とするドクター役だったのだ。

激しい長期戦闘で、ダメージを負いひどい状態だったなのはを、人一倍心配していた人物でもある。

「その節は、お世話になりました」

なのはは、素直に、シャマルにお礼をかねた挨拶をした。

なのはも、シャマルがどれだけ自分を心配してくれたのか良く分かっているのだ。

シャマルの服装は、御伽噺おとぎばなしの中の魔法使いか、

古代の女性神官が身にまとっていた様なグリーン調のシックな騎士

服である。

シャマルは、癒し系お姉さんと言う感じのやさしげな女性だが、本気の戦闘時はかなり怖い、との噂もあった。

「シャマルの心配性は、今に始まった話ではない。
高町一尉とて、それほど、ヤワではあるまい」

最後に、話に加わったのは、ヴォルケンリッター
盾の守護獣ザフィーラである。

機動六課時代の守護獣形態、蒼き狼モードではなく人間形態である。

ザフィーラの服は、動きやすさ重視の騎士服であり、
格闘戦・接近戦を得意とする無口な男ザフィーラに、似合いである。

頑丈そうな手や足のアーマーは、鎧の一部にも見える。

彼の強さと、しぶさに憧れる管理局員は多いが、
最近、「兄貴と呼ばせてください！」
と言い出す若い男性局員が増加中であつた。

彼ら4人の守護騎士ヴォルケンリッターは人間ではなく、
ある魔導プログラムが実体化した疑似生命体である。

その魔導プログラムは『守護騎士システム』と呼ばれたモノであつた。

『守護騎士システム』は、超古代に造られた『夜天の書』と言う魔導書型ストレージ・デバイスの守護・防衛がその使命であり、守護騎士は魔導書『夜天の書』の一部であるとも言えた。

（ストレージ storage は、貯蔵・保管、あるいは、記憶を意味する）

今となつては、詳細は誰にも分からないが、元々『夜天の書』は各世界の優れた魔法技術を『記憶・保管』する事を目的に造られた魔導書だったらしい。

それが何者かによつて改造され、防衛プログラムの暴走によって、現在、位置する世界を破壊する恐るべき破壊魔導兵器『闇の書』へと変貌を遂げたのだ。

この『闇の書』は守護騎士ヴォルケンリッターとともに、長きにわたり、各世界を旅し、ある時は戦争を起こし、ある時は逆に戦乱に巻き込まれながら、最終的には、その所有者自身と、様々な世界の、双方を破壊してきたのである。

その悲しき運命に終止符を打ったのが、現在の『夜天の書』の所有者、八神はやて、であった。

はやてが、9歳の時、異世界より空間転移していた『闇の書』は、はやてを次の所有者にランダムに選択した。

それと同時に、はやての前に守護騎士ヴォルケンリッターが出現し、

彼女を『闇の書』の主・「所有者」として
守る様になったのだ。

その後、『闇の書』は、以前と同様暴走し、

はやての生活する世界全体を破壊するところであったが、
これを防いだのが、同じ世界に住んでいた高町なのはと、
その親友フェイト・テストロッサである。

（当時は、フェイトは、まだハラウン家ではなかった）

なのはと、フェイトの奮戦によって、はやてもまた魔導師として
覚醒し、

彼女ら3人と守護騎士ヴォルケンリッターはチカラを合わせて、
分離された『闇の書』の防衛プログラムを消滅させる事に成功した
のだ。

だが、この後、『夜天の書』の管制プログラムであった
初代リインフォースは――

自分の内部プログラムも改造されていて、このままでは自分は暴
走し、

新しい防衛プログラムが再生され、元の危険な状態になると警告し
て――

なのはと、フェイトに、自分自身を破壊してもらったのである。

ちなみに、現在、まどかと、さやかさやかの所に初代リインフォースが
存在しているのは、彼女の意識の『欠片』が、

まどか達のいた高次元世界にたどりつき、それを発見した何人かの
高次元生命体が彼女を哀れに思い、彼女を高次元生命体として
再生させたためである。

「合流が遅くなつてすまん。

私も隊長研修の途中で呼び出されて、あわてて飛んできたところだな」

シグナムが、合流が遅くなった件をなのはに詫びた。

「いえ、私達も似たようなものですから」

「みんな！

急いで艦に乗って！」

皆が再会の挨拶をしていると、フェイトがあわてて走って来た。

「フェイトちゃん、どないしたんや？

そないあわてて」

はやてが、息を切らしているフェイトに声をかける。

「まどか軍団が次の目標とする惑星が、判明したらしいの」

「なんやて?!」

「先に防衛のための、次元艦隊が出撃したらしいけど、私達も急いで欲しいってクロノが！」

「ゆっくり挨拶している場合じゃなさそうだね。

みんな、急ごう！」

なのはも、皆に急ぐ事を提案する。

「分かった！ 急ぐぞみんな！」

シグナムがヴォルケンリッターの将として
指示を出した。

「おう！ 腕が鳴るぜ！」

ヴィータも腕まくりして走り出す。

なのは達と守護騎士ヴォルケンリッターは、
クロノが待つ次元艦に乗り込むため先を急いだ。

第3章 開戦

そこは『地球』型惑星の存在する恒星系内部の宇宙空間。

まどか軍団が目標としている惑星を、守るべく先行した
3000隻の次元艦隊の姿が有った。

その艦隊旗艦の艦長席で、艦隊司令は大声で指示を出していた。

「L級およびLS級戦艦は、右翼に展開、
アルカンシエル発射準備！」

Aタイプ新造艦は、左翼に展開、
拡散魔導砲、発射準備！

巡洋艦および駆逐艦は後方で待機せよ！」

艦隊に指示を出した艦隊司令は、その後、独り言の様に呟いた。

「やれやれ、どれほど強力な魔導師軍団か知らんが、
この艦隊規模は少し大げさじゃないのか？」

「観測班より連絡！」

オペレーターが声をあげる。

「何か?!」

艦隊司令は怪訝な顔で聞き返した。

「こ、こちら、観測班！」

す、すごい敵の数だ……

敵の数が多すぎて、宇宙が黒く見えない……

う、宇宙が、宇宙がピンク色に見える……

て、敵が八分で、黒が二分だ……！」

観測班リーダーが、恐怖の叫び声をあげた。

その約3分後、時空管理局は、蜂の巣をつついた様な大騒ぎとなっていた。

担当オペレーターは、自分の目の前の機械に表示された情報が信じられなかった。

だが、事実は事実である。

「ぜ、全滅……！」

3000隻の次元艦が、3分も、たたずにか……！

ほ、本来たった一人の魔導師が分身した軍団相手に……

あれだけの最新鋭の戦闘艦が……！

バ、バケモノか?!」

クロノ艦（LS級次元艦）は、既に出撃準備を完了し
虚数空間にある管理局本局から出撃しようとしていた。

なのは達が待機している艦内ルームに、クロノが入ってくる。

「みんな、すまないが、出撃はもうしばらく後になる」

「どないしたんや?!」

「確か予定では、まどか軍団が目標としている惑星へ
急行して、先行している艦隊と合流するはずじゃあ?」

なのはが、手をあげてから、クロノに質問した。

「それがさっき、管理局本局から連絡が有って、先行艦隊は全滅し
たそうだ」

「全滅?!」

フェイトが驚いて、思わず大声を出した。

「目標とされた惑星は?!」

「転移魔法を使った住民の避難計画は?!」

なのはが、一番気がかりだった事を確認した。

「間に合わなかった、と、言うより実行されなかった。

艦隊司令が、鹿目まどかのチカラを甘く見た結果、
避難計画の指示そのものが出されていなかったらしい」

「なんて事……」

最悪の事態にフェイトが悔しがる。

「現在、まどか軍団の次のターゲットの惑星を分析中だ。

君達には、その間に見てもらいたいモノが有る」

クロノは、ブリーフィング・ルームへ、一同を移動させた。

ブリーフィング・ルームの椅子に全員が座った事を
確認したクロノは、ビデオ・スクリーンのスイッチを入れた。

そこには、ひとつの惑星を守るように展開している
次元艦隊の姿が映し出されていた。

「これは惑星の監視衛星が録画していた艦隊が全滅した時の映像だ」

なのは達が映像を見てみると、艦隊がまどか軍団に激しい攻撃を
加え、

その結果、まどか軍団は一時的にその数を減らしたが、どこからか、

鹿目まどかと同じ姿をしたモノが多数出現した。

そして、再度、艦隊が攻撃すると又まどか軍団が増加すると言いつ、同じ事を何度か繰り返し返した。

その内、まどか軍団のまどか達が上方に腕を上げると、軍団の上空の宇宙空間に、巨大な未知の魔法陣が出現した。

「何や、あの魔法陣は?!」

「ミッド式でも、ベルカ式でもねえな。
あんなの、見た事がねえ」

はやても、ヴィータも首をかしげる。

「どっちかと言うと、あれは……」

なのはは、その魔法陣になんともなく見覚えが有った。

なのはと、はやての出身地である『地球』は魔法資質を持った者がほとんどいなかったため、魔法文化は生まれなかったが、それでも魔法を

研究し、実践している者はいた。

そのような人々が残した魔導書や魔法の研究書に描かれた図に『生命の樹』と呼ばれたモノが有る。

それは、人体に存在する肉眼では見る事の出来ない霊的器官を表現した

モノとも、世界の全てを解説する概念とも伝えられていた。

（『生命の樹』は英訳すれば、『ツリー・オブ・ライフ』となる――）

しかし、ユダヤ教の神秘思想『カバラ』ではこの図形を『セフィロト』と言い、神のチカラがどのようにこの世界を創ったかを

説明する概念図である、とされている。）

鹿目まどか達が造りだした魔法陣は、その『生命の樹』と良く似ていた。

まどか軍団は、全員が魔法の弓矢を構えると、それを艦隊ではなく、自分らが造りだした魔法陣に向けた。

弓から発射されたピンク色の魔法の矢が、巨大魔法陣に着弾すると、魔法陣もピンク色に輝きだした。

そして約3秒後、巨大魔法陣からピンク色のレーザー光線のような、光のシャワーが艦隊に向かって発射された。

その光景はレーザー・マシンガンのようなだった。

レーザーに似た魔法弾が、次元艦に着弾すると、その次元艦は、爆発するでも、溶かされるでもなく、瞬時に消滅した。

この次元艦は、なのはや、はやての『地球』の尺度で言えば300～400メートル級の巨艦である。

その艦体が、あっけなく消滅していく様は悲壮感があまり無い代わりに、

言いようの無い不気味さを感じさせた。

「な、なんや、あの攻撃は?!」

映像を見ていたはやては、恐怖感の混じった声をあげる。

「むう、あれは炎熱系の攻撃魔法では無いようだ。

かと言って、アルカンシエル（空間歪曲魔導砲）のような空間歪曲攻撃でもない。

「いったい、何なのだ、あの攻撃は?!」

古代ベルカ時代から、戦い続けている歴戦の騎士であるシグナムにも、

その攻撃の正体は全く分からないようだ。

その時、奇妙な行動を始めたのは、2代目リインこと、リインフォース・ツヴァイであった。

リインは空中に浮かび上がると、自分のストレージ・デバイスである魔導書『蒼天の書』を自分から少し離れた空中に浮かべた。すると、はやてが手にしていた

『夜天の書』も同じく空中に浮かび上がる。

そして、リインと『蒼天の書』と『夜天の書』は、共鳴し合うかのように、

光りだした。

「リイン?!」

どないした?!

何しとるん?!」

はやてが、質問を投げかけるが、当のリインははやての問いにも答えず、

目をつぶり、作業に集中しているようだ。

彼女は『蒼天の書』を通して、『夜天の書』にアクセスし、そこに保管されている膨大なデータから得体の知れない敵の攻撃を分析しようとしていた。

しばらくすると、リインと、2冊の魔導書の光が消え、

『夜天の書』は、はやての手の中に戻った。

リインは、自分の魔導書『蒼天の書』を手に取ると、目を開けて、皆に向き直った。

「はやてちゃん、それに皆さん。」

アレは、とんでもなく、まずいです」

「分かったんか?」

あの攻撃の正体が」

はやてが尋ねる。

「はい。アレは、ただの原子分解砲でもなければ、素粒子破壊ビームでもありません。」

いいですか。生命体にも、私達デバイスにも、様々なマシンにも、時の流れの中に、存在するための原因が有ります。

あの攻撃は、その原因と、現在の対象物を結び付けている

《因果の糸》を断ち切り、対象物を完全に消し去る《完全消滅魔法》です！」

「な?!」

「なんて恐ろしい……」

リインの解説に、驚愕するはやてと、シャマル。

「確かに、原理を聞く限り、今までに前例の無い恐るべき攻撃魔法だ」

さすがにシグナムは冷静に話を進めた。

「しかし、映像を見る限り、回避はさほど難しくは、なさそうだ。

この魔法陣が輝きだしてから、消滅魔法弾が発射されるまで、約3秒程度のタイムラグがあるようだ。

魔力弾がこちらをホーミング（自動追尾）せず直進するタイプなら、

「この隙に回避可能なはずだ」

「そうだね。」

「これなら勝算はあるかも」

なのはも、自分の考察を述べる。

「おう！」

敵弾を、回避できれば、後は、あたしのギガントシュラークで、鹿目ナントカは、全部たたきつぶしてやるぜ！！」

ヴィータも、闘志を露にする。あらわ

「では、今後の作戦の詳細だが……」

クロノが話をまとめ、

作戦の細かい内容に関する会議を開始した。

約1時間後、クロノ艦から出撃したなのは達は、地球型惑星の衛星軌道上、宇宙空間にいた。

「そろそろ、まどか軍団が来る！」

二人とも、迎撃準備は良い？」

なのはは二人の戦友に声をかける。

「私はOK！
はやて、シグナム達は？」

「予定通り、地上で住民の退避準備しとるよ。
畏の方も、もう準備できとるそつや」

フェイトの問いに、そう答えるはやて。

なのはは、バリアジャケット（魔導師用戦闘防護服）を
エクシードモードに換装している。

これは、JS事件の最終決戦時に使用されたタイプで、機動力や
回避性能は低いが、
その代わりに最高の重装甲と爆発的な攻撃力を秘めた、なのはが『
本来の実力』を
自在に振るうための形態である。

外見的には、約10年前に、ほむら達魔法少女と共闘した際
なのはが着ていたバリアジャケットに良く似ている。

——上腕部に、黒いリング状のアーマーが、追加され、靴と袖の
部分も

硬いアーマー（装甲）と化し、また今までのバリアジャケットの特
徴である

胸元の赤いリボンがなくなっている。

——部分的にごつい感じになったものの、
セクシーなビスチェ型インナーと、白地に青い
ラインの入ったロングスカートの組み合わせが、
可憐な印象を生み出している。

——天空を舞う、白い戦闘ドレスは、新人魔導師達の憧れの的である。

なのは達と、クロノ艦から出撃した管理局の魔導師部隊は、全員が宇宙戦用の補助デバイスを、両腕・両足・腰に、合計6個付けていた。

全員が、宇宙戦用ソフトウェアを自分のインテリジェント・デバイス

（人工知能を搭載した魔導演算機器）にインストールしていたが、戦闘中、

敵の攻撃等によりデバイスが作動不全を起こす可能性を考え、生命維持システムを含めた補助デバイスを装着していたのだ。

気休めのな装備ではあるが、『もしもの場合の命綱』と言えるため、その有り無しが、気持ちを変えるのだ。

「来た！」

なのはが、全員に注意をうながした。

「まずは、話し合いで説得してみよう。
話を聞いてくれればだけど……」

フェイトが対応を提案する。

惑星に接近してくる数億人の鹿目まどか軍団。

「待つんや、まどかちゃん！」

はやてが、思念通話で話しかける。

一斉に、はやてを見る数億人の鹿目まどか達。

——こわいよ、これは。

そして、軍団のリーダー格らしい一人の
鹿目まどかが、はやてに近づいてきた。

その鹿目まどかは、いかにも、魔法少女らしいかわいいピンクを
基調とした

魔法少女コスチュームを着ている。

——なのは達が、約10年前に共闘したまどかも、同じ姿をして
いた。

……そして現在の鹿目まどか軍団も、全員同じ姿である。

「あ、あのー、どちら様ですか？」

リーダー格の鹿目まどかは、その外見通りの

——中学2年生の、女の子らしいかわいいうさで、首をかしげ
と、

はやてにそう尋ねた。

「は？」

わ、分かんのか？

ウチらのことが」

はやては、リーダー格まどかの、予想外のリアクションに思わず、
逆に質問する。

「あ、はい。」

ええと……

初対面だと思いますが……」

答えを返すリーダー格まどか。

「つ、つまり、ウチらが、
年をとったから、誰か分からんと？」

そついう事なんかあ——?!」

この、はやての言葉には、
まどかでなく、なのはと、フェイトが即座に反応した。

「と、年をとったって……
前にまどかちゃん達と出会ってから
正確に言つと約9年だったつけ？」

そ、そんなに変わったかな私達？」

なのはが、フェイトに尋ねるように呟く。

「うん。」

年をとったと言つよりも……

はやては、ともかく、私となのはは——」

ここで、フェイトはなぜか――

自分の胸と、なのはの胸と、はやての胸を見比べて……

「おとなっぽい、体型になったと、
言っべきじゃない？」

このフェイトの言葉に、はやては、自分の胸を数十秒間、
じっと見つめてから――

「うわ――ん！！」

フェイトちゃん！

そ、それは、あんまりや――！！！！」
と大騒ぎするはやてだった。

「あのー、良く分かりませんが、邪魔をしないでいただけますか？

私は、宇宙に存在する全ての魔女を
滅ぼさなければいけないんです」

まだ大騒ぎしているなのは達に冷静に告げるリーダー格まどか。

さすがに、真顔になる、なのは達。

「そう言われたら、
邪魔をしない訳にはいかないじゃない」

なのはの、目つきが変わる。

「そう言うことやな」

「罪もない大勢の人々を見捨てる訳にはいかない」

はやても、フェイトも顔つきが、戦闘モードに変化していた。

「なら、仕方ありません。

私の――魔女との戦いを邪魔するなら、あなた達も、魔女の仲間として――」

いまさつきまで、少女のかわいらしさを春風のごとく周囲に振りまいていた、リーダー格まどかから、強大な魔力と、禍々しい殺気が宇宙に放たれている。

「――抹殺します！」

リーダー格の鹿目まどかが、そう宣言したとたん、いままで静止していた鹿目まどか軍団全員が動き出した。

「交渉決裂やな！」

いくで、リイン！」

「了解です、はやてちゃん！」

はやての指示に、一度飛んでから、

空中をユーターンしてくるリイン。

「ユニゾン——インッ！」

リインが、はやての体の中に飛び込み、融合し——
はやての、瞳と、髪の毛の色が変化して、その魔力が増大する。

これが、融合騎——人格型ユニゾン・デバイスである
2代目リインフォースの特殊能力——ユニゾン（融合）である。

ユニゾンは相性のいい特定の相手でないと、失敗する事も有るし、
人によってはあまり能力を増幅しきれないが、——
リインは、はやてのリンカーコア

（魔導師の体内の魔力器官）から生み出された事もあり、
……はやてや、ヴォルケンリッターの4人と
リインの相性は抜群である。

「皆、注意して！」

まどか軍団は、恐らく最初から、
消滅魔法を使ってくる！」

なのはの、警告通り、まどか軍団が、消滅魔法の発動準備をし始
める。

リーダー格の鹿目まどかが、腕を上方に振り上げると、
『生命の樹』の図に似た巨大な魔法陣が宇宙空間に出現した。

そして、まどか軍団は、ほぼ全員がその手に魔法の弓矢を構え、
『生命の樹』の魔法陣に狙いをつける。

「天使カマエルよ。」

我が敵に神の愛と裁きを与えよ。

ゲブラー・ブラスト！」

リーダー格まどかが、魔法の詠唱を行うと、まどか軍団は魔法の矢を、

『生命の樹』の魔法陣に向けて発射した。

魔法の矢は、『生命の樹』のやや左側に着弾し、直後『生命の樹』の魔法陣はピンク色に輝きだした。

それを確認したなのは達は、一斉に回避行動に入る。

（——1……2……3——）

回避しながら、なのは達は頭の中で、秒数をカウントする。

——3秒後、

巨大魔法陣からピンク色のレーザー光線のような魔法弾が連続で撃ちだされた。

この消滅魔法弾を、ぎりぎり回避に成功したなのは達が反転し、反撃を開始する。

「クラウドソラス！」

はやての、シュベルトクロイツ（はやて専用の非人格型アームドデバイス）から

発射されたビームのような白い砲撃魔法がまどか軍団へと直進する。

はやての、砲撃魔法は、巨大な魔力爆発を起こし、
白い球状の光が、数百人の鹿目まどかを飲み込んでいく。

「いくよ！ レイジングハート！」

「オーライト！ スタンバイ！ ロード・カートリッジ！」

なのはが、相棒を手に突貫する。

——そして、なのはがレイジングハートを
まどか軍団の密集ポイントに向ける。

「ストライク・スターズツツ！！」

ファイヤ——ツ！！！！」

強力な砲撃魔法と高速誘導弾のコンボ技がまどか軍団をことごとく、
なぎ倒していった。

なのはと、ほぼ同時にフェイトも砲撃魔法を撃つ。

「トライデント——」

フェイトが左腕で胸元に魔力をためるような、
体勢をとると、バルディッシュは魔力

カートリッジを2発ロードし、

——フェイトの足元と、前方に、
ミッド式魔法陣が現れる。

——フェイトの体と、バルディッシュから

電流の放電が、稲光のように放射されていた。

「……………スマツシャ——！！！！」

フェイトが左腕を前方に向けて伸ばすと、その左手から金色の砲撃が撃ちだされ

——直後2本の砲撃も発射され、

——合計3本の金色の光の矢が、まどか軍団を焼き払っていく。

他の魔導師部隊も、それぞれ善戦していた。

「いけるで！」

シグナム達の、準備完了まで、あと45分！

なんとしても、まどか軍団を、ここで足止めするんや！」

はやてが、白熱していく戦場で叫んだ。

その頃、惑星の地表では、

ヴォルケンリッターの4人と管理局局員達が

住民の避難誘導を行っていた。

「急げ！ 結界発動時刻まで、余裕がないぞ！」

「はい！ 避難急がせます、シグナム一等空尉！」

局員に指示を出すシグナム。

「なあ、シグナム。」

「はやてや、なのは達、大丈夫かな？」

「ヴィータが心配そうな声で話しかける。」

「絶対大丈夫だ！ 信じる！」

「余計な心配をする暇が有ったら、体を動かせ！」

「わ——てるよ！（分かってるよ！）」

「ヴィータが持ち場に戻ると、入れ替わりにシマルがシグナムの所に走ってきた。」

「どうだ、シマル？」

「エリアFから、Lまで避難完了したわ」

「そうか。意外と早かったな」

「ええ。」

「それにしても……」

「やはり、お前も、気がついていたか？」

「シグナムは、確認するように聞いた。」

「シマルは、一度深く頷いてから、——」

「惑星規模の避難なんてそうそう有る事じゃないわ。通常の事故や災害に対する避難訓練をいくら実施していたと

しても——この星の住民の避難の仕方はあまりにスムーズ過ぎる」

「私も、最初からその点に違和感を感じていた。普通ならば程度の差こそあれ、パニックが起きてもおかしくない状況だから」

「実はそのことで、この星の『魔女』のおばあさん、から興味深い話を聞いたわ」

「その話とは？」

真相にせまる話に、心なしか緊張するシグナム。

「この星にはある種の『予言』が伝わっていて、それは——

いつか、この星に『全ての魔女の天敵』が、現れる。この星に住む者達はそれに備えよ」

昔話の語り手のような口調でシャルマルが解説する。

「なんだと?! それでは……」

「鹿目まどか軍団の出現を予知していた何者かが過去に存在していた、と言う事ね」

「……まさか」

「シグナム？」

「……いや、なんでもない。
シャマルは、作業に戻ってくれ。
もうあまり時間がない」

「ええ」

シャマルは、急ぎ足で担当地域に戻っていった。

そのシャマルの後姿を眺めながら、
シグナムは独り言のように呟いた。

「まさか　な……」

第4章 魔砲

「あと30分！ 皆、頑張つて！」

なのはが、全員に声をかける。

衛星軌道上の戦いは、ここまでは順調だった。

まどか軍団が、消滅魔法を使つても、約3秒のタイムラグがあるので、

ぎりぎりではあるが、なんとか回避出来たのだ。

多少の疲れはあつても、管理局魔導師部隊にダメージはなかった。

あれだけ、大量にいた、まどか軍団も少しは数を減らしたように見える。

「すごいね。
かなり強い……」

戦況を冷静に眺めるリーダー格の鹿目まどかが、感心したように、そう呟いた。

「……それなら、こういうのは、どう？」

再び、宇宙空間に、『生命の樹』の図が浮かび上がる。

「また、消滅魔法か？
何度やっても同じ事や！」

はやてが、うんざりした声を出す、――

「待って……いや――違う?!」

なのはが、警告するように大声を出した。

「天使ハニエルよ、我らに勝利を。」

ネツ阿克・メーザー!!」

リーダー格まどかが、魔法の詠唱を行うと、再度、まどか軍団の魔法の矢が、発射された。

しかし、今回の魔法の矢は『生命の樹』のやや右下の部分に着弾し、

――直後、その箇所からすぐに白いレーザーのような魔法弾が速射砲のように連射された。

「なっ?! 速い?!」

「なのは!!」

フェイトが、叫ぶが、もう遅かった。

「きゃああああ?!」

「うああああ!!」

フェイトは高速回避に成功したが、なのはと、はやて、

そしてほとんどの魔導師部隊員が、この魔法弾に当たってしまった。

「わわわわ！ か、体が消えてない？」

はやてが、あわてた声をあげる。

「消滅魔法弾じゃない？」

なのはも、これが消滅魔法弾ではないことに気づいた。

「そやけど、結構な威力やで！
バリア用魔力をこっそり削られたわ」

「高速連射弾に変更してきた？！」

「しかも、貫通性の高い魔力弾や。
かえって、やっかいかもしれん！」

はやての言う通りだった。

今度は、発射までのタイムラグがなく
——連射の速度が速く、弾速も速い。
——しかも、連射している時間も長い。

とても、回避しきれるモノではなく、バリアか防御シールドで耐えるしかなかった。

だが、防御すれば、するほどこちらは、魔力を消耗していく。

やがて、管理局魔導師部隊には、魔力を使い果たして、ダメージを受ける者も出始めていた。

「このままじゃ、ジリ貧や！」

でかいの一発撃つで！

なのはちゃん！ フェイトちゃん！」

「援護するよ！ フェイトちゃん！」

「了解！」

はやてからの、提案を受けたなのはと、フェイトがオトリとしてまどか軍団に突進する。

なのはと、フェイトの二人は2本の二重螺旋のように高速飛翔しながら

誘導魔力弾を撃ちまくる。

「アクセル・シューター

—— シュートッ！」

なのはの、桜色の誘導弾がまどか軍団にそれぞれ着弾する。

「プラズマ・バレット！」

フェイトの金色の高速誘導弾が宇宙の闇を切り裂いて、まどか軍団の頭上に降り注いだ。

なのは達からかなり離れた空間で、はやては、シュベルトクロイツを、高く掲げている。

はやての、足元と、頭上に大型のベルカ式魔法陣が出現し——はやての前方には巨大な黒い魔力球が出来ている。

「遠き地にて、闇に沈め。」

デアボリック・エミッション!!」

はやてが、詠唱すると、上方のベルカ式魔法陣から白い光線が黒い魔力球へと伸び——黒い魔力球は、一度見えなくらい小さく縮小してから、爆発的に巨大化して、まどか軍団をその中に飲み込んでいった。

そのような、まるで小型のブラック・ホールだ。

「——はやて!」

フェイトが、声をかけたが、——

「あかん。」

まどか軍団は、うまく散開して回避しおった! そやから、思ったほどの効果が得られなかった」
落胆の声をあげるはやて。

「うーん。」

「こちらも、攻撃方法を変えるかな?」

なのは達の、様子を伺うように観察していたリーダー格の鹿目まどかが、小声で呟いた。

「みんな程、うまく使えるか分からないけど……
みんなの武器、コピーさせてもらうね」

誰に向かって言っているのか、——リーダー格まどかは、そう言
った。

次の瞬間、まどか軍団のその手に

さやか of 魔力剣・杏子の槍・マミのマスケット銃が、握られていた。

さらに、一度人数が減少したまどか軍団だったが、宇宙からわき
出るように

増援が出現し、その数量が回復していく。

「えっ?! あれは?」

驚くのは達に、マスケット銃を持つまどか達が発砲してきた。

「実体弾?!」

「な?! 質量兵器?!」

バリアで防御するも、やはり魔力を削られていく。

そんな、魔導師達に、まどか軍団が数にモノを言わせた接近戦を
しかけてくる。

遠距離からの魔力弾と銃撃で、魔力を削られ、防御が薄くなった
ところに、

接近戦を強いられたのだから、——

射撃戦を主戦法としている管理局部隊は、総崩れとなった。

「ぎゃあっ……」

「た、助けて……」

「がはっ……」

さやか劍で斬りつけられる者、杏子の多節槍で突き刺される者、
——被害甚大だった。

——宇宙が、『血溜まり』と化していく。

「このままやと、足止めに必要な戦力が不足する……」

「もうあと、15分。」

もう少し、何か……

大きなダメージを与えられる広域攻撃を……」

悩むフェイトに、——

「それなら、アレしかないよ！」

と、なのはが声をかける。

「アレ？　って、まさか？！」

「その、まさかだよ」

なのはの言う『アレ』とは、

過去に、なのはとフェイトが造りだした

「N&F 中距離殲滅コンビネーション：

ブラスト・カラミティー」の発展・進化技である。

過去——闇の書事件の解決した年の、次の年の5月に、——管理局本局のトレーニング・ルームにおいて、そのまれに見る集団戦の模擬戦が行われた。

この模擬戦は、はやてと、ヴォルケンリッターの5人と、——なのは・フェイト・クロノそして、ユーノ（なのはの、魔法の師匠だった少年魔導師）、アルフ（フェイトの使い魔）の5人——で戦うということでもない、集団戦だった。

（ミッドチーム 対 ベルカチーム 戦、とも言われている）
「ベルカ式騎士 対 ミッド式魔導師 戦 とも——」

そして、この模擬戦は、なのは・フェイトが撃った「ブラスト・カラミティー」と、はやての撃った

広域攻撃魔法（詳細不明）が、大激突して、——
管理局本局の建物に大穴を開けるといいう、結果（損害）を残して終了したのである。

しかし、「ブラスト・カラミティー」は、魔力消費が大きい割りに、

その効果範囲は、はやての、広域攻撃魔法に比べれば、大した事はなかったので、その後使うことはなく、技としても忘れられていた。

だがJS事件の際、はやてが思ったほど活躍出来なかったこともあり、
大量の敵軍を相手にした際に有効な技を、「ブラスト・カラミティー」を

元にして、考案していたのだ。

「でも『アレ』は、まだ実験中のモノだし、私達3人が集中しなければ、使えない。

——誰かが援護してくれないと……」

フェイトの、この言葉に——

「ならば、我々が、お三方を援護致します！」

と、声を上げたのは——

高町なのはの、元教え子達だった。

「君達?!」

驚いているなのはに、——

「お話は、聞かせていただきました」

「高町教官の訓練のおかげで、我々は、まだほとんど無傷です」

「我々が、援護致しますので、皆さんは、目的の特技を、思い切りぶっぱなしてください！」

元教え子達の厚意に、なのはは、——

「その気持ちは、嬉しいけど、みんなも結構、疲労が溜まっているしケガもしてる。

無茶は、させられないよ」

「なんの！」

高町教官のために、ここで散れるならば、
自分は本望であります！」

「自分もであります！」

「私も！」

「俺も！」

「あたしも！」

なのはの、胸に熱いものが、こみ上げるが――

「もう！」

自分の命を粗末にするような戦い方を、教えたつもりは、ないん
だけど！」

――と、思わずどなる、なのはだった。

「はっ！ 申し訳ありません！」

「皆さんも守り、

そして自分の命もきっちり守ってみせます！」

「そして、ともに勝利を！」

「ならば、良し！」

それじゃ、皆、援護よろしく！」

ようやく納得して、元教え子の、魔導師達に援護をまかせるなの

はだった。

「なのはちゃん、
良い生徒、持ったもんやな……」

なのはに、声をかける、はやて。

「うん……、

はやてちゃん、フェイトちゃん、
いきなりの、ぶっつけ本番、

——ほとんど練習なしでの、
実戦テストになっちゃったけど……」

「まあ、いつもの事や。

そやけど、ウチは信じとるよ。

この3人なら、絶対に大丈夫や！」

はやてが、確信のこもった目でなのはを、見る。

「私も、なのはと、はやての、二人だから、命を預けられる。
私もそう思う」

フェイトもありのままの、素直な気持ちを二人に伝えた。

「……うん、ありがとう。

はやてちゃん、フェイトちゃん。

それじゃ、——　いくよ！」

「了解、なのは」

「了解や！」

——今こそ、3人の意志と命と、その魔力、そして3機のデバイスのチカラが
ひとつになろうとしていた！

「レイジング・ハート！」

「スタンバイ・レディ！」

「バルディッシュ！」

「ゲット・セット！」

「ええか！ リイン！」

「はいっ！」

いつでも、どうぞ！」

3人は、正三角形の形に円陣を組み、
お互いのデバイスの魔力回路をリンクさせた。

今、6つのチカラとイノチがひとつになる——

「空間魔力、集束！」

——なのはが、得意の魔力集束技術によって戦闘空間に散った膨大な魔力エネルギーをかき集め、集束していく！

——本来ならば、この集束した魔力で、
なのはは、集束魔導砲——

スターライト・ブレイカーを撃つのだが——

「ディバイド・エナジー・スタート！」

——なのはは、レイジング・ハートを通してフェイトとバルディッシュへ、

集束した魔力を供給していく。

——そして、

「電気変換！」

「ハイパー・プラズマ・バースト、スタンバイ！」

——フェイトは、なのはから、受け取った

巨大な魔力を、その変換資質によって膨大な電力へと変換していく——それは、凶暴な程の破壊力を生み出す。

「もう少し……もう少し」

なのはが、集め、フェイトが造りだしたエネルギーはさらに、巨大化していく！

「エネルギー臨界突破！」

いいよ！ はやて！」

——フェイトの合図に、

「やるで！ リイン！」

「広域砲撃制御！ 照準入ります！」

——発射可能な、エネルギーを、最後に、

はやての得意とする広域攻撃魔法へと

いわば強引に変換して、ぶっぱなそうと言う無茶と言うより、むしろ狂気の大技である！

——その威力と効果範囲は、超弩級なモノだった。

「」 「」 「」 我らが命と、魔力をかけて、

——集めて放つは、超越魔砲！　「」

「」　トライアングル・カラミティ　——！！！！　「」

3人の叫びとともに、巨大な、金色に輝くプラズマ球が宇宙に広がっていく！

まどか軍団はあわてて、回避しようとしたが、——管理局魔導師部隊の陽動に気を取られていてタイミングを狂わされ、——高温プラズマの輝きの中に消えていった。

——「やった？！」

油断せずに、周囲を警戒しつつ、なのはが、まどか軍団の様子を確認していると——

「ちょうどいいタイミングや！
今、シグナムから連絡きたで！
準備完了や！」

はやてが、なのはに念話通信をいれた。

「よし、それじゃ、全員後退！
鹿目まどか軍団から、距離をとって！」

「了解です、高町一尉！」

なのはの指示に従って、管理局の魔導師部隊は残りの、まどか軍団から、距離をとって後退した。

「?!」

——リーダー格の鹿目まどかは、
一瞬怪訝な表情を見せるが——

「……そうやって、最初から素直に、
道を開けてくれば、お互いに傷つけ合わずに
すんだのに……」

悲しげな顔で、そう言い残すと、リーダー格まどかは、
残存する軍団を引き連れ、惑星へと降下していく。

ピンク色の魔法少女達は、大気の摩擦熱で生じた赤い炎をその身
にまとい

隕石のごとく、星へと落ちていった。

「負傷者は、味方艦に緊急回収してもらって！
戦闘可能な者だけ、惑星に降下する！」

なのはは、それだけ簡単に命令すると、惑星の大気圏に突入した。
——フェイトと、はやても、その後が続く。

「来ました！」

まどか軍団、惑星に降下してきます！」

惑星地上の管理局局員が叫んだ。

「来たか！」

「シグナム一尉！ 転送は？」

「まだだ！ 私の指示を待て！

—— 探知妨害と、幻術魔法のみ、術式開始！」

シグナムが空を睨みながら、返事をする。

—— 探知妨害は、まどか軍団が、転送された

住民達を追跡出来ないようにするため、

—— 幻術魔法は、後から来る増援の魔導師部隊を、
魔女達であると、誤認させるためのモノだった。

「まどか軍団、結界エリア通過します！」

局員が追加報告した。

「はやてちゃんや、なのはちゃん達、
魔導師部隊も結界エリア突入！」

今度は、シャマルが、大声で叫ぶ。

「住民の転送開始！ 急げ！」

シグナムが、命令を下した。

「了解！ 長距離転送開始します！」

管理局局員達が、転送システムを作動させ、

—— 所定の場所に集まっていた

惑星の住民達が次々と転送されていた。

—— そして、

「転送反応を確認！」

増援の本局魔導師大部隊が惑星地表に転送されています」

退避のため、転送されていく、住民達と、入れ替わりに、増援の本局魔導師大部隊が多数、地上に出現した。

——数的には、「トライアングル・カラミティー」で、その数を減らした、まどか軍団を圧倒していた。

——今度は、接近戦・格闘戦が得意な部隊も多数混じっており、様々な状況に対応できるはずであった。

——宇宙空間では、クロノ艦の同型艦が現状で500隻ほど転移で集結しており、

先の魔導師部隊はここから、転移してきたのである。

——増援の次元艦も、さらに転移してその数を増やしていく。

「住民の転送避難完了！」

そして味方の増援部隊も、全部隊、転送完了です！」

局員が、大声で報告する。

「今だ！」

惑星用 —— 強層型捕獲結界作動！

星を閉じる！」

シグナムの指示で、局員が結界装置を作動させ、

——超大型の魔力結界が、惑星そのものを、包み込んでいった。

「はやてちゃん！」

はやての姿を見つけたシャルが駆け寄る。

「シャル！」

すぐに皆に治癒魔法を！」

はやてが、シャルに命じ、——

「あ、はい！」

クラールヴィント！」

「ヤー！」

シャマルの指輪型アームデバイス

——クラールヴィントが返事をして、治癒魔法を発動させる。

「静かなる風よ……

癒しの、恵みを運んで……」

魔法の詠唱を行う、シャマルの足元にはベルカ式魔法陣が出現し、

——彼女の体からあふれた、緑の魔力光と、葉の様な白い輝きが

——はやて・なのは・フェイトを包み込むと

——3人の、バリアジャケットの損傷と、体の傷が、あれよ、
と言っ間に消えていく。

——だが、それでも、3人の、体力と、魔力はすぐには、
回復していない。

実戦は、コンピューター・ゲームではないので、全て回復させて
くれる

万能薬はないのである。

——その時、天空より多数の光が舞い降りた。

——その姿、人に天罰をくだす、神の軍団のごとし。

…… その、ひとつ

——リーダー格の鹿目まどかは、

八神はやての、目の前に、降り立つと、

……はやてを、怒りに燃える目で、睨みつけた。

「やってくれたね。」

私達をここに、閉じ込めるつもり？」

対峙するはやては、腕を組み、
リーダー格まどかの前に、仁王立ち。

——その後ろに、控えしは、
魔導騎士団ヴォルケンリッター！

はやては、不敵な笑みを浮かべつつ、——
「ふっふっふ！」

もう、他の星には、行かせんよ！

ここで、決着をつけてやる！

いくで！ みんな！」

「「「「
おうっ！」「」「」

第5章 戦争

戦争が始まった。

——そう、それは戦争としか言えなかった。

今現在も、内戦を続けている次元世界もある。

——国同士が対立関係にあり、その軍隊が戦闘状態にある世界もある。

——それでも、全惑星規模で、数億人の魔導師と敵軍が戦う戦争など、

ここ50年程はなかった事例である。

——砲撃魔法の流れ弾が巨大なビル群を崩壊させていく。

……同様の流れ弾によって、広大な工場地帯が火の海と化して炎上する。

——草原は燃え上がり、湖は蒸発する。

——高熱の大气が、風と雲を呼び、あちこちで、台風と竜巻が暴れまわった。

——管理局の魔導師部隊が、射撃魔法を一斉発射すれば、魔法少女達も、

実体弾を連射して応戦する。

——古く美しい町並みが、粉々になって消えていく。

——大地が抉られ、美しかった山々がその姿を醜く変えていった。

——倒れていく、名も無い勇者たち。

自分達は、いったい何のために、戦っているのか、

——そんな疑問は、頭から消えていく。

……それでも、彼らは必死に戦っていた。

ヴォルケンリッターの4人は、主人である八神はやてを、守るように、

その周りをぐるぐる回りながら、まどか軍団に攻撃を加えていた。

「まどか軍団に反撃のスキを与えるなあ！」
シグナムが檄を飛ばす。

「おおともさ！」
ヴィータが吼える！

「いくぞ！」

グラフ・アイゼン！

カートリッジ・ロード！」

ヴィータの持つハンマー型アームデバイス（武器タイプの魔導演算機器）である

グラフ・アイゼンが魔力カートリッジを1発ロードした。

「ギガント・フォーム！ スペシャル・バージョン！」

ヴィータが、グラフ・アイゼンを振りかぶると、

—— グラフ・アイゼンは、一度、ヘッドパーツを分解し、—— 空間から巨大パーツが出現して、再合体し、超巨大ハンマーの形になった。

—— ヴィータの足元には、赤く輝くベルカ式魔法陣が回転している。

「超轟天爆碎！」（ちようごうてんぱくさい！）

ヴィータは、巨大ビルなみに、でかくなった、グラフ・アイゼンを天高く持ち上げる！

「ギガント・シュラーク！！」

スペシャル・サイズ！！！！」

振り下ろされた超巨大ハンマーが、—— 鼓膜が破れそうな—— 轟音をたてて、

文字通り、数百人のまどか軍団を、ぺっちゃんこに、叩き潰した。

—— 「みんな、援護おおきに！」

はやてが、近くの全員に念話で通信を入れる。

「みんなが、うまく護衛してくれるから、ウチは安心して広域攻撃が撃てるわ」

「今回は、テストロッサも

手を貸してくれてますから、楽勝です。

「ご安心を我が主^{あまのじ}」

シグナムが、返事の念話を返す。

「それじゃ、もう1発いくで！」

はやては、クロノ艦のオペレーター達から、

長距離用の照準調整サポートを受けている。

——『ラインとユニゾンしていない』状態では、特別なサポートを受けないと、

長距離攻撃の命中率が下がってしまうのだ。

はやては、自分のアームドデバイス、シュベルトクロイツを手に持ち、

上に高く掲げた。

——そして、『夜天の書』を開いて詠唱を開始するはやて、——

「こよ、白銀の風……」

天よりそそぐ夜羽となれ！」

はやての、眼前、『夜天の書』の上に、白い魔力光が集まる！

——さらに集まった魔力光が、はやての前方でミッド式の魔法陣となった。

——はやての足元にはベルカ式魔法陣が出現している。

——はやての前方の、ミッド式の魔法陣の周囲にさらに小型の、ミッド式の魔法陣が4個発生する。

——前方の、大小のミッド式魔法陣、5個が白く輝き始め……

「フリース・ヴェルグ!!」

はやての詠唱により——前方の魔法陣、5個から、白銀に輝く、超長距離用、着弾炸裂魔法が発射された。

『フリース・ヴェルグ』は、遠距離広域型である、はやての真骨頂と言える

魔法で——同時に複数地点への発射が可能であり、

——その効果範囲の広さと、高い威力はもはや、『殲滅兵器』の域にある。

——この魔法は、八神はやての

保有魔法の中でも、ほぼ最大に近い効果範囲を持つ。

——四方に発射された白銀の砲弾は、着弾とともに白い大爆発を起こし、

『殲滅兵器』の名の通り、的確に、そして冷酷に、鹿目まどか軍団を殲滅していった。

「ペンダルシュラーク!」

——地味な技で、地味に戦っているのは、シャマルだった。

シャマルのアームデバイス、クラールヴィントは、

サポート用のデバイスであり、たいして攻撃性能は持っていない。

——一応、ペンデュラムを発射して、

敵を拘束したり、突き飛ばしたりは出来るが

——あくまで、護身用程度のモノである。

「ああ、もう！」

あの子達が、みんな魔導師なら、
リンカーコアをぶっこ抜いてやるのにー！」

——と、ぶっそんな文句をこいている、シャルに魔力刀を持った
5人の鹿目まどかが、襲い掛かった。

「キアアアアア——ッ！」

——悲鳴を上げたシャルの目に、跳んできた黒いカゲが映りこ
む。

「?!」

「牙獣走破!!」

ザフィーラが、魔力を帯びた飛び蹴りで、まどか軍団を蹴り飛ば
した。

その鹿目まどか達は、遠くのビル群まで弾き飛ばされ、ビルの壁
にめり込んだ。

「ザフィーラ?!」

「ケガはないか？ シャマル」

「え？ ええ。」

ありがとう。助かったわ」

「お前がやられたら、敵の動きが分からん。
出来るだけ、後方に下がっている」

「分かったわ」

シャマルの後退を確認したザフィーラは、無言で、敵軍に突っ込んでいった。

「つき合ってもらって、すまん、テストロッサ」

シグナムは、戦友のフェイトに詫びたが――

「いいえ、適材適所と言うヤツです。」

私には、はやてのような広域攻撃魔法は使えませんし、砲撃魔法も、

なのは程の射程はありません。

やはり、高速での――接近戦・格闘戦が私の得意分野ですから。

今回のような集団戦闘では、はやてか、なのはのサポート役の方が、

私の技能を生かします」

と、答えるフェイトだった。

「なるほどな。」

では――行くか！」

「はい！ シグナム！」

そう話しながら、二人は、はやてを、狙って接近してくる
鹿目まどか軍団に突進していく。

「ライオット！」

「ライオットブレイド！」

——フェイトの足元に

金色のミッド式魔法陣が出現し、

——バルディッシュは、

魔力カートリッジを2発ロードして、強化タイプの魔力刀に変形。

——さらに、

「ゲット・セット」

「オーバー・ドライブ

真ソニック・フォーム！」

「ソニック・フォーム！」

——真ソニック・フォームは、フェイトの持つ魔力のほぼ全てを『
速度』に費やし、

そのバリアジャケットを防御性能を無視した軽装甲型に換装させる。

「ライオット・ザンバー！」

——バルディッシュは、

カートリッジをさらに1発ロードして、

ライオット・ブレードの二刀流タイプへと変形をとげる。

——この形態は

『ライオット・ザンバー・スティングー』と呼ばれ、
この2本の魔力刀は魔力ワイヤーで連結されている。

——1本を防御に、もう1本を攻撃に使う事で軽量化された防御装
甲を補いつつ、

連続攻撃を可能としている。

——フェイトの超高速戦闘形態——
『真ソニック・フォーム』用に開発された、攻防一体の魔力刀である。

——2本の

『ライオット・ザンバー・ステインガー』を構えたフェイトが、まどか軍団の一部隊に斬り込んだ。

——目にも止まらぬ、舞うような、踊り狂うような、フェイトの剣技に、

——反応する暇も無く、斬り倒されていく鹿目まどか達。

「ほう！」

これは、私も負けておれんな。

久しぶりに、血が騒ぐ！」

フェイトの戦いぶりに、興奮するシグナム。

「ゆくぞ！」

レヴァンティン！」

〔エクスプロージョン！〕

——シグナムの持つ長剣型のアームデバイス、レヴァンティンがカートリッジを1発ロードすると、その刀身に高熱の炎がまとわりつく。

「紫電一閃！」

——燃えるレヴァンティンを上段に構えたシグナムは、鹿目まどかの一群へと真っ直ぐ突入し、そのまま突き抜けた。

——気がつけば、数十人の鹿目まどかが、その首をすっ飛ばされていた。

「まどか軍団、海上へ移動しています！」

シヤマルが、はやてに念話通信で報告した。

「ほんならちようどええ。

ウチも、海上に出てオトリになる。

皆も、まどか軍団を、海上へ追い込むようにしてくれへん？」

はやてが、全員に話しかけた。

「海上へ？」

まさか、あの技を使うおつもりですか？」

シグナムが念話で、はやてに質問する。

「ようわかったな。そのつもりや」

なにげに答えるはやて。

「しかし、あの技はまだ研究中の、はず。

あまりに危険です、主^{あるじ}ははやて」

シグナムが忠告するが――

「危険は百も承知や。

それにな、さっきから、

『フリース・ヴェルグ』の撃墜率がどんどん低下しとるんよ」

「と、言うことは」

「まどか軍団が、と言うよりはあのリーダー格が、『フリース・ヴ

エルグ』の

特性を学習して、うまく回避させとる、と言うことや。

——そやから、これ以上フリース・ヴェルグを連発しても、魔力の無駄遣いにしかならん。

ここらで、別の大きい攻撃くらわさんと決め手にならんわ。
できる事は何でもやっておきたいんよ」

「分かりました。

そついう事でしたら、ご随意に。

我らヴォルケンリッターが、全力にて主をサポート致します」
シグナムも、はやての決意に覚悟を決める。

「いつもすまんな、シグナム」

「いいえ」

——ヴォルケンリッターと、フェイトは、はやての、希望通り、まどか軍団を海上へと誘い出す。

——もともと、まどか軍団ははやてを狙って移動していたので、誘導するのは、意外と簡単だった。

「ようし、ここや！」

はやてがタイミングを図っていると——

「本部および本局より、八神はやての、技能封印開放許可！

——『ヘイムダル』起動承認！

撃てるぞ、はやて！」

クロノ提督からの通信が届いた。

「承認 了解！」

——おおきに！ クロノ君！」

はやての、足元にベルカ式魔法陣が、輝き

——手に『夜天の書』を持つはやての全身から巨大な魔力が迸る。

「海より集え、水神の槍！」

——彼方より来たれ、

銀雪の吐息！」

はやての、詠唱に招きよせられるように、海水が空中に吸い寄せられ、

竜巻となって上昇していく。

——そして、海水は空中の一箇所に集まって、大きな氷の塊を造っていった。

「逆巻き連なり、天に座せ！」

はやての更なる詠唱に伴なって氷は、急激に巨大化していく。

——その様は、『地球』の北極や南極に存在する巨大な流水のようだ。

——それが、空中に浮かんでいるのだから、ある意味シユールな光景だった。

「暗い海底で、静かに眠つとれ！」

すり潰せ——ヘイムダル！」

はやては、そう叫ぶと、大氷塊を魔力で操り、上空から高速で

まどか軍団に叩き付けた。

——大氷塊は、多少はまどか軍団の攻撃で削られたものの、

——彼女達を巻き込みながら、

巨大な波しぶきとともに海中に没し、——そのまま、まどか達を深海まで

押し込んで、——海底との間ですり潰した。

ここは、はやてが『ヘイムダル』を使用した地点から一番近い海岸。

海の中から、小さくて、綺麗な手がよきつ、と出て——

「ふはあっ！ うう、海水飲んじやったよー。」

ぎもぢ 悪い——

ぐぶっ、げろげろー！」

ボロぞうきんのようになってしまったリーダー格まどかが、海岸に這い上がってきた。

「私が、おっきな氷にびっくりしてたから、

他の鹿目まどか達に回避させる暇が無かったなんて、

——これじゃ、軍団長失格だよー」

リーダー格まどかが、嘆いていると、——

「見つけたぞ！ リーダー格！」

「うつつ？！」

リーダー格まどかを凝視しているのは

ヴォルケンリッター烈火の将シグナムであった。

「しばらく隠れていたようだが、
我が主の攻撃に、あぶり出されたか。

ちようど良い。——決着をつけてくれよう」

シグナムは、そう言う——炎の魔剣レヴァンティンを鞘から抜き、

その剣先を、——チャキツと——リーダー格まどかに向ける。

「ま、負けるもんか！」

リーダー格まどかは、その手の中に『さやか』を実体化させると、

剣を上段に構えた。

「おもしろい！」

この私に剣技の勝負を挑むか？」

「うっ……」

プルプルと、手が震えているリーダー格まどか。

「はああああっ！」

「きゃあっ！」

——シグナムが鋭く、斬り込み、リーダー格まどかは、どうにか、その斬撃を受けとめたものの、剣を、弾き飛ばされてしまった。

「ぬるいっ！」

「シュランゲ・フォーム！」

シグナムの意思に、レヴァンティンが反応し、

れんけつじん
連結刃の形態に変形する。

——チェーンで繋がれた小型の刃物は、——ムチのように、
——獲物を狙う蛇のように、——人間の目では捉えられぬスピード
で、

空中を飛び回り、鹿目まどかに襲い掛かった。

「うあああああッ?!」

悲鳴を上げながら、魔法少女服を切り裂かれるリーダー格まどか。

「れ、連結刃?!」

そ、それなら、こっちだって!——」

——リーダー格まどかが、再び

『さやかか剣』をもう1本実体化させて、——その柄の部分に隠さ
れている

スイッチに触れると、——カチッ、と——音がして、

——『さやかか剣』も、連結刃の形態に変形した。

「ほう!」

連結刃に、同じ連結刃で対抗するか。

ますます、おもしろい!

では、見せてみる! お前の剣技を!」

まどかを挑発するシグナム。

「えええい!

切り裂け! スクワルトーレ!」

——そう言って、まどかは、連結刃を振り回すが——

「? どこを、狙っている?!」

シグナムの言葉通り、リーダー格まどかの連結刃は、シグナムには当たらず、

全然あさつての方向に、ぶっ飛んでいる。

——しまいには、

「うきやあああ!」

——地面で跳ね返った自分の連結刃で、

自分を斬りそうになっているリーダー格まどかだった。

「まったく話にならんな。」

連結刃とは——」

「シュベルト・フォーム!」

レヴァンティンが通常の剣形態に戻る。

——シグナムの目がギリリと光り——

「——このように、使うモノだ!」

シュランゲバイセン・シュナイデン!」

——シグナムが、閃光の速度でリーダー格まどかの目前に踏み込み
剣の柄で、彼女の額を強打した。

「あぐっ!」

——悲鳴を上げるまどかを、さらにシグナムは、——

再び連結刃の形態にしたレヴァンティンを螺旋状にグルグル回転さ
せて——

その斬撃によって遠くまで、弾き飛ばした!

「ぐはああ——ッ!」

断末魔のような、叫びが海岸に響く。

ぼろぼろで、人間なら、すでに死んでいておかしくないような状態のリーダー格まどかに、シグナムは、油断無く近づいた。

「うつうつうつ……」

満身創痍で、苦しそうにしながらも、なんとか立ち上がるうとするリーダー格まどか。

シグナムは、そんなリーダー格まどかに剣を向け、——
「これ以上の抵抗は無駄だ！」

降服して、——武装を解除しろ！」

「それは、……できない……」。

私は……

私は、全ての魔法少女の希望だから。

そして、私は、鹿目まどかの、願うそのものだから」

そう答える鹿目まどかの姿に、シグナムは奇妙な違和感を感じ取る。

（むう？　なんだ、この存在感の無さは？……

こいつは、すさまじい魔力を周囲に放出している。
強い闘志も、感じられる。

……それなのに、……

まるでこの場所には存在していないような、この感覚は？
いったい、どういう事なのだ？　）

——だが、いくら考えても、答えを見出せない
シグナムは、——自分の疑問を捨て去ると、——やるべき事を実行に移す。

「ならば、遊びはここまでだ！」

「うっ?!」

見れば、シグナムの後方500メートル程の
地点にドーム状の建物が有る。

この星にも、スポーツ競技場のような物があつたとすれば、
そのひとつであろうか。

そのドームがゆっくりと、2つに割れていく。

——その中から、眩い桜色の魔力光に包まれた高町なのはが、
空中へと、浮上していく。

なのはの、髪の毛は、なぜか濃い青紫色に変色しており、
——彼女の瞳は、あわいピンク色に光っている。

「しまった！ この魔力反応は?!」

リーダー格まどかは、慌てるが、もうすでに遅かった。

——なのはは、ドーム内に隠れ、——戦場に、拡散した魔力が満ちて、

集束砲が最大出力で撃てるタイミングを待っていたのである。

——集束砲とは、戦闘空間に放出された魔力をかき集め、

一つに束ねて発射する一撃必倒の砲撃魔法だ。

「なのはさん！ いけます！

超広域個別照準——完了です！」

——なのはと、『ユニゾン中』のラインが叫ぶ！

「それじゃ、いつきまーす！

ブラスター・スリー——！」

「オーライト！ ブラスター・スリー——！」

なのはの意思に、レイジング・ハートが答え、

ブラスター・システム（能力強化装置）を起動させた。

——なのはと、レイジング・ハートから、

限界を超えた凶暴なほどの、膨大な魔力が迸る。

「モード、ワイドエリア・マルチロックオン！

全力全開！

スターライトオ・ブレイカ——！！！」

なのはが、上空に向けたレイジング・ハートから、
集束砲スターライト・ブレイカーが発射された。

天高く、撃ち上げられた桜色の巨大な魔力砲弾は、花火のように
弾けると、

惑星の各地に向かって飛んでいく。

中型の大きさに、分割した砲弾は、各大陸の激戦地に到達すると、
さらに破裂してから、小型化して、豪雨のように地上に降り注いだ。

——そして、桜色の銃弾は、残存していた
まどか軍団のまどか達一人一人を正確に撃ち抜いていく。

「ああああっ?!」

自分の軍団が壊滅していく様を信じられない、といった感じで
見つめるリーダー格まどか。

「やったようだな」

なのはの戦果に、安堵するシグナム。

「やりますね。」

まさか、はでに動いていたあなた達の方が
オトリだったとは」

全身の傷から血を流しながら、リーダー格まどかが、
ゆらりと、立ち上がった。

「どうだ？」

私達の仲間は強いだろう？」

「そうですね。……すごく強い。」

だから……」

「だから？」

「だから——そのチカラ……」

「コピーさせてもらいます!」

「なにっ?!」

「軍団再生！」

リーダー格まどかが、そう言うと、彼女の体から、巨大な魔力が放出され

—— たった今全滅したはずの、鹿目まどか軍団が、惑星上にいきなり無傷な姿で出現する。

「くっ?!」

驚きつつも、反撃に備えるシグナム。

見れば、リーダー格まどかも

その体の傷と、服の損傷が、完全に消えている。

「私には……過去と、未来の、全てが見えるの」
そう言つと、にっこり笑うまどか。

—— そのあどけない、美少女の笑顔に底知れぬ恐怖を感じるシグナム。

「だから、——私は、過去に存在した
全ての魔法少女達の魔法が使えるんだよ」

「な?!」

「来たれ！」

「さくらカード！」

リーダー格まどかが詠唱しながら、腕を空に向かって振り上げると、

まどか軍団の頭上からカードの様な物体が出現した。

「何だ、あれは?!」

カード?」

見たことも無い魔法の技に、シグナムが目を見開いていると、――
「契約のもと、まどかが命じる……ミラー!!!!」

鹿目まどかの詠唱が完了すると、まどか達の足元には
星型を中心とした、未知の魔法陣が形成される。

「?!」

シグナムの目前で、数百人の『鹿目まどか』が

高町なのはと全く同じ姿に変身した。

フェイトや八神はやての姿に変身した、まどか達もいる。

「バ、バカなっ?!」

驚愕するシグナム。

高町なのはの姿をコピーした、

――数百人のまどか軍団を前にして、

……ヴィータは、その小さい顔を、真っ赤にして怒りまくっていた。

「ふっざけんじゃねえ!

なのはは……

なのはは、たった1人だ！

このあたしと一緒に戦っていた高町なのは、
ただ1人だけなんだ！！

ニセモノなんか、全部、
このあたしが叩き潰してやるうッ！！」

ヴィータは、そう叫ぶと、コピーなのはの大群に猛突進していく。

「アイゼン！」

「ヤボーン！」

魔力カートリッジをロードして、

ハンマー型に変形するグラーフ・アイゼン。

「ラケーテン！ ・ ハンマ——！！！！」

「待て！ ヴィータッ！ 無茶をするな！」

ザフィーラの静止を無視して、

——ロケット推進機能を持つ、ハンマー型のグラーフ・アイゼンを
グルグル振り回しながら、敵軍に突っ込んでいく
ヴィータだったが、——

「「「アクセル・シューター！！」」」

「ぐほっ！！」

——コピー・なのは達の、誘導魔法弾の集中砲火をまともにくら
って、

黒コゲになって墜落していくヴィータ。

「ち、畜生ッ……」

海岸では、いまだに、シグナムと、
リーダー格の鹿目まどかが、睨み合いを続けていた。

「ねえ、剣士さん？」

こんな所で、私の相手をしていても、いいのかな？

今頃、あなたのご主人様は……」

「ぬ……おのれっ……」

まどかを、一瞥してから、飛び去るシグナム。

その頃、時空管理局の魔導師部隊は、大混乱に陥っていた。

なにしろ、あの高町なのはの大群が、自分達に向けて、大魔力砲
撃を
連発してくるのだ。

冷静に、対処しろと言う方が無理であろう。

「皆、落ち着いて！ 隊列を乱さないで！」

なのは本人が、指示を与えようとしたが――

「ひ?!」

おびえきつた局員の1人が、本物のなのはに、デバイスを向ける。

「えええ?! ちょ、ちょっと待って!」

「うわあああ――ッ!」

――バシッ!――

なのはは、局員からの射撃魔法を、シールドで、防御すると――

「しっかりしなさい!! 私は、本物よ!」
局員を叱りつけるなのは。

「うあつ?! あ?

し、失礼しましたっ!! 高町一尉っ!」
間違いに気づいて、慌てて詫びる局員。

「こう言う状況じゃ、仕方ないけど、――
とにかく、体勢を立て直さないと。」

このままじゃ、――全滅する!」

なのはは、自分と同じ姿に変身した
まどか軍団を睨みつけていた。

フェイトは、はやてを護って奮戦していた。

だが、敵が多すぎる。

強力な砲撃を連発してくるコピー・なのはの大群。

「私はいい！」

逃げて……

逃げて！ はやて！」

フェイトが、はやてに叫ぶ。

「うっ……

くっ！」

はやては、後ろ髪を引かれる思いで、高速飛翔していった。

「まだ、やれるね、バルディッシュ」

「イエッサー！」

バルディッシュが、まだ戦える事を主^{あるじ}に告げる。

「……殲滅する！」

トライデント——」

フェイトが、大威力砲撃を準備し始めたその時——

「「「ショット・バスター——」」」

コピー・なのは達が、一斉に魔力砲撃を放つ。

「し、しまった！ 速射砲……」

フェイトは、あわてて、防御しようとしたが、

——フェイトを包み込んだ、ショート・バスターの桜色の光が、大爆発を起こした。

はやては、先程、なのはが出てきたドーム状の建物の内部に隠れていた。

（まさか、こないな事態になるなんて……）

（どないしたら、ええねん……）

（本局に増援を頼むか？　しかし、この状況では……）

（それとも、結界を解いて、皆を退却させるか？
いや、しかし……）

はやてが、あれこれ、考えていると、——

——　ザッ、ザッ、ザッ　——

戦闘で、廃墟と化した街の中を、誰かが、歩いてくる足音が聞こえた。

（だ、誰か来る?!）

——　ザッ、ザッ、ザッ、ザッ　——

足音は、明らかに、はやての隠れているドームに近づいている。

（誰や?! 敵か、それとも味方か?）

—— ザッ、ザッ、ザッ、ザッ ——

はやては、その手の中の、シュベルトクロイツを強く握り締めた。
額から、いやな汗が流れ落ちる。

—— ザッ、ザッ、ザッ ——

近づいている何者かは、もうはやての、手が届きそうな間近まで迫っていた。

ゴクリと、つばを飲み込むはやて。

そして……

「はやて!」

「そ、その声と、魔力反応は!」
ドームから、飛び出すはやて。

目前にいたのは、フェイトだった。

「な、なんや——フェイトちゃん。

無事やったんか——

よ、よかったわ。

ウチは、てつきり……」

「バルディツシュ・ザンバー！」

「?!」

いきなり、はやてに、斬りかかるフェイト！

そこに、割って入ったのは、シグナムだった。

はやてを護つて、フェイトのザンバーをレヴァンティンで、
防御しているシグナム。

「シグナム?!」

い、いや、2人とも何しとるんや?!」

「主^{あるじ}はやて。

こやつは、ニセモノです！」

「なんやて?!」

シグナムの言葉に、絶句するはやて。

目の前にいるフェイトはどう見ても、本物にしか見えない。

「ふふふ。

こうやって戦うのは、久しぶりですね、
シグナム」

「言っな！

このニセモノめ!!」

からかう様な、コピー・フェイトの言葉に、憤慨するシグナム。

「ま、まるで悪い夢でも見とるようや
頭を抱えて、ふらつくはやて。」

「ここは、私に任せて、後退してください。
あるじ主はやて！」

「シグナム?!」

「お願いします!」

「分かった!

無茶するんやないで!」

「はい!」

その場から、飛び立つはやて。

「ふふ。

たとえ、あなたでも、私には、――
いえ、私達には決して勝てない。

アギトを連れて来ていない貴女では」

死刑宣告でもするかのようなコピー・フェイトの言葉と共に――
バルディッシュ・ザンバーの鋭い刃が、
レヴァンティンにギリギリと食い込んでいく。

アギトとは、リインと同じユニゾン・デバイス（融合騎）であり、

「JS事件の際にシグナムと出会って以来、彼女のパートナーとなった。」

今回、訳あってアギトは、シグナムに同行していない。

「ならば、試してみるか？」

飛竜一閃！」

シグナムは、一度後方に飛び退き、――

レヴァンティンを連結刃の形態にして――

魔力を伴なう高熱火炎の柱を、――

連結刃の突き攻撃に加えて、――撃ち出した。

シグナムに対峙していた、コピー・フェイトはとっさに回避したが――シグナムを包囲していた数人のコピー・フェイトは、飛竜一閃をまともに食らって、瞬時に焼け死んだ。

「さすがは、シグナム。」

それなら、こうです。――

真ソニック・フォーム！」

シグナムを取り囲む数十人のコピー・フェイトが、全て、真ソニック・フォームの形態となる。

「騎士道とは――

死ぬ事と見つけたり！」

レヴァンティンを構えるシグナムの

目が、スウツと、細くなり、――
「おおおおおおッ――！！！」

シグナムは、コピー・フェイトの群れに
斬りこんでいった。

「ええい！ こいつら！」

はやては、別のコピー・フェイトの一団に、襲撃されていた。

「撃ち落せ！ バルムンク！」

はやてのシュベルトクロイツから発射された白い剣状の誘導魔法
弾が

次から次へと、コピー・フェイトを撃破していく。

はやてがシグナムと別れた後で、――なのはと『ユニゾン』して
いたラインが、
戻ってきてくれて、はやてと『ユニゾン』しているので、
射撃の命中率も、攻撃の威力も上がっている。

しかし、多勢に無勢、と言うヤツである。

――いくら敵を倒しても、まったく、きりが無い。

「ライオット・ザンバー・カラムティー！」

コピー・フェイトの1人が、ライオット・ザンバー2本を
1本に束ねた大型魔力刀を上段に構え、はやてに斬りかかった！

「くっ！ バリア――！！！」

横から追加攻撃される事を警戒したはやては、球状の魔力バリア

ーで防御する。

——だがコピー・フェイトは、物凄いチカラで押し込んでくる。

足元の地面がひび割れ、体がバリアーごと、大地に、めり込んでいく！

「うっうっうっ……」

はやては、『ザンバー・カラミティ』の重攻撃を、必死に耐えるが、——

横から、3人のコピー・フェイトがダッシュしてきて、

『ザンバー・カラミティ』の『突き』を、はやてに、ぶちかました！

「んぎゃあああああああ——！！！」

バリアーを破壊され、——

吹っ飛ばされて、ビルに叩きつけられた、はやては、目を回して、気絶した。

「なのはちゃん！」

「?!」

苦戦している仲間を探して、飛行中のなのはは、誰かに呼び止められた。

「はやてちゃん？

いや、違うね……」

「アロンドイト！」

「シオート・バスター！」

コピー・はやての砲撃を、なのはは最速の砲撃魔法『シオート・バスター』で相殺する。

2人の間に、薄いピンク色の爆発が起きた。

「さすがは、なのはちゃん。

よう、ニセモノだとわかったな……

それに、すごい反応速度や」

思わず、なのはを褒めるコピー・はやて。

「今の砲撃……はやてちゃんの技じゃないよね」

「ああ、なのはちゃんは、まだ、知らんか。

鹿目まどかはな、

どんな魔法でも使えるんよ」

「……………」

（やはり、この子は……）

なのはは、心の中で、目の前にいるモノの正体を推測した。

「そやから、なのはちゃん達に、勝ち目は、ないんよ」

「だから？」

「そやから——

なあ、もつやめにせえへん？

魔女の味方するんも、やめて、ウチら、攻撃するんもやめて……」

「……………」

「コピー・はやての話を無言で、じっと聞いているのは。」

「この結界を、解いて、——」

私達を、この惑星から開放してくれませんか？」

そう言う、まどかは、元の鹿目まどかの姿に戻っている。

「あなた達を、解放したら、

また、魔女と呼ばれる人達を襲うつもり？」

「当然です。」

それが、私達の存在理由ですから」

リーダー格まどかは、事も無げに、そう答える。

「でも、鹿目まどかは——」

あなた達のオリジナルである、

あの子は、こんな事は望んでいない。

こんなひどい事をして喜ぶような子じゃないよ！」

「それでも、

私達は—— 鹿目まどかの、祈り・願い、
そのものだから」

リーダー格まどかは、静かにそう言った。

「どんな理由が有ったとしても、

平和に暮らしている人達の生命と財産を守るのが、
私達の仕事」

高町なのはは、静かにそう言った。

「だから――」

「だから――」

「決して、やめない！」

「必ず、止めてみせる！」

――その時、

「その決意、見事だ！」

気に入ったぞ、魔導師！」

星の『内部』から、その声は響いてきた。

星が、震える。

『伝説の魔神』の目覚めを知り、恐怖に慄くがごとく。

――ドクンッ……ドクンッ！――

地の底で何かが、覚醒しようとしていた。

「な、何?!」

「こ、これは?!」

なのはも、リーダー格まどかも何が、起こったのか、理解できずに、大地に立ち尽くす。

その大地は、大きく揺さぶられている。

惑星全土で、巨大地震が起きていた。

——その異変を、惑星の周囲の次元艦隊も、捉えていた。

「いったい、何が、起きている?!」

クロノが大声で、オペレーターに問いたです。

「わ、惑星の全大陸で、巨大地震が発生しています。

それと、高町一等空尉の現在地のすぐ近くに、
巨大な魔力反応を検知!

さらに、反応が大きくなります!

こ、こんな、反応は、有り得ません!

計測範囲外の大きさです!」

「何が有ったと言うのだ?!」

あの星に?!」

星を見つめるクロノの顔に、焦燥が満ちた。

なのは達の目の前で、地面に亀裂が走る。

——小さな山のような、丘が出来上がり、更に盛り上がっていく。

その丘の頂点が、白く光り輝いて——

ひととき大きな、地震が襲った次の瞬間、光る丘が、爆発したように吹っ飛び、そこには、人影が——

赤く鋭い瞳。

やや短めの、燃えるような、赤い髪。

赤いシンプルな戦闘服。

——胸と腹に、白い縦長の楕円型のアクセントが合計4つ、あるものの、

極めて機能的重視の戦闘用の衣服。

闇のように黒いブーツ。

そして、首からは、人の血で染めたかのような、

真紅の、マフラー。

——全身、真っ赤な、

怒りと闘志の塊のような、少女がそこにいた。

——そして、全身から溢れ出す、巨大な魔力！

いや、『巨大な』とか『大きな』、

あるいは、『膨大な』・『強大な』などと言う、

形容詞が陳腐に聞こえるほど、少女の発する魔力は、想像を超えて

いた。

それは、戦闘用の次元艦数万隻分の魔力に近い。

とても、人間とは思えなかった。

「あれは、いったい？」

戦闘機人？！

な、なぜ、わざわざ地面の中から？！」

なのはが、どう対処すべきか、悩んでいると、――

「我が名は、サリー・ザ・マジシャン！

鹿目まどか！

貴様は、このワシが殺してくれる！！ 今日、ここでな！！」

「うつつ？！」

殺意の籠もったまなざしで、まどかを睨む少女。

リーダー格まどかは、戸惑いつつも、攻撃に備えて臨戦態勢を取る。

「まどか軍団、戦闘準備！」

リーダー格まどかの号令に従い、

彼女を護るかの様に、他のまどか達が周囲に展開した。

「あ、あれは、サリー！」

魔女、——サリー・ザ・マジシャン！」

その時、傷ついた体を引きずりながら、建物の影から、シグナムが、

ヨロヨロと歩いてきた。

「シグナムッ！」

なのはが、駆け寄り、よろめいたシグナムに肩を貸す。

「あの人の事、知っているんですか？」

シグナムに尋ねるのは。

「うむ、かなり昔、仲間達と離れて

単独行動していた時に、一度会った事があるのだ。

彼女こそは、宇宙最強の魔女、——

全ての魔女の祖であり、

——正義の為に戦う魔女達の守護者でもあるのだ」
そう答えるシグナム。

「またの名を、『伝説魔神』、——」

「おう、誰かと思えばシグナムではないか？

久しぶりじゃの」

シグナムの姿を見て、語りかけるサリー。

「サリーどの、なぜ貴女がここに？」

サリーに問うシグナム。

「『全ての魔女の天敵』と戦う為じゃよ。
こんな星の地下で数千年眠っていた
甲斐があつたと言つモノだ」

「あなたも、魔女。」

なら、私達の敵……

滅ぼすべき、宿敵」

リーダー格まどかが、サリーに対して、敵意をむき出しにする。

「シグナム！ それに魔導師たちよ。

すぐに、この星から、立ち去るのじゃ！

ワシの戦いに巻き込まれたら、
命の保障は出来んぞ！

捕獲結界はすでに、分解してある。

急げ！」

サリーが、なのは達に警告した。

彼女の言うように、いつの間にか、惑星を覆う捕獲結界は消滅していた。

「サリーどの？！」

シグナムが、サリーに話しかけるが、彼女は、意識をまどか軍団

に向けており、
返事は返ってこなかった。

「撤退しましょう、シグナム」

シグナムに肩を貸しているのはが、損害の無い
転移魔法システムの方向に歩いていく。

「高町一尉?!」

「ここは、彼女の指示通りにすべきです。

私達がいても、足手まといになるだけです」

シグナムに、自分の考えを、説明するなのは。

「総員撤退！」

繰り返します！

総員撤退！」

なのはが、念話通信で、全魔導師部隊に、通達を出した。

高町なのはの指示に従って、――

無事な、ヴォルケンリッター達も、負傷した仲間を運びながら、

――
転移魔法で、次元艦隊へと、撤退していく。

なんとか、意識を取り戻したフェイトが

まだ気絶しているはやてを担いで、空間転移した。

次々と、転移魔法で、姿を消す、管理局の魔導師部隊。

それを、じつと見ているサリーと、リーダー格の鹿目まどか。

「追撃しないとは、おやさしい事だな」

サリーの、からかうような物言いに、――

「もともと、私達の標的は『魔女』だけです。
邪魔をしないのなら、

攻撃するつもりはありません」

警戒を解かずに、答えるリーダー格まどか。

――そして……惑星の上には、

サリーと、まどか軍団だけが残された。

「……………」

サリーは、無言で空中に、浮遊、上昇していく。

「さくらカード！」

リーダー格まどかが召喚したさくらカードの魔力によって、
200人程の、まどか達が、八神はやてに変身した。

コピー・はやて達は、サリーを取り囲むと、魔法の詠唱に入る。

「響け！ 終焉の笛！」

コピー・はやて達が天に掲げたシュベルトクロイツに銀色の魔力
光が

集中していく。

「……ラグナロク……！」

コピー・はやて達は、一斉に、シュベルトクロイツをサリーに向
ける。

そして200本の銀色の魔力砲撃が

サリーに殺到したが、――

「ふんっ！」

この集中砲火をサリーは、片手一本で受け止めた。

「そ、そんな?！」

目が点になっているリーダー格まどか。

「今度は、こっちの番じゃ！」

超魔力ビ――ム!!」

いきなり、ビームが出た!

サリーの両目から、赤いビームが発射され、それに、
飲み込まれたまどか軍団は、瞬く間に爆裂していく。

「きゃわわわわわわッ！」

リーダー格まどかは、あわてて回避行動をとり、
残っているビル群の間を高速飛行して、逃げ回る。

サリーは、手を手刀の形に伸ばし、

腕も左右に伸ばして、――

飛行機の真似をする子供、のような姿勢の
水平飛行のフォームで、――超音速まで、
スピードを増し、まどかを追跡していく。

サリーの両足の裏から、加速用の、魔力流がロケットの炎の様に、
噴き出していた。

目から出る魔力ビームを、連射するサリー。

2 発！ 3 発！ 4 発！ 5 発！

そのビームを、まどかは——ビルの際間を、ぎりぎりです、飛行して、

——ジグザグに方向転換を繰り返して、避けまくる！

サリーは、視界を横切ったまどかを、目で追いつつ、顔を横に、振りながら、目から再度、ビームを、発射した。

まどかを狙った、魔力ビームは、

大きな、建物を、カッターナイフのように、斜めに、切断する。

ぶった切られた、建物は、ビル群に、倒れこみ、まるで、ドミノ倒しのように、巨大なビルが、次々に倒れ、崩壊していく。

倒れていく、ビルの真下を猛スピードで、飛び去る、まどか。

「ほう？

なかなか、ねばるのう。

だが、——逃げるばかりで、敵に勝てるつもりかっ……！」

そう、言つと、さらに、スピードを上げ、

まどかとの、距離を詰めるサリー。

逃走する、リーダー格まどかを護るように展開した

コピー・なのはの一団が、飛んできたサリーに攻撃を仕掛ける。

「『デイバイン・バスター!!』」

サリーを直撃する桜色の砲弾。

——だが、これも、片手で防御するサリー。

「コピーした他人の技なんぞで、このワシは倒せんよ！」

くられ、魔力スマツシャー・パンチ！」

サリーの両腕が、はずれた、——とたん、ミサイルのようにロケット噴射を起こして、高速回転しつつ、まどか達を襲う！

前衛の、コピー・なのは達をぶっ飛ばして、飛来した、サリー・パンチは、

リーダー格まどかの背中に直撃し、そのまま、ビル群の中に、彼女を殴り飛ばす！

「ぐっ、ぶああああああ——?!」

盛大に、ビル群の中に、突っ込んだまどかは10本ぐらいのビルを貫通してようやく止まった。

「め、目からビームに、

ロケット・パンチって……

サリー、あなた、それでも、人間?!」

「無論、違っさ！」

そして、貴様もな！」

「っッ!!」

埃を払って立ち上がるリーダー格まどか。

「皆！　お願い！」

リーダー格まどかの命令に従って、

コピー・フェイトの姿になったまどか軍団は、

——全員が『真ソニック・フォーム』になり、
サリーに接近戦を挑んだ。

「だから——

無駄だと、言っておろうがッ！

超魔力ブラスタ——ッ!!——」

サリーの全身から、魔力を含んだ超高熱波が放射され、——
接近戦をしかけようと、近づいていたコピー・フェイトの一群は瞬
時に蒸発した。

「うあああああああッ?！」

悲鳴を上げたリーダー格まどかの姿も、

高熱波の熱線の中に消えていったが、——

「むっ?！」

惑星の反対側に空間転移したか？

だが、それも無駄な事よ！」

リーダー格まどかの現在地を捕捉し、高熱でドロドロになった街の中央で、

ほくそ笑むサリー。

サリーは、天高く飛翔し、その速度を増していく。——
ついには、大気圏を突破したところで、彼女は停止した。

「これが、最後だ！」

鹿目まどか！

滅ぼせ！ 大魔光剣！」

サリーは、そう叫ぶと、腕を『バンザイ』するように上げる。

——するとサリーの左右のコブシが輝き始め、
次第に白熱化していく。

「こ、この魔力の大きさは？
まさか星の反対側から？！」

惑星の裏側の宇宙空間に退避したリーダー格まどかが驚く。

さらに、サリーの手の周りに光の粒子が集まり
巨大な光の塊と化していく。

そして——

「くられ、光の剣！」

マギアン・ソ——ドッ！——！

サリーが両腕を、惑星の大地に向けると、膨れあがっていた光の塊が、

白く輝く巨大ビームとなって、地面に突き刺さった。

光のビームは、高熱で大地をドロドロに融解させると、さらに地下深くへと突き進んでいき、――
ついには惑星の核を貫通した。

そしてマントル層を貫通した巨大ビームは、惑星の反対側にまで到達して、
地表から飛び出した。

「そ、そんな！」

1つの惑星を貫通して?!」

惑星から発射されてくるビームを見て、
恐怖に染まるリーダー格まどかの顔。

「いけないッ！ シールドッ!!」

まどか軍団は、残った全員の防御シールドを1つに束ねて、
サリーのビームをなんとか防ごうとする。――

だが、そのシールドそのものが超高熱で解け落ちそうだ。

「ぐっ！ うっうっうっ！」

滝のような汗をかきながら、耐えているリーダー格まどか。

「貴様は、こう思っていたはず、――

自分の行いは、正しいと」

「?!」

そんな状態のまどかに、サリーの声が聞こえてきた。

——それは、サリーの念話通信（＝テレパシー）のようだった。

「恐らく、貴様は、知らなかったのだろっな。——」

他の宇宙には、——

邪悪でもなく、——

悪人でもない、魔女達がいる事を。

平和に暮らしている魔女達が、——

正義の為に戦っている魔女達がいる事を。

だな！

知りませんでした、で 済まされぬ事も、
この世には、有るのだよ！！！！」

「うっうっ？！」

まどか達の、発生させていた防御シールドに、
亀裂が入り、徐々にその亀裂は大きくなっていく。

「正義と信じ、
分からねと、逃げ、——」

知らず！
聞かず！

その果ての終局だ！――

この光の剣！

もはや、止めるすべなど、無い！

そして、滅ぶ！――

鹿目まどかは――

滅ぶべくしてな――！！――

最後通告のようにサリーが叫ぶ。

「あああああ――ツ？！――」

サリーの『マギアン・ソード』の輝きの中に、リーダー格まどかも、

まどか軍団も消えていく！

そして、『マギアン・ソード』の威力は、惑星そのものを、切断し、破壊していく！

――その光の剣は、まるでリングを切る果物ナイフのように、星を真つ二つに、切っていった。

惑星が中央から綺麗に分割されていく様子は、無論、

周囲に展開していた、時空管理局の次元艦隊も捉えていた。

「おおおおお?!」

ほ、星のひとつが、割れていく!」

恐怖に震える次元艦隊の局員達。

そんな中、クロノは、次元艦の端末から管理局本局のデータベ
スにアクセスして、

サリーに関する情報を確認していた。

「入力——退却してきたシグナム一等空尉からの
追加情報を追記の事、——」

魔女 サリー・ザ・マジシャン

(以下、本作作者の人物設定が一部混在)

出身地は『魔法の国』。

サリーは、その国の王女であり、つまり国王『サリーちゃんのパ
パ』と

女王の娘であつた。

サリーは、子供の頃、ある宇宙の『地球』と言う名の惑星に、
小学生『夢野 サリー』として、弟とともに、滞在した経験がある。

しかし、ある事件によって彼女の友人達に『魔法使い』である事
実がバレ、

『魔法の国』の掟により、急遽^{きんぐん}帰国することになった。

尚、この時同じく『魔法の国』の掟により、友人達と関係者の記憶から、

サリーとその弟、及び家族等に関する事のみ記憶の抹消措置が行われた。

「ここまでテレビ・アニメ『魔法使い サリー』の原作通り」

サリーが17歳の時、祖国『魔法の国』が戦火に巻き込まれる。

これは『魔法の国』と『古代ベルカ』が位置的に近い関係にあり、当時の軍事大国から、ある国に『チカラを貸した』とあらぬ疑いをかけられたのが

原因であると言うのが、現在最も有力な説である。

（古代ベルカとは、フエイトの出身地でもある現在のミッドチルダ世界の近くに、昔存在していた次元世界。

——多くの大国が存在していたが、長年の戦争で、荒廃し、滅亡した。）

サリーは、この戦争により、弟を含む家族全員を失い、それ以降、『魔女 サリー・ザ・マジシャン』と、名のる様になり、性格も、顔つきも激変する。

サリーは、再興した『魔法の国』の国王となったが、任期終了前に、自分とは無関係の適任者を次の国王に任命し、自分は国民の前から姿を消した。

サリーは、国王をやめる直前に『全ての魔女の天敵』の出現を予知したと言われている。

サリーは、国王をやめた後、自分の体を『生体魔導サイボーグ』へと

改造し、その後、各次元世界を旅して、『全ての魔女の天敵』の情報を

集めながら、より強くなるための修行も行っていたらしい。

サリーが戦闘を行っている最中に、ごくたまにであるが、

彼女の技の解説を行う謎の人物が戦闘空間で目撃される事があるが、これは、サリーの修行中の記憶が、彼女の余剰魔力によって、戦闘空間に投影・実体化されるためである、とされる。

この現象は『サリーの解説者』と呼ばれるが、

この現象そのものは、攻撃力も無ければ、実害も無い。

『生体魔導サイボーグ』は、ジェイル・スカリエッティが製造した『戦闘機人』とは、構造やシステムが全く違う別物である。単独で宇宙空間での長期活動も可能。

『生体魔導サイボーグ』の製造技術は、古代ベルカ諸国の王族が行っていた

王族自身が生体兵器となる為の技術が流用されたとされる。

『生体魔導サイボーグ』になったサリーは、1人で、（現在までに確認されている全力時）LS級次元艦70万隻分の戦闘力を持つとされる。

サリーは、各次元世界で、様々な伝承・伝説を残しているが、彼女の実際の戦い方や、使用魔法・必殺技等についての記録は、ほとんど残っていない。

これは、サリーが本気で戦った、あるいは、
サリーを本気で怒らせた者が一つの例外なく、死亡しているか、
行方不明になっているためである。

そのため、サリーには『伝説魔神』と言う二つ名が存在する。

サリーは、長い放浪の旅の途中で、まどか達の世界、『マギカ宇宙』を発見した。

その宇宙に存在する『魔法少女』と『邪悪な魔女』が将来、
自分の祖国や他の世界の脅威になる事を予見したサリーは、
『マギカ宇宙』に、自分の魔法で封印を行った。

『マギカ宇宙』が進入不可能なバリアーで覆われていたのは、このためである。

（ リリカル・マギカ第1話 参照 ）

サリーは『全ての魔女の天敵』が現れるタイム・ポイントを予知して、
その時期に自分が目覚めるよう、自己の体内システムを調整してから、
長い休眠に入った。

尚、ある宇宙の『地球』と言う名の惑星に、
『サニー・ザ・マジシャン』と言う名前の、
特殊能力を有する少女が存在するが、
この『サニー』と『魔女 サリー・ザ・マジシャン』は、
全くの別人である。

第6章 発進

ここは、曉美ほむら達が住む、——
『マギカ宇宙』の惑星、『地球』。

『日本』と言う名の国に、存在する町の1つ『見滝原町』。

駅前のショッピングセンターへと向かう道を、曉美ほむらと、
年配の女性が歩いている。

「曉美さん、今日は、顔色が優れないようですけど、大丈夫ですか？」

「え？ ええ。」

昨夜よく眠れなくて……」

今、ほむらが一緒にいる女性は、『水瀬 秋子』さんと、言つて、
かなり北の方の町から、この見滝原町に引越して来たそうだが、
一風変わった人物である。

彼女は一人娘とともに、暮らしているのだが、この親子が元々住
んでいた

北の町の自宅は、秋子さんの甥っ子の男性に譲ってしまったのだ。

そして、この男性は、現在その家で、恋人と2人で同棲生活をし
ている。

——ここまでは、いい。

だが、この男性『相沢 祐一』の事を、秋子さんの娘である『水

瀬 名雪』が
好きだったのだ。

——これでは……秋子さんは、自分の娘の恋敵に、自分の家を譲ったようなものだ。

『こう言う場合、今までは甥っ子と同居していた、としても、その甥っ子を家から追い出すのが、普通ではありませんか』

——と、事情を知った誰もが、秋子さんに、そんな感じの事を言ったらしい。

話を聞いたほむらも、この点を疑問に思い、失礼を承知で、秋子さんに尋ねてみた。

すると、秋子さんは笑いながら、――

『でも、私も、娘の名雪も、その女の子、あゆちゃんの事、大好きですから。

祐一さんと、あゆちゃんには、絶対に幸せになって欲しいんです。

せつかく再会出来たのだから……』

『？』

秋子さんの、暖かな微笑みの謎は、ほむらにも、解けそうに無かった。

そんな事を、ほむらが思い出していると、――
彼女の頭の中に、誰かの言葉が、飛び込んで来た。
「オイオイ！」

呑気に買い物なんて行ってる場合かよ?」

杏子からのテレパシーを受け取り、すぐに杏子の位置を確認するほむら。

「ちょっと話があるんだ。
顔貸してくれる?」

杏子がテレパシーで、そう聞いてくる。

「秋子さん、ごめんなさい。

私、急用を思い出して……

友人と、大事な約束をしたのを、忘れてました」
そう告げると、走り出すほむら。

「そんな? 暁美さん、ちょっと?!」

秋子さんが声をあげたが、ほむらの姿はすぐに見えなくなってしまった。

——杏子がほむらを連れて行った場所は、

——まるで、ヨーロッパの路地裏のような石畳のある町並みに、周囲を囲まれていた。

その風景は、——不安も緊張も感じさせないが、

——まるで異国に来てしまったかのような落ち着きのなさがあった。

2人は、しばらく無言だった。

そして、先に口を開いたのは、ほむらだった。

「話って何?」

「鹿目まどかの事、助けたいと思わない？」

「助けられると思う？」

「助けられないとしたら、放っておくか？」

「う……」

苦しい表情になるほむら。

このほむらの、反応に、杏子は、少々バツの悪い顔になり、――
「妙な聞き方しちまったね。」

バカと思うかもしれないけど、あたしはね、本当に助けられないのかどうか、

それを、確かめるまで、諦めたくない」

「……………」

「あいつは、人間でもなければ、魔法少女でもない、別の何かになっちまったのかもしれない。」

だけど、友達の声ぐらいは憶えてるかもしれない。

呼びかけたら、人間だった時の心を取り戻すかもしれない。

それができるとしたら、たぶん、ほむらだ」

「うまく行くのかしら」

「分かんねえよ、そんなの、……」

ふ…… 分かんないから、やるんだよ」

「うん。……うん、ありがとう杏子。」

私、やるわ！

まどかを助けに、あそこに行く！！」
ほむらの顔に、かすかな、笑みが浮かぶ。

「それでこそ、魔法少女——曉美ほむら、だぜ！

んん？ あれ？！

この会話って、……

前にも、……

誰かと、したような？」

杏子は、しきりと首を傾げたが、それがいつだったかは、
どうしても思い出せなかった。

「もちろん、私も、行きますわ」

「巴さん……」

振り向くほむら。

いつの間に来ていたのか、巴マミが、会話に加わる。

「お二人とも、この私を置いて行こうなんて、——
まさか、そんな事は考えていませんよね」

「ちょっとだけ、——考えてたような、……」
ペロツと、舌を出す杏子。

「なあんですってええええ——?!」

「ウソだって！　ウソ、ウソ！！」

だから！

マスケット銃を、あたしに向けるなあッ！！」

銃を向けられて、——手を上げて、青くなっている杏子。

「ふふ、……」

吹き出しそうになっている、ほむら。

「あ？………」

ところで、どうやって現場に行くんだ？」

肝心な事を思い出した杏子が、ほむらに尋ねる。

「リンディ・ハラオウン提督に、
連絡を取ってみるわ。」

あの人なら、きっと、私達のチカラになってくれる」

「ああ、フエイトのお袋さんか！」

「それ以外無さそうね」

杏子もマミも異論はなかった。

「それじゃ、急ぎましょう」

マミが、2人を急かす。

「ええ。」

待ってて、まどか！

今、私が——行く！！」

ほむらが、遥か彼方の親友に、宣言する。

3人は、魔法少女に変身すると、魔法少女連合会の基地へと急いだ。

約30分後、ほむら達、3人は、時空管理局本局の内部に転送されていた。

そこは少し狭い、休憩室の様な場所だった。

「誰もいねえな？」

「確か、リンディ提督は迎えをよこすと、そう言ってたわよね？」

杏子とマミが、周囲を見回すが、それらしい人影は無かった。

「いったい、……お？」

「お迎え、……じゃ、ねえな」

近づいてくる、足音。

それも1人や2人では、なかった。

「敵意まるだしね」

警戒する、杏子と、ほむら。

マミも2人にならった。

3人を取り囲む20人程の、武装局員達。――全員が、デバイスを、

ほむら達に向けていて、その先端には、何時でも撃てるように、射撃魔法がチャージされていた。

「なんなんだ、てめえらは?!」

あたしらは――!!」

杏子が怒った声を出すと、――
「良く知っているとも。」

魔法少女、佐倉杏子・巴マミ、そして、曉美ほむら、だろう?」

声の主は、武装局員達の上官らしき中年男性だった。

その男は、値踏みするかのように、ほむら達を、じろりと、見回すと、――

「君達、魔法少女は、危険人物として、全員拘束させてもらっ
そう通告した。」

「なんだとお!!」

杏子が、歯をむき出して、『むかついた』顔をする。

「元々、我々は君達、異世界の魔法少女などは、信用していなかったのだよ。」

高町一等空尉や、八神はやて、

そして、ハラウン家の連中は、別だったがね。

正体不明の異星人に魔力を与えられた特殊能力者など、胡散臭い事、この上ない!

加えて、今回の鹿目まどか軍団の事件だ!

信用してください、——と言う方が、無理が有るのではないかね」
男は、吐き捨てるような口調で、まくし立てた。

「だからこそ、私達は、ここに来たのです。」

協力して、共に戦うために、——」

自分達の真意を理解してもらおうと、食い下がる、ほむら。

「そうだ、そうだ!

もっと、言ってやれー!」

頭に血が上ると、何を言っているのか、全然分からなくなる杏子は、

——難しい話は全部、ほむらとマミに、任せるつもりらしい。

「君らの助力など、無用だ!

すでに、——鹿目まどかについては、本局より、『クロス・アウト』の命令が、出ている！」

「クロス・アウト？」

杏子は、ほむらに、意味を聞いてみた。

「『抹殺せよ』と言う意味よ、……」
杏子に、答えるほむら。

「な?! なんだと！」

てめえら、本気か？

本気で、まどかを、——」
中年男性を、睨みつける杏子。

「本気だとも。」

そして、信用の出来ない、
いや、危険な魔法少女は、ここで捕まるのだ」

「くそっ！」

こんな所で、足止めくらってる
場合じゃねえのに、………」

悔しがる、杏子だったが、武装局員達は、
良く訓練を積んでいるらしく、スキがない。

その時、その一角の照明が落ち、——そのとたん、黒い人影が、
乱入した。

「なっ?!」

何者だっ?!」

中年男が喚くものの、――黒い人影は、まるで『日本』の忍者の
ように、

暗くなった狭い空間を跳びまわり、武装局員達を1人ずつ、失神さ
せていく。

低い体勢から、局員のみぞおちに、鋭いパンチ・

振り返った中年男の首筋に手刀を叩き込み気絶させる。

壁を蹴って、三角跳びから、至近距離の局員に、延髄蹴り。

鍛えられた精鋭の局員達が、全く反応すら出来ずに倒されていっ
た。

――20人の武装局員を倒すのに、15秒とかかかっていない。

黒い人影は、衣服についた埃を払うと、ほむら達に向き直った。

照明がついて、周囲が明るくなり、――

「お、お前は、……」

「アルフ?!」

杏子と、ほむらは、知った顔を見て驚いた。

「よう!」

おまたせっ!」

3人の前には、獣の耳と、しっぽを生やした

——20歳代くらいの外見の獣人の女性がいた。

服装は、ザフィーラのものより、やや軽装で女性的な、一見、『地球』の、女性プロレスラーの衣装にも見える。

この女性、——アルフは、フェイトの『使い魔』で、——ミッドチルダ産の狼の子供を、素体として生み出された。

——もとは、狼だけあって、獣の俊敏な動きによる、高速格闘戦も可能だが、——サポート系の魔法も得意であり、バリア破壊や、ターゲットの拘束、転送魔法などが使える。

——また、狼型の動物形態、ビースト・モード

子犬フォーム・美少女フォームなどにも変身可能である。

最近は一美少女フォームで、ハラウン家の家事手伝いをする事が、彼女の基本的な仕事となっていた。

「遅くなって、悪かったね、ほむら、杏子。」

おかあさんの、——リンディ提督の指示で、あんた達を、迎えに来たんだ。」

「久しぶりね、アルフ。」

でも、最近あなたは、ハラウン家でお手伝いさんをしてたんでしょう。

こんな、騒動に巻き込んで、ごめんなさいね」

フェイトと、友人関係にあるほむらは、アルフの事も前々から知っており、

今回の件について素直に詫びた。

「いいって、いいって！」

まあでも、あたしも、少女モードでの、家事手伝いが長いせいか、さつきも動きが鈍かったな！。

現場に出てた時の、半分のスピードも出やしない。

緊急時に備えて、今度、なのはに、鍛えなおして、もらおうかな？」

そんな、アルフの軽口に、――

「あ、あれで、半分未満かよ？！」

全力だと、一体、どんだけ速いんだ？」
だが、そんな杏子の疑問に答えている時間は、なかった。

「おっと、こうしてる場合じゃない！
リンディ提督が待ってるんだ！」

皆、あたしに付いて来て――」
そう言うつと、アルフは、走り出す。

あわてて、その後を追って同じく、ほむら達も走り出した。

――アルフを追って、ほむら達3人が走りこんだのは、

——次元艦の整備工場のような、場所だった。

あちこちに、どんな働きをするのか、分からない機械類が並んでいる。

そこに、ほむら達が到達したのだが、案内役のアルフの姿を見失ってしまった。

「どこだよ?! アルフ!」

杏子が怒鳴ると、——

「こつちだ、こつち!」

見ると、工場の奥に、エレベーターの入り口があり、その前で、アルフが、手招きしている。

エレベーターの中に、ほむら達が全員入った後、

——アルフが、機械のスイッチを押すと、——ドアが閉まり、『ゴウンッ』と言う起動音とともに、——エレベーターは、上昇を開始した。

「んんっ？」

なんだか、傾いて上昇するエレベーターだなあ?」

杏子の言う通り、本局の人工重力の軸線とは、かなりずれのある、斜めに上昇する、エレベーターだった。

しばらくすると、——また『ゴウンッ』と言う音とともに、——エレベーターが停止して、ドアが開いた。

「こ、これは――?!」

ほむら達の前に、現れたのは、――

「レティ提督！」

『ビクトリー』に不穏な動きが有ります」

レティの忠実な部下であるエルザが、報告に来た。

「不穏な動き？ あの実験艦は、廃艦にしたのでは？」

「それが、――元乗組員が、続々と集結している模様です！」

「なんですって?!」

「ご覧ください」

提督専用の執務室に、設置された大型ディスプレイに、次元艦ドック（艦船の建造・修理・検査等をする為の施設）の監視装置の映像が、映し出された。

『ビクトリー』と呼ばれた次元艦に、次々と乗り込むリンディの部下達。

その中に、――

「ん？」

あれは、第137管理外世界の『魔法少女』?!

なぜ彼女達が?!」

——ディスプレイに映っている、ほむら達の姿。——

彼女達は、巨大な次元艦の威容に、びっくりしているように見える。

「直ちに、本局から、退艦命令を出します!」

そう言って、部屋を出て行くとするエルザを、

レティは、呼び止め、——

「待ちなさい、エルザ!」

「は?」

「言葉で言っても、リンディは、素直に言うことを聞く人物ではないわ」

「では、どうします?」

「そうね、……」

レティは、少し考え込むと、
意地の悪い笑みを浮かべ、
……………

「リンディ提督!」

「来たわね!」

私の『次元戦艦ビクトリー』へようこそ!」

ほむら達は、『ビクトリー』と言う名前の『次元戦艦』の、メイン・ブリッジ（艦橋）に立っていた。

管理局の中では、古い言い方らしいが、ある一定以上の戦闘力を有する次元艦を『次元戦艦』と呼ぶらしい。

——ちなみにリンディ提督はこの『次元戦艦』と言う、名称が好きである。

「本局からの、緊急通信です！」
オペレーターが、リンディ提督に報告した。

——リンディの指示に従い、オペレーターは通信をスピーカーから流した。

——レティ提督の姿が、ブリッジのディスプレイに映る。

「こちらは本局、レティ提督です。」

ビクトリーの乗組員は、直ちに退艦しなさい！
諸君の行為は明らかな命令違反よ！

命令に従わない場合は、提督権限において、
全員逮捕します！」

「通信回線オープン！」

「了解、通信回線開きます」
リンディの指示に従って、オペレーターは通信装置を操作する。

「相変わらずね、レティ」

「リンディ！」

あなた、自分が何をやっているのか、
分かっているの?！」

「一応、分かっているつもりよ、レティ」

「いいえ！」

あなたは、何も分かっていない！

多くの部下達を、あなたの我が儘^{わがまま}で、
道連れにするつもり?」

「私の性格は、良く分かっているでしょう。」

ここで何もせずに、後悔するより、
やるべき事を全部やってから、後悔するわ!」

「……分かったわ。」

私もあなた達をこのまま行かせる訳には行かない！

ゲートを閉じて! 早く!——」

レティの声とともに、通信回線が切られ、ビクトリーの前方の、
発進用の大型ゲートが、閉鎖されていく。

「発進ゲート、完全に閉鎖されました。」

——だめです！

こちらからの、コントロールを全く受け付けません！
本艦からのコントロール回路が、完全に遮断されたようです」
オペレーターが、簡潔に状況を説明する。

「しかたありません、ゲートを、吹き飛ばします！

主砲発射準備！

出力6パーセント」

決断したリンディが、即座に、命令を下した。

「了解！ 主砲発射準備！」

リンディの命令に、従い、火器管制係がシステムを操作し、
主砲発射の準備をする。

通信係が、慌てて通信機のマイクに手を伸ばし――

「こちら、ビクトリー！」

施設内に残った、作業員と技術スタッフは、ただちに
本艦から離れて、安全エリアへ退避してください！

繰り返します！

施設内に残った、作業員と……………」

「魔力駆動炉との、エネルギー回路接続！

出力6パーセントに固定！

安全装置解除！

……………照準よろし！

主砲発射準備——完了！」

「施設内の、作業員、及び、技術スタッフ——

安全エリアへの、退避終了を確認！」

「主砲の射線上に、危険物無し！

——オールグリーン！」

「て——ッ！！！」

ビクトリーの主砲から、青白いビームが発射され、
——ゲートへと吸い込まれていく。

——そして……ほんの、0.4秒程度の時間差で、ゲートは、は
でな爆発を起こし、
その中心には大きな穴が開いた。

「ビクトリー、出航準備！」

リンディの命令に、従って、今度は操舵手が、運航システムを操
作して、

出航の準備を開始する。

「了解！ 出航準備！」

「ガントリー・ロック解除！」

重い金属音とともに、ビクトリーの艦体を固定していた巨大な金属のホールド器具がはずされた。

「こちら、ビクトリー。」

.....

ああ、オレだ！

魔力駆動カタパルトの、スイッチを切ってくれ！

.....

ああ、そうだ。

大破した発進ゲートの残骸が、まだ有るからな。

アレに高速で、激突したら、このビクトリーでもどうなるか、分かんたろう。

.....

だから――

スイッチを切るだけでいい！

後は、こっちでなんとかする！」

「魔力駆動炉パワーフロー正常！」

「魔力推進システム——出力正常！」

—— オールグリーン！」

「微速前進 0.5」

「了解。—— 微速前進 0.5！」

リンディの指示通りに、操舵手が、操作すると——

巨艦は、ゆつくりと、前進し、

—— やがて、ビクトリーは、破損したゲートを、むりやり、突き破りながら、

本局の建物の外部へと、出て行つた。

「ビクトリー、虚数空間へ進入」

操舵手が、報告する。

「現場へ、急行します！」

航路設定10784！」

リンディが、目的地を指示する。

操舵手は、マシンを操作して、データを、正確に入力していった。

「了解、—— 航路設定10784——

空間座標修正——05……12……39……50
……20……31……45——修正完了」

「次元戦艦ビクトリー……発進！」

「ビクトリー、発進します！」

操舵手の操作によって、——

ビクトリーの魔力駆動炉が、全力運転に入り、

——ビクトリーは、その巨体からは、想像できないような猛スピードで、

虚数空間を、疾走していった。

第7章 決闘

2つに裂かれ、完全に崩壊した惑星から、かなり離れた、太陽に近い赤い惑星。

リーダー格まどかは、その惑星の月の、暗い夜の部分に、身を潜めて、じっとしていた。

「ハア ハア ハア ハア……………」

フウ、こ、ここまで来れば……………」

軍団を再構成して、一度体勢を整えてから、反撃を、——」

「やはり、転移魔法で逃げていたか」

「う?！」

リーダー格まどかが振り向くと、腕組みをしたサリーが、悠然と自分を見下ろしていた。

「はあっ!」

瞬間的にサリーから距離を取った、——

リーダー格まどかは、両手に

『マミのマスケット銃』を実体化させると、狂ったように、乱射する。

—— 1発撃つと、まどかは、その銃を捨て、新しく出現するマスケット銃を、

さらに手に取って、撃つ！

撃つ！ 撃つ！ 撃つ！ 撃つ！ 撃つ！

——まどかの射撃が、次々とサリーの体に、着弾するも、サリーの体は、魔銃の弾丸を全て跳ね返した。

「シールドも、使わずに?!」

「そんな、豆鉄砲みたいな質量兵器が、 通用するか！

くらえ！

超常スマッシュ!!」

サリーが、そう叫ぶと、彼女の右手は、巨大な、高速回転する丸型の電動ノコギリと化し、彼女の左手には、両刃の大型魔力剣が、握られていた。

——そして、彼女は、光速に近いスピードまで、加速して、リーダー格まどかに向かって飛行して来る！ —— 来る！

「アレは、——当たったら、すっごく、
い、痛そう、……………」

両手の武装、そのどちらか、或いは、両方で攻撃してくる?!」

リーダー格まどかは、あわてて、両手に、それぞれ魔力シールドを発生させて、
サリーの攻撃に備える。

それは、まどかが、見よう見まねで、創り出したミッド式防御シールドだった。

しかし、――

「ソーラー・プレキサス・ヘッドバットオ――!!」

「ぐべ?!」

サリーは、飛行体勢のまま、リーダー格まどかに、頭突きを喰らわせたのだ。

サリーの頭が、まどかの、みぞおちに、めり込む。

「ぐっ! うつつつつ………」

リーダー格まどかは、腹の激痛に悶絶する。

そして、サリーの技の衝撃で、ぶっ飛ばされたまどかは、その勢いのまま、頭から月面にめり込んだ。

「あぐっ!」

激突の衝撃で、月面の砂が高く舞い上がる。

リーダー格まどかは、みぞおちの痛みと、落下のショックで、しばらく動けずにいたが、それでもなんとか、立ち上がった。

「ゲホッ! ゲホッ! ぐふっ! うえっ!

ペッ！ ペッ！ ペッ！

月の砂が、口の中に入ってしまったまどかは、激しく咳き込んだ後、砂を吐き出した。

「ケホッ！……あ、あの攻撃体勢で、

……頭突きって、反則じゃないのぉ？！」

まどかが、文句を言っていると、――

「反則ではない！

あれは、サリーちゃんが、戦いの中で身に付けた、生き残るための、技術なのじゃ！

サリーちゃんが、うまい！

そして、まどか嬢ちゃんが甘いのだ！」

――どこからか、出現した、正体不明の、ハゲオヤジが、技と状況の解説をしてから、いきなり消えた。

――伝説の『サリーの解説者』である。

――暗い月面で対峙する、まどかとサリー。

「超魔力・ターツーマーキ――！！！」

サリーの頭髮が、逆立ち、その髪の毛から、すさまじい放電が起こる！

彼女の両腕からも、強力な電流が放出され、その直後サリーは、左右の腕を交差させて、スパークを起こす。

——サリーは、そのスパークしたエネルギーを、そのまま、前方に撃ち出した。

それは、強大な電磁エネルギーと、捕縛魔法が、重なった複合魔力弾だった。

エネルギーの竜巻に包まれたリーダー格まどかは、大の字の体勢で、空間に固定される。

「な、何、これは？
か、体が動かせない?!」
もがく、まどかだが、金縛りにあったようにビクとも動けなかった。

「超魔カスピ——ン!!!!」

再び、サリーの赤い髪の毛から、放電が起き、

——彼女は両腕を頭の上で、組み合わせる。

すると、左右のコブシが、腕の中に引っ込み、

——手の代わりに、巨大なドリル風の刃物が、

腕の先に、実体化する。

それは、左右を合体させて、1つの突撃用ドリルとなっていた。

——そして、サリーの体は、電磁エネルギーによって

回転するモーターのように、高速回転しつつ、そのまま高く上昇し、

上空でUターンして、——動きの取れない、リーダー格まどかに、回転中の、ぶっそうな刃物を叩き込んだ！

「ぐぎゃあああああ——ッ！！！！」

腹を、深くえぐられ、のたうち回る、まどか！

サリーは、体の回転を停止して、月面に降り立つ。

彼女は、腕の刃物を消し去り、通常の手を生やした。

「さすがに、応えたか。

だが、まだまだ、行くぞ！」

そういうサリーの手の中に、両刃の大きい剣が、実体化する。

——彼女が、野球のバッターのように、剣を構え、——

「超魔力ボール！」

横に振った剣の先端から、発射された赤い魔力弾が、

リーダー格まどかを捕えると、再びまどかは、動きが取れなくなつた。

「まただ！ 今度は、重力弾と魔力弾の複合？」

先程と同じく、いくら、まどかが、チカラを込めても、体が動かせない。

——サリーが、頭上に両刃剣を掲げると、今度は、剣と、

サリーの体全体が放電を起こし、その電磁エネルギーと、魔力が、両刃剣に、チャージされた。

「超魔力・^{ファイ}Vの字斬りい——！！！！」

サリーは、上空に高くジャンプすると、両刃剣で、リーダー格ま

どかに、

斬りこんで、

——一度、上から斜め下方方向に斬り、そこから、剣を斬り返して、上の方へ

斜めに斬っていった。——まさに『Vの字斬り』である。

「うわああああああああっ?!」

大ダメージを喰らったまどかは、

上空に跳ね上げられた後、落下して月面に倒れた。

「ぐっ……うっうっうっ」

さすがに、ダメージが蓄積したのか、リーダー格まどかは、立つ事が出来ずにいる。

「次でとどめだ！」

鹿目まどか！

サリーが、ゆっくりと、近づき、——

「超魔力ブリザード!!」

サリーの胸部から、2本の紅蓮の火炎が、渦をまいて、まどかに、襲い掛かった。

そして、——

「魔王!——正拳づきいいい——!!!!」

そのコブシに魔力を纏ったサリーが、

まどかに、殴りかかり、——

「うおおおおおおっ!!!」

まどか・ハイパーモードッ!!!!!!」

突如、跳ね起きた、リーダー格まどかが、叫び声をあげると、彼女を取り巻いていた、サリーの炎の渦が消し飛ぶ。

そして、まどかのピンク色の魔法少女服が、千切れ飛び、彼女の白い裸身が露あらわになった。

さらに、白い光がまどかを、包み込むと、その光は、白いドレスのような衣服となって、彼女の体を彩っていく。

——足の靴からは、小さな白い羽根。

——背中からは、巨大な白い翼。

それは、正に天使の姿だった。

まどかの右手が赤く輝きだす。

「わたしの、この手が、真っ赤に燃える！

魔女を倒せと、轟き叫ぶ！！

ばーく熱！ まどかフィンガア——！！！！」

叫びとともに、リーダー格まどかは、サリーへと、飛びかかると、右手でアイアンクロウの型を造り、サリーの頭部を、——ワシッ！ と——つかむ。

「ガッ?!」

まどかの反撃に、驚くサリー。

サリーの魔力鉄拳が、まどかの腹に叩き込まれたが、
——かまわず、リーダー格まどかは、つかんだ手を、
通して、超高熱波と、破壊的魔力を、サリーの頭に、撃ち込んだ!!

「う？ うおおおおっ?!」

「私の願いは、——」

全ての魔女を、この手で消し去る事、だから……

私を邪魔する魔女なんて………

壊してやる！ 滅ぼしてやる！ 壊してやる！

滅ぼしてやる！ 壊してやる！ 壊してやる！

壊してやる！ 壊してやる！ 壊してやる！

壊してやる！ 壊してやる！ 壊してやる！

壊してやる！ 壊してやる！ 壊してやる！

こわしてやるウ——!!!!!!」

リーダー格まどかは、さらに、身体強化魔法による

怪力で、物理的にも、サリーの頭部を、右手で締め上げた。

「ぐがあああああっ!!!!!!」

リーダー格まどかは、とどめとばかり、サリーの頭部に、最大出

力の、

高熱波と、魔力を、叩き込んだ。

「ヒ——トオ——！・———エンドオ——ッ！……！！！」

「……！！！！！」

大爆発して、粉々に吹き飛ぶ、サリーの頭部。

——頭部を失って、月面に横たわる、——

サリーの遺体を、しばらく悲しげに見つめていたリーダー格などが、

くるりと向きを変え、次の目的地に向かうべく、

月を後にしようとした、その瞬間、——

——ガシィィ——ッ！——

「うつつ？！」

「くくく、捕まえたぞ、鹿目まどか！！」

信じられない事に、頭の無いサリーの体が、リーダー格まどかを、後ろから、はがし締め、している！

「あ、頭が吹き飛んで、無くなっているのに、どうして？！」

サリー、あなたは、まさか、ロボット？！」

驚いたまどかは、思わず聞いていた。

「ワシは、生体魔導サイボーグ（改造人間）だよ。」

くくく。

サイボーグの頭脳は、頭部になければいけない、
と言うルールは、有るまい。

ワシの頭脳は、人間で言えば、心臓の部位に有る」

余裕を持って、一々丁寧に解説する、首なしサリー。

「くっ！ は、はなして！！

は、はなせえ！！」

リーダー格まどかは、サリーの腕を振りほどこうと、
もがくが、サリーの腕力は、正にサイボーグのそれである。

まどかは、身体強化魔法で、対抗するが、それでも
サリーのパワーの方が数段上だった。

「無駄だっ！！

このまま、ワシとともに滅ぶがいい、鹿目まどか！！

この——反陽子爆弾でな！！！！」

「なっ？！！！！」

サリーの言葉に、真っ青になるリーダー格まどか。

（……もし、これでも駄目だった時は、後を頼むぞ！）

（頼もしき、我が後輩たちよ！——）

——サリーの意思と魔力が、宇宙に何かの作用を残した。

——次の瞬間、まどかの姿も、サリーの姿も、

そして、月と、その本星である赤い惑星も、全てが『白い闇』に飲み込まれ、——

何も存在する事を許されぬ空間が急速に広がった。

——そして、『白い闇』が消え去った時、そこに存在していたのは、——

鹿目まどかだった。

元のピンク色の魔法少女服に戻っている。

彼女の周りの宇宙空間に、何事もなかったように出現する鹿目まどか軍団の威容。

「行こう、みんな、………次の戦場へ、

………うつん、地獄へ」

リーダー格まどかは、どこか、悲しげな顔で
そう言うのと、軍団を引き連れ、移動を開始した。

ほむら達を乗せた、『次元戦艦ビクトリー』は、1時間程かけて

虚数空間を抜け、通常空間に突入した。

「ビクトリー、目標の宇宙に到達しました」
操舵手が、報告する。

「ふう、後は……」

リンディ提督が、ほむら達に話しかけようとした、その時、――

「1時の方向に、次元艦の反応！
距離、4万、接近してきます！」

メイン・スクリーンに出します」
オペレーターが叫ぶ。

メイン・スクリーンに大型次元艦の艦影が映し出された。

「『ビッグ・タイガー』？！ そんな――

なぜ、あの艦が？！」

リンディが、珍しく動転しているようだ。

「提督、『ビッグ・タイガー』から通信が」
オペレーターが報告し、――

メイン・スクリーンにレティ提督の顔が出る。

「こちらは、時空管理局所属の、
『次元戦艦ビッグ・タイガー』、艦長のレティ・ロウランです。

ビクトリー聞こえますか？」

レティの声が響く。

「ええっ?!」

「なんで？」

あの人は、本局にいたはずじゃあ？」

杏子と、マミが疑問を口にした。

「本艦は、時空管理局本局より、
貴艦の捕獲命令を受けて、行動しています。

直ちに、艦を停止して、こちらの指示に
従ってください。——そうすれば、
こちらからは、攻撃しません。

乗員の安全も、保障します。

警告は1度です。

以後の申し入れには、応じられません。

貴艦の賢明な判断を望みます」

レティが、そう言うと、通信が切れた。

「リンディ提督……」

ほむらが、リンディに話しかけたが、
リンディは、それには、答えず、——

「通信回線を開いて」

「はい！」

リンディは、オペレーターに指示を出した。

「ビクトリー艦長、リンディ・ハラOWNです。

貴艦の申し入れに、感謝します」

「リンディ ——」

「レティ —— なるほどね、本局にいたのは、——
変身魔法であなたに化けたエルザだったのね」

「エルザは、レティの使い魔で、変身魔法が使えるのだ。」

リンディが、自分の推理を述べると、

レティは、1度頷いてから、——

「リンディ！」

すぐに艦を止めて！

今、指示に従えば、悪いようには、しないわ。

——本局の上層部にも、私が掛け合ってあげるから——」

「ありがとう、レティ。」

いつも、私の事を心配してくれて。

でもね、私達はここで、立ち止まる訳にはいかないのよ！」

「リンディ！」

「フェイトさんや、なのはさん達が、苦戦するのは、目に見えてるわ。」

——放ってはおけない。

それに、事態を収拾して、——
平和に暮らしている人々を守る為にも、

まどかと言う子を救う為にも、——

ここにいて、

ほむらさん達、魔法少女のチカラが必要なのよ」

「どうしても、行くつもり？」

「1度決めた事なら、絶対に、最後までやり通す！」

それが、ハラオウン家の人間よ！」

「そういうつもりなら、

チカラずくでも、あなたを止める！」

たとえ、あなた達を傷つける事になっても——！」

レティの最後の言葉とともに、通信が切れた。

「ビッグ・タイガー、なおも、接近」

オペレーターの言葉通り、メイン・スクリーンにビッグ・タイガーが映り、

その姿がみるみる大きくなる。

——と、ビッグ・タイガーの一部が光り、——

「ビッグ・タイガー、魔導砲を撃ってきます！」

出力は、低くしてくれてますが、——」

オペレーターが、悲鳴をあげる。

「こちらも、主砲を！」

ただし、当てては、ダメよ。

——あくまで、威嚇射撃、——

出力2パーセントに固定」

リンディの指示に従って、火器管制係が、主砲を準備する。——

ビクトリーと、ビッグ・タイガーの、

魔導砲の青白いビームが、暗い宇宙空間を、交互に飛びかう。

そして、2隻の次元戦艦は、高速のまま、急激に接近し、——
400メートルぐらいの、至近距離をすれ違った。

「防御シールド全開！ 最大戦速！」

隠れられる場所を探して！」

リンディの命令が、オペレーターに跳ぶ。

「9時方向に、

アステロイド・ベルトがあります！」

「砲撃中止！」

攻撃を回避しつつ、そこへ、向かって！」

艦首側面に装備した、緊急機動バーニア（推進装置）

から、大きな火炎を吹き出した、——ビクトリーは、艦の向きを、急激に変えて、アステロイド・ベルト

（宇宙に存在する小惑星が、集まって帯び状になったモノ）へ向かって、加速を開始した。

ここは、ビッグ・タイガー艦内の、ブリッジ（司令室）。

「ビクトリー、逃げて行きます！」

オペレーターの報告を聞いたレティは、——

「逃がすな！」

魔力エナジー・ミサイル発射！！」

レティは、——まさに、大トラのごとく、吼えた！！

再び、ビクトリー艦内の、ブリッジ（司令室）。

「魔力ソナーに、感！

質量兵器の反応！ ミサイル接近！」

再度、悲鳴をあげる、若いオペレーター。

「迎撃ミサイル発射！！」

リンディの命令によって、――

ビクトリーの艦尾から発射された、多数の迎撃ミサイルが、次々とビッグ・タイガーのミサイルを、撃ち落していくが、――

撃ちもらった、1発のミサイルが、ビクトリーの、すぐ近くの岩石に、

着弾し、――爆発で、ビクトリーの巨体が大きく揺さぶられる。

「わあっ！ うわわわわっ！！

こ、これじゃまるで、戦争じゃねえか！」

杏子が、悲鳴をあげた。

「そうよ。

あなた、何だと思ってたの？」

いまさらと言うように、ほむらが言う。

「じよ、冗談じゃねえぞ！

あたしは、戦争するために、
こんな所まで来た訳じゃ、……………」

「じゃあ、ここで、この艦を降りて、逃げ帰る？」

「う！　そ、それは、…………ええと、何だ？」

「何？」

「こっ、こっ、…………ここまで来たら、
せ、戦争でも、何でも、やってやらああ！！！！」

「まったく、この人達は、…………」

のん気なんだか、真剣なんだか？」
杏子と、ほむらの、漫才のような、やり取りに、ため息をつく、
巴ミミ。

「Jタイプ・ステルスシールド展開！

振り切るわよ！　機関全速！

小惑星に艦をぶつけないよう、
気をつけて！」

リンディの命令により、オペレーター達は、
何か特殊なシステムを、起動させたようだった。

しばらく、ビクトリーが前進した後、――
ステルスシールド（探知妨害装置）のおかげで、ビッグ・タイガー

は、

ビクトリーの位置を見失ったらしい。

——リンディの指示によって、ビクトリーは、小惑星が密集しているポイントに停止した。

「さっきの、ミサイルですが、……」

オペレーターが、リンディの所に、報告しに来た。

「何？」

「魔力エナジー・ミサイルの一種です。
装填していた魔法は、強化した捕縛魔法でした」

「——で、事は？」

杏子の頭の上に『？』マークが、浮かんだ。

「本艦に、一発でも直撃をもらえば、動けなくなって、捕まりますね」

オペレーターが、親切に教えてくれた。

「あらあら、それは、困ったわね」

リンディが、のん気に感想をもらす。

「この人も、真剣なんだか、のん気なんだか？」
再び、ため息をつく、巴マミ。

「——にしても、変ね。——データ上は、この宙域に、これほど大規模な、

アステロイド・ベルトは無いはずなんだけど」

リンディ達は、このアステロイド・ベルトの大半が、
——サリーと、まどかの戦いによって、破壊された惑星の
『成れの果て』である事をまだ知らない。

2つに割れた惑星は、その後、お互いの引力によって引かれ合い、
激突して、さらに小さな、たくさん的小惑星に、爆散して、
アステロイド・ベルトの元になったのだ。

それが、ビクトリーにとっては、恰好な隠れ場所となったのは、
皮肉な運命の巡り合せ、と言っべきであろうか。

「ビッグ・タイガー、本艦に接近してきます」
オペレーターが、報告する。

「発見されるのは、時間の問題ね。

いくら、高性能のステルスシールドを使っても、
『人間の目』で見れば、認識可能だから」

リンディが、作戦を考えていると、——

「そう言えば、こういうの、昔、
テレビでやってた何かのアニメで見たよ」

この杏子の言葉に、——

「あら、おもしろそうね。

どついう話だったの？」

リンディが、興味を示した。

「ええと、……………確か、
……………うーんと、

傷ついた宇宙戦艦が、アステなんとかに、逃げ込んで——敵の目を、

くらますために、——岩石を、その艦にひっつけて、
でっかい岩に見えるようにした、——
って、話だったような？」

杏子が、何度も、小さい頃の記憶を思い出しながら、説明した。

「いいわね、それ！

それで行きましょう！」

「へ？」

リンディの満面の笑みに、
再び、杏子の頭の上に浮かぶ『？』マーク。

こちらは、ビッグ・タイガーの、ブリッジ。

「ビクトリーは、まだ発見できないの？！」
レティが、イラついた声を出した。

「も、申し訳ありません。

あの艦は、ジェイル・スカリエッティが製作した試作型ステルスシールドを搭載していますから、恐らくは、……」

戦々恐々な感じで、オペレーターが、言い訳するように、説明した。

「司法取引で、彼に造らせた新兵器の1つね。

天才科学者も、まったく厄介なモノを、——って、
——こちらが、使った魔力エナジー・ミサイルも、確か、彼の開発したモノだったわね？」
レティが、質問した。

司法取引とは、裁判結果が出て、刑期
(刑に服する期間。懲役〓年など)が確定した犯罪者に対して、
警察組織など(この場合は時空管理局)への、協力を条件に
刑を軽くする事である。

「そうです」

オペレーターが、簡潔に答える。

「痛い痒い、って事か。
複雑な気分ね」

良く考えると、ビッグ・タイガーとビクトリーの双方に、かなりの数の、
『スカリエッティの作品』が搭載されている。

レティは、自分とリンディが、狂気の、マッド・サイエンティストの、モルモット（実験台）にされているような気がしてきて、不愉快だった。

実際、今回、ビッグ・タイガーの出撃を許可した上層部の連中に、そういう意図が、有ったとしても、おかしくはない。

そう考えると、レティは、余計に気分が悪くなってきた。

（あの、連中の思惑通りにさせていいの？

——レティ・ロウラン。）

自問自答するレティ。

（ヤツらは、多数の人的被害が出る危険性も、充分承知の上で、我々に新兵器の実戦テストをやらせるつもりなんだわ。）

——これでは、一生懸命、真面目に、職務を遂行している自分が、『アホ』みたいではないか。

——そう思った、レティは、——なんだか、だんだん、腹が立ってきた。

「……あっ——！」

ビ、ビクトリー発見——」

オペレーターが、突然叫ぶ。

「見つけたの？！」

レティが、尋ねたが、——

「あ？ …… あれ？
……す、すみません！」

良く似たサイズで、似た形の小惑星でした！

申し訳ありません！」

オペレーターが、ぺこぺこ頭を下げて、レティに謝った。

「——もういいわ。

次からは、きちんと、確認してから、報告しなさい」
レティは、それ以上きつく叱ったりは、しなかった。

「はっ！ 以後気をつけます！」

……この、宙域は、魔力素の濃度が濃く、
センサー類の反応が不安定でして、——

かなり大規模な、魔法戦闘が行われたようです」

「でしょうね。

出現した、まどか軍団は、数億人いたと、報告がきているわ」

「……………ん？

こ、これは！」

「何？」

オペレーターに、レティが尋ねる。

「反陽子の反応です！」

この恒星系内で、反陽子爆弾が使用された形跡があります!」

「恒星とは、——太陽の様に、それ自体発光する星の事である。

——惑星とは、この恒星の周囲を公転する、地球の様な、大型の天体の総称。

——そして、恒星系とは、恒星および、それを中心として、運行する惑星の集団の事を意味する。

——ちなみに、太陽系も、恒星系の一種である。」

——オペレーターの報告に、レティの顔色が変わる。

「なんですって!

反物質兵器が、……………」

「——まどか軍団の仕業でしょうか?」

このオペレーターの疑問には、——

「いままで、確認された、まどか軍団の戦闘能力に関しても、他の魔法少女のデータでも、そんな物を使用した情報は、まったく無かったわ。

——恐らくは、報告にあった、伝説の魔神、

サリー・ザ・マジシャンが使用した、と考えるのが、妥当ね」

このレティの推測に、今度は、オペレーター達の顔が青くなる。

「まどか軍団に、伝説の魔神、そ、そんな連中に今、襲われでも、したら——!」

オペレーター達の顔は、恐怖に染まっていた。

「落ち着きなさい！」

本艦の任務は、あくまで、ビクトリーと、その乗員の、捕獲よ！

今は、目の前の、任務に集中しなさい！」

レティが、オペレーター達を叱責する。

「はっ！」

も、申し訳ありません！

任務を続行致します」

やっと、落ち着いたオペレーター達は、
ビクトリーの探査に集中した。

——そして、しばらく、時が過ぎ、——

「ん？　こ、これは？　——まさか？

……………ま、間違い無い。

やっと、見つけたぞ。

ビクトリーを発見しました！」

オペレーターが、今度は確信に満ちた、声を出した。

「発見したの?!」

レティが、尋ねると、——

「メイン・モニターに出します」

オペレーターが、メイン・モニターに、映像を出す、——

「どこ?」

レティが、映像を凝視するが、そのどこにも、ビクトリーらしい
物体は、

見当たらない。

「あそこです」

オペレーターが、指差す先には、――

「あれが？ ビクトリー？」

オペレーターが、指差した物体は、単なる大きな、岩石の塊にしか、見えない。

「対象物をズーム（拡大表示）します」

オペレーターが、そう言うと、問題の、岩石の塊が、拡大表示された。

「こ、これは？！ まさか！」

レティが、珍しく、驚いた声を出した。

その巨大な岩石の所々から、魔導砲の砲台や、レーダーやセンサー類が、

その姿をちよつとだけ、覗かせているのだ。

そして、現在、周囲の小さな岩石が、そこに吸い寄せられ、姿の見える砲台などを、懸命に隠しているのだ。

「こんな事をして、ここに隠れていたのね。でも、良く見つけれられたわね」

オペレーターの仕事を、褒めるレティ。

「はい。」

わずかに、小惑星が妙な動きをしていました。もし、ビクトリーの、カモフラージュが

完了していたら、発見は不可能だったかもしれません」

「……………」

「すぐに、攻撃を仕掛けましょう！」

「気がついていない振りをして、接近すれば！」

「……………」

「レティ提督？」

レティは、オペレーターの問いかけにも答えず、ビクトリーをじっと見つめている。

その時、――

「時空管理局、本局より暗号電文あり」
通信担当のオペレーターが、報告する。

「読め」

レティの命令を受けて、――

「ビクトリーの捕獲に成功したか？　すぐに報告をせよ、です」
オペレーターが、電文を読み上げた。

「本局へ、暗号電文を送れ」

レティが命令をしたので、通信担当のオペレーターは、聞き返す。

「内容は、何と？」

「我、目標の次元世界に到達するも、ビクトリーを発見出来ず。」

ビクトリーは、すでに別の次元世界に、逃走した可能性が高い、と推測される。

なお、本艦は、魔力駆動炉の出力が不安定な為、早急に、本局の整備ドックで、艦のシステムチェックをする事が、必要と思われるので、急遽帰還する事を英断。

よって、ビクトリーの追跡には、別の艦を派遣する事を、提案する。

——ビッグ・タイガー艦長、レティ・ロウラン」

このレティの指示に、ビクトリーを発見したオペレーターの、目が点になる。

「て、提督?!」

ビクトリーは、あそこに!」

「そう?」

岩石が、邪魔をして、良く見えないけど、私には、アレは、別の次元艦のように見えるわ」

このレティの言葉に、オペレーターの、目は再び点になる。

「へ?!——」

「本艦の任務は、終了した、——」

これより、管理局本局へ、帰投する！」

「はあ」

ビッグ・タイガーの操舵手も、

なにやら、狐に包まれたような顔のまま、命令に従った。

後方に、遠ざかるビクトリーをじっと見つめるレティ。

「リンディ、――

自分で決めた事なら、最後の最後まで、決してあきらめず、全力全開で、やり遂げなさい。

あなたの、見つけた子たちが、いつだって、どこでだって、そうだったように、――

そして、必ず、生きて帰ってきなさい！

あなたには、――

言いたい事が、山ほどあるんだからね！」

再度、ビクトリー艦内の、ブリッジ。

「ビッグ・タイガー、本艦より離れていきます。

現在距離、1万5000」

ビクトリーのオペレーターが、リンディに報告した。

「でも、どうして？」

偽装（他の物と紛らわしくして、敵の目をごまかす事）が、まだ作業途中の段階で、——接近されてしまったから、絶対発見されると、思ったのに」

マミが、リンディに聞いてみた。

「気がついたのに、——
気がつかない振りをしてくれたのね。」

さすが、かつては、『次元の虎』と呼ばれたレティだね。

引き際も、見事ね」

このリンディの言葉に、——

「え？　どう言う事ですか？」
再度、マミが、リンディに質問する。

「ビクトリーと、ビッグ・タイガーは、——
ほぼ同じぐらいの、戦闘能力を、持っているのよ。——
防御はこちらが優位、
攻撃力は向こうが上、と言う違いはあるけどね。」

——何れにせよ、——
もし、本気で戦っていたら、双方とも、ただでは済まなかったでしょうね。

最悪、相打ちで、共倒れ、になっていた可能性もあるわ。

だから、レティは、好意や、善意だけで見逃してくれた訳じゃないのよ。

私達が、殺し合いをして喜ぶのは、——あなた達を、拘束しようとした連中と、その同類ぐらいのものよ。

レティも、そこらへんを、良く分かっていたはず」

「なるほど、……」
納得したマミ。

（さすがに、レティも、私達が、スカリエッティの実験台にされている事に、
気がついてくれたようね。）

（でも、あなたらしいわね、……レティ）

（あなたなりに、私達の行動を認めてくれたんでしょ。）

（私は、必ず生きて戻ってくるわ。
あなたに、絶対お礼をしなくちゃね。）

そう思いながら、遠ざかる友の艦に、敬礼するリンディ。

「ビッグ・タイガーから、本艦に、暗号電文です！」
通信担当のオペレーターが、報告した。

「読んで」
リンディが、指示をする。

「はい。――」

『航海の安全と、諸君らの健闘を祈る、

――レティ・ロウラン』

以上です。」

オペレーターは、簡潔に電文の内容を述べた。

「ありがとう、レティ」

リンディが、改めて、親友に礼を述べた、その時、――

「こ、これは?!」

艦のコンピューターが?」

メイン・コンピューター担当のオペレーターがあわてた声を出した。

「どうしたの?」

リンディが、

そのオペレーターに尋ねると、――

「ビッグ・タイガーのメイン・コンピューターが、

本艦のメイン・コンピューターに、アクセスしています!」

オペレーターは、状況を説明する。

「ま、まさか、ハッキングを?! そんな!」

顔色を変えるリンディ。

「い、いえ、ハッキングでは、ありません。

これは、――

コンピューター同士が、相互リンクして、

——ビッグ・タイガーのコンピューターから、本艦のコンピューターに、

メッセージ文の付いた、膨大なデータ・ファイルを送ってきているんです」

オペレーターが、詳しく解説した。

「そのメッセージ文の、内容は分かる？」

状況を把握した、リンディが、オペレーターに尋ねる。

「少々、お待ちください。——」

『高町一等空尉以下、管理局魔導師部隊は、

——まどか軍団を捕捉するも、これに敗北、

——その直後、伝説の魔神とも呼ばれる、魔女サリー・ザ・マジシヤンが出現、

まどか軍団と戦闘を開始、——その結果、恒星系内の惑星数個が破壊される事態となるが、サリーは、戦死したものと推測される。

——まどか軍団は、次の目的地の惑星に移動を開始した模様』

——以上です」

オペレーターが読み上げたメッセージ文に、

リンディは、——

「これは、ビッグ・タイガーから、本艦への、メッセージ文と言うより、——

なのはさん達を乗せた、クロノの次元艦から、ビッグ・タイガーが受け取ったモノを、そのまま、こっちへ送ってくれた、モノらしいわね。

まどか軍団の、次の目的地に関する情報は？」

リンディが、尋ねると、――

「データ・ファイルの方に、空間座標が有ります。

他には、まどか軍団の能力分析・高町一等空尉のまとめた経過報告・

サリー・ザ・マジシャンの情報などです」

オペレーターがデータの説明をする。

「データは、整理してから、ブリーフィング・ルームの端末に送ってちょうだい。

空間座標から推測される、まどか軍団の目的地は？」

リンディが指示の後で、質問する。

「結構遠い銀河の、恒星系です。

ワープ（空間歪曲航法）を使わないと、到着にかなり時間がかかります」

オペレーターの説明に、――

「では、総員ワープ準備！

まどか軍団を追跡して、――

高町一尉達と、合流します！」

リンディの命令に従って、次元戦艦ビクトリーは、ワープの準備を開始した。

「もうすぐよ、まどか」

ほむらは、逸る（はやる）気をおさえた。

第8章 刹那

「ファビア?! ファビア!

何してるの?! 早くこっちへ!

シェルターに入るのよ!」

彼女の家族らしき女性に、『ファビア』と呼ばれた、

——ロングヘアーの黒衣の少女は、空の一点を静かに見つめ、こつこつと言った。

「誰かが、……………」

誰かが、戦ってくれてる。

私達を守るために、——」

彼女の周囲では、ほとんどパニック状態の、この惑星の住民達が、我先にと、地下シェルター（避難施設）に、駆け込んでいた。

「きゃあああああああつ!?!?!」

高町なのはは、苦戦していた。

なのはの、バリアジャケットがひどく破損してボロボロの状態である。

何箇所か、鋭い刃物で切り裂かれた様な傷痕があり、ある箇所は焼け焦げた様な痕があった。

ここは漆黒の宇宙空間。

『ファビア』と呼ばれた少女達がいる惑星の、すぐ近くだった。

高町なのはに高速で接近する者がいる。

「たああああああ！！」

以前に『美樹さやか』が使用していたモノと同じ魔力剣を手にした『鹿目まどか』が、なのはに襲い掛かってきた。

「くっ！」

なのはは、レイジングハートで、『鹿目まどか』の魔力剣を防御する。

レイジングハートと魔力剣が、激しい火花を散らした。

しかし今度は、なのはを、『杏子の槍』を持った『別の鹿目まどか』が

中距離から、多節槍で攻撃してくる。

高町なのはが、二枚の防御魔法シールドを展開し、『二人の鹿目まどか』の攻撃を何とか、防御していると、彼女の、背後から、射撃魔法の閃光が迫る！

「ぐふっ!!?」

背後からの、射撃魔法を背中にもろに受けた、なのはは、苦痛に顔を歪める。

なのはが、振り向くと、『巴ミのマスクett銃』を構えた、『もう一人の鹿目まどか』が彼女を狙っていた。

『さやか of 剣』を持つ『鹿目まどか』が、なのはにその剣先を向ける。だが、格闘戦が可能な距離ではない。

しかし、いやな予感がしたなのはは、咄嗟に防御シールドを再展開する。

「スパ―ダ!」

まどかが、そう叫ぶと、――剣の根元で、小さい爆発が起き、剣の刃が、ミサイルのように飛び出した。

なのはを目掛けて、飛んできた剣の刃はなのはの防御シールドに当たって跳ね返される。

攻撃を防がれた『鹿目まどか』は剣の柄の中からマガジンを引き出し、

新しいマガジンを剣に装填して再度トリガーを引いた。

すると、液体金属状のモノが剣の柄から出てきて硬い長剣の形に凝固する。

「マジカル・ストリーム・アタック!!」

3人のまどか達が、一斉に、

なのはに向かって、突進してくる!——

「どこの三連星じゃっ!」

『さやか^の剣』を持つまどかの頭を、真上から、八神はやてが、シュベルトクロイツで、思いっきりぶっ叩いた。

「痛——ッ!　こーのー!」

頭のとっぺんに、でかいタンコブが出来た『鹿目まどか』が、はやてを睨む。

——そして、超高速で、はやての背後に回り込んだ、『鹿目まどか』は、

組んだ両手を頭上に持ち上げ、『ダブル・ハンマー・パンチ』の形で、

はやての頭部を強打した。

「ぶぎゃっ?!」

不意をつかれたはやては、長距離をすっ飛ばされ、小惑星に、めり込んだ。

「はやてちゃん!」

なのはが、思わず叫ぶ。

「ふふん!　邪魔をするから!　うっ?!」

鼻を鳴らす、まどかの肩を、踏みつけて、そこを足場に、跳躍する者がいた。

——ザンバーを手にしたフェイトである。

「わ、私を、踏み台にしたあ?！」

フェイトは、その勢いのまま、マスケット銃を持つ『鹿目まどか』に

斬りかかり、頭から、一刀両断にした。

「こ、こいつら——ッ!！」

怒り狂う、リーダー格の『鹿目まどか』。

——そして剣を持つリーダー格まどかが、その剣を上方に高く掲げると、

——それを合図に、なのは達の近くにいる数百人の『鹿目まどか』が

魔法の詠唱を開始する。

「来たれ! さくらカード!！」

まどか達が詠唱すると、

彼女達の頭上からカードの様な物体が出現した。

「契約のもと、まどかが命じる……ミラー!！」

詠唱が完了すると、まどか達の足元には

星型を中心とした、未知の魔法陣が形成される。

「ま、またか?！」

気がついたはやてが、叫ぶ。

なのは達の目前で、数百人の『鹿目まどか』が
なのはと全く同じ姿に変身した。

フェイトや八神はやての姿に変身した、まどか達もいる。

3人は、コピー・なのはの大群に取り囲まれた。

そして、数百人の『高町なのは』が、3人に対して
手にしたレイジングハートを向ける。

「『デイバイン・バスタ——ッッ！！！！』」

数百人の『高町なのは』が同時に魔力砲撃を放った。

3人を襲う巨大な桜色の砲弾。

「ぐううう——ッ！！！」

この集中砲火を、なのは達3人は、
全員の魔力バリアーを一つに合わせ、なんとか耐えた。

しかし次の砲撃にも耐えられるのか、なのはにも自信はなかった。

外見が全く同じであっても、所詮は模造品、コピーなのである。
本物の高町なのはと同じ能力を持っている訳ではない。

だが、『塵も積もれば山となる』の諺ことわざが有るように、
数百人のコピーなのはの、集中砲火は、オリジナルを超える破壊力
を持っていた。

自分に向けて、レイジングハートを向ける
自分と全く同じ姿をした『数百人の鹿目まどか軍団』。

それは、高町なのはにとって、
まさに『悪夢』としか言いようがない。

「これ以上進まれたら、もう、後がない！」
なのはの言う通りだった。――

まどか軍団は、先の戦いで、管理局部隊の作戦を学習したらしく、
――今回は、惑星上に設置された、『住民避難用の転送装置』と、
『惑星用――強層型捕獲結界システム』を、衛星軌道からの、
超長距離砲撃で、先に、破壊したのである。

――そのため、なのは達は、やむを得ず、惑星の住民たちを、
地下シェルターに避難させて、――まどか軍団を、なんとか宇宙空
間で、
食い止めるしかなかった。

だが――戦況は、悪くなる一方だった。

出撃した魔導師部隊は、現在ほぼ7割が、負傷し、管理局側の戦
力は
底をつく寸前と言える。

「やめて、まどかちゃん！」

もうやめて！

こんな事、まどかちゃんだって、いやだったはずだよ！」

なのはが、必死に、リーダー格まどかに呼びかけるが、返事は、無かった。

「あなたが、欲しかったのは、こんな世界なの？」

こんな、チカラなの？！

思い出して！

あなたは、本当は、何が欲しかったのか、——！」

フェイトも、大声で叫んだが、それも無視して、

——まどか軍団は、なのは達を包囲して、攻撃を仕掛けようとする。

その時、——

「うおおおおお——！！！」

「何や？！」

訝しい顔の、はやて。

「叫び声？！」

フェイトには、そう聞こえた。

「あ、あれは、——？！」

なのはが、戦闘宙域に近づくモノを、見つけた。

——それは、高速で爆走する光の螺旋だった。

——ほむらと、マミが、中心で螺旋状に飛翔しながら、

射撃を連発し、まどか軍団を迎撃、

——その外側で、杏子が、接近してくるまどか軍団を、得意の槍術で蹴散らしながら、なのは達に接近して来る！——来る！

——連戦で、動きの鈍ってきた、フェイトに、二刀流の剣で襲い掛かるまどか軍団の1人。

——それを見た杏子が、高速移動で、フェイトの援護に入る。

「この、——バカヤロウ！！」

ライトニング・ランサ——！！！！！！」

杏子は、その『鹿目まどか』に、槍による高速突きを連続で繰り出し、

さらに、強力な回し蹴りをぶちかました。

——両腕と、片足を失った『鹿目まどか』は、吹き飛ばされ、そのまま消滅していく。

だが、接近してきた、多数のまどか軍団が、魔法の弓と、マミのマスケット銃を構え、なのは達と合流した、ほむら達にも、射撃魔法の雨を降らせた。

「くっそおおー！」

杏子が思わず、たじろぐ。

「ツイン・パープル・ソード！」

ほむらは、自分の弓を、中央から、分離させると、2本の魔力刀に

変形させた。

ほむらの魔力刀は、ビーム剣のように長く伸びて、紫色に輝いている。

「パープル・ソード・トルネード！」

ほむらは、2本の魔力刀を構えた腕を、伸ばして、——
フィギュア・スケートの選手のように、自分の体を高速回転させて、
——
敵弾を回転ソードで跳ね返す。

——そして、今度は、マミが、射撃魔法で、反撃した。

「アルティマ・シユ——！！！」

マミの声に従って、9台の大型魔銃が彼女の正面に、——
さらに、マスケット銃が、彼女の左右に75丁ずつ出現する。

——そして、

「当たたれえ——！！！」

マミの叫びと共に、大小の魔銃が、一斉射撃を始めた。

——接近して、距離を詰めていたまどか軍団は、次々と撃破されていく。

「マミさん？」

フェイトが、驚く。

「ほむらちゃん?! それに、杏子ちゃん?!」

なのはも、思わず、大声を出した。

「あ、あんた達！

なんで来たんや？！

ここは、私達にまかせ、言っただろ！」

はやてが、憤慨したような声を、出すが――

「まかせろ、言われて、――

はい、そうですか、――と、

引っ込むほど、あたしら、いい子ちゃん、じゃ、ねえんだよ――！」

杏子が、逆に、はやてに噛み付く。

「そういう事！」

マミも、杏子に同意した。

「まどかは、私達が止める！」

そして、まどかを、戦いの運命から、救い出す――！

他の誰でもなく、私達のこの手で――！」

ほむらが、自らの決意を、言葉で述べた。

遠距離から、新たな敵の出現に気づいた、
リーダー格まどかは、――

「誰が、来たのか、知らないけど、無駄な事です！」

私の邪魔をする人達は、全て、滅ぼしてくぼがつ?!」

いきなり現れて、リーダー格まどかを跳ね飛ばして行ったのは、

『ショート・ワープ』で空間跳躍してきた、『次元戦艦ビクトリー』だ。

「ふふつ。」

油断大敵よ、まどか軍団の『軍団長』さん！」

ビクトリーの、ブリッジ（艦橋）に立つリンディ提督が、ニタリと笑う。

「こ、これは、――?!」

時空管理局の『次元戦艦』？」

リーダー格まどかが、突然の奇襲に驚愕した。

「魔力エナジー・ミサイル発射！」

リンディの命令で、ビクトリーは、多数の、魔力エナジー・ミサイルを乱射する。

ミサイルの弾頭は、細かく分裂し、高速でまどか軍団を捉える。

すると、『凍結魔法』が、発動し、まどか達は、凍り付けにされて、動けなくなった。

「あれは?! 凍結魔法?」

その光景を見たマミが、呟く。

「あれは、例の魔力エネルギー・ミサイルだわ。」

ビクトリーも、装備していたのね」

ほむらも、ビクトリーの戦闘を目撃する。

「そんな、巨大戦艦で、私達と戦おうなどと、——正気ですか？

邪魔者は、消滅しなさい！」

リーダー格まどかが、そう言うと、まどか軍団の頭上に『生命の樹』の

魔法陣が出現した。

「あれは！ まずいつ！

母さん！！——逃げて！！

早く！！！！——」

フェイトが、あわてて、ビクトリーに回避するよう、警告した。

「もう遅いつ！！——ゲブラー・ブラスト！」

リーダー格まどかの、魔法の詠唱によって、まどか軍団は魔法の矢を、

『生命の樹』の魔法陣に向けて発射した。

魔法の矢が、『生命の樹』に着弾し、直後『生命の樹』の魔法陣はピンク色に輝きだす。

「耐圧力バリアー、出力最大！」

リンディの命令で、ビクトリーのオペレーターが、何か特殊な操作を

したようだった。

——約3秒後、巨大魔法陣からピンク色のレーザー光線のような魔法弾が連続で撃ちだされた。

この消滅魔法弾が、ビクトリーに襲い掛かった、——
しかし、ビクトリーは、白く輝く光に包み込まれ、——消滅魔法弾は、

この光に、ことごとく跳ね返されてしまった。

「あ、あれを、跳ね返した?!

なんや、あのバリアーは?!」

驚嘆するはやて。

「『ジェイル・スカリエッティの作品』の中でも、傑作中の傑作よ。

今のところ、理論上は、このバリアーを破れる攻撃は、魔法にも、質量兵器にも、存在しないわ。

バカと、天才は、使いようってね!」

得意げに、解説するリンディ。

「心配させないでよ。

——母さん」

フェイトが、ほっと、胸をなでおろす。

「パルス・フェザーガン掃射開始っ!!」

リンディの命令により、ビクトリーの側面に装備された小型砲台が、

一斉に火を吹いて、——マシンガンの様に、発射される魔力ビームが、

艦に攻撃してくるまどか軍団を、片っ端から、撃ち落していく。

「す、すげえっ!!」

ビクトリーの戦いっぷりに、感心する杏子。

「うっっ! くそっ!——」

戦況が、不利だと、判断したのか、急加速して、逃げ出すリーダー格まどか。

「ああっ! 軍団長が、逃げるっ!」

なのはが、気づいて皆に伝えた。

「ま、待つて——! まどか!

お願い! 逃げないで! ——

まどかあ——!!!!」

ほむらが、喉も、かれんばかりの大声で、叫ぶが、

——その声は、リーダー格まどかに届かない。

「後を追いましょう!」

「よし、行くぜっ!」

マミと、杏子が、ほむらを急かしたが、――

「ちょっと待って！

あなた達は、もし、魔力を 使い果たしたら、――？！」
なのはが、魔法少女達を、引き止める。

確かに、魔法少女が、魔力を使い果たしたら、――
待っているのは、『消滅』である。

「そ、それは、――でも。
でも！」

ほむらは、言いよどむ。

それでも、あそこに、助けたい、大切な人がいる。

――その時だった、

アイツの声が、聞こえてきたのは。

「ほむら！ ほむら――！」

そのどこか、緊迫感の無い声は、――

UFO（未確認飛行物体）みたいだな、――

円盤状の、小型宇宙艇から、聞こえてきた。

「キュウベえ！ 完成したの？ 例の物が！」

ほむらが、小型艇に乗っている、キュウベえに尋ねた。

小型艇は、円盤型をしており、その上部が、透明になっていて、
そこから、キュウベえの顔が、見えている。

「出来たとも。」

と、言っても、設計図を造ったのは、
例のジェイル・スカリエッティだけだね。

さあ、受け取りたまえ！

これが、「魔力カートリッジ対応型」
ソウル・ジェム
SGチャージャーだ！」

キュウベえが、小型艇のマジック・ハンドを操作して、
差し出したのは、腕に装着するごつい大型メカだった。
（スバルのリボルバーナックルより、ちよいでかい！）
（試作品なので、大型）

それを、自分の腕に取り付ける、魔法少女3人。

「ほむら、——それは？」

フェイトが、ほむらに聞いた。

「これは、フェイト達の使用しているカートリッジ・システム用の
魔力カートリッジを使って、私達のソウル・ジェムに魔力をチャージ
してくれるシステムです。」

魔力の波長が、微妙に違うので、この試作機では、変換効率が、
多少悪いのですが、私達、魔法少女に長期戦を
可能としてくれる新兵器です！」

メカの説明をしながら、その作動チェックを、すばやく
進めるほむら。

「ビクトリーは、次の作戦の為に、一時後退します！」

なのはさんは、皆への指示をお願いします！」
リンディ提督が、なのはに通信を入れた。

「了解です！」

リンディへ、返信するのは。

「SGチャージャー・システム正常！

何時でも行けるわ！」

作業を完了するほむら。

「私も、機能チェック完了！」

マミも、ほむらに続いて完了する。

「ええっ？！ ちょ、ちょっと、待ってくれえー！」

杏子は、まだ、もたついているようだ。

「ああ、もう！」

何やっているの、あなたは！

ちよつと、見せてみなさい！」

痺れを切らせたマミが、杏子の作業を手伝う。

「す、すまねえ、マミ」

やっと、システム・チェックが終了したが、――

全て、完了した時には、逃げ出したリーダー格まどかと、
相当な距離が開いてしまった。

「皆、急ぐよ！」

なのはが、先頭をきり、――リーダー格まどかを追跡する一同。

——しかし、

「くそっ！ 追いつけねえ！」

杏子が齒軋りする。

——全員が、全速で、飛翔しているが、なのは達は、長時間の戦闘で疲れており、ほむら達は、元々、宇宙戦闘が今回、初体験であった。

ほぼ光速に達している、相手との、距離は、縮まるどころか、少しずつ、

離されているようだ。

「こ、このままじゃ、引き離される！」

なのはが、思わず怒鳴る。

「行つて！なのは！」

ほむら達を、連れて行つて！

バルディッシュを、——加速レールにして突っ込んで！

はやては、援護射撃を！」

フェイトが、思いついた作戦を、大声で、皆に、伝える。

「分かったよ、フェイトちゃん！」

杏子ちゃん、槍を、こっちに！」

「おおっ！」

なのはに、指示された、杏子が、槍を長く伸ばす。

「マミさん、お願い！」

「分かりました！」

なのはは、今度は、マミに指示を出す。

マミは、『結びつける魔法』のリボンを使って、『杏子の槍』と、
レイジング・ハートを硬く結びつけた。

「ほむらちゃん！」

全体に筒状の魔力バリアーを！」

「はいっ！」

なのはの指示で、ほむらは、自分と、なのは・マミ・杏子を
筒状の魔力バリアーで、包み込んだ。

そして、3人の魔法少女は、槍を、きつく握りしめる。

「ライオット！」

「ライオット・ブレイド！」

バルディッシュが、魔力カートリッジを2発、ロードして長剣形
態の、

ライオット・モードに変形する。

さらに、――

「ライオット・ザンバー！」

バルディッシュが、魔力カートリッジをさらに1発、ロードして、
魔力ケーブルで繋がれた、2本の魔力剣となる。

——そして、フェイトが、魔力を込める事によって、バルディッシュの2本の魔力剣は、長く伸びていった。——

フェイトは、2本の超大型魔力剣となった、バルディッシュで、なのは達の、円筒形バリアーを、挟み込む形をとった。

「レイジング・ハート！」

「オーライト！ ストライク・フレーム！」

レイジング・ハートの、ヘッド部から、桜色の魔力刀が、槍の穂先の様に突き出し、加速用ウィングも展開された。

「A・C・Sドライバー！」

「チャージ！！（突撃！）」

レイジング・ハートの、後部から、魔力流が、ロケットのごとく、噴射され、加速し始めた！

「バルディッシュ！」

ハイパー・プラズマ・バースト！！」

「ハイパー・プラズマ・バースト！！」

フェイト自身と、2刀のバルディッシュが黄金に輝き、——

バルディッシュは、その刀身を、巨大なレールガン（電磁加速砲）と、化して、

その弾丸に相当する、なのは達を、亜光速で撃ち出した。

「おおおおお——ッ！！」

「マジカル・ビクトリ——ダ——ッシュッ！！！！」

まさに、光の矢と化した、なのはと、ほむら達は、

——レイジング・ハート前面の螺旋状の魔力シールドで、邪魔をするまどか軍団を全て粉碎しながら、——
リーダー格まどかへと徐々に接近していった。

だが、まどか軍団の防衛網が巨大な壁のごとく、何重にも、立ち塞がり、

なのは達の進行を阻もうとする。

「高町一尉達を攻撃中の、まどか軍団に攻撃を集中！」

魔法少女達を援護する！」

シグナムと、ヴィータ・ザフィーラ、シャマルがまどか軍団の背後について

攻撃をかける。

「おらあぁっ！ いっけー！」

「シュワルベフリーゲン！」

ヴィータが、グラーフ・アイゼンで、数個の、特殊合金の玉を、ぶっ叩いて、撃ち出した。

——ヴィータの、高速追尾弾は、数十人のまどか軍団を叩き潰す。

「行け！ 自分が守りたい人のために！」

突進を続けるほむら達を見守るシグナム。

「こ、これだけ速度を上げて、距離がもう縮まらない？！」
なのはは、あせり始めた。

「まどか軍団は、こっちを包囲しようとしている。
こ、このままじゃ」

「よ——し！」

ひとつ、やってみるか——！」

「杏子ちゃん、何を?!」

なのはは、驚いた。

杏子が、全体のバリアーの上に立ち上がったからだ。

「こい！ ほむら！」

あたしが加速して連れてってやる！」

「む、無理よ、杏子！」

ほむらも、驚愕した。

「無理でも、無茶でも、やるしかねえ！」

チカラを貸してくれ、マミ！」

「どうするの?」

マミも、杏子の意図が分からず、困惑顔をする。

「あたしが、ほむらを、おんぶする！」

そしたら、マミは、あたしの正面から、
ティロ・フィナーレを撃ち込んでくれ！」

「あなた、正気なの？」

そ、そんな事をしたら！」
マミは、耳を疑った。

「心配すんな！

あたしの槍で、ティロ・フィナーレを防御して、その反動で、
すっ飛んで行く！」

杏子は、どうやら、本気のようなのだ。

そんな杏子に、マミは言葉を荒げて、反対する。

「バカ！！

どう考えたって、耐えられる、訳がない。

暁美さんは、無事かもしれないけど、

あなたは、……………？？？——！！！！」

マミは、息を呑んだ。

杏子の考えに、気づいたからだ。

杏子は、自分がどうなってもいいから、ほむらを、行かせる気なのだ。

「杏子？ あなた、ひよつとして、

自分のせいで、追跡開始が、遅れたからって

責任を取るつもりなんじゃ？」

杏子に問いかけるほむら。

「そんなんじゃないよ！

い、いや、それもあるけど。

あたしのせいで、スタートが遅くなったのは、事実だし、……………

もともと、今回の件は、あたしが、言い出した事だし、何よりも、ほむらには、まどかの事を、あきらめて欲しくねえんだよ」

「杏子、……………あなた……………」
ほむらは、杏子の顔をじっと見つめた。

「2人とも、そんな顔すんなよ。」

まだ、死ぬと、決まった訳じゃねえだろ！

さあ！

早くしねえと、また、逃げられちまうぜ！」
覚悟を決めている、杏子に、ほむらも、マミも、言つべき言葉が見当たらない。

「杏子ちゃんの、言う通りに、してみよう」
話を聞いていた、なのはが、突然、口を開いた。

「なのはさん?!」
ほむらは、何かの、聞き違いだと思った。

「一体、ほむらちゃんは、
なんのために、ここまで、来たんだっけ？

ほむらちゃんと、マミさんの、気持ちも分かるけど、杏子ちゃんの、言う事をやらずに、今ここであきらめたら、たぶん一生後悔するよ」

なのはは、——レイジング・ハートを操作して、必死に、リーダー格までかを

追跡しながら、——ほむらに向かって、静かにそう言った。

「——……分かり、……ました」

ほむらは、そう言うのと、杏子の考えた通り、彼女の背中に、おぶさった。

「覚悟は、いいのね？」

マミも、覚悟を決めたらしく、ティロ・フィナーレ用の大型魔銃を構える。

「ああ、やってくれ!!」

連結銃で、防御の形を造った、杏子は笑って、そう言った。

「いくわよ!!」

ティロ・フィナーレ——レ!!」

マミの大型魔銃から発射された砲撃は、杏子の構えた、連結銃にクリーン・ヒットして、——

杏子の狙い通り、ほむらを背負った杏子の体を、前方へと、すごい、勢いで撃ち出した。

「わはははははははははははは!!」

やけになった、人間が何をやるか、
見てろよ——!!!!」

大笑いしながら、ぶっ飛んでいく、杏子。

「なんで、そんな、楽しそうなのよ!!!
杏子?!」

杏子の背中に、しがみついているほむらは、生きた心地がしなかった。

——しかし、リーダー格まどかへとたどり着く前に、2人のスピードが
落ち始めてしまった。

——本来、大気の無い宇宙ではスピードは、落ちないはずだったが、
まどか軍団の攻撃を防御しているうちに、反動で、ブレーキが、
かかってしまったのだ。

「さあ、ここらで、——
もう一丁——!!」

「きゃああああ——?!」
いきなり、杏子が、連結銃の仕組みを使ってほむらを、
前方へと、突き飛ばして、加速させたのだ!

「いわゆる、3段ロケット?」
「フェイト・マミ・杏子のチカラで、ほむらを、発射!」

「そのまんま、行っけ——!!」

ほむら——!!」

もう、ムチャクチャだったが、ほむらは、ぐんぐん加速して、——

リーダー格まどかへと、接近していった。

「まどか！ 待って！ まどか！！」

ほむらが、リーダー格まどかに声をかけるが、彼女は、ひたすら、逃げるだけだった。

「カートリッジ・ロード！

最大加速！」

ほむらは、新装備SGチャージャーを操作して、自分のソウル・ジェムに、魔力をフル・チャージして、可能な限りスピードを上げた。

——ある程度、接近したところで、やっと、リーダー格まどかは、自分を追尾している者の存在に気づいたようだ。

まだ、高速飛翔しながら、後ろを振り返るまどか。

——だが、その顔つきは、友人を見つめる、あのやさしいまどかでは、なかった。

——敵を凝視するその目は、怒りと、殺意に、満ちて！——

いきなり、Uターンして、ほむらに、向かってくる、リーダー格まどか！

その手には、『さやか』の剣をさらに、拡大強化した大型魔力刀が、握られていた。

「邪魔するヤツは、——！！！！」
リーダー格まどかは、相手が、誰であるとか、認識出来ていないようだ。

——自分を邪魔する者は、——
全てが敵であり、全てを滅ぼすつもりなのだ。

「まどかつ——！」

「……………！！！！」

ほむらは、まどかの様子に気付き、一瞬躊躇したが、——
弓を変形させた2本の魔力刀を連結させた、大型魔力刀をその手に
にぎる。

——そして、

まどかと、ほむらは、武器を手にした状態のまま、光速に達し、
急速接近していく！

「はああああああ——ッ！！！！」

「うああああああ——ッ！！！！」

——2人が、激突する刹那——
せつな

「ほむら……ちゃん？——」

「！！——まどか！」

接触する、ほんの数秒前になって、やっと、まどかは、

相手が誰なのか、理解した。——それに、気付くほむら。

——だが、……もう、遅い！

——高い殺傷力を秘めた、凶器を手にして、

——光の速度で接近する2人の、激突を防ぐには、
もう時間が無かったのである。

第9章 伝説

——!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

.....

いやな、音がした。

2つの、巨大な金属の物体が、衝突した様な、.....

何かが、壊滅的に、破壊された様な、.....

——???

ここは、真空の宇宙空間である。
本来なら、音など、するはずが無い。

——では、今の凄まじい破壊音は、一体何だったのか？

光速で飛行する2つの物体が、激突した衝撃で、
重力波が生じたと思えなかった。

——その『いやな音』を聞いた誰もが、凍りついたように、動き
を止めていた。

「う、ウソだろ。」

ほ、ほむら?! まどか?!」

息をのむ、ボロボロになっている杏子。

「暁美さん?! ま、まさか、そんな! そんな事って!」

傷ついた杏子を抱きかかえたマミも、絶句する。

「いや、ちょっと、待って!

あそこを、良く見て!」

宇宙空間の一点を指差す、なのは。

——そこには、……

そこから、金属の破片の様な物が、飛び散っている。

——それは、リーダー格まどかと、ほむらが手にしていた、魔力刀の残骸であるらしい。

——その近くで、ほむらは『鹿目まどか』を、しっかりと抱きしめている。

「無事だったか、——

なんだよ、心配させやがって!」

杏子は、ボロボロ涙を流しながら、文句を言った。

「ごめんね、ほむらちゃん。

「ごめんなさい、迷惑をかけて。」

私、私、……」

泣きそうな顔で、謝るリーダー格まどか。

「いいのよ、まどか」

ただ、静かにまどかを、抱きしめるほむら。

「だけど、私は、……」

私は、本物の、『鹿目まどか』じゃない!」

「ううん、

今、私の目の前で泣いているまどかは、
ニセモノでも、コピーでも無い。

私の大切な、……

大切な、……

私の、たった1人の、最高の友達」

いつの間にか、2人の目からは、とめどなく、涙が零れ落ちていた。

「ほむらちゃん、………」

………う?!

うつうつ！

うあああああああああああ！！」

まどかの顔が、突然ひどい苦痛に歪んだ様な、表情に変わった。

「まどか？！

まどか！

どうしたの？！

まどかあ——！！」

リーダー格まどかの手の中に、先程と同じ形の魔力刀が実体化する。

その武器を持つ腕が、ブルブルと震え、その腕を、もう片方の腕で、
必死に抑えるまどか。

「まどか？！」

「い、いやだ！

いやだよ、ほむらちゃん！

私、もう戦いたくない！

もう、誰も傷つけない！」

まどかの、表情が、さらに激痛に耐えているように、歪む。

「まどか！ まどか！」

「うっ！ うっ！ うっ！」

あああああああああああっ！！！！」

どうすれば、そんな表情になるのか、地獄で、体を生きたまま焼かれる、

罪人のごとく、リーダー格まどかの顔が、痛みに苛まれる。

彼女の、凶器を手にした腕は、それ自体に自分の意思が

有るかのごとく動き、今にも、ほむらを、斬り殺そうとするかのようだ。

「まどか！

まどかあ！

私には、何も出来ないの？！

私の、目の前で、まどかが、こんなに苦しんでいるのに！

私に、出来る事は、ないの？」

ほむらには、自分の命の危険など、どうでも良かった。

まどかの感じている苦痛を、どうすれば、打ち消せるのか、それだけを、知りたかった。

「いったい、何が起きている？」

遠方から、異変に気付いたシグナムが、呟いた。

その時だった。――シグナムの意識に、懐かしい友の声が聞こえてきたのは。

「シグナム！ シグナム！

私の声が、聞こえますか？

――シグナム！」

「その声は？！

ま、まさか、初代リインフォース？

お前か？！」

驚いたシグナムは、思わず尋ねた。

「ああ、ちゃんと聞こえているようですね。良かった」

「な、なぜ、消滅したお前が？！

お前は、今、どこにいる？」

「その話は、後回しです！

今、優先すべきは、鹿目まどかの救済です」

「う、うむ」

「いいですか、シグナム。」

時間が無いので、詳しい説明は、省きますが、まどか軍団は、『魔女』を、滅ぼすただけに、魔力を実体化させて、生み出された、魔法兵士です。

そのまどか軍団の、リーダーである軍団長を、戦いに、縛り付けているモノは、

オリジナルの、本物の『鹿目まどか』の願いによって生まれた、『戦いの因果』です」

「ならば、どうすればいい？」

「彼女を縛っている『戦いの因果の糸』を破壊するしか方法は、ありません」

「『戦いの因果の糸』だと?!
そんなモノがどこにある？」

シグナムは、いまだ、苦しみ続けている、リーダー格まどかの周囲を、

凝視してみたが、初代の言う『戦いの因果の糸』などは、全く知覚する事が出来ない。

「これは、特殊な次元空間に存在しているので、普通は、見る事も、認識する事も、出来ません。

しかし、今、私は、本物の『鹿目まどか』の、目の前にいて、彼女と、意識をリンクさせています。

今から、私の、認識している『戦いの因果の糸』を、あなたの、視覚に、投影します」

初代リインフォースの解説の後、しばらくすると、シグナムは、自分の額に、「ジーン」とする鈍痛を、感じ始め、——
リーダー格まどかの背中から、背後の、宇宙に伸びている、不思議な色合いの、糸状の巨大な繊維が見えてきた。

「むう！ 見えた！ あれか？」

「そうです。今、破壊ポイントを表示しますから、あなたと、仲間達の、魔力攻撃を可能なだけ、撃ち込んでください！

——なにしろ、あれを、造ったのは、神に等しいチカラを持っていた時の、

オリジナル『鹿目まどか』ですから、

——破壊するには、かなりの、魔力攻撃が、必要ですよ」

「分かった！ とにかく、やってみよう！

——む？ あそこだな！ 破壊ポイントは！」

初代リインフォースが言った通り、シグナムには、
『戦いの因果の糸』の一部が赤く光って見えた。

「——ほむら！ 曉美ほむら！」

シグナムが、ほむらに、念話通信を入れた。

「シグナムさん?!」

「解決方法が、分かった！」

——私が、その、まどかを縛り付けている『戦いの因果の糸』の破壊ポイントを今から、狙撃する。

お前達も、そのポイントに魔力攻撃を、集中してくれ！」

「ええ? ——

よ、良くは分かりませんが、——

まどかを、救えるのなら、何でもやります」

「それでいい！」

私がまず撃つ! —— 続けてくれ！」

「はい!」

シグナムの説明不足のおかげで、——ほむらは、訳が分からなかったが、

とにかく、出来る事は、何でもやるつもりだった。

「ほむら?!」

シグナムの姐御、何だつて?!」

シグナムを『姐御』と呼んで、慕っている、

杏子がほむらに聞いた。

「シグナムによると、『戦いの因果の糸』とか言う物があって、それを、破壊する事が、解決策だって、——

今から、シグナムが、その物体を狙撃するから、皆も、魔力で攻撃しろって言ってた」

ほむらの言葉に、皆が、シグナムの行動を見守った。

「剣^{ツノ}の騎士、シグナムが魂、――

炎の魔剣レヴァンティン、

刃^{やいば}と、

連結^{れんけつじん}刃に続く

もう1つの姿、……………」

シグナムは、レヴァンティンと、その鞘^{さや}を、接続して、弓の形に、変形させる。

「スナイプ・フォーム！」

シグナムは、魔力を実体化させた、矢を弓にセットして、射撃姿勢をとって構えた。

シグナムの足元で、赤く輝くのは、ベルカ式魔法陣。

「駆けよ隼！！（ハヤブサ！）」

「シュツルム・ファルケン！！」

シグナムの矢に、魔力光が集中していく！

そして、『戦いの因果の糸』に向かって、高速の矢が、撃ち出された。

——『戦いの因果の糸』の破壊ポイントに突き刺さる、魔法の矢。
だが、初代リインフォースの説明通り、破壊には、まだ魔力が足りないらしく、

『戦いの因果の糸』は、ビクともしない。

「とにかく、あのポイントを！」

ほむらは、シグナムの矢が、目に見えない何かに、刺さったのを確認すると、——魔法の弓矢を構え、その矢に自分の魔力をありつたけ込めた。

「壊れる！」

ほむらの願いを込めて、放たれる魔法の矢。

——魔法の矢は、『戦いの因果の糸』に、刺さる。
しかし、やはり、まだ破壊できない。

——マミが、SGチャージャーで、自分のソウル・ジェムに大量の魔力を
充填し、新必殺技を放つ。

「カートリッジ・ロード！」

最大火力！

グランド・フィナ——レ！！！！」

マミの眼前に、30丁の大型魔銃が、並んで、一斉に火を噴いた。
そして、強力な砲撃が、目標のポイントに、大爆発を起こしたが、

ただそれだけだった。

「ま、まだ、駄目!?」

一体あと、どれだけの、魔力攻撃が、必要なの?」
先の見えぬ状況に、困惑するマミ。

「次は、あたしだ。

接近攻撃をするから、射撃や砲撃は、しばらく待ってくれ!」
杏子が、前に出る。

「佐倉さん?! 大丈夫なの?」
杏子を心配するマミ。

「あたしなら、心配いらねえって。

カートリッジだって、数には、限りがあるんだ。――
皆の体力にもな。

今は、一人一人に、出来る事をやるしかねえ」
杏子の言葉に、――

「分かったわ。

でも、決して無理しちゃ駄目よ」

マミは、杏子のやりたいようにやらせる事にした。

「カートリッジ・ロード!
いくぜっ!

うおおおおっ!!--!!--!」

杏子のソウル・ジエムから、赤い魔力光が、溢れ出し、彼女自身と、手にした槍を、包み込む。

生きている火炎の様に、うごめく、赤い魔力光は、猛り狂う竜神の姿を形作る。

「噛み砕けっ！——

レッド・バロン・スマ————シュッ！！！！！！」

杏子の凄まじい、突撃が、宇宙に大きな火花を散らしたが、その槍は、何も壊していない。

「くっそー！

まだ、駄目かっ……」

分かつてはいたが、少々悔しそうな杏子。

「選手交代よ、杏子」

そう言って、ほむらは、杏子を休ませた。

「ああ、頼むぜ、ほむら」

マミが、ふらつく杏子の体を支えた。

「カーリッジ・ロード！

パープル・ソード・タイフーン……」

ほむらは、頭上に、魔力刀を構えると、体を高速回転させつつ、飛翔して、破壊ポイントへと、突撃する。

——そして、ほむらは、破壊ポイントとの接触の瞬間、回転ソードの刃先に、自分の魔力を、限界まで込めた。

だが、やはり、激しい火花を散らすのみで、——『戦いの因果の糸』は、傷つく兆しさえ見えなかった。

——その時、かなり後方にいたフェイトが、なのはに、追いついた。

「なのは、状況は？
皆は、何を？」

「ええとね、今は、——」
簡単に状況を、フェイトに説明するのは。

「……だったら、私と、なのはの、2人で同時砲撃を行おう。

——今は、まだか軍団が動きを止めているから、——
砲撃の威力を、充分高めて、撃つ事が出来るはずだよ」

フェイトの言う通り、リーダー格まどかの、影響なのか、まどか軍団は、
先程から、その動きをピタリと、止めていた。

「私も、それを考えていたよ！
さすが、フェイトちゃん！

杏子ちゃん、ほむらちゃん、—— 私達で同時砲撃をするから、
射線上から、退避して！」
ほむら達に注意するのは。

「！！ 分かりました、なのはさん。」

杏子、巴さん、ここから、離れるわよ！」

「分かった！」

「了解です」

3人は、急いで、なのは達の射線上から、距離を取る。

「バルディッシュ！」

「イエッサー！」

フェイトの意思に反応して、バルディッシュは、魔力カートリッジを2発ロードした。

「トライデント

フェイトが、左手に魔力をためる姿勢を取り、

——フェイトの体と、バルディッシュから電流の放電が、起きる。

「レイジング・ハート！」

「ロード・カートリッジ！」

なのはの足元に、桜色のミッド式魔法陣が、形成された。

「ディバイン・バスター・エクステンション」

「ディバイン、

なのはが、レイジング・ハートを構えた。

「「はあああああああ——！！！」」

極限まで魔力を高めて、砲撃の威力を増幅する2人。

「……スマツシャ——！！！！」
「……バスタ——！！！！」

なのはの、桜色の魔力砲撃と、フェイトの金色の3本の魔力砲撃は、

1つの光の束となって、——
破壊ポイントを直撃したが、そこが、淡く発光したのみで、大した変化は、見られない。

この様子を見ていたシグナムが、はやてに、話しかけた。

「やはり、初代リインの説明した通り、そう簡単には、壊せそうに、無いですね」

「よし！

私らも、行くでっ！」

ヴォルケンリッターを引き連れ、ほむら達の援護へ向かおうとする、はやて。

——だが、そんな彼女の前に、立ち塞がる者がいた。

「ここは、通しませんよ、八神はやて！」

「な、何や、あんたは？！」

「私は、サブリーダー・まどか・1号！

またの名を、『鹿目まどか・レッド』！」

良く見ると、服のデザインは、一緒だったが、彼女の魔法少女服は、

『ピンク色』ではなく、『真紅』だった。

ついでに、髪の毛の色まで、『真紅』だった。

「そんなん、どっから、出て来たんや?!」

「私は、もともと、軍団長のバックアップ用です。

彼女が完全に消滅するか、戦意を喪失した場合に、私は、自我に目覚めます。

——コピー魔導師の人格も、一時的に起動した『私達』がやりましたが、——

そして、私のパワーは、軍団長の約3倍!」

「赤くして、能力3倍なら、勝てる思うたら、大きな間違いや!

そこを、どかんかい!!」

「我が主^{あるじ}。

ここは、我らに任せて、先へ進んでください」
話に、割り込むシグナム。

「シグナム?!」

「あなたですね、惑星上で、軍団長をいじめてたのは!」

「いじめてた——とは、人聞きが悪いな。

少なくとも、騎士道精神に背いた事は、していないぞ」

「あなたと、言う人は！」

あなただけは！」

『鹿目まどか・レッド』は、『さやか^の剣』を
実体化させて、シグナムに挑む！

「なら、やってみろ！ レヴァンティン！」

「エクスプロージョン！」

——レヴァンティンが
カートリッジを1発ロードすると、
その刀身に高熱の炎がまとわりつく。

「言われなくても！」

シグナムに斬りかかる『鹿目まどか・レッド』。

「シグナム？」

シグナムの戦いを目撃したヴィータは、どうするべきか、躊躇した。

「ヴィータ！」

ここは、シグナムに任せればええ！

ウチらは、ほむら達の支援や！」
はやてが、叫ぶ。

「わ、分かったよ、はやて！」
ヴィータは、素直に従うが、――

「そうは、行きませんよ！」

私は、『鹿目まどか・シルバー』！」

この、銀まどかは、『杏子の槍』を持っている。

「またかい！」

一体何人おるんや?!」
頭を抱えるはやて。

「はやて！ こいつは、あたしがやる！
はやては、先へ！」

「分かった！
気をつけるんやで、ヴィータ！」
急いで、飛翔するはやて。

「あなたじゃ、私に、勝てませんよ」

「うつせえ！ とつとと、かかってきやがれ！」
アイゼンを銀まどかに突きつけるヴィータ。

「シャルル！ ザフィーラ！」

一緒に来てくれるか？」

「はやてちゃん?!」

「もちろんです」

——だが、ここにも、——

「あなた達の相手は、私達がします!」

「『鹿目まどか・ブルー』推参!」

「『鹿目まどか・イエロー』出陣!」

黄色まどかは、マスケット銃や、銃型のデバイスを持っているが、青まどかは、武器を持たずに、ファイティング・ポーズを取っている。

青まどかは、格闘型らしい。

「はやてちゃん、ここは、私達が!」

「うむ!」

シャマルも、ザフィーラも、はやてを先に行かせるつもりだった。

「シャマル?! ザフィーラ?」

「お急ぎを、我が主^{あるじ}!」

「……………2人とも、油断だけは、するんやないで!」
はやては、皆を信じて先を急いだ。

——しかし、やはり、そこには、

「そして、あなたを、倒すのは、
この、『鹿目まどか・ブラックRX』！」

「なんで、——
ひとりだけ、RXやねん？」

この黒まどかは、服や髪の色まで、黒で統一されていた。

「5人、揃って！」

魔法戦隊！

まどか・ガ・ファイブ！！」

「『ガ』ってなんや？！
『ガ』って！」

「一々、突っ込まないでよ！」

この、関西人！！」

「じゃかましいわ！！」

この、ぼけえええ——！！！！」

「むー！」

カチンと来たので、——カチンとやります」

「カチン？」

はやてが、見ていると、『鹿目まどか・ブラックRX』が、彼女の腕につけている、『円形の盾』に触ると、

『カチンと』音がして、――

「き、消えた？！ ど、どこへ？！

うわっ？！」

突如、はやてを襲う、爆発。

見ると、頭上の宇宙に、黒まどかがいて、その手には、バズーカ砲らしき火器が、有る。

――しかも、彼女の周りには、ロケット・ランチャーやら、ミサイル、対戦車ライフルなどのぶっそうな、質量兵器が、大量に浮遊していた。

さらに背後には、戦車部隊までが、浮いている。

「なっ？！ ななななな！」

「ふふっ。

これは、かつて、曉美ほむらが魔法少女として、持っていた能力。

さて、時間の流れを操る、この私に、勝てますか？

——八神はやて？」

「くっ!！」

「そして、私達、戦意を持つサブリーダーが1人でもいれば、まどか軍団は、再び動き出す!」

「なんやとお?!」

——黒まどかの言う通り、再び、動き始めたまどか軍団が、ほむら達、魔法少女を包囲しようとしていた。

「これは?!」

まどか軍団が、こちらを包囲しようと、展開してる!」

異変に気付いたマミ。

ほむら達は、交代で、まだ苦しみ続ける、リーダー格まどかを、その背中に、背負っていた。

宇宙空間に、置き去りでは、戦闘の流れ弾に当たる危険性もあったからだ。

「はやてちゃんから、通信、まどか軍団のサブリーダーが、出現したと、——」

なのはは、はやてから、状況を聞いたらしい。

「そんな？」

まだ、『戦いの因果の糸』が破壊出来ていないのに」

ほむらは、最悪の事態に啞然としている。

「と、言うより、『戦いの因果の糸』を破壊する事が、全ての解決方法と言う事だよ」

なのはは、改めて、皆に事実を伝える。

さつきから、各自の得意とする魔力攻撃を、何発も、何発も、破壊ポイントへ直撃させていた。

それでも、ほとんど、変化は見られないのだ。

「だったら、もう一度！」

魔力刀を構えたほむらが、矢が刺さった、例の破壊ポイントへと、突進する。

「もう、いい加減、――」

まどかを、――開放してよ！！！！」

ほむらは、叫び声を上げ、渾身の魔力を込めた一撃を、破壊ポイントへ叩き込むが、――

「あああああああつ？！」

「ほ、ほむらの魔力刀が？！」

「お、折れたあ――！！！！」

皆が大声を出した様に、——ほむらの魔力刀は、実際には、折れたと、言うより、——粉々に碎け散り、消滅してしまった。

茫然自失のほむら。

「ああっ！ ああああああ——！！」

.....

も、もう駄目なの？！

何をやっても無駄なの？

私には、まどかを救う手立ては無いの？！」

絶望に沈み込むほむら。

その絶望感は、皆に伝わる。

「曉美さん.....」

「ほむら.....」

「.....」

皆の体力もかなり消耗していた。

魔力カートリッジの残量も、少ない。

ほむらが、言うように、もう何をやっても、無駄なのだろうか？

人が、誰かの事を想う時、――

その気持ちで、空間を超え、時を超え、

心と、心を繋ぐ絆となり、――

時として、

神をも超える奇跡を起こすチカラとなる事を、

我々は、誰もが、心のどこかで、知っている！

知っていながら、それを信じる事ができずにいた！

信じる！

この宇宙に、希望の光が、ある事を！

今、信じる心が、チカラとなる。

――宇宙空間の一部が、不思議な輝きを放ち始める。

――伝説が、復活しようとしていた。

なのは達が、防衛している惑星には、月（＝衛星）が、3つ有

るのだが、
ヴィータと、『鹿目まどか・シルバー』は、その月の上で、戦っていた。

「テートリヒ・シユラーク！」

ヴィータは、グラーフ・アイゼンに自分の魔力を乗せると、——
アイゼンを振り上げた勢いで、銀まどかを弾き飛ばす！——
さらに、相手の吹っ飛んだ先に、高速で、回り込み、追撃を、
叩き込もうとしたが、——

その、銀まどかは、スウツと、消滅してしまった。

「くそつ、眩惑魔法かつ！」

本体が、掴め（つか）めねえつ！」

単なる幻をアイゼンでぶっ叩いた事に気付いて、歯軋りするヴィータ。

「だから言っただじや、ありませんか。
勝てませんよって」

背後に現れた、銀まどかの言う様に、眩惑魔法や幻覚魔法によって、

実体を捕捉できないヴィータは、——

すでに、銀まどかの槍によって全身傷だらけの状態だった。

シャマルと、『鹿目まどか・イエロー』もヴィータ達がいる月の
上で戦っていた。

「アルティマ・シュート!!」

「ぐっ!」

巨大な火線が、シャマルを捉え、爆発の威力が彼女を吹き飛ばした。

黄色まどかの射撃に翻弄されるシャマル。

「あ、あなた、――

いい加減に、しないと、後で、後悔するわよ!」

「へ?」

シャマルの、負け惜しみとも取れる言葉に首を傾げる黄色まどか。

ザフィーラと、『鹿目まどか・ブルー』が戦闘しているのも、ヴィータ・シャマルがいる月面だ。

「はあああああ――ッ!」

「アクセル・スマッシュ!!」

「おぐっ?!」

ザフィーラの鋭いパンチを、ギリギリで、かわした青まどかは、綺麗なカウンターの、アッパー・カットを繰り出した。

このパンチをまともに、あごにくらったザフィーラは、かなりのダメージらしく、ふらふらしている。

「くっ！」

むっ、むむ？！

——い、今の格闘術は、一体？」

「うふふ。

これは、高町なのはの娘が、近い将来、身につける格闘能力です。

どうですか？

仲間のチカラで倒される気分は？」

「……他人に借りたチカラなどで、我らを倒せるなどと、思っな」

「強がりを、……」

うーん。

「ところで、駄目押し、しておきますか」

「むっ？！」

「来たれ！ さくらカード！！」

青まどかが詠唱すると、まどか軍団の頭上からカードが出現した。

「契約のもと、まどかが命じる……ミ」

「だめだよ！」

「?? だ、誰だっ?！」

「さくらカードを、——そんな事に使っちゃ、
だめ——!!」

その、誰かの叫びとともに、青まどかが召喚したさくらカードは、美しい輝きと共に、砕け散って、消滅してしまった。

「何?! 何だ一体?」

驚愕する青まどか。

「何、あれは?!」

周囲のまどか軍団を、警戒していたバマミが、
『それ』に気がついた。

宇宙空間の一部が、不思議な輝きを放ち、それが、大きく膨張していた。

「あ、あれは?」

杏子も、不思議な現象に、瞬きを繰り返して、自分の目をこすった。

「異空間ゲート?!」

ほむらも、呟く。

まさに、そんな感じだった。

——その、ゲートが、さらに広がり、

——中から、数十人の少女達が、飛び出てきた!

彼女達は、伝説の存在。

様々な世界・様々な時代で、活躍した、

魔法少女と、魔女っ子達、そして魔法使いと、魔道士だった。

「ふっふっふ!

美少女天才魔道士 リナ・インバース!

大先輩、サリーの召喚により、

ただ今、参上!!!」

そう高らかに、宣言したのは、ファンタジー系RPGゲームか、空想小説などに、登場しそうな、いかにも伝統の魔道士っぽい服装の、

元気いっぱい少女だった。

——ただ、美少女かどうかは、微妙なところである。

「そして、超天才女魔道士 サーベント 白蛇のナーガ、

以下同文！！！」

さらに、前に——ズズンと——出て来たのは、——

長い黒髪に、トゲだらけのショルダー・ガード、度を越した露出の多い服装、そして、やたらと、でか過ぎる胸！！

少女と言うには、少々、グラマー過ぎる女性魔道士だった。

「リ、リナ・インバースに、
サーペントのナーガ、だとう?!」

赤まどかと戦いながら、叫ぶシグナム。

「シグナム！ 知つとるんか?!」

あの、2人を！」

やはり、黒まどかと戦闘中のはやてが、尋ねる。

「はい！

当人達の、生まれた次元世界から、出てきた事が、ほとんど無いので、

あまり知られては、いませんが、……

リナの方は、『魔を討つ者』として活躍し、

1つの世界を救った事も有りました。——

しかし、他の次元世界の存在を知り、他の世界への移行方法を独自に

開発してからは、サーペントのナーガとともに、あちこちの、次元世界で、ロストロギア（古代遺物）や、宝飾品などの、強奪事件を

起こし、管理局に追跡された事もたびたびありました。

危険人物と言ってもおかしくありません。

サリーどのも、また、えらい連中を、……」
頭を抱えるシグナム。

「ま、まあ、今回、協力してくれるんなら、
ありがたいけどな」

援軍として、リナ達に期待するはやて。

「あ、なんか、私達、期待されてるよ。
ナーガ」

リナが、はやて達の、視線に気付いた。

「ふっ!!」

なら、この私から、やらせてもらうわね。
文句ないでしょ! リナ!

「サーペントのナーガが、その巨乳を、
『ゆっさゆっさ』と揺らしながら、リナに尋ねる。

「……まあ、いいですよ。

頑張ってみなさいな」

リナは、素直に後ろに下がる。

（状況は、サリーが、圧縮情報を私達の頭脳に、
強制的に、送り込んだから、良く分かっている。）

（問題は、敵軍の実力。ナーガを実験台にすれば、
それが、すぐ分かるはず。）

（敵を倒すには、まず、味方からってね。）

そんな事を考えている、リナ。

何か間違えている様な気もする。

「それじゃ、行くわよ！」

メガ・ヴライマ！！」

ナーガが、『魔法の呪文』を唱えると、周囲の宇宙空間に存在する岩石が

一箇所に集まり、巨大な人型を形作る。

「あれは？」

ゴーレム（魔法によって造られる疑似生命体）？」
なのはが、目の前の現象に驚く。

「ほーっほっほっほ！」

やるのよ！ ゴーレム！！」

高笑いしながら、岩の巨人に命令するナーガ。

『オオオオオ——ン！！！！』

雄叫びを上げた巨大ゴーレムは、ゆっくりと動き始め、——

「ぶぎゅー！！」

創造主であるナーガを、ぷちっと、踏み潰した。

——いや、実際には、巨大ゴーレムの足と、小惑星の間に、

ナーガが挟まれて、潰されたのである。

幸い、ナーガは、それでも、死んだわけではなく、気を失って、びくびくと、痙攣しているだけの様だ。

「じ、自分の造り出したゴーレムに、

——それも、宇宙空間で、踏んづけられるなんて！」

笑っているのか、突っ込んでいいのか、

フェイトは、プルプルと震えている。

「な、なかなか器用だ、——」

なのはさん、それは、ちょっと、意味が違います。

ナーガを踏んづけたゴーレムは、造り上げた術者が気絶したせい
か、

魔力の制御を失い、ただの岩へと、分解していった。

「ああ、もう何やってんだか！」

頭を抱えるリナ。

（実験台に、すら、なりやしない。）

リナは、そんな事を思った。

鬼ですか、あなたは？

「こうなったら、私の出番よ——」

リナの体から、強大な魔力が溢れだす。

「黄昏^{たそがれ}よりも昏^{くら}きもの、

血の流れより紅^{あか}きもの、

時の流れに、埋れし、
偉大な汝の名において、
我ここに闇に誓わん、——」

リナは、自分の頭上に両腕を掲げて、詠唱を続ける。

その両手の間に、赤い魔力光が形成され、そこに、禍々しい魔力が集中していく。

「こ、この魔力の大きさは?!」
黒まどかが、驚く。

明らかに、人間の発生させる魔力の許容量を超えている。

「これは、異世界の、魔王のチカラだ!」
シグナムが、叫ぶ。

そうこうしている内に、リナの詠唱が完了する。

「我らが前に立ち塞がりし、
すべての愚かなるものに、——

我と汝がチカラもて
等しく滅びを与えんことを!!!!

ドラグ・スレイブ!!!!（竜破斬!）」

リナの両手の魔力光から、撃ち出された巨大な魔力砲撃は、
広範囲を焼き尽くし、——
たった一撃で、まどか軍団の約2割を消滅させた。

「なっ、なんだあ、今のは?!」
目が、点になっている杏子。

なのはの、砲撃でも、これだけの、威力は、なかなか出せるものではなかった。

「す、すごいつ！」

これが、伝説の魔道士の実力!!」
なのはも、素直に感心する。

「よし！ 敵軍の隊列が乱れた！」

今だよ、さくらちゃん！

あの子に、例の物を届けに行つて!!」

リナが、さくらと言う名の魔法少女に叫ぶ。

「はいっ！ 分かりました、リナさん！」
木之本桜は、元氣一杯返事をした。

彼女は、小学校高学年の年齢で、——バトン・トワラー・コスチュームの

意匠を含んでいる——パーツごとに、赤とピンクを組み合わせた、可愛さと、凜凜しさを表現した衣装を着ていた。

（この服は、魔法で造った物ではなく、桜の親友の手作りである。）

「契約のもと、さくらが命じる！ フライ！」

さくらが、魔法の詠唱を行うと、彼女の背中から、天使の翼のよ

うな、
羽が生える。

「木之本 桜、いつきまーす！」

高速飛翔する桜は、まどか軍団を、うまくかわして、いまだに、『戦いの因果の糸』に苦戦中のほむらの元へと、急行した。

「暁美ほむらさんですね？」
ほむらに、声をかける桜。

「あ、あなたは?!」
目の前に、突如、現れた魔法少女に驚くほむら。

「サリーさんに召喚された、魔法少女の1人です。
あなたに、渡す物が有ります」

「え？」
驚くほむらを、尻目に、桜は魔法の詠唱を行う。

「契約のもと、さくらが命じる！ ホープ！」
頭上に出現した『さくらカード』を手にとった桜は、それを、
ほむらに手渡した。

そのカードには、赤いハート型を胸に抱く天使の様な外見の女の子の絵、とともに、
『希望』と言う漢字が書かれている。

カードの裏面には、中心に星型の有る、見た事の無い魔法陣が描かれていた。

「希望？」

ほむらは、不思議な魔力を放射しているカードを見つめた。

すると、――『THE HOPEの、さくらカード』は、

柔らかな輝きを放ち、魔法の剣の姿に変化した。

「こ、この剣は？」

「それは、希望の剣、『ホープ・ソード』。

その剣に、あなたの大切な人への想いを込めれば、必ず、あなたの願いに応えてくれるはずです」

「うまく、……いくのでしょうか？」

何度も、やってみて失敗しているほむらは、自信を失いかけていた。

「なんとか、なるよ。

絶対大丈夫だよ」

ほむらの、手を握り、やさしく話しかける桜。

その言葉は、桜自身を何度も助けてくれた、『桜、最強の呪文』だった。

そして、『木之本 桜』の暖かな微笑みは、なぜか、『鹿目 まどか』のそれに、

とても良く似ていると、ほむらには、思えた。

桜の言葉に勇気付けられるほむら。

「分かりました。 やってみます！」

桜に託された『ホープ・ソード』を手に、ほむらは、再度、
『戦いの因果の糸』の破壊ポイントへ、挑んだ。

シグナムは、シャマル達とは、違う衛星の月面で、『鹿目まどか・レッド』と戦っていた。

「やるではないかつ！」

あのリーダー格・軍団長とは、えらい違いだ！
シグナムは、驚いていた。

「彼女の時の様には、行きませんよっ！」

はあああっ！」

この赤まどかは、シグナムの神速の剣を、あえて防御はせずに、
ギリギリでかわして、カウンターの斬撃を、シグナムの急所を狙っ
て、

正確に繰り出していた。

「そうかつ！ 経験の共有化か？！」

貴様は、軍団長と、まどか軍団、全員の戦闘経験を自分の物とし

て、
吸収したのか？

でなければ、これほどの剣術が使える理由が、分かん！

それに、どうも太刀筋と動きに、覚えが有ると思ったら、
貴様は、惑星上で、テストロッサに化けていたヤツだな？！」

「大正解ですよ！ さすがは、シグナム！」

シグナムに激しい斬撃を打ち込みながら、問いに答える赤まどか。

「しかし、本番は、これからです！

真・スクワルトーレ！！！」

赤まどかの、連結刃れんけつじんが、シグナムを正確に狙って、飛んできた。

その剣技に舌を巻くシグナム。

「やるなっ！

ならばっ！！」

「シュランゲ・フォーム！」

お互いの連結刃が、相手の首を狙って、火花を散らし、――

――ギャン！ ギャリ、ギャリ、ギャリ――ン！！！！――

「あ、……………」

「むむっ！」

「か、からまったあー!!」

2人のほぼ、途中で、2本の、連結刃が、――
複雑に絡み合ってしまった。

……………

「あ、あの、――シグナム？」

「何だ？」

「ど、同時に手を離しませんか？」

「いや、それでは、……………」

「……………」

「ちょっと、待て。」

貴様の剣は、貴様が自分の魔力を集めて、実体化させた物だろう。

ならば、一度魔力の形態に還元してから、再度実体化させれば、
良いのではないか？」

「!!! そ、そうでした！」

言われて、やっと、解決策に気付いた赤まどかは、自分の剣を魔

力に

戻してから、再度実体化させた。

シグナムも、レヴァンティンを、通常の剣の形態に戻した。

「全く、利口なのか、『間抜け』なのか、良く分からんな」

「うー！『間抜け』は、ひどいです、シグナムっ！！」
頬を、プーと、膨らませて怒っている赤まどか。

（レッドだから、怒りっぽい性格なのか？）
シグナムは、心の中で、そんな事を考えた。

「こうなったら、本気でいきますよ！！」
再び、攻撃態勢をとる赤まどか。

今度は両手に、『さやか之剑』を持って、二刀流に切り替えるつもりのような。

「そうだな！

そろそろ、遊びの時間は、終わりでしょう！

我が友も、やっと、合流してくれた事だしな！！」

「え？」

良く見ると、シグナムの肩に、小さな人影が、腰掛けている。

「ま、まさか？！」

目を見開く赤まどか。

「アギト！ マリアージュ事件の方は、もう良いのか？」
シグナムが尋ねた。

「ああ！

マリアージュって言う生体兵器は、全滅。
真犯人も、ティアナが逮捕したぜ！」

そう答えるのは、シグナムの相棒である、——融合騎
（「ユニゾン・デバイス」であるアギトだった。

「だから、——皆も、大急ぎで応援に駆けつけてくれた」
アギトが指差した方向から、——

「お久しぶりです、シグナム副隊長！」
元、機動六課、前線フォワード部隊のスバル・ナカジマが大きな
声で挨拶した。

「ティアナ・ランスター以下、
元、機動六課、前線フォワード部隊4名、対まどか軍団作戦に、
協力させて、いただきます！」
同じくティアナが、叫ぶ。

その後に、キャロル・ル・ルシエ（召喚魔導師の少女）と、
エリオ・モンディアル（槍型のデバイスを使う陸戦魔導師の少年）の
2人が、続く。

「シグナムさん！」

「副隊長！——」

「エリオ？ キャロ？」

お前達もか？！」

シグナムは、懐かしい顔に驚く。

「はい、管理局部隊が苦戦中と聞いて、駆けつけました！」
エリオが答える。

「副隊長、指示をお願いします！」
ティアナが、シグナムに声をかける。

「私達は、良い！」
他の魔導師部隊の援護をしてやってくれ！

だが、お前達は、本来は陸戦魔導師だ。
危ないと思ったら、無理せずに退却しろ！

いいな？！」

「はい！ では、彼女達も、連れて行きます」

「彼女達？」

「元、ナンバーズの戦闘機人、平和の為、戦い忘れた人の為、ただ今参上！」

そう言うのは、セイン、ジェイル・スカリエツィが製作した
戦闘用サイボーグ（改造人間）の1人だ。

彼女達の中で、自分の罪を認め、懸命に社会復帰を試みている者

達は、

その一環として、時空管理局の仕事も手伝っていた。

「味方の戦力が足りないと、聞きました。

ならば、我々にも、是非協力させてください」

彼女は、チンク。

ナンバーズの面々から、『チンク姉^{ねえ}』と呼ばれる、

戦闘機人達の、社会復帰組の中でもリーダー格の女性だ。

チンクの背後には、オットー・ディード・ウエンディ・ディエチ・
ノーヴェと、——ティアナ達、フォワード4名と、
チカラを合わせたならば、——

かなり大きな犯罪組織や、悪しき侵略を企てる軍隊でさえ、
尻尾を巻いて逃げ出しそうな、強き者達が、集結していた。

「おお！

お前達もか。

これは、誠に心強い！

よろしく頼むぞ」

予想外の援軍の登場に喜ぶシグナム。

「「「はいっ！ 全力全開で頑張りますっ……！」「」」

そう言うと、ティアナ達と、チンク達は、

苦戦中の味方の所へと、急ぎ直行した。

「——ってな訳だ！

高速次元艦をぶっ飛ばして、急行した甲斐が有ったってもんさ！

誤算だったな、赤おんな！！」

アギトが、赤まどかを挑発する。

「く、くそっ！！」

赤まどかは、悔しがっているようだ。

「では、——行くか？

アギト！」

相棒に、語りかけるシグナム。

「おうっ！

ユニゾン・——インッ！！」

アギトが、シグナムの体の中に、飛び込み、2人がユニゾン（融合）する。

シグナムの背中から、オレンジ色の火の翼が飛び出る。

——彼女の、瞳は桜色に、

——そして、髪の毛は、淡い栗色に、変色した。

「猛れ！ 炎熱！ 烈火刃！！」

シグナムの体内のアギトは、両手に高熱の炎を宿し、——
元来炎熱変換の技能を持つシグナムと、レヴァンティンに、
高く強く燃え上がる火炎を上乗せする。

シグナムの手の、レヴァンティンに火炎が、まとい付き、その刀身を、焦熱破壊の刃へと変える。

「うつつ！ 皆、撃て、撃てっ！！！」

撃ち倒せっ！！」

シグナムの変化の意味するところを、感じ取ったのか、赤まどかは、
狂ったように叫び声をあげる。

彼女の命を受けたまどか軍団が、マスケット銃を手にして、シグナムを
包囲した。

「この、土壇場で、飛び道具か？
見苦しいぞっ！」

「や、やかましいっ！！」
赤まどかが、余計に赤い顔をして怒る。

「レヴァンティン！——」
「シュランゲ・フォーム！」

レヴァンティンから、魔力カートリッジが、1つ排出される。

シグナムと、アギトは、気合とともに、右腕を、振り上げ、——
高熱化して、火炎の魔力を宿した、レヴァンティンの連結刃を振り
回す！

——瞬時に、まどか軍団の前衛が、斬り裂かれ、焼き尽くされる！

「「剣閃烈火！！」」

シグナムと、アギトが同時に叫ぶと、2人の左手に、紅き炎が宿る。

「「火龍一閃！！！！！！」」

シグナムの左手の火炎は、ビーム剣のように、長く、鋭く伸びる！

シグナムと、アギトは、その巨大な、火炎剣を、

——テニスのバック・ハンドの様なフォームで、

——横に振り斬り、敵軍団を、横一文字に、斬り裂いた！！！！

まどか軍団の、『鹿目まどか』達は、瞬く間に、
焼き殺され、跡形も無く、蒸発していく。

そして、赤まどかも、——

「くっ——そおおおお——！！！！」

真っ赤な業火の中で、燃え上がり、消滅していった。

「ど、どうしてっ！

なぜ、この剣を使っても、壊せないの！！

私の想いが、足りないとしても、言うの?！」

ほむらは、その手にした、『ホープ・ソード』に
自分の魔力を目一杯に、充填して、――

『戦いの因果の糸』の破壊ポイントに、何度も、何度も、
斬撃を叩き込んでみたのだが、それでも、『戦いの因果の糸』には、
傷1つ付いていなかった。

――そんな、ほむらや、マミ・杏子達を、再びまどか軍団が、包
囲して、攻撃を
加えようとしていた。

「あれじゃ、袋叩きにされるっ！」

もっ、何をもたもたしてるのかな?！」

ナーガ！ 援護しに、行くよ！」

ほむら達の、窮地に気付いたリナが、――ゴーレムに潰された状
態から回復した、

――ナーガを呼んだ。

「えゝ?！」

めんどくさ――」

全く乗り気で無いナーガ。

「ふうん。 あんた、昨年、あたしにお金、いくら借りてたっけ？」

リナの、底冷えするような冷たい視線に、――

「い、行きます、行きます！」

行けば、良いんでしょ！

ああ、いえ、行かせてくださいっ――！」

大慌てで、同行を承諾するナーガ。

「んじゃ、そう言う訳だから、

桜ちゃん、アッコちゃん、後をよろしくっ！」

「分かりました！」

「任せてっ！」

リナの指示に、こっちに帰ってきた桜と、

『アッコ』と呼ばれた、少女、『加賀美 あつ子』が返事をした。

ナーガの首根っこを掴み、高速飛翔していくリナ。

――アッコと、桜の周りに円陣を組んで、集結する、魔法少女と、魔女っ子達。

「サリー先輩！」

あたし、必殺技とか、何も無いけど、精一杯、魔力で皆をサポート――

トします！

だから、どうか、見ていてください」

「メグ！

そんなの、あたしも、同じよ！

一緒に頑張りましょう！」

「ルンルン?!」

——互いに、励まし合う、少女達。

戦闘技術には劣るが、魔力の大きさにだけは、自信のある、

——古の、魔法少女と、魔法つ子達は、桜とアッコの、いにしえ

サポート役に徹する事に、覚悟を決めたようだ。

彼女達が、桜とアッコの、2人に、自分達の魔力を供給していく。

『ひみつのアッコちゃん』こと、アッコは、魔法のコンパクトを開いて、

魔力を持つ鏡に、映る自分の姿を見ながら、魔法の呪文を唱えた。

「テクマクマヤコン。

テクマクマヤコン。

リナ・インバースになーれ！」

鏡の魔法が、発動して、アッコを、リナ・インバースの姿に変身させた。

「今度は、私の番！」

桜が、リナに変身したアッコの前に立つ。

「契約のもと、さくらが命じる！」

ミラー！！」

桜が、『ミラーのさくら・カード』で、今のアッコの姿をコピーして、

同じく、リナ・インバースの姿に変身した。

——そして、リナの姿の2人は、即座に魔法の詠唱を始めた。

本来、この魔法を行使するには、2人の魔力は、小さすぎる。

——だが、今は魔法少女と、魔女っ子、数十人分の魔力が2人に集中していた。

「『黄昏^{たそがれ}よりも昏き^{くら}もの、
血の流れより紅^{あか}きもの、

時の流れに、埋れし、
偉大な汝の名において、
我ここに闇に誓わん、

我らが前に立ち塞がりし、
すべての愚かなるものに、——

我と汝がチカラもて

等しく滅びを与えんことを！！」

2人の手の中に、強い輝きを放つ紅い魔力光が生じた。

「ツイン・ドラグ・スレエエ——イブ！！！！」

2人は、まどか軍団に手を向けて、——

—— 発射された、2本の紅い魔力砲撃が、まどか軍団に突き刺さった。

さすがに、その威力は、本物のリナ・インバースの『ドラグ・スレイブ』には、遠く及ばないが、——
それでも、まどか軍団の動きを止めるには、充分だった。

「霸王——断空拳！！！！」

「がはああああああ——ッ！！！！」

月面では、ザフィーラが、青まどかの猛攻に、追い詰められていた。

独特のモーションから繰り出される、中国拳法の奥義『虎の拳』に良く似た技の衝撃が、ザフィーラの肉体を貫通し、——
最後に残っていた反撃する為のパワーを、刈り取る。

崩れ落ちるザフィーラ。

「ザフィーラ?! 大丈夫?!」
シャルだった。

同じ月の上で戦う三組は、いつの間にか、戦闘エリアが、重なっていた。

しかし、シャルも、黄色まどかの攻撃を何発も、もらっており、ザフィーラやヴィータのサポートをしている余裕はなかったのだ。

「てこずらしてくれましたね、ザフィーラ。

それにしても、——何度も試してみたが、さくらカードが全く使えなくなった。

これは、本来の所有者である『木之本 桜』が、他者に、カードを使用できないように、魔法で封印をしているのか?

我々のチカラを撥ね退けるとは、さすがは、伝説の魔法少女『カードキャプター・さくら』と言うことか」

青まどかは、桜のチカラに、驚嘆した。

「す、すまねえ、シャル。

ほ、本当なら、あたしが、皆を守ってやらないと、いけないのに、……」

そう言つて、うずくまる、ヴィータも全身傷だらけで、シャルはすぐにでも、回復魔法をかけてあげたかった。

しかし、——

「回復する時間など、与えませんよ。」

もう、終わりです」

3人のまどかが、シャルル達に迫る！

だが！

もう、一度立ち上がる、ザフィーラ！！

「どうにか、戦えるのは、もう、俺だけか、……………」

「ザフィーラ！　だめよ！

そんな体で、これ以上戦ったら、本当に死んでしまうわ！！」
ザフィーラの身を案ずるシャルル。

「それでも、守らねばならん、仲間達を！　大切な者達を！」

「ザフィーラ、……………」

あんた達、よくも、…………よくも……

よくも、ここまで、やってくれたわね！！」

シャルルの目が異様な光を帯び始める。

だが、青まどか達は、シャルルの、この異変には、

「うふ。ふふふふふつ。」

「うふふふふふふつ」

妙なテンションで、笑い始めたシャル。

「や、やべえ！ シャ、シャルがキレタっ！」
顔色を変えるヴィータ。

彼女は、知っていたのだ、——シャルを本気で怒らせたらいけない事を。

（昔、と言うか、前は、国が1つ余計に滅んだっけ？）

ヴィータは、はやてと出会う前の事柄を、最近夢に見る事がある。
その中でも特に恐ろしい夢があったのだ。

「ふふふふふつ！」

仕方ないわね。

これだけは、使いたくなかったけど」

やや冷静になったのか、シャルが、そんな事を言う。

「今更、何をするつもりですか？」

銀まどかが、訝しげな顔をして、質問した。

「さあ！ ザフィーラ！」

やっとおしまい!!」

変な事を言い出すシャル。

「シャル?! いったい何を言って——?」

ザフィーラも、訳が分からない。

「術式開放!!」

ビースト・ブレイク!!」

シャルが、叫ぶと、ザフィーラに異変が起きた!

「う?! うつつつつ?!」

うおおおお——ッ!!

フウ——ッ!

グルルッ!!

ガルルルル——!!!!!!」

全身の筋肉が盛り上がり、………変身していくザフィーラ!

それは、まさしく、蒼きオオカミ、——ザフィーラのビースト・モードだった。

——だが、何か様子がおかしい。

ザフィーラは、——伝説や、空想映画などに登場するいわゆる『オオカミ男』とは、違い、オオカミの姿になっても、人間的な心や、理性を失う事は決してない。

——いや、なかった。今までは。

——ところが、今のザフィーラは、まるで、本当の『オオカミ男』のように、理性の欠片もない、『ケダモノ』みたいだった。

その目は、野獣のように爛爛と光り、大きな口からは、ヨダレをしたたらせている。

「ザフィーラ?! おい、どうしたんだっ?

ザフィーラ?」

ヴィータは、自分さえ、見た事のない仲間の異変に動揺した。

しかし、——

「今は、近づかない方がいいわよ。

今のザフィーラには、かろうじて、敵味方を認識する知性ぐらいしか残っていないから」
シャマルが、冷静に解説する。

「何だって?! シャマル?

ザフィーラに一体、何を?!」

血相を変えるヴィータ。

「彼の獣性・性欲・性的本能・精力を、限界まで増幅したのよ！

人間的な、理性は、封印してね。

でも、私の命令は、ちゃんと聞くように、設定してあるわ」
状況を説明するシャル。

悪魔か、あんたは？

「な、なんだって——？！！」
絶句するヴィータ。

「そして、彼には、欲望の対象を
『目の前の、青・銀・黄色の鹿目まどか』であると、設定したわ」

「な、な、何、——？！！」
今度は、3人のまどかが、絶句する番だった。

シャルの言った通り、獣じみたうなり声をあげながら、
『目の前の、青・銀・黄色の鹿目まどか』にゆっくりと、迫るザフ
イーラ。

「ひ？！」

小さな悲鳴を上げる青まどか。

——だが、

「ふ、ふんっ！

だから、なんだって言うのよ。

こんなヤツ、やっつけてしまえば!」

黄色のまどかが、マスケット銃を、ザフィーラに向けた。

「やってみなさいよ。

できるものならね」

黄色まどかを挑発するシャマル。

「こ、こいつ、——!」

黄色まどかの射撃魔法が、ザフィーラに、直撃したが?——

——ザフィーラの体は、白い光に包まれ、その光が攻撃を全て跳ね返した。

「こ、これは?! まさか?!」

目を見開く黄色まどか。

「そう、それはビクトリーが使ったのと同じ耐圧力バリアー。

今は、ビクトリーのメイン・コンピューターと、

私のクラルヴィントがリンクしていて、

私と、ザフィーラだけが、個人用バリアーとして、使用できるのよ。

前々から、リンディ提督の許可をもらって、このリンク・テストを、

していたのだけど、思わぬところで役に立ったわね」

冷たい声で説明を続けるシャマル。

「ひでえや、シャル。」

あたしだけが、そのバリアー無しかよ」
文句を言うヴィータ。

「ごめんなさいね、ヴィータ。」

このリンク・システムは、試作段階で、今は、2人しか使えないの。

制限時間も有るし、無限に使える訳じゃないのよ。

私が、ここでやられちゃったら、ザフィーラをコントロールして、さらに元に戻せる人物がいなくなっちゃうでしょ。

そしたら、たぶん、あなただって、ザフィーラに大変な事されちゃうわよ。

今の彼の精力は、絶大よ。

女の子3人ぐらいじゃ、きつと、満足できないでしょうね。

まあ、ザフィーラにいやらしい事を、されたいのなら、別にいいけど」

シャルは、不気味な笑みを浮かべた。

「ああ？ い、いや、遠慮しておく！」

ブルブルと、首を横に振って、絶対拒否の意思を表現するヴィータ。

別に、ザフィーラが、『嫌い』という訳じゃないが、

……仲間に、しかも、こんな状態のザフィーラに

『いやらしい事』をされるなど、ごめんだった。

「今の、私と、ザフィーラには、どんな攻撃も通用しないわ。

ねえ、この意味が分かる？」

『ニコニコ』と、笑顔で、まどか達に質問するシャマル。

プルプルと震え始める3人のまどか。

そのまどか達に、うなりながら、近づくザフィーラ。

「ガルルッ！」

グルルルルル——！！！！」

「ひ！ い、いや！」

こ、来ないでえ——！！

い、いやあつ！ いやだ、いやだよ！

ご、ごめんなさい……！！

もうしません！

ゆ、ゆるしてえ——！！！！！！」

ぼろぼろと、本気で泣き始めた3人のまどか。

「うふふ。」

ごめんで済めば、――

時空管理局は、いないのよ」
 明るい笑顔が、かえって恐ろしいシャマル。

「い
——
や
——
ッ
!!!!!!」

3人の『鹿目まどか』に、今まさに、
飛びかかるようにする、ケダモノ・ザフィーラ！

「ひいー！！！！」

その時、シャマルが『パチン！』と、指を鳴らした。

——すると、ザフィーラの動きが『ピタリ!』と、止まる。

ひ？！

硬直している3人の「鹿目まどか」。

「じゃあ、私の言う通りにする?」

シャマルは、にっこり笑って、3人のまどかに、尋ねる。

「する！ する！ します！」

何でもします！

もう何でもやります!」

3人のまどかは、もう、その顔が、涙と鼻水で、グチャグチャだった。

「じゃあ、あなた達の支配力の及ぶ範囲でいいから、まどか軍団を武装解除させて!」

3人に、要求を突きつけるシャマル。

「う! そ、それは、——あの——」

要求の内容に、たじろぐ、まどか達。

「出来ないの?」

——それじゃ仕方ないわね。

ザフィーラ!」

シャマルは、ザフィーラの停止状態を解除しようとする。

「わあっ!!! ま、ま、待ってください!!!!」

軍団の動きを止めておく程度なら、なんとかかなりますう!!!!!!」

青くなった3人のまどかは、（元々、1人は青だったが、）慌てて、自分達に可能な事柄を説明した。

「じゃあ、すぐにやってね」

「は、はい——！！！」

3人のまどかは、速攻で、支配可能な範囲の、まどか軍団の動きを停止させた。

「こわ！ シャマル、こえ——！！」

改めて、『シャマルを怒らせない事』を心に強く誓うヴィータだった。

第10章 終戦

はやては、——『鹿目まどか・ブラックRX』と、
——シヤマル達や、シグナムとは、別の、衛星の月面で戦っていた。

月の砂漠を爆走する戦車大隊！

それが、追っているのは、八神はやて。

先頭を走る、5台の戦車が、大砲を撃つ。

「うああっ！」

爆風に、吹き飛ばされるはやて。

「まだやつ！ まだ、やれるで！」

クラウドソラス！」

はやてが、反撃の魔力砲撃を撃つ！

はやての、シュベルトクロイツ（はやて専用の非人格型アームド
デバイス）から
発射されたビームのような白い砲撃魔法が戦車部隊へと直進する。

はやての、砲撃魔法は、大きな爆発を起こし、数十台の戦車を粉
々に粉碎した。

だが、対空砲戦車部隊が、弾丸の雨を下から掃射し、はやては、
慌てて回避する。

「だあ、もうキリがないわっ！」

文句をいいつつ、はやては、高度を上げた。

すると、上空から、接近する機影が有る。

「なっ?! え、F22 - ラプター?!」

知っている人は、少ないと思うが、――

『F22 - ラプター』とは、いくつかの宇宙に存在する『地球』と言っ星の、

『アメリカ』と言う国の、軍隊が保有する、――高性能のステルス戦闘機である。

言うまでも無く、本来は、惑星の大気圏内で使用するための機体だ。

恐らくは、魔力で、むりやり動かしているのだろう。

F22 - ラプターは、3機編隊で、飛行し、対空ミサイルを、はやて目掛けて発射した。

「ぐおおっ!!」

この、猛攻を魔力バリアーでなんとか凌ぐはやて。

「この! バルムンク!!」

8本の短剣状の魔力弾が、F22 - ラプターをホーミング（自動追尾）して、

見事に撃墜した。

「はあ、はあ、はあっ！」

しかし、かなり消耗している、はやては、降下して、月面にしゃがみ、肩で息をしている。

はやては、いつそ宇宙空間に退避しようかと、思ったが、上空の宇宙には、まどか軍団が、待ち構えていた。

「地上には、戦車部隊、上空にはF22・ラプター。

そして、宇宙には、まどか軍団。

さて、どうするか」

「どうするも何も、どこも行き場所など有りませんよ。

あなたの行ける所は、天国ぐらいのモノです」

そう語りかけるのは、鹿目まどか・ブラックRX！

「それにしても、変ですね。

さつきから、『レッド』の反応が消えている。

『イエロー』・『ブルー』・『シルバー』の3人は、

反応は、有るのに、私からのテレパシー通信に応答が無い。

そして、何より、この3人の反応の周辺の、

——まどか軍団が、動きを強制停止させられている。

『シルバー』達に何かあったのか？」

別の月を睨みながら、首を捻る黒まどか。

「ふふん！ 大方、シャルルを本気にさせて、逆襲されたんとかうか？

あの子、ああ見えて、実は、怒らせると、一番恐いんや」

ふらつきながら、立ち上がるはやて。

「なかなかタフですね。

でも、仲間の様子も気になりますので、あなたとの、戦いもここで、最後にします」
冷たい目で、はやてを、見つめる黒まどか。

そして、黒まどかは、腕に装着した円形のシールドに手を伸ばし、

『カチン』と、スイッチを？

「あ、あれ？ ど、どうして？ おかしいな。……………！！！」

し、しまった！

これって、砂時計の砂が全部落ちてしまうと、
時間停止の機能がもう使えないんだっけ？！

品質の悪い複製品だから、1カ月持たなかったのか？

。。。製品がよっ…！！

.....
あぁっ?!

落ち着いて、良く見ると、――

なんか、デザインが、微妙に、違っつ?!

特殊能力の使用限界に気付いて、慌てている黒まどか。

「なんや知らんけど、時間停止が、
もう使えへんのやったら、こっちのもんや!」

闘志と、魔力を高めていくはやて!

「ええい! あなただって、魔力は、もうほとんど、からっぽのは
ず!

そのデバイスは、カートリッジ対応型じゃない!

落ちろおおー!」

はやてを狙って、歩兵用、対戦車ミサイルをぶっ放す、黒まどか。

「パンツァーシルト!」

ベルカ式魔法防御シールドで、ミサイルを防ぐはやて。

「あんたは、確かに強い!

その強さと、戦う覚悟だけは、ほめといたるわ!

けどな、ウチらは、みんなのチカラを、
ごつつう大きく1つに合わせて、戦つとるんや！

たとえ、無数の分身がいても、本来は、
たった1人のあんたじゃ、絶対勝てやせんよ！」

「そんな、理屈——！！！」

はやてを、睨みながら、闘志と、魔力を、高めていく、黒まどか。

「ヘイムダル・格闘シフト！！！」

はやての全身から、強力な『凍気』が、発生する。

「ウ、ウソでしょ？！」

どこに、その技に必要な大量の水が？！」

ヘイムダルの情報データを、記憶している黒まどかは、驚く。

——そう、ここは、海も、川も無い月面。

「惑星の周りの衛星には、地下水が大量にある場合があるんや。

それも惑星の海に近い分量の！」

「えええ？！」

はやての言葉が、信じられない、黒まどか。

「こつ言つ説を知らんか？

ウチと、なのはちゃんの故郷の地球にも、
『鹿目まどか』の地球にも同じ『仮説』がある。

その昔、地球の月の内部には、大量の水が有り、
それは、地下の海と言って良かった。

その月の地下水が、なんらかの異変によつて、大量に地球に降り
注いだ。

——その現象こそが、『聖書』に記されている、『ノアの大洪水』
なのだ、と」

「ま、まさか、——まさか！」

「そう！」

ウチらが、今、立つとる、この月の地下にも、『海』が、有るん
よ！

防衛目標の惑星に、月が3個もあると、知つて、
事前に天体情報を確認しておいたんや！」

「く、くそっ！」

戦車大隊や、F22を呼び寄せようとする黒まどか。

「遅いつ！」

海より集え、水神の槍！

彼方より来たれ、銀雪の吐息！

逆巻き連なり、——我に従え！！」

はやてが詠唱を、始めると、月の表面がひび割れ、そこから、大量の水が、竜巻となって噴き出した。

黒まどかの、支配する、戦車大隊と、F22、その他の質量兵器群も、

大量の水流に巻き込まれ、粉碎されていく。

「ああつ?! そ、そんなっ！」

『水』の破壊力に、言葉もない黒まどか。

「彼方より、来たれ、氷結の息吹！

我が手に集いて、チカラとなれ！」

はやては、さらに、特殊な詠唱を加える。

「じゅ、呪文が、違う?!」

「くらえええええ——！！」

ダイヤモンド・ダストォ——！！！！！！！！」

「な、何イ——！！」

こ、これはああああああ——ッ?!」

はやての、正拳突きフォームから、打ち出された、巨大な、凍気の流れは、黒まどかと、残っていた彼女の兵器群を巻き込み、月の山の1つに叩きつけ、さらに、凍結させた。

「うつつ！ こ、こんな？！

こんな、事があ——！！！」

山の側面に、凍りついた状態で、じたばたしている黒まどか。

「さてと、……まだ、抵抗していたサブ・リーダーは、あんたが、最後や。」

とつとつ、全軍を武装解除してもらおうかい」

そう言っつて、ゆっくりと、黒まどかに近づくはやて。

「ふ、ふざけるなっ！

まだだっ！

まだ、まどか軍団は負けてないっ——！！

降服なんて、誰がするものかあ——！！！」

つばを飛ばして、絶叫する黒まどか。

「だ、そうや、インキュベーター——！！」

はやてが、宇宙にいる『アイツ』に、合図を送る。

「了解した。」

『瞬間物質移送機』作動!!」

キュウベえは、そう言うのと、小型艇に装備した特殊システムを操作する。

そして、数秒経つと、キュウベえの小型艇に付いている、サーチ・ライトの様な2つのメカから、怪光線が宇宙の1点に照射され、
そこから、巨大な黒い影が、出現した。

「あ、あれは?! まさか、そんな?」
小さく震えだした黒まどか。

その巨大な影は、リンディ提督の、『次元戦艦ビクトリー』だった。

「ワープの反応も、転移魔法の前兆も無かった。

なのに、なぜ?」

訳が分からない黒まどか。

「あれは、インキュベーターの使用する特殊マシンだそうや。

ワープ・システムでもなく、魔法も使っておらん。

まったく未知のテクノロジーの産物や」

はやてが、解説した。

「おのれええ、キュウベええ——！！！！！！！！」

オリジナルまどかの影響なのか、

キュウベえに対して激しい憎悪を表す、黒まどか。

「そして、恐らくは、ビクトリーは、もう……」

はやてが、ビクトリーの動向を見守る。

「広域個別照準、——完了！」

「艦首——拡散魔導砲、エネルギー充填、120パーセント！」

ビクトリーの火器管制係が、リンディ提督に、報告する。

頷いたリンディ提督は、一度、深呼吸すると、——

「拡散魔導砲、発射——！！！！」

ビクトリーの艦首から、撃ち出された、魔導砲は、——

しばらく、宇宙を直進してから、花火の爆発のように、拡散して、

残存していたまどか軍団を直撃した。

「あああああああ——ッ？！」

叫び声をあげる黒まどかの、眼前で、消滅していくまどか軍団。

——それは、——戦いの終わりが、近い事を告げていた。

それは、はやてと、黒まどかの決着が付く少し前。

「ちょっと、あんた達！」

何を、もたもたやってんのよ！」

リナと、ナーガは、——『戦いの因果の糸』を破壊する事にやっきになっている——

ほむら達、魔法少女のところに到着した。

「あ、あなた達は、——」

「で、伝説の魔道士、

リナ・インバースと、サーペントのナーガ？」

マミと、ほむらが、伝説の人物を前に緊張する。

「あー、あたし達の事は、まあ良いわよ。

それで、ナントカの糸、と言うのは、まだ壊せない訳？」

大事な事を確認するリナ。

「は、はい。」

さくらさんから、借りたこの『ホープ・ソード』や、他の人の攻撃魔法を、もう何度も、撃ち込んでみたんですが、全然効果が、出ていないようです」

ほむらが、少し疲れた顔をして説明する。

「ふむ？ あの矢が刺さっているポイントよね？」
ほむらに、質問するリナ。

「はい。肉眼では見えませんが、あそこを狙えと、シグナムさんが」

ほむらは、事実のみ答える。

「実際には、魔力の影響は少しずつ、蓄積しているようなね。」

ようは、諦めない事よ。

あたしも、昔、何度も挫折そうになった事が有る」

リナは、ふと、親しい友人達の顔を思い出した。

「ええ？ リナさんが、ですか？」
マミが、驚いて尋ねる。

「うん、……。」

大切な人達を、人質に取られたりしてね。

そんな時、別の人が、励ましてくれたり」

「そう、ですか」

ほむらは、この人がどれだけの、つらい戦いに耐えて、最強の魔道士になったのか、想像してみた。

それは、ほむらが、繰り返したあの悲しい戦いにも、似て、……。

「それより、問題は、……。

よし！

あたしが、奥の手を使ってみる！

ただし、それでも、少し切れ目が入る

程度だろうから、後は、あなた達の努力次第よ！」

「はいっ！！」

リナの言葉に希望を見出したほむらが、答えた。

「…… ナーガ！」

リナは、退屈そうに、話を聞いているナーガを呼びつけた。

「え、何？」

ナーガは、今にもあくびとか出しそうな、ダレ具合である。

「いい、ナーガ？」

あたしは、これから、大技の準備に、入るから、完全に無防備になるの。

だから、あんたは、敵軍が接近してこない様に、援護してちょうだい！」

ナーガは、信頼は、出来ないが、活用すれば、とっても便利！！

そう思っているリナは、援護を頼んだのだが。――

「ふっ！

なら、援護してあげるかわりに、
今まで、あなたから借りたお金は、全額チャラね！！」

その、でかい胸を『プルルルン！』と
揺らしながら、ナーガが、でかい態度で、リナに言う。

「そんな、取引があるかああああっ！」
つばを、すつとばして、拒否するリナ。

「ほーっほっほっほー！

この、条件を飲まないのなら、今後、どこかの国で
おいしい食べ物を見つけても、リナには、もう、おごってあげないわ！」

――猛烈に、せこいナーガ。

「ぐっ！　そ、それは、痛くないようで、意外と、痛いような気もしてくるっ」

気がするんかい！

こう言う大人になっちゃ、いけません！！！！

いきなり始まった交渉に、かたまっている魔法少女達。

「な、なら、チャラにする金額は、全額の一割ね」

リナも、負けじと、せこい。

「な、七割！」

七割で良いのか、ナーガさん？

「二割よ！　二割！！」

即答するリナ。

「うつっ！　ろ、ろ、ろ、六割！！！！」

汗をかき始めながら、答えるナーガ。

「に、に、に、20・3パーセント！」

とうとう、パーセントを出した、リナ。

「60・5パーセント」

増えてるぞ、ナーガ。

計算が、出来ないらしい。

……
魔法少女達も、『これ、いつ、終わるの?』と言う呆れ顔をして
いた。

「さ、さ、さ、さ、三割いい——!!!!」

こ、こ、これ以上は、絶対に、譲歩しないわよ!

ナーガ!!!」

最後通告するリナ。

「せ、せ、せめて、半額にいい——!!」

なんか、泣き始めちゃったナーガ。

この、時点で、両者の主張には、——
20パーセント(二割)の開きが、有る訳だ。

(もともとリナ達の世界に、

割、や、パーセントの概念があつたのか、不明。

……無かつたかも、知れない。)

——その時、

「リナ・インバースと、サーペントのナーガ!!」

貴様ら、一体何を、ゴチャゴチャやっている?!

さつさと、この子達を、支援せぬかつ！！！」

いきなりやって来て、イライラした声で、怒鳴り散らしたのは、シグナムだった。

赤まどかを倒したシグナムは、因果の糸に、悪戦苦闘しているほむら達が
気になって飛んで来たのである。

「う！ え、ええと、あのー、どちら様？！」

いきなり、怒鳴られて、びびるリナだったが、取り合えず、相手の素性を確認する。

「私は、時空管理局のシグナム一等空尉だつ！！」

そんな事より、貴様達は、まどか軍団への対応の為に、サリーどのに召喚された口だろう。

とつとつ、責任を果たさぬかつ！」

問答する前にやるべき事をしない相手に、シグナムは、苛立つ。

「果たさぬかつ、て言われてもねえ」
納得のいかないリナ。

「そうよ、半額にしてもらつまで、援護のお仕事は、保留させてもらっわー！」

ここだけリナに、同意するナーガ。

「いや、だから三割だって、さつきから、言ってるでしょうがっ！
」

主張を変えようとしないうりナ。

「一体何の話をしている？」

「いやー、あの、実は、……………」

シグナムに、事情を説明するリナとナーガ。

話を聞いている内に、段々と、シグナムの表情が険しくなっていく。

「ほほう。」

では、何か？

この、多くの人の命がかかっている、戦いの大事な局面において、借金の割合について、もめている、と、そう言う事なのか？

まして、1人は、かつて魔族と戦い、『デモン・スレイヤーズ』の称号を持つに至った勇者ともあろう者がっ！！」

そう言うシグナムは、努めて冷静さを装っていたが、こめかみの辺りが
ピクピクと痙攣し、その全身から怒りの赤いオーラが立ち昇っていた。

「い、いや、そのだって、
納得できないモノは、承諾できないから。」

その称号だって、あたしは、ただ、魔族に自分の命を狙われたり、仲間が危険な状況になったから、必死に戦っただけで、そのー。

勇者の称号持っても、お金にならんし」

シグナムの、怒りに気圧されながらも、リナは、正直な心情を吐露する。

「そうよ、そうよ!」

何か、怒っているシグナムが、怖いので、リナの後ろに隠れているナーガ。

「リナは、三割なら承諾、——なのだな。

ならば、それで話をまとめろっ!

いいな!」

勝手に、結論を出すシグナム。

「え——!」

抗議の声を上げるナーガ。

「もし、これ以上もめるつもりなら、

……貴様ら自身を、

半分か、三割引き、にしてやるっ」

妙な事を言い出すシグナム。

「は?!」

「えっと、それは、どう言う意味でしょうか？」

ナーガと、リナが、2人仲良く、首を傾げる。

鞘から、スラリと、レヴァンティンを抜くシグナム。

「だから、私が、この魔剣で、

貴様ら自身を、半分か、三割に分割してやろうと言うのだ！

分割するのは、身長か、体重か、好きな方を、選べっ！！！」

シグナムの目は完全に『マジ』だった。

「めめ、滅相も無いっ！！」

三割で、けけけけけ、結構ですう——！！！」

血相を変えて、いきなり、承諾するナーガ。

「あ、ああああ、あたしは、元々、三割で、OKしてたし、もちろん、異論はございませんともっ！！」

青い顔で、縦にぶんぶん首を振るリナ。

「シグナム！ ちょっと」

話に割り込むフェイト。

「テストロッサか？ なんだ？ もう、話をまとめさせたところだが」

シグナムは、少々不快な顔をした。

だが、こう言う話は執務官であるフェイトの方が適任だ。

しぶしぶ、後をフェイトに任せるシグナム。

「あのですね、私は時空管理局の執務官ですので、少しは融通が利きます。

後で、あなた達の、協力に対して、報奨金を出してもらえるよう、管理局本局に要請を出す事も出来ますから」

リナ達に、助け舟を出すフェイト。

「ええっ！」

「ほ、報奨金っ?!」

俄然、リナと、ナーガの目の色が変わる。

もう一度言います。

こう言う大人になっちゃ、いけません!!

「だ、だけど、あたし達の世界と、こっちの世界は、交流がないでしょ！」

こっちの世界のお金をもらってもー」

リナが大事な事実を思い出す。

「そ、そうかつ！」

そう言う事だと、やる気が、萎えるわねー」

ナーガのやる気メーターが、ガツクンと、下がる、下がる。

再度、言います。

こう言う大人になっちゃ、いけませんよ！

「それは、大丈夫です。あなた達の世界でも、『金』（きん）は、貨幣価値のある物質のはず。

出てきた報奨金を全て、『金』に換金してから、お渡し、します。

それで、どうでしょうか？」

さすがは、執務官である、――

異世界人との、交渉術に長けているフェイトだった。

「『金』で、もらえるっ！

それなら、全然OKよ！

異論はないわ！

でも、ナーガ、三割だからね」

リナは、フェイトには承諾しながらも、ナーガに釘を刺す事は、忘れなかった。

「いいわ！『金』で、報奨金を、もらえたら、あなたへの借金を

返しても、

たっぷり残るでしょうから」

ナーガも承諾したようだ。

「良いのか、テストロッサ？

あんな事を約束してしまつて」

シグナムが、フェイトに質問した。

「いいんですよ。

命かけても、報酬無し、では、納得出来ない人達もいますから」
フェイトは、色んな人物を見て、ある意味悟っているようだ。

それが人の世の真実である。

正義だけ、じゃ、腹の足しにはならぬ、とは、良く言つたものだ。

——報奨金がもらえたら、どう使おうか、とか、色々と考えだし
たりナと、ナーガ。

「うふふふふつ。

報奨金もらつて国に帰ったら、何買おうかなつ？

そうだ！ 久しぶりに、全世界うまい物さがしてグルメの旅も、
いいかも、しんない！

ふふつ！

うえへへへへへへっ！！」

「ごちそうを、頭の中に思い浮かべ、よだれをたらし始める、
だらしな顔のリナ。」

「まったくあさましいわね、リナ！」

女のお金の使い道と言えば、ひとつでしょう！

それは、おしゃれ！ いい服！ 身だしなみっ！

そう言えば、胸用の下着が、かなりきつくなってきたから、
新しいのを買わないと！」

その巨乳を『ぽよんぽよん』と、揺らしながら、ナーガが言う。

「あんたは、あれだけ、でかかったのに、
また育ったんかい！！」

「ごちゃごちゃ言っているリナ達に、最初とは打って変わって、
急速冷蔵庫に勝てそうな、とっても冷たい視線を送っているほむら
達。」

「あ、あれが、……………」

伝説の魔道士？！」

信じられない、と言う顔のほむら。

「人間あはなりたくねえな」

そんな感想を漏らす杏子。

「それは同感ね」

マミも杏子に賛成した。

「それじゃ改めて、行くわよ、ナーガ!！」

「OK、リナ!！」

『お金』の問題も、解決したので、戦いに集中するリナと、ナーガ。

「前にも言った気がするけど、敵軍が、あたしに、接近しないよう、援護してよね!」

ナーガに指示を出す、リナ。

「とにかく、あの変な、ピンクの女の子達を撃ち落せば、良いんでしょ?!」

この宇宙で、自分が一番変な事に気付いていない、ナーガ。

「フェルザレード!!（螺光衝霊弾）」

ナーガの手の先から、白いビームの様な、貫通力の高い射撃魔法が、

発射され、接近してきた、まどか軍団数名を撃破した。

「その調子でいいわ、ナーガ!」

リナは、ナーガに敵の迎撃を任せて、大威力魔法の準備に入った。

マミ・杏子・ほむら、なのは・フェイトも、接近してくる、まどか軍団を撃墜した。

「世界のいましめ
解き放たれし、

凍れる黒き虚無の刃よ……」

リナの詠唱が、始まると、彼女の手の中に、黒い『闇』が生まれ
た。

「……我がチカラ、我が身となりて
共に滅びの道を歩まん

神々の魂すらも打ち碎き……」

さらに、詠唱が進むと、リナの手の中に、わだかまる『黒き闇』
は、

その形を変え、一本の『闇の剣』となった。

「ラグナ・ブレ——ド！！！（神滅斬）」

リナは、気合を込めて、『闇の剣』を、『戦いの因果の糸』の破
壊ポイントに
振り下ろした。

宇宙に、激しい火花を散らす『神滅斬』。

だが、それでも、なかなか切れない！

「ぐぐつ！ た、確かに、カタイツ？！」
冷や汗をかき始める、リナ。

この技は、魔力だけでなく、リナの心や、魂そのものを消費する
ひどく危険な技なのだ。

「くうううううう——ッ！——！」

さらに、『闇の剣』に全力で、魔力を込めるリナ！

それでも、状況に変化は無い。

「ええい！

少しはチカラを貸してよ！

私の中で、眠っている魔王様！」

リナの髪の毛が、黄金色に変化した。

「なんだと！

器である者が、内なる神に、頼み事など、
ルール違反もいいところだぞ！」

リナの『内側にいる誰か』が、大声で、反論する。

「そんな事、百も承知よ！

でも、かわいい我が子達が、必死で戦ってんだから、少しぐらい、
助力してくれても良いんじゃない？」

「だいたい、人間が、神の真似事など、するから、こんな事になる！

人間に全ての多次元世界を把握する事など、不可能なのだ！

自分が認識出来ない、他の宇宙の事まで、干渉したりするから、全宇宙規模の過失を犯す事になった！！」

普段は、リナの魂の中で深い眠りにについている、黄金の魔王、『ロード・オブ・ナイトメア』は、事実を指摘する。

この魔王、『魔王』と呼ばれているが、実は、全ての世界、全ての存在の『創造主』であるらしい。

だが、リナは、その『創造主』に反論する。

「確かに、あの、まどかつて娘は、大きな間違いを犯したのかもしれない。

その罪は、決して許されないのかも、しれない。

だけど、彼女は、自分の私利私欲のために、神のチカラを求めた訳じゃない！

助けたい人がいたから、救いたい人達がいたから、そのチカラを求めた。

その思いが、間違いだとは、あたしは、思わない」

「むっ……」

「それに、元々、感情の無い種族である、——インキュベーターに、感情を『魔力源』とした魔法技術を与えたのは、あなたでしょうが」

「確かにその通りだ。

しかし、その技術と、魔法のチカラを、
どう使うかは、その宇宙に生きる者たちの、
自由意志にまかせた。

子供の行動を、全て、母親が指示していたら、
その子供は、成長できまい」

「母親だったら、1回や2回ぐらいは、
子供の間違いを、許してやってよ」

「だとしても、我が、チカラを貸せるのは、今回のみだ！

人間達が、今度、何か大きな間違いをしたと、しても、
……………」

「それは、——大丈夫だと、思うな」

「なぜ、そう断言できる？

リナ・インバース？」

「あたしは、こう思うの。

人間って言うのは、間違えながら、学ぶ事が出来る
生き物なんだって」

「……それは、逆に言えば、間違いから、何も学ばぬ者に、
進歩は無い、と言う事だ」

「『生きる』って事は、さあ！

『間違える』って事なんだよ！

だから、『痛い』んだ！

だから、『苦しい』んだ！

でも、それでも！

いや、だからこそ！

『命』は、『生きて』いたいんだ！！！！」

「……………」

「人間は、弱い生き物かも、しれない。

でも、決して、愚かな生き物じゃない！

あたしは、そう、信じる」

「……………『希望』と言う名の、内なる神か……………ふふっ」

「え？」

「よかるう！

今回に限り、我のチカラ、貸してやろう！！！」

金色の魔王は、そう言うと、
ラグナ・ブレードに『神力』を流し込む。

黄金色に、輝きながら、巨大化していく、ラグナ・ブレード。

「過ちを、打ち壊せえー！」

超・神滅ざ——んっ！！！！！！！！！！」

リナは、渾身のパワーを込めてラグナ・ブレードを『因果の糸』
に、
叩き付けた！

『因果の糸』は、不思議な光を放ち、その半分ぐらいまで、
『切れ目』が入ったのが、肉眼でも、確認出来る。

「や、やった、……あ、あとは、……」

ふらふらしているリナ。

彼女の、髪の毛は、黄金色だったのが、白髪に変色している。

かなり消耗しているようだ。

「リナ！」

「リナさん！」

ナーガと、ほむらが、リナの体を支える。

「あとは、あなた次第よ。」

友達を助けてあげなさい」

リナは、やさしくほむらの背中を押す。

「はい！」

返事をするほむら。

——その時、キュウベエの『瞬間物質移送機』によって、戦場に出現した、ビクトリーが、拡散魔導砲を発射した。

そのほとんどが、消滅していく、まどか軍団。

だが、まどか軍団は、全滅した訳では無く、まだ少数の部隊が残留していた。

そして、最後に残ったサブリーダーまどか（黒まどか）の意思によるものなのか、——戦闘意欲を失っていない、まどか軍団が再移動を開始して、——魔法少女と魔導師連合軍を包囲しようとしていた。

「くそっ！ こいつら、もう残り少ないと、言っても、あと何人いるんだよ！

うわっ！」

ノーヴェが、まどか軍団を格闘戦で、迎撃しようとするが、背後から、魔銃で、狙撃される。

「振動拳！！」

スバル・ナカジマが、綺麗に、S字ターンを描きながら、振動破碎の必殺拳で、数十人のまどかを、粉々にした。

実は、彼女も、製作者が不明の戦闘機人である。

遺伝子的には、スバルとノーヴェは、一卵性の双子と同じなのだ。

「す、すまねえ、スバル！」

「うん！ デイエチ！
援護射撃をお願い！」

スバルは、ノーヴェに、返事をしてから、
ディエチに、指示を出す。

「了解！

IS（個人スキル）発動、ヘヴィバレル！

狙い撃つぜ！！」

ディエチが、固定装備イノメスカノンを連射して、まどか軍団に反撃する。

「味方同士で固まってる、逆にこっちが狙い撃ちされる！」

皆、止まらずに、動いて！」

ティアナが、全員に注意する。

「い、いけないっ！」

このままじゃ味方がっ！

暁美さん、急いで！」

マミが、ほむらを、急かす。

ほむらに、残された時間は残り少ない。

「チャンスは、この、1回きり！」

『希望の剣』を手にした、ほむらが、『戦いの因果の糸』の『切れ目』に向かう。

「行っけー！ ほむらぁー！」

杏子が叫ぶ。

「暁美さん！」

マミも声を上げる。

「ほむらちゃん！」

「ほむらー!!」

「ほむらちゃん!!」

はやて・フェイト・なのはも、応援するように、叫んだ。

「まどかあああ——!!!!!!!!!!」

ほむらは『ホープ・ソード』を振り上げ、『戦いの因果の糸』の『切れ目』に

全力全開の一撃を叩き込んだ。

『戦いの因果の糸』は、一瞬その斬撃に耐えたが、次の瞬間、不思議な七色の輝きを放ちながら、崩壊していった。

ここは、はやてと、『鹿目まどか・ブラックRX』のラスト・バトルが行われた月面。

リーダー格まどか（＝軍団長）が、平らな砂地の上に、寝かされており、その周りには、ほむら達、魔法少女と、なのは達、管理局の魔導師達もいた。

「まどか？ まどか！」

もう苦しくないよね?!

もうなんとも無いよね？

『戦いの因果の糸』は、破壊できたんだから！」

ほむらが、心配そうに、リーダー格まどかの顔を覗き込む。

「うん。」

もう、ぜんぜん、苦しくない。

私は、大丈夫だよ。

ほむらちゃん」

そう言う、まどかの表情は、とても穏やかで、本当に大丈夫そうに見える。

「そう……よかった」

ほっと胸をなでおろし、安心するほむら。

「ありがとう、ほむらちゃん。」

苦しみから、救ってくれて、――

戦いの運命から、解放してくれて、……………

でも、――ごめんね。

もうすぐ、ほむらちゃんとは、お別れしなくちゃ、いけないの」

「まどか?!」

それは、どう言う意味なの?!」

まどかの、言葉に血相を変えるほむら。

——月の、山の壁面に、凍り付けにされ、その上、捕縛魔法を掛けられ身動き1つ出来ずにいる——

『鹿目まどか・ブラックRX』が、はやてに、話しかける。

「あの、八神はやてさん？」

「ん、何や？」

「もう戦いは、終わりました。」

抵抗したりしませんから、私を、自由にしてくれませんか？

せめて最後に、軍団長に、挨拶をしたいのです」

「……………まあ、いいやろ。」

今の、あんたの目からは、敵意も、殺意も、感じられんし」

そう言って、凍結魔法と、捕縛魔法を、解除してやる、はやて。

「ありがとうございます」

黒まどかは、はやてに、礼を言つと、横になっている
リーダー格まどかの所へ歩いていった。

「『因果の糸』を、破壊……か。

原理的には、『消滅魔法』と、同じやな。

……と、すると、あの子らは、もうすぐ……

ん？」

はやては、月面に降下してくる、シャマルを見つけた。

ヴィータと、ザフィーラも一緒である。

彼らは、バインド魔法（捕縛魔法の一種。光るロープにも見える）
で、

グルグル巻きにされた青まどか・銀まどか・黄色まどかを連行して
いた。

「皆、ご苦労やったな。

ん？ どないしたんや、ザフィーラ？

何や、えらい、具合悪そうやな？」

はやては、心配して、ザフィーラに尋ねる。

「は、はい。

が、治療魔法を、かけてもらって、体の怪我は、もう、治ったのです

頭痛がひどく、なかなか、治まりません。

それに、途中までは、憶えているのですが、なぜか、戦闘中の記憶が、一部欠けています」

青い顔（？）で、自分の頭をしきりと、さすっているザフィーラ。

そして、妙な事に、縛られている3人のまどか達が、明らかに、ザフィーラを、恐怖の眼差しで、見ており、さらに、小さく震えている。

「どう言う事や？」

ヴィータは、何が有ったのか、知らんか？」

理由が、気になるはやてが、ヴィータに質問してみたが、――

「え?! あ、あ、あはは。

い、いや、そのー。

あたしには、さっぱりー」

ヴィータの返事は、答えになっておらず、全然、要領を得ない。

「シャマルは、事情を知らんか？」

この、サーペントのナーガには、遠く及ばないわ！！

ほ——っほっほっほっほ——！！」

いきなり、やって来て、シャマルに挑戦するかのように、
高笑いを、始めた、ナーガ。

「ちょこざいなっ！

あなたなんて、古代ベルカ時代から、高笑いの女王と呼ばれた、
このシャマルの敵では無いわよっ！！

オ——ッホッホッホッホ——！！」

高笑いを、競い合う、変な女、2人。

「ほ——っほっほっほっほっほ——！！！！」

「オ——ッホッホッホッホッホッホ——！！！！」

「ほ——っほっほっほっほっほっほっほ——！！！！！！！！」

「オ——ッホッホッホッホッホッホッホッホ——！！！！！！！！」

延々と、高笑い対決を続けるナーガと、シャマル。

「あ、あかん！

シャマルが、壊れてしまった。

途方に暮れるヴィータが、宇宙空間を見上げる。

ちょうど、そこに、ワープ・アウトしてきたレティ提督の『次元戦艦ビッグ・タイガー』が、その巨体を出現させた。

ビッグ・タイガーの艦内から、応援の管理局魔導師が、多数出てきて、

負傷者の手当と、——活動停止中の、

——残存する、まどか軍団の捕縛を、行い始める。

黒まどかは、——臨終の国王に付き従う、忠実な兵士のように、恭しく、——

リーダー格まどかの、すぐ近くに跪いた。

「軍団長、長い間、お疲れ様でした」

「ブラック……あなたこそ、とても、苦勞をさせましたね。

今まで、本当に、ありがとう」

互いの勞をねぎらう、2人のまどか。

はたから、見れば、仲のいい、双子の姉妹のように、見える。

「ほむらちゃん、最後に私の話、聞いてくれる？」

ほむらに、視線を向けて、リーダー格まどかが、尋ねる。

「うん。」

何でも聞いわ

リーダー格まどかの運命を悟ったのか、ただ静かに、そう答えるほむら。

「あの日、あの時、——ほむらちゃんや、全ての魔法少女を、救う為、

——勇気ある、自分の願いを叶えて、魔法少女となった『鹿目まどか』は、
『鹿目まどか』と言う個体を、保てなくなった。

それは、人間としての『自我』を保てなくなる、
と言う事を意味していたの。

そこで、問題が起きた。

巨大な魔力エネルギーをコントロール出来るのは、『人の心』だけなの。

だから、『鹿目まどか』の自我が、無くなれば、神にも等しい、
その魔力を制御出来なくなる。

魔力の制御が出来ないと、——『鹿目まどか』が改変した宇宙は、
元の状態に戻ってしまう。

魔獣達が、そのチカラで、宇宙を、修正してしまうから」

リーダー格まどかの語る真実に、ほむら・マミ・杏子は、愕然と

する。

「魔獣達が?!」

思わず大声で、質問するほむら。

「ど、どう言う事だよ、そりゃあ?!」

杏子も、同じく疑問を口にする。

「ほむらちゃん達の、世界に、出現している、魔獣は、——人間の負の感情を、核にして、誕生してくるけど、——その活動エネルギーは、宇宙が、元の状態に戻ろうとしているパワーそのものなの」

この、まどかの解説に、マミが口を開く。

「ようするに、宇宙の反作用みたいなチカラをあつ魔獣は、活用しているって、事なのかしら？」

「正解です。マミさん」

マミに、笑顔で答えるまどか。

「そして、——『鹿目まどか』の自我を保つ為に、あんたらまどか軍団が生み出された、ちゅう訳やな？」

八神はやてが、話に割り込んだ。

「その通りです。」

事实に気付き、自我崩壊の危機に陥った『鹿目まどか』は、

慌てて、自分を2つに分けた。

生まれ故郷の宇宙を見守り、その因果律を調整する自分と、他の世界に存在する魔女を滅ぼす軍団に。

そうすれば、人としての自我を、失わずに、済むから。

だけど、まどか軍団は、――

私達は、――最初から、間違った存在だった。

サリーが、指摘した通り、他の世界には、正義の為に戦う魔女達が、――

ただ、平和に暮らしている魔女達が、いたのに！

まどか軍団は、ただ無意味に、罪も無い人々を攻撃する殺戮集団だった！

私達は、この宇宙に、いちゃいけない存在なんだ！」

リーダー格まどかは、自らの、運命を呪うように、涙を流していた。

縛られている、3人のまどかも、軍団長に同調するように、泣いていた。

ただひとり、黒まどか、だけは軍団長の言葉を、静聴していた。

「殺戮集団か、……

我ら、ヴォルケンリッターも、似た様なモノだった」

いつの間にか、シグナムが、来ていた。

「シグナム、……………」

複雑な表情のはやて。

「確かに、やってしまった事は、間違いだった。

でも、その『想い』だけは、決して間違いじゃない」

リナが、会話に加わっていた。

「リナ・インバース……………」

リナを見つめるシグナム。

「リ、リナさん？ その髪の毛？」

リナの髪が白髪である事に、ほむらが気付いた。

「ああ？ これ？ 大丈夫よ。

前にも、一度、こうなった事が有るんだけど、しばらく時間が経てば自然と元に戻るのよ」

リナが、心配そうな、ほむらに答えた。

「元に戻るモノ・戻せるモノは、それでええ。

そやけど、結局、尊い命が、たくさん、失われてしまった。

まだ確認は、出来てへんが、恐らくは管理局部隊にも、多数の犠牲者が、……」

起きてしまった、悲劇の大きさに沈み込む少女達。

だが、そんな、皆に、まどかは、告げる。

「その事なら、大丈夫です。」

私達は、もうすぐ、実体を失い、私達を構成していた魔力は、全て、

オリジナルの鹿目まどか本人に、戻る。

まどか軍団は、鹿目まどかの願いを核にして、彼女の魔力が実体を持ったモノです。

その魔力が、全部、オリジナルの鹿目まどかに帰って行けば、――

復活するはずです！

神のチカラを持つ、宇宙最強の魔法少女、ハイパー・アルティメットまどかが――！

まどかの語る内容に、信じられない様子の一同。

「ハ、ハイパー・アルティメットまどか？

その神様のような魔法少女が、復活すると、
一体全体、何が起きるんや？」

はやてが、次の言葉を促す。

「今、鹿目まどか本人は、高次元世界にいますが、彼女も、
この状況に、心を痛めているはず。」

ハイパー・アルティメットまどかになった彼女は、必ず、消滅し
た人々や、

傷ついた者達、破壊されたモノを、——その神に等しいチカラで、

元の状態に戻してくれる、と思います」

まどかの話に、まだ、信じられない、といった顔の、面々だった。

「まあ、それやったら、何も問題あらへん。」

恐らく今回の事件は、時空管理局の公式データからは、
完全に、削除されるやろうな」

はやては、自分の予測を話した。

「ええ?! それは、どうしてですか?」

はやてに、首を傾げながら、尋ねるほむら。

「考えても、みてみい！」

本来、たった1人の、魔法少女に、管理局の次元艦隊が、一時的

とは言え、

全滅させられたんや！

そんな、事実、あまりに恥ずかしゅうて、公式資料に、残せる訳が、あらへん！」

——はやての、予見通り、この事件が公式データに残る事はなかったのだ。

全ての真実は、闇から闇へと、葬られた。

——それを知る人々の、思い出の中を、除いては。

「軍団長、そろそろ、時間です。

申し訳ありませんが、私は、先に帰ります」

突如、別れを告げる、黒まどか。

「さようなら。

また、会いましょう、ブラック」

黒まどかに、別れの挨拶をするリーダー格まどか。

「ブラック?! 帰るって?」
驚くはやて。

「さらば、八神はやて。

あなたの言った通り、『仲間』は、強かった」

はやてに、手を振りながら、黒まどかは、光の粒子となり、
彼方の宇宙へと、散っていく。

「そうか。」

帰っていったんやな、自分の有るべき場所へと」

はやては、心の中で、強敵^{とも}に、別れを告げた。

気がつけば、ほっとかれた、3人のまどか達も
光の粒子と化して、消えていくところだった。

高笑いし過ぎて、『ゼーゼー』と肩で息をしているシャマルに、
『あっかんべー』をしながら、黄色まどかが、消えていく。

他の、残存していた、まどか軍団も、同じく光の粒子となって飛
んでいった。

「私にも、そろそろ、帰るべき時が来ました。

.....

ほむらちゃん、.....」

ほむらの名前を、呼ぶ、リーダー格まどか。

「うん、.....」

リーダー格まどかの、手を、握るほむら。

その、まどかは、夢見るような、表情で、
宇宙の星々を見上げ、――

「未来が、――見えるよ。」

あなた達と、鹿目まどかの、未来が。

とても、幸せそうな、みんなの笑顔が」

「え？」

「ほむらちゃん、……………」

まどかを、よろしくね。

もうひとりの、私を、……………」

そこまで、言っと、まどかは、目を閉じた。

まるで、安らかな、眠りにつくように、……………」

その顔は、楽しい夢でも、見ているかのように、
かすかに、笑って見えた。

「まどか？」

まどか！

――

はしゃぎ過ぎて、ころんでしまい、少々ケガをする人までいる。

だが、皆そんな事は気にしない。

今から、またいつもと変わらぬ、平和な日常が、始まるのだ。

それは、——何と退屈で、何と、幸せな事だろう。

平和が、長く続くと、人は、皆、平和の尊さを忘れるものだ、
——と、歴史の専門家は、言う。

それが、人の真実である。

「ファビア！」

ファビア——！

助かったのよ！ 私達！」

ファビアと言う名の少女の、母親なのか、姉なのか、それは、
分からないが、——若い女性は、ファビアを抱きしめ、
泣きながら、そう言った。

ファビアは、宇宙の一点を見つめて、——

「うん、——

ありがとう、勇敢な人たち。

.....

そして、――

さようなら、

魔法の戦士たち」

伝説の魔法少女達と、伝説の魔女っ子達も、この宇宙から、
去る時がきたようだ。

彼女達の代表として、『木之本 桜』が、暁美ほむらと、握手を
交わす。

桜に、『THE HOPEの、さくらカード』を返却するほむら。

「『希望』のカードを貸してくれて、ありがとう。

おかげで、大切な人を救う事ができたわ」

桜に、感謝するほむら。

「こちらこそ！

この子、すごく喜んでるから！

実は、この子は、元々、破壊能力しかない、
『無』THE NOTHINGの、『クロウカード』だったんで
す。

1人ぼっちで、寂しくて、暴れまわっていた、この子を、――私と、さくらカード達、それに私の大切な人が、チカラを合わせて、説得に成功して、――
やっと、さくらカードの仲間入りを、したんですが、――
それ以後は、あまり、事件とかは、無くて、
このカードを、使うような、必要が無かったんです。

それ自体は、とても、良い事なんです、この子、誰かの役に立ちたいと、
私に、いつも言っていて。

それで、今回あなたの願いを叶える事が出来たので、
本当に、この子、すごく、喜んでいるんです」

事情を説明する桜。

「じゃあ、良かったわ。

『戦いの因果の糸』を破壊する為に、その子が、変化した剣を何度も、
乱暴に叩き付けたから、怒っているんじゃないかって、心配してたの。

カードに、精霊が宿っている事は、なんとなく、感じられたから
ほむらの、言葉に、桜は微笑む。

「あなたの親友を想う気持ちが、本物だったから、この子も、頑張れたんだと

思います。

改めて御礼を言います。

本当に、ありがとうございます」

「うっん。

礼を言わなきゃいけないのは、私の方。

ありがとう、桜ちゃん」

「……………あ、あのー、これは、私の勝手な、推測なんです、——

『鹿目まどか』さんは、いつか、帰ってくるんじゃないでしょうか？」

桜が、不思議な事を言い出した。

「ええ?!」

どうして、そう思うの？」

ほむらは、桜の言葉に、思わず質問する。

「途中から、話を聞いていたんですが、あの軍団長さんは、確かに言っていました。」

——まどかを、よろしくね。

もうひとりの、私を、——って」

「……………」

「それって、本当の、まどかさんが、こっちの世界に戻って来るって、

事だと、思えるんです」

「そうだと、……良いわね」

「あと、ここにいる皆さん、全員に聞いて欲しいのですが、——これは、私が、経験から得た教訓なんです」

「なあに？」

「人を本当に、幸せにするのは、魔法のチカラじゃない。

私は、そう思っんです」

「……………！ 本当に、そうよね。

でも、改めて、心にとめておくわ、あなたの言葉」

「生意気な事、言ってますいません」

「いいえ、私達のように、魔法を使える者は、その当たり前事を、良く忘れてしまう。

魔法のすごいチカラを、見続けると、魔法が万能に思えてしまう。

魔法で全て、解決出来ると、考えるようになる。

決してそうではないのに」

「はい」

「魔法のチカラで、全てが手に入る訳じゃないわ。

いつの間にか、私達も、その事を、忘れていたのかも、知れないわね」

「……………あつ、

そろそろ、サリーさんの、召喚魔法が、帰還モードに入りますっ！」

「それじゃ、桜ちゃん、皆、本当にありがとう。

元気でね！」

ほむらや、マミ・杏子、なのは達が、伝説の少女達を見送る。

淡い光に、包まれる『魔法使い』たち。

やるべき義務を果たしたので、少女達を、元の世界に、帰還させる方向に

転移魔法が作用を開始したのだ。

——だが、少女とは、言いにくい人が、騒ぎだした。

「あああつ！　ちょ、ちょっと待って！

ほ、報獎金！ 報獎金は？！」

勿論それは、ナーガだった。

「今は、しょうがないわ。

後で、特殊魔法で、こっちの世界に、転移してくるしかないわ！

その時は、よろしくね！

フェイト執務官！！」

リナが、フェイトに、報奨金の支払いを、再度、確約させる。

「はいはい。

分かってます。

おふたりが、来るの待ってますよ」

笑いながら、リナとナーガに手を、振るフェイト。

「絶対来るからねー！

忘れたら、怒るわよ——！！

金塊、洗って待ってなさい！！！」

大騒ぎしながら、消えていくナーガ。

転移魔法の光に包まれて、『魔法少女』・『魔女っ子』と呼ばれた少女達は、
それぞれの世界へと、帰って行った。

——『夢』と『希望』を振り撒きながら。

第11章 さやか

ここは、高次元世界。

この世界では、数多くの高次元生命体が、生活している。

ある町の、喫茶店『マギア』の前に、3つの人影が、有る。

初代リインフォースと、美樹さやか、そして鹿目まどか、であった。

まどかの、周囲を美しい、光の粒子たちが、舞い踊り、彼らは、次々にまどかの、体の中へと、飛び込んでいく。

「みんな、お帰り……………」

ごめんね。

痛かったよね。

つらかったよね。

苦しかったよね。

本当に、——

本当に、ごめんなさい」

まどかは、大切な、誰かを、抱きしめるように、何かを胸に受け

とめるような

動作を、してから、自分の肩を抱いた。

「でも、みんな、もう大丈夫だから。

——これから、私達の間違いを、修正するから、——

消してしまった、罪も無い人々も、

傷つけてしまった人も、物も、全て元に戻すから、——

だから、みんなのチカラを貸して……！」

ウエートレス用のユニフォームを着ていた、まどかの、体が、
眩い光に包まれ、その姿を変える。

光は、白いドレスのような衣服となって、彼女の体を彩っていく。

——足の靴からは、小さな白い羽根。

——背中からは、巨大な白い翼。

それは、正に、宇宙最強の、魔法少女、——
ハイパー・アルティメットまどかの姿だった。

ゆっくり、目を見開くまどか。

その瞳も、金色に輝いている。

「因果律、逆転、——有は有に、無は無に。

天は天に、星は星に、人は人に。

円環の理よ、我が意に従い、全ての過ちを、浄化せよ！」

まどかが、特殊な『言霊』（ことだま）を唱えると、彼女の体から、

七色の不思議な、輝きが、四方に、放射され、——その輝きは、瞬時にして、

あらゆる時空間に、影響を与えた。

「ふうつ。これで、なんとか、……」

地面に、座り込む、まどか。

服装と、瞳の色が、元に戻っている。

「うーん。

だけど、………どうしようか。

このままじゃ、私、人間の自我が消えて、魔力のコントロールができなくなっちゃう。

そうすると、宇宙のルールを、保持できないよ。

本当の事、言うと、魔獣の行動は、私としても、想定外だったから。

『魔女』の代わりに何か、出現する事は、予知出来たけど、宇宙の状態を元に戻そうとする存在が、生まれる事までは、感知出来なかったし」

まどかは、これからの、行動に関して、悩み始めた。

あまり、時間の余裕が有る訳では無かった。

早く解決策を見つける必要があったのだ。

しかし、そんなまどかを、尻目に、なにやら、ヒソヒソ話をしている、さやかと、初代リインフォース。

まどかは、何故か、不吉な予感を持った。

「それじゃ、大丈夫だね？ リインさん」

「はい！ あれだけの、魔力エネルギーがあれば、絶対にうまく行きます！」

私も、サポートしますし、……………」

2人の話す内容が聞こえてきて、まどかの、いやな予感は、やがて大きな不安へと、変わる。

それは、……………」

「2人とも！」

何、さつきから、こそこそ、内緒話をしているの？！

一体、何の話？！」

まどかは、わざと、こわい顔をして、2人を詰問する。

「あ？ あー、いや、そのー」

何か隠している、風体の、さやか。

「え、ええと、まどかさんの、懸念されている、事柄について、解決策を、ですね。」

そのー、いろいろと、相談を」

壮絶に、わざとらしい、初代リインフォース。

「それで、何？！」

その解決策って？！」

2人の企みの、中心は、そこに有りそうだと、推測する、まどか。

「もう、隠す必要も、時間もないでしょう？」

さやかさん？」

リインフォースが、さやかに、決意を促す。

「そう……だね。」

うんっ！

まどか！

まどかは、もういいよ!」

「もういいって?」

さやかちゃん、それって?」

「いわゆる、——選手交代って、ヤツだよ!

今まで、まどかが、やってた事は、全て、あたしが、引き継ぐ!

まどかは、——人間の世界に帰るんだ!」

「!!!!!!!!!!」

さやかの言葉に、絶句する、まどか。

「な、何言ってるの?」

さやかちゃん。

まったく、訳が、分からないよ」

本当は、分かっているのに、とぼける、まどか。

「その話、——ワシにも、詳しく聞かせてもらおうかの?」

「ひ?!」

声のした方を見た、まどかが、小さな悲鳴を上げる。

赤い服、赤い髪、赤い瞳、真っ赤なマフラー……………。

そこには、魔女——サリー・ザ・マジシャンの姿が、あった。
ちゃんと、頭が有って、しゃべっている。

「サリー……………」

リインフォースは、サリーを、じっと、見つめた。

「久しぶりじゃの？ リインフォースよ」

旧友に、会ったかのように、挨拶するサリー。

「ええ？ 知り合いなんですか？」

リインさん

まどかが、驚いて尋ねる。

「はい。」

もう、何千年も、昔の事です」

まどかの疑問に答えるリイン。

「まあ、そう警戒するな、鹿目まどか。」

お前は、もう、邪悪では無い魔女達を、滅ぼすつもりは無いのじやろ？」

サリーが、まどかに、尋ねる。

「勿論です。

罪のない『魔女と呼ばれる人達』を攻撃した事は、誤っても、許される事では、ないと思っています」

「だからこそ、お前は、宇宙の状態を、修正して、傷ついた者の傷も癒したのだろ？」

ならば、ワシと、お前が、これ以上、争う必要も有るまい？

違つかね？」

「はい。

私も、無益な争いは、望みません」

「ならば、仲直りじゃ」

まどかに、手を差し出す、サリー。

静かな、高次元空間の街中で、

宇宙最強の魔法少女と、宇宙最強の魔女は、あつく握手を交わした。

「それにしても、サリー、良くここに、入れましたね。

ここは……」

ラインが、サリーに対しての疑問を口にする。

「ああ。」

ワシは、自分が肉体的に死んだ場合、高次元生命体として、復活出来るように、

体内の『超次元システム』を設定しておいたのじゃよ」

「なるほど、……」

納得するリイン。

「それで、リイン。」

さっきの、話じゃが」

「はい、……まどかさんの内部には、まどか軍団を構成していた、魔力のエネルギーが、全て、戻って来ました。」

そのチカラは、神に等しい程だ、と言われていきます」

「じゃが、人間1人では、そのチカラの巨大さに、耐えられず、人としての自我が、崩壊する」

「そこで、今度は、まどかさんの魔力の、ほぼ半分を、さやかさんに移しかえる事に、します」

リインは、自分が考えた計画の内容を、明らかにした。

「そ、そんな！」

慌てるまどか。

「私と、さやかちゃんでは、魔法少女としての、能力や状態の違い、が大きすぎる。」

はつきり言えば、さやかちゃんでは、半分の魔力でも、それに潰される!」

真実を、はつきり口にするまどか。

「分かっています。」

そこで、私が、さやかさんと、ユニゾン（融合）して、魔力の制御・因果律の調整など、全てをサポートする、つもりです」

リインは、自分のプラン（計画内容）に、自信を持っていた。

「どうして？」

何故、私達の為に、そこまで、してくれるんですか？

本当は、リインさんは、今まで蓄積した魔力を使えば、マスターである、八神はやてさんの所へ、帰る事だって出来るはずなのに、……。

リインさんは、仲間や、家族の待つ、暖かい、場所に、帰りたくは、ないんですか？」

（自分は、意地の悪い事を言っている）
と、思いながらも、まどかは、リインの真意を、確かめたかった。

「何故、そこまでののか、――

あなた達が、好きになったから、――
では、理由になりませんか？」

「リインさん……………」

さやかが、リインを見つめた。

「我が主^{あるじ}は、とても強い女性に、成長しました。

それに主の、そばには、頼もしい、我が友、我が同胞たちが、いつも、おります。

とても、良い友人達にも、恵まれています。

もはや、何の心配も、有りません。

それに、あなた達をここで助けずに、帰ったりしたなら、私は、主、はやてから、きつく、叱られてしまいます」

リインは、笑いながら、そう言った。

「ならば、ワシも、さやかと、リインの、補佐役を、務めよう。

ワシの『超次元システム』が、因果律のコントロールに、役立つ
じやろう」

サリーが、そう言うと、別の声が、聞こえてきた。

「そう言う事なら、私達にも、お手伝いさせてください!」

そう声を上げたのは、まどかによって、
魔女化の危機を救われた、大勢の魔法少女達だった。

彼女達も、今は、高次元生命体と、なっており、
この世界で暮らしていたのだ。

「なるほど——」。

2人に、コントロール可能な魔力を分割したと、しても、
まだ余剰分の魔力が、かなり残る。

その分を、皆さんに、負担してもらうのも、良い方法かも、知れ
ませんね」

リインの話に、集まってきた魔法少女達も、賛同する。

「みんな、——まどかに、感謝してるのよ」

さやかが、周囲を見ながら、そう言った。

「みんな——」

まどかは、沢山の好意に、泣きそうだった。

「そして、——まどかは、もう一度、向こうの世界に、戻る」

しかし、このさやかの言葉を聞いたまどかは、——

「さやかちゃん……………」

私、…………いやだ。

絶対に、そんなの、いやだよ。

もう、さやかちゃんと、二度と、会えなくなる、なんて。

もう姿を見る事も、触れる事も、出来なくなる、なんて。

……………私、……………

私、本当にバカだ。

今になって、あの時の、ほむらちゃんの、気持ちが、やっと分かるなんて」

「まどか、……………」

「いやだ。

いやだよ、さやかちゃん」

「まどか。

あたしは、さ、

——あの時、まどかに、救ってもらえなかったら、
魔女になって、魂が消滅して、そのままだった。

——それが、まどかのおかげで、愛する人が、幸せになるところを、

ちゃんと、見守る事が、できたんだよ。

それに、こつちの世界に来てからは、まどかが、いつも一緒にいてくれたから、あたしは、全然寂しくなかった。

——10年ぐらい前から、リンさんが、加わって、3人で一緒に暮らしてて、
すごく楽しかった。

どれも、大切な思い出だよ。

あたしは、幸せだった。

まどかのおかげで、あたしは、本当に幸せになれたんだよ。

だから、まどか、——

今度は、まどかの番だよ。

あんた、まだ、何もしてないでしょうが！

まどかは、あの世界に帰って、——『人間に戻ってから』、——
今度は、自分の幸せを見つけるんだよ」

「人間に、戻るって、……仮に普通の魔法少女に戻れたとしても、人間に戻る事は、……………」

「そこらへん、大丈夫なんだよね？」

リンさん、サリーさん?！」

さやかが、2人の方を振り向いて、質問する。

「はい！ 現在の宇宙の動きならば、少し因果律を操作してやれば、……」

リンが、そう答えた。

「うむ！ ワシの『超次元システム』をフル稼働させれば、造作もない事よ！」

自信満々のサリー。

「——だ、そうです」

まどかの方を向き、笑顔で回答するリン。

「魔法少女が、人間に戻るようになる?！」

とても信じられない、——と言う顔の、まどか。

「そう言う技術が、開発されるように、私達で、因果律を操作しておきます」

リンが、この計画の、重要な部分を説明した。

「まかせておけ！」

サリーも、胸をはって、成功を約束する。

「まかせたっ！」

サリーに、笑顔向け、手の親指を立てる、さやか。

そして、さやかは、再度、まどかの方を向いて、説得するかのよう
うに、話した。

「まどか、……あたし、約束する。——

今度は、あたしが、『円環の理』となって、まどかの生きる世界
を守る。

これからは、あたし達が、——
悲しい魔女が生まれないように、宇宙の因果律を調整する。

そして、ずっと、まどか達の世界を、見守るから。

あの世界で、まどかが、幸せになるのを、ずっと、見守ってるか
ら」

「……さやかちゃん、……」

「まどか、——あなたは、今まで十分に頑張ってきた。

だから、もう、幸せになってもいいんだよ」

「ずるい。……

ずるいよ、さやかちゃん。――

そんな風に言われたら、私、私、……………」

「あんたが前に、ほむらに、言っていたように、――

見えなくても、聞こえなくても、あたしは、ずっと、まどかのそばにいるよ。

そばにいて、ずっと、見守ってるから」

「さやかちゃん、…………私…………私……………」

うつ、…………ふつ…………ぐすつ…………うつ…………つああああ!」

とうとう、まどかは、泣き出してしまう。

まどかは、――皆が何を言っても、――泣き続けた。

初代リインと、サリーが、オロオロするなか、

さやかは、いきなり、まどかを抱きしめ、――彼女の唇を奪った!

「うぶ?! んんっ?!

んーん――?!

んー! ん――!!

ぶはあっ!」

「えへへ、

まどかの、ファースト・キッス、もらい!!」

「な、なななな!

何するの?!

さやかちゃん?!!」

「まどかつてば、なかなか、泣き止んで、くれないんだもん。

そこで、強行手段に出ました!」

ペロツと、舌を出す、さやか。

「さやかちゃん!!」

真っ赤になつて、本気で、怒り出す、まどか。

「ねえ、まどか。――

まどかが、あたしに、教えてくれたんだよ。

生きる事は、すばらしいんだって」

「さやかちゃん、……………」

「――これは、たぶんだけど、……

まどかが、ずっと幸せな様子を、あたしに、見せてくれるなら、あたしも、幸せな気持ちで、いられるんだと、思う。

——だから、まどか、あたしに、約束して、——

人間に戻ったら、

絶対に幸せになるって」

「さやかちゃん、……………」

分かった、……

私、約束する。

絶対に、……

絶対に、幸せになるって事を」

「まどか、……………」

2人の少女は、お互いを、強く、やさしく、抱きしめ合う。

触れ合う唇と、唇。

「……………んっ……………」

今度は、お互いの意志で、口づけをする2人。

——ただ、暖かな、ぬくもりを、感じていたかった、……

——ただ、ずっと2人で、いたかった、……

この世界で、2人でいる時間が、——

気の遠くなる程、長かった、まどかと、さやかは、

——互いに、離れがたい存在となっていたのだ。

もはや、友人とか、親友と言うレベルを超える程に。

切り離す事の出来ぬ、互いの半身と、呼ぶ程に。

——いや、もっと深い理由がある。

それは、まどか自身、忘れている、遠い日の思い出。

——

——美樹さやかが、まだ小学生だった頃、
見滝原町に引っ越してきた1人の女の子がいた。

それが、鹿目まどかだった。

気が小さく、引っ込み思案だった、まどかは、
すぐ、周囲からの、いじめの対象となった。

そんな、まどかを、かばったのが、
美樹さやかだったのだ。

まどかは、——髪の毛がショートで、
半ズボンをはいて、元気に動き回る、

さやか姿を見て、——
てつきり男の子だと、思い込んでしまった。

まどかが、その子を好きになるのは、自然な流れだった。

つまり、——鹿目まどかにとって、

——美樹さやかは、初恋の相手だったのだ。

しばらく、2人は、ただ無言で、抱き合っていた。

そして、さやかは、ゆっくり、まどかの体を放す。

「リインさん、

お願いします」

リインにそう言う、さやか。

「はい」

初代リインフォースは、さやかに返事をしてから、まどかの正面に立った。

そして、リインは、まどかを、ぎゅっと強く、
だけど、とても、やさしく抱きしめた。

リインの腕の中の、まどかは、じっとして、おとなしくしている。

まどかは、自分の中の、膨大な魔力の大半が、リインの中へと、吸い込まれて行くのを、感じた。

しばらくすると、リインが、まどかの頭を、右手で、やさしくなでた。

まどかは、自分の体が、『高次元生命体』から、『普通の魔法少女』へと、変化していくのが、分かった。

まどかの体から、手を放すリイン。

次に、リインは、さやかの前に立った。

「決意は、変わりませんね？」

さやかの、意思を再度、確認するリイン。

「もちろん！ 何時でも、どうぞ！」

即答するさやか。

「では、—— ユニゾン・イン！！」

今度は、さやかを抱きしめるリイン。

すると、さやかと、リインフォースの体が1つに重なり、溶け合っていく。

1つになった2人の体は、神々しい七色の光を放ちながら、外見が変化していく。

「さ、さやかちゃん？」

良く知る人の変身に、驚くまどか。

「ほほう、これはまた、——」

サリーも目を細める。

——それは、——新たなる宇宙の守護者の誕生だった。——

「ふむ？」

祝福の女神 「リイン・さやか ——」

とても、呼ぶべきかの？」

さやかと、リインがユニゾン（融合）した形態に、
適当な名称を付けるサリー。

そのまんまな気もするが、まどかは、
とても良い名前だと思った。

——服装は、ハイパー・アルティメットまどか、と
ほぼ同じデザインだった。

——長い髪の毛は、——髪の毛の根元が、青く、髪の毛の先が、銀色
に染まっている。

——瞳の色は、さやかと、リインの色が、混じり合ったような、

薄い紫色。

——背中から、生えている、巨大な純白の翼。

「さやかちゃん、……すごく綺麗。」

……本物の、天使様が、女神様みたい」

まどかが、感想をもらす。

「えへへへへっ。」

そんなに、褒められると、ちょっと、照れるな——」

顔を赤らめるリイン・さやか。

「さやかさん？」

照れてないで、次の工程へ！」

リイン・さやかの内側の、リインが注意する。

「悪い、悪い、——そうでした。」

じゃあ、皆、すまないけど、余剰分の魔力の負担をお願い！」

リイン・さやかの、体から、魔力光が生じて、

周囲に集まった魔法少女達に、魔力が分割・供給されていった。

魔力を受け取り、作業を終了した少女達は、思い思いの場所へと

帰っていく。

「…………じゃあ、そろそろ、まどかも、
……………帰るべき時間だよ」

意を決して、別れを告げる、さやか。

「さやかちゃん、……」

リン・さやかを見つめるまどかの目には涙が光っていた。

「約束、忘れないでね、……」

リン・さやかの目からも、涙があふれる。

「うん、……………うん！」

何度も、うなづくまどか。

「まどかさん、

——あなたが、進む未来に、

夜天の祝福を！」

リンも、まどかに、別れを告げる。

「たっしやで、暮らすのだぞ！」

鹿目まどか！」

サリーは、まどかを、帰るべき世界へ、送るため、転移魔法を使用した。

不可思議な輝きを放つ、サリーの魔法陣。

最後に、もう一度、さやかが、別れの言葉を送る。

「バイバイ！！ まどか！！」

「さやかちゃん！……さやかちゃん！！……！！……！！！！」

まどかの声は、転移魔法の光に、飲み込まれ、消えていった。

ここは、しばらく前まで、激しい戦闘が行われていた、ある宇宙空間。

次元戦艦ビクトリーの艦体の上で、
ほむら達と、なのは達が、何か作業をしている。

「なあ、あたしら、何で、こんな所で、修理作業しているんだっけ？」

杏子が、首を捻りながら、マミに尋ねた。

「あなたが、それを、言いますか?!」

戦闘で、この艦のシステムが故障して、

——リンディ提督は、修理作業は、

——なのはさん達や、管理局の人達がやりますから、——
『あなた達は、ビクトリーの艦内で、休んでて良い』と、
言っていたのに！——

自分達も、修理を、手伝おうと、言い出したのは、
佐倉さん、——あなたでしょう?!」

バマミは、宇宙で無ければ、
口から、火を吐きそうな勢いで、杏子に怒鳴った。

「あー！ そうだった！ そうだった！
忘れてたよ。悪い。」

マミに、誤る杏子。

「忘れてたよ、じゃないでしょ！ あなたは、もう！」

そう、ビクトリーは、——帰還するのに必要な、虚数空間センサ
——などが、
先の戦闘で、損傷し、——修理しないと、時空管理局にも、ほむら
達の世界にも、
行けない状態だったのである。

「ごめんねー。」

皆、疲れているのに手伝わせて。

やっぱりー、試作品の耐圧力バリアーをフル稼働させたり、

奇襲攻撃しようと思って、拡散魔導砲を充填した状態で、異星人の転送システムで、強制転移させたから、艦のあちこちが、もう、みごとに、ぶっ壊れちゃって。

あははははははっ！」

なんか、楽しそうに笑っているリンディ提督。

「いえ、このくらいは、手伝わせてください」

せつせと、手際良く、作業しているほむら。

「まあ、艦内にお茶と、おいしいケーキを準備しているから、後でゆっくり休んでね」

ほむら達に、声をかけるリンディ。

「それは、楽しみです」

どんなケーキなのか、今から期待しているマミ。

「疲れとる皆に、小さな朗報が2つあるで」

はやてが、会話に割り込んだ。

「何でしょう？」

尋ねるほむら。

「まず、最初の1つ。」

ほむらちゃん達を、拘束しようとした失礼な連中がおったように、
—— 時空管理局内には、魔法少女に対する不信感があつたんやけど、
——
『伝説の3提督』と呼ばれる偉い人達が、それを押さえ込んでく
て、

今後は、魔法少女達との、信頼関係の改善に尽力する、そうや」

はやてが、管理局の状況を解説した。

「そうですか、—— 安心しました。

せつかく、良い関係が作れたのに、それが無くなってしまつのは、
残念な事ですから」

ほむらが、はやてに、正直な気持ちを伝える。

「これからも、よろしく、—— やな。

それと、もう1つ。

消滅していた人達や、破壊された惑星等が、
いきなり、元の状態に戻つたそうや」

「それは、—— あの、まどか軍団のリーダー格まどかが、言ってい
た通りに、
なつたと言つ事ですね。

それも、喜ぶべき事です。

やはり、本物のまどかは、やさしい、まどかの、ままだった」

ほむらは、友の顔を、思い浮かべる。

「でもよ、——ちょっと、待ってくれ。」

それなら、何で、このビクトリーの損傷は、元に戻らねえんだ？」

杏子が、疑問を提示する。

「うーん。」

これはね、私の、推測なんだけど、ビクトリーの損傷は、——
まどか軍団の攻撃の結果ではなく、ある意味、こっちの自爆、
または、自業自得で、『自分で壊した物』だから、元のまま、
なんじゃないのかな？」

さつきから、修理作業の全体を指揮していた
高町なのはが、自分の考察を述べる。

「な、なのはちゃん！

自業自得に、自爆は、ひどいなあー！

わっはっはっはっはあー！」

なんか、ハイテンションな、リンディ提督。

「そう言えば、どうして、リンディ提督は
先程から、変なテンションなんですか？」

マミが、小声で、フェイトに質問する。

「ああ、あのですね、

母さんのやった事は、——結果はともかく、
実際は命令違反と言う事ですので、——『伝説の3提督』が、局の
上層部を

説得してくれたので、——

——厳罰には、なりませんでした、
3ヶ月の減俸処分と言う事になりました。

ついでに、次回のボーナス支給も無くなりました。

母さんには、何か、買いたい物があつたらしく、

——しばらくは、あんな調子でしょう」

フェイトが、少々疲れた顔で説明した。

今後、母親の、グチにつき合わされる事を予感しているのだろう。

「な、何か、あたし達、すごく悪い事したような、そんな気がする
」

杏子が、バツの悪い顔になる。

「ほむら達は、ただ大切な友人を助けようとした、だけでしょ。

母さんも、覚悟はしていた筈だし。

あまり、気に病まないでください」

フェイトは、笑顔で、ほむら達にそう言う。

「今度、私達の世界の、おいしいケーキや、お酒を差し入れるわ。

何も無しじゃ、悪いもの」

マミが、リンディへ謝罪する、良い方法を思いつく。

……………その時、ほむらは、
どこからか、——聞いた事のある、——
懐かしい声が聞こえた気がした。

「ほむらちゃん。

みんな、——」

「?!……………」、「この声は?!」

声を聞いて、驚くほむら。

「ま、まどか?!」

杏子も、聞き耳を立てる。

「まさか？

か、鹿目さん?!

ど、どこ?。」

マミは、周囲の宇宙空間を見回した。

「こ、この魔力波動は、確かに、まどかよ!

ど、どこから?!」

必死に友の姿を探す、ほむら。

「どこや?!」

広域探査魔法を使うはやて。

「どっちから?」

気配を探る、フェイト。

「まどか、どこ?!」

相変わらず、見つけられず、あせり始めた、ほむら。

「みんな!

あそこ!

あそこだよ!!」

結局、『それ』を見つけたのは、そこにいる者の中で、『空間把握能力』の一番高い、高町なのはだった。

なのはの指差す方向を、凝視するほむら。

「あれは?!」

それは、美しい桜色の流星だった。

——ピンク色にも見える魔力光に、包まれた、魔法少女の姿をした『鹿目 まどか』が、ビクトリーを、目指して、直進してくる。

「まどかぁー!!」

泣きながら、叫ぶほむら。

「まどか!」

やはり大声で、叫ぶ杏子。

「鹿目さん!」

マミも、声を上げる。

みんなが、ビクトリーの甲板上に、立って、まどかを、迎える態勢を取る。

「さやかちゃん、——リインさん、——サリーさん。

私には、まだ、帰る場所があったよ。

これって、幸せな事、だよな。

.....

すごく、うれしい、.....」

まどかの目から、涙が、零れ落ちた。

彼女の涙は、宇宙空間で、凍りつき、星の光を反射して、『青い宝石』のように、きらめきながら、宇宙を流れていく。

「私は、さやかちゃんとの、約束を、絶対に忘れないよ。

これから、進む未来に何があってもみんなと一緒になら、私は、負けたり、絶望する事なんてしない！」

まどかは、ゆっくりと、

ほむら達へ近づき、.....。

第12章 卒業式

それは、ミッドチルダの暦で、新暦 0080年 4月末。

世界は、概ね、平和だった。

その『卒業式』は、元、機動六課の本部隊舎だった建物を使って行われた。

卒業生の代表として、壇上に上がり、大勢の『元 魔法少女達』の前で、

挨拶しているのは、時空管理局の制服を着た『鹿目まどか』だった。

「振り返ると、——いろんな事が有りました。

私が、覚えているのは、魔法少女達の、悲しい戦い。

その誰もが、大切な願いの為、傷だらけになりながら、命がけで、戦っていました。

でも、私は、そんな彼女達を、ただ見ているだけで、ただ恐ろしさに震えていただけで、——。

私は、考えました。——

自分に何ができるのか。

自分は何をすべきなのか。

そして、私は、自分の答えを出しました。

全ての魔女を消し去り、全ての魔法少女を救う事。

——それが、自分に出来る最善だと、信じていました。

——でも、その願いが、また新たな悲劇を招いてしまいました。

私にとって、幸いだったのは、——私の間違いを正してくれる友達と仲間達がいてくれた事です。

——本当に感謝しています。

そして、私は、今日、ある人にもお礼を言いたい。——

この卒業式には、この4カ月間の、戦闘魔導師——養成訓練の卒業と言う他に、もう1つの意味が含まれています。

それは、『人間の魔導師』となった私達が、『魔法少女』からの卒業を成し遂げた、と言う事。

そのための、システムを開発してくれた、ジェイル・スカリエツティ博士に、

私は、心からのお礼を述べたいと、思います。

——私は、彼の事を、良く知りません。

彼の犯した罪を、良くは、知りません。

——ですので、ただ彼が、私達のために、実現してくれた事に対

してのみ、
言葉を送ります。

私達を、人間に戻してくれて、――

本当に、ありがとうございました」

卒業式の会場のあちこちから、すすり泣きが、聞こえてくる。

まどかの語る、――ジェイル・スカリエッティの偉業。

それは、『魔法少女』を『人間の魔導師』へと『変身』させる魔導システム。

詳しい説明は、難しいが、――

まず、対象となる『魔法少女』と、本人の『ソウル・ジェム』をシステムにセットする。

次に、その両方を、特殊な、エネルギー・フィールドで包み込む。

これによって、作業工程の流れの中で、肉体と魂のリンクが切れないようにするのだ。

そして、第1段階として、『ソウル・ジェム』を純粋な魔力エネルギー体へと、変換する。

次の第2段階として、その魔力エネルギー体の中に、存在している『人間の魂』を分離する。

——『人間の魂』とは、『複素電磁場』と呼ばれる、
言わば『影の電磁場』で、構成されており、これは、
『人間の意識・心』の本体でもある。

（人間の脳は、実のところ、魂と言うユーザーが、
使用しているバイオ・コンピューターに相当する。）

この事は、『地球』の物理学者の、ごく一部の人も、
解明し始めている事である。

（この分野の、研究を総じて『意識工学』と言う。）

——作業工程に話を、戻そう。

この分離した『人間の魂』を、本人の肉体に、入れて、
肉体と魂を結合させてやる。

『人間の魂』の位置は、ほぼ心臓の中心である事は、
分かっていた。——理屈は、理解出来ても、これを機械のチカラで、
やってしまったのだから、やはり、ジェイル・スカリエッティは、
すごい超天才と言うべきかも知れない。

この段階で、作業を中止すれば、対象となった少女は、
魔法のチカラの無い普通の人間に、戻れるはずだ、

——と言う批判の声が有ったのだが、——
後に残った魔力エネルギー体の中に、本人の潜在意識の一部が溶け
込んでおり、
次の作業を行わないと、後で精神疾患を引き起こす危険が出てくる
事が判明した。

——そのため、最終段階は、必ず、実行されなければ、いけない。

——残った、魔力エネルギー体に、特別な処理を行い、本人に適合する『リンカー・コア』

（魔導師の体内に存在する魔力機関）へと変換する。

そして、この『リンカー・コア』を体内に入れて、固定する。

これで、1人の『高い魔力資質を持った』少女の完成である。

実は、この作業を行った場合、『魔法少女』だった時の、特殊能力や、

魔法特性が、本人に残っている事が多く、『魔導師』となっても、ほぼ同じ実力を発揮できる事が分かってきた。

だが、実際には、『魔導師』の肉体に慣れ、魔力運用と魔法戦闘技術の訓練を、しないと、実戦では使えない、中途半端な素人となってしまう。

そのために、この4カ月間、戦技教導官である、高町なのは一等空尉と、
ヴィータ二等空尉が、中心になって、元『魔法少女達』を、徹底的に、鍛えてくれたのである。

（時間があいた時に、はやてや、フェイトも、手伝っていた。）
（他にも、衣食住の世話を含めて、協力してくれた人物は大勢いたのだ。）

もちろん、これは、時空管理局の全面協力が無ければ出来ない事

だった。

——しかも、親切な事に、——『魔法少女』が、留守にしている間は、彼女達の世界の、『魔獣退治』を、管理局の新人魔導師達が、担当してくれていた。

——しかし、高町なのはによれば、『魔獣』というのは、種類にもよるが、管理局の新人魔導師が、実戦経験を積むのには、『丁度良い敵』なのだ、と言う事らしい。

「はやてちゃん、……」

なのはが、となりにいる八神はやてに、小声で声をかける。

「何や？」

今、まどかちゃんの、答辞の最中やで」

はやては、顔をしかめた。

こう言うタイミングで、なのはが、ヒソヒソ話をしてくるのは、珍しい事だ。

「この、4カ月の教導だけでも、すごい費用がかかってるし、『魔法少女の治療システム』なんて、どれだけお金がかかったのか、いまだに公表されてない。

『魔法少女達』との、関係改善は、かなり進んだと言っても、時空管理局が、ボランティア精神だけで、そんな莫大な費用捻出を行ったとも思えない。

つまり、これは、――

いくつかの次元世界で、活動が報告されている、

――例の『魔導殺し』への対処を、

視野に入れた戦力増強の一環と見ていいのかな？」

なのはが、確信をついた質問を、はやてに浴びせた。

だが、はやては、肩をすかしてみせた。

「半分正解、半分間違いやね。

確かに、なのはちゃんの、推測通りの部分は確かに有る。

そやけど、まどかちゃん達が、魔導のチカラを何に使つかは、彼女ら、自身が決める事や。

彼女ら全員、囑託魔導師、扱いやし。

今後は、ほぼ全員が、元の世界にもどってまた、

『魔獣退治』を続行するやろうしな。

もし、こちらが、『魔導殺し』がらみで、危機的な状況になれば、正式な方法で、援護要請は、するやろけど、それも、強制やない。

助けてやったから、言う事聞け、言うんやったら、

そこらのギャングと変わらん。

今の管理局は、そこまで、『まだ』腐ってへん、と思うよ」

はやては、自分の推測を交えて説明した。

「まあ、その時になってみないと、分からない事もあるか」

「そんなところや。」

もし、なのはちゃんの、心配しとる通りに、なった場合は、ウチらで、

しっかり、まどかちゃん達を守ってあげれば、ええ」

「うん、そうだね。」

フェイトちゃんの、助っ人探しも、

うまく行けばいいんだけど」

「しかし、いくら、『魔導殺し』に、魔法が効かんからって、他の次元世界にまで、行って、人材探し言ってもなあ」

「まあ、今日中には、フェイトちゃん、一度、こっちに戻る筈だし。計画してる模擬戦に間に合うかは、微妙だけど」

「まあ、いきなし、抜き打ち模擬戦か？

皆に嫌われてまうで、ほんま」

「嫌ってくれて、それで皆が強くなってくれるなら、私は、それで本望なんだよ。」

それに、今日は『四天王』の予定もばっちり、だったし、こんなに良いタイミングは、無いよ」

2人の内緒話をよそに、まどかの答辞は、続く。

「……………私達は、戦闘技術、以外でも大切な事をたくさん、教わりました。

誰かを守る為に、戦いたいのなら、想いだけでも、チカラだけでも、

駄目なのだ、と言う事。――

チカラだけだと、無関係な人や、無力な命を傷つける暴力に成りかねない。

想いだけでは、誰も守れず、何も望めない。

必要なのは、正しき想い、そして、――

守るべき者を、守れるチカラ、

救うべき命を、救えるチカラ、

絶望的な状況に立ち向かっていけるチカラなのだ、

――と言う教えは、決して忘れません」

まどかの答辞の最中、今度は、はやてが、なのはに、小声で、話しかけた。

「なのはちゃん、……」

「うん？」

「ウチな、初代リインフォースが、何故、まどかちゃんと、さやかちゃんの為に、向こうの次元に残ったんか、分かるような気がするねん」

「……………」

「なんも、むずかしい理由やなかった。

あの子らが、えらく、ええ子やから。ただ、それだけ、なんやって」

「そうだね。誰だってそう思うよ。

どうするかは、その人、次第だけど」

——そうこうするうちに、

まどかの、答辞は終わりを迎えていた。

「……この4カ月、みんなとともに、過ごせて、本当によかったです。

ありがとうございました！

卒業生代表、鹿目まどか！」

会場全体から、拍手と歓声が、沸き起こる。

顔を赤らめながら、自分の席に戻るまどか。

「はあっ！ き、緊張した——！」

まどかは、自分の額の汗をハンカチで、ふき取った。

「すばらしい答辞だったわ、——まどか」

まどかの隣に座っているほむらが、声をかける。

ほむらも、まどかと同じく、時空管理局の制服を着ていた。

「えへへっ。ありがとう、ほむらちゃん。」

実は、話のほとんどは、——マミさんに頼んで、考えてもらっただけだね」

自分の頭を、自分で小突きながら、『ペロッ』と舌を出すまどか。

「そうなの？」

私にも、相談してくれれば、良かったのに」

少し、寂しい気持ちになるほむら。

本当は、自分に頼って欲しかったのだ。

「ああ！ あ、あのね、……」

ほむらちゃんは、魔導デバイスの最終調整で、忙しかったから、時間を取ったら悪いと思って」

ほむらの表情に気付いたまどかは、慌てて、弁解した。

「別に良いのに、――

『ウリエル』は、思ったより早く、仕上がったのよ。

マリエル技術官が、頑張ってくれたから、……」

そう言って、ほむらは、とても綺麗な、指輪を、まどかに、見せる。

美しい紫色で、ひし形の宝石が、光っていた。

それが、AI（人工知能）ユニットらしい。

「ハロー！ レイディ！」

「はじめまして！」

あたし、鹿目まどか！

よろしくね、ウリエル！」

「サンキュー！」

「まだ、教育中だけど、とても良い子よ」

「ラファエル！ 挨拶して」

まどかは、自分のブレスレットを、ほむらと、ウリエルに見せた。ブレスレットには、サンゴのアクセサリーにも見える、ピンク色の球体が付いている。

これが、ラファエルのAI（人工知能）ユニットのようだ。

「ビギン イット アンド マイ セイム カインド」
（はじめまして、我が同類よ）

「うーん、ちょっと、まだ表現が硬いかなー」

まどかは、ラファエルの話し方が気になるようだ。

「アイム ソーリー マイ マスター」
（すいません、我が主人）

「まあ、あせらずに、じっくり、育てていきましょう。

マリエル技術官も言ってたけど、この子達は、単なる機械じゃない。

心と、命があって、使い手との間に、信頼感が育っていく事で、私達、

魔導師のチカラを、100パーセント以上に増幅してくれる、大切なパートナーよ」

ほむらが、ここで勉強した大切な事を、再確認する。

「うん、——これからも、よろしくね」

まどかは、『生きているデバイス達』に、挨拶しながら、この2年間の出来事を、思い出していた。

——現実には、映画や小説ほど、やさしくは、無かった。

第137管理外世界、のちに『マギカ宇宙』と呼ばれる、まどか達の世界では、——まどか自身によって行われた、『宇宙のルールの書き換え』によって、鹿目まどかは、人々の記憶からも、宇宙の歴史からも、抹消され、——『本来、存在していなかった人間』となっていた。

2年前、まどかが、この世界に帰ってきて、時空管理局と、魔法少女連合会が、まずやったのは、『鹿目まどか』の個人情報の捏造だったのだ。

もちろん、それは、違法行為である。

だが、自己を犠牲にして、全ての魔法少女を救おうとした、1人の少女が、

これから幸せな生活を始める為と思えば、それが『悪い行い』だとは誰も思わなかった。

そして、衣食住に必要な、様々な事柄。——

暁美ほむらは、大慌てで、まどかと、2人で暮らせるように、自宅を大改造した。

その改造工事が、終了するまでは、まどかは、巴マミの住む

マンションの部屋と、佐倉杏子のいるホテルの一室を、往復する毎日だった。

そして、まどかが、暁美ほむらとの、共同生活になんとか、慣れた頃、

まどかは、ひそかに、自分の家族がどうしているのか、見に行つた事が、ある。

自分よりも、かなり背が高く、とつくに姉の年齢を追い越して、立派な大学生となつていた弟、『鹿目 タツヤ』の姿を目撃した、まどかは、しばらくの間、号泣した。

その、まどかを、なだめるのには、さすがの、ほむらも、苦勞したそうだ。

もっとも、まどかは、高次元世界から、家族の様子を見て、弟の成長を、知つてはいたが、『神の立場』で、高次元から、人々を見下ろすのと、

同じ人として、近くで見るのは、勝手が違つらしい。

まどかは、成長した弟を見て泣いた自分が、『嬉しくて泣いた』のか、

それとも、『寂しくて泣いた』のか、今となつては、分からないと、笑いながら、ほむらに言つた。

いずれにせよ、家族は、まどかの、記憶を完全に失っており、直接、会う事は出来そうになかつた。

——人間の体に、戻つて、——自分の未来に夢や理想を、持つ事

が、

出来るようになったのは、まどかにとっても、幸いだったのだ。

……その、はず……だった。

………

——まどかと、ほむらが、いろいろと、話し込んでいる間に、卒業式のプログラムは進み、つつがなく、終了した。

卒業式の後、まどか達は——建物のすぐ外で、杏子やマミと、合流して——

これからの、予定などについて、会話していた。

そんな、まどか達に、なのはと、はやてが、声をかける。

「まどかちゃん、ほむらちゃん、卒業おめでとう!」

2人に花束を渡す、なのは。

「わあっ! ありがとう!」

「ありがとうございます」

「杏子ちゃん、マミさん、卒業おめでとうや」

杏子と、マミに花束を渡すはやて。

「あ、ありがとう」

「ありがとうございます、八神司令。」

それは、——いいんですが」

はやてを、何故か、睨んでいるマミ。

「ん、何や？」

「どうして、いつも私だけ、『マミさん』なんですか？

私だって、おふたりより、年下ですよ！（肉体年齢は）」

マミが口をとんがらせて、そう言う。

「あ？ ああ！ そう言えば、そうや！

こりゃまた失礼。

ただ、なんとなく、そう言うてて、しもつたな。

それがもう、習慣化しとった」

「うー。習慣化って、そんなー」

まだ、不満げなマミ。

「まあ、これからは、直すよう気をつけるわ」

「えっと、それでね、この4人には、

今から、ちょっと練習場に来て欲しいんだけど」

なのはの、この話に、――

「ええっ?!」

「い、今から、ですか?」

「な、何か、もーれつに、いやーな予感が!」

まどか・ほむら・杏子の順に不安が伝わる。

「む――!!」

こうなったら、もう誰が相手でも、やるせないこの気持ちを、魔弾に変えて撃ち込んでやるわよ!!」

マミは、良いストレス解消になりそうだと、やる気満々だが、果たして、……………?

練習場に到着した4人を待っていたのは、ヴォルケンリッターの4人だった。

「げげっ!

シグナムの姐御!

と言う事は、あたしらの、模擬戦の相手は?!

ま、まさか、——まさか?!」

シグナムの悠然と構える姿に、うろたえる杏子。

「その、まさかだ、——と言ったら、どうする? 杏子」

シグナムが、『ニヤリ』と笑う。

「ひー!

ま、負ける! 絶対、負ける!

い、いや、死ぬる!

死んでしまう!

い、いやだー!

やっと、人間に戻れたのに、

何もしないまま、死ぬのは、いやだ——!」

べそをかきながら、みつとも無く、叫ぶ杏子。

「と——言いたい、ところだが、今日のお前達の相手は、我らでは、
無い」

シグナムが、本当の事を言い放つ。

「へ?」

ハトが豆鉄砲をくらったような顔の、杏子。

「その相手チームは、まだ来ていないようだ。

すまないが、しばらく待ってくれ。

そう言えば、——」

シグナムは、まどかの様子がおかしい事に気付いた。

まどかは、ほむらの後ろに隠れ、ザフィーラの方を、ちらちら見ながら、プルプル震えている。

その目には、明らかに恐怖が浮かんでいた。

「やれやれ、鹿目まどかは、まだ——

『ザフィーラ恐怖症』が、治つとらんのか？」

シグナムが、まどか達に尋ねる。

「はい、——まどか軍団が、消滅して、まどかに、その魔力が戻った時に、

彼らの体験した何かの記憶が、まどかの中に、移行したせいだと思いますが、——」

そう答えたのは、ほむらだった。

問題のまどかは、まだ、青い顔で、プルプルと震えており、とても話の出来る様子では、無かった。

「だ、そうだ、——すまないが、ザフィーラ、少し、後ろに下がり、距離をとってやれ」

シグナムは、苦笑しながらも、ザフィーラに指示した。

「む。心得た」

ザフィーラは、不快な顔一つせず、
将（リーダーであるシグナムの事）の指示通りにした。

恐怖心の対象が、自分から離れたので、やっと正気に戻るまどか。

「ご、ごめんなさい。」

どうしても、あの人を見ると、足がすくんで」

まどかは、自分でも理由が分からないらしい。

そっぽを向いているシャマル。

（まあ、あれだけ怖い思いしたら、トラウマが残るわな。

あの戦いの後で、シャマルを問い詰めたら、やっと、

何したか、白状したけど、これは、絶対、公表できへんなー。

いくら殺戮行為を計画しとる敵軍を止める為とは言え、
レイプ未遂って！）

心のなかで、そう思うはやて。

「そう言えば、練習場の、このエリア設定は、初めて見ますね」

ほむらが、周囲を見回しながら、そう言った。

「どうして、綺麗な桜並木？」

マミも、桜の木を見上げる。

「しかも、花見が、出来そうな、満開の桜だぜ」

杏子も、美しい風景にため息をつく。

「これは、私とはやてちゃんが、暮らしていた『日本』の『海鳴市』の公園にある桜を再現したモノなの。

別れと、出会い、それに新しい旅立ちに相応しい花だから」

なのはが、皆に、説明する。

「へへっ、鬼の教導官様も粋な事を」

杏子は、なのはの、そんなところが、好きである。

まどかは、桜の木に触ってみた。

「完全に本物の木の、感触だ。

これ、最初に、話、聞いた時は、びっくりしたよ！

この戦闘エリアに存在する物、全てが、魔力の実体化したモノだなんて」

周囲には、かすかに、花の香りさえ、ただよっていた。

「そうね。――」

ええと、確か、レイヤー建造物って言うんでしたっけ？」

マミが、なのはに尋ねる。

「そう！

弱い魔力弾でも、壊せるけど、手で触れる事も、出来るし、
高速で衝突したら、当然、痛みも有るよ。

隠れてもいいし、射撃魔法で、死角から、撃ち抜くのも有り！」

なのはが、改めて、解説してくれた。

「なるへそー」

軽口を叩きながらも、すでに、いろいろと、
作戦を立てている杏子。

「高性能な、立体映像を併用しているから、余計に本物っぽく見えますね」

ほむらが、遠くに見えている『海鳴市』の町並みを眺めて、呟いた。

皆が、そんな話をしていると、遠くから、可憐な少女2人が、近

づいてきた。

「あ、あれは！

ヴィヴィオちゃん！」

まどかは、2人の少女のうち、1人には見覚えがあった。

「こんにちは、まどかさん！

それに、皆さん、

ご卒業、おめでとunggざいます！」

ヴィヴィオは、元氣良く挨拶しながら、まどか達4人に、花束を手渡す。

その花束の半分は、ヴィヴィオと共にやって来た彼女よりは、少し大人びた少女が、手に抱えていた。

ヴィヴィオは、JS事件の際に、なのはが、保護した少女で、今は、なのはの養子となって、名前も『高町ヴィヴィオ』となっている。

そして、ヴィヴィオは、古代ベルカの聖王と呼ばれた、人物のクローン（遺伝子コピー）体でもある。

スカリエッティの犯罪の道具にされ、生体兵器となって戦わされていた、

ヴィヴィオをなのはは、大苦戦の末に保護したのである。

なのは、とは、血の繋がりの無い子供だが、この2人は、今や、
実の親子にも負けない深い愛情で、結ばれていた。

ヴィヴィオは、少し黄色の強い綺麗なロングの金髪、
そして右の目の瞳は、鮮やかな翠、
左目の瞳は美しい紅のオッドアイ——
今は、動きやすいトレーナーを着ていた。

「紹介します。

私の、親友で、格闘技の練習仲間の、——」

ヴィヴィオが、もう1人の少女を促す。

「は、始めまして。

アインハルト・ストラトスです」

おずおずと、挨拶する少女。

彼女は、ヴィヴィオより身長が若干高め、青紫色の虹彩
（こうさい：瞳の回りにある膜、日本人は通常褐色）異色、
薄い翠のロング・ヘアー。

アインハルトも、ヴィヴィオと同じくトレーナー姿だった。

このアインハルトは、——ヴィヴィオの遺伝子オリジナルである
オリヴィエ聖王女と恋仲であった——霸王イングヴァルトと
言う男性の純血統（直接の子孫）である。

だが、今は、2人とも、――

一生懸命生きているだけの、普通の子供達だった。

「今日は、魔導師の集団戦と言う形での、模擬戦を見学するため、お邪魔致しました」

『ペコリ』と、お辞儀するアインハルト。

「まったく、あいも変わらず、堅苦しい子やなあ。そんな形式ばらんと、楽にしておつたらええねん」

はやてが、苦笑する。

その時、――

「みゃあ――！」

「みゃあ？」

首を傾げる杏子。

見ると、いつの間にか、アインハルトの肩に、小さな生き物が、つかまっている。

「にゃっ？」

その小動物は、――

「ね、ね、ね！」

ねこ——！

ね、ネコだよ！ ほむらちゃん！

思わず叫ぶまどか。

「ネコ！ 確かにネコだわ、まどか！」

ほむらも、なにやら、興奮しているようだ。

「あら、かわいい！」

かわいい動物を見て、マミも顔が緩む。

「い、いや待て。」

こいつ、どうみても、猫って言うより

杏子が、言うように、その生き物は、体の模様からして、猫は、猫でも、何か他の猫科の動物のようだった。

「ああ、この子は、『アスティオン』、——

愛称は『ティオ』、——

古代ベルカのシュトゥラ地方の、——雪豹の子供を、イメージして造られた、

——私のデバイスなんです。

八神司令に、プレゼントしていただきました」

アインハルトが、小さなパートナー『ティオ』の説明をする。

「みゃ——ん!!」

自分の事を説明されているのが、分かるのか、
挨拶するように鳴く『ティオ』。

『ティオ』のかわいらしさに、大興奮する、まどかと、ほむら。

「ミヤーンって、言ったよ、ミヤーンって!」

「ミヤーンって、いったわね、まどか!」

「みゃみゃ?」

「ミヤミヤって、言ったよ、ミヤミヤって!」

「ミヤミヤって、いったわね、まどか!」

「にゃおっ?」

「ニヤオツって、言ったよ、ニヤオツって!」

「ニヤオツって、いったわね、まどか!」

「また、2人のネコネコ・パニックが始まったわね」

マミがため息をつく。

「ネ、ネコネコ・パニックだあ?」

杏子は、マミに意味を尋ねる。

「鹿目さんも、暁美さんも、大のネコ好きでね。」

かわいいネコを見つけると、ご覧の通り、しばらく、パニック状態になるのよ」

マミが、状況を解説した。

「はあ」

マミの説明に、同じくため息をつく杏子。

「確か、昔、2人が一緒に世話をしていた黒猫がいて、その頃から、2人のネコ好きが、始まったと、聞いているわ。」

なんて言う名前のネコだったかしら?

確か、えーっと?」

マミが、そこまで、話した時、――

「『エイミー』!」

「そうそう! 確か『エイミー』って?

ええっ?!」

『エイミィ』——と叫んだのは、高町なのはだった。

こちらに、歩いて来るのは、なのはの知り合いの、女性らしい。

「なのはちゃん、はやてちゃん、久しぶり！」

元気だった？」

エイミィ、と呼ばれた女性が挨拶する。

彼女は、やや短めで茶色の髪の毛、やせ過ぎず、
太ってもいない理想的な体形、黄緑色のカジュアルな
軽装の衣服を着ている、なのは達よりは、
少し上の年齢の女性だった。

「うん！ 今日また、どうして？」

なのはが、エイミィに質問する。

「なのはちゃんや、はやてちゃんが、
こっちに来てるって聞いて、久しぶりに顔を見たくなくて。

それで、その子達が、例の？」

エイミィが、なのはに尋ねる。

「そう、元『魔法少女』の女の子達、——」

「皆さん、始めまして。」

エイミー・ハラウン、と言います。

なのはちゃんや、はやてちゃんとは、長い付き合いで、
ついでに、フェイトの兄「クロノ提督の妻です」

自己紹介する、エイミー。

「ええ?! あ、クロノ提督の、お、奥さん?」

マミの目が点になる。

「ほほー!

なかなかの美人じゃねえか。

あのクロノ提督も、隅に置けねえな?」

杏子も、びつくりだ。

「あはは。

そんなに、褒めても何も出ないわよ」

笑いながら、少し照れているエイミー。

一方、――

ティオは、いわゆる、

『猫が、顔を洗っているしぐさ』をしている。

その、しぐさを見た、まどかは『もう、タマラン』状態だった。

「みゃ?」

「!!!!」

八神司令——この子、^{ディオ}私にもください!

欲しいですー! 猫!

ネーコー!! ね——こ——!!!!」

まどかが、ペットを欲しがる子供みたいに、はやてに縋り付く。

「い、いや。」

欲しい、言われてもな、こつ言うデバイスは、完全に、一品モノやし。

そないな事言われても、——」

困っている、はやて。

まどかと、はやての、そんな、様子を高町なのはの、娘、ヴィヴィオは、

笑いながら、見ている。

そのヴィヴィオの、肩のあたりの空中に、ウサギのヌイグルミにしか見えない物体が、『ふよふよ』と浮いていた。

これが、ヴィヴィオ専用の、インテリジェント・デバイスのクリス、

正式名称セイクリッド・ハートである。

クリスは、アインハルトのデバイス、ティオの方が、皆の（まどか達の）人気を独占しているので心なしか、寂しそうに見える。

もちろん、クリスは、本物のウサギでは無いので、寂しくても、死ぬわけでは無かった。

（実際には、ウサギは、寂しいと死ぬ、と言うのは、単なる迷信である。ウサギは、本来、単独行動を好む習性を持つ動物なのだ）

クリスは、自分の意志を、身振り手振り、などで、表現する事が多いが、

他の多くのデバイスとは異なり、人の言葉を話す事は無い。

元々、そう言う設計なのか、それとも、AI（人工知能）が、成長すると、言語を習得出来るのか、それは、まだ分からなかった。

その時、——近づく人影が、——

「はあっ、はあっ！

み、皆さん、お、遅くなりましたっ！

元、機動六課、フォワード4名、高町なのは一等空尉の命により、模擬戦参加の為、ただ今、到着いたしましたっ！——」

そう発言したのは、ティアナ・ランスター、本局執務官だった。

そして彼女の後から、走ってきたのは、――
スバル・ナカジマ防災士長、今は辺境自然保護隊に所属する、
エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエだった。

「よし！」

皆、そろったね！

――って、そんなに、慌てて走って、来なくても、良かったのに。

ああ、こんな息が、あがってたら。

――しょうがない、今から、

――7分後に、模擬戦を開始します！」

なのはが、宣言する。

「と、言う事は、今来た、元、機動六課メンバーが、――」

そうそうたる、猛者達に、驚くほむら。

「あたしらの、相手って事だなっ！」

全身に、闘志を漲らせる杏子。

きつちり7分後。

練習場の中央に、なのはと、8人の魔導師が、集合していた。

「ルールは、今話した通り。」

各人、相手のバリアーを抜かないように注意！

それでは、全員バリアジャケット装着！」

なのはが、全員に、指示を出した。

「いくよ！ ラファエル！ セーット・ア——ップ！」

「イエス！ マスター！」

まどかの、管理局の制服が弾け飛び、一瞬、彼女の綺麗な裸身があらわになる。

すぐに、衣服の破片は、光になり、その光達は、変形して、新たな衣服へと、姿を変えて、まどかの体を覆う。

まどかの、バリアジャケットは、以前の魔法少女服と、色もデザインも一緒だった。

マリエル技術官の好意で、そう設定してくれたのだ。

ラファエルは、魔法の弓矢タイプの武装に形態変化した。

「ウリエル！ セット・アップ！」

「イエッサー！」

ほむらの声に、反応するウリエル。

ウリエルの会話パターンは、何故か、フェイトのバルディッシュ

に酷似している。

ほむらも、着ていた制服が、吹き飛び彼女の素肌が見える。

しかし、すぐに、バリアジャケットが、装着されるので、彼女の裸体を見る事が出来るのは、超人的に動体視力の良い者だけだ。

ほむらの体は、ある意味、達人の鍛えた日本刀にも似て、自然の創りあげた、芸術品の輝きを放ち——見た者には、生命のエロティシズムを感じさせる。

彼女のバリアジャケットも、以前の魔法少女服と同じ、白と黒を基調にした制服のような衣服だった。

その左腕には、姿を変えたウリエルである『菱形の盾』が装着されている。

『菱形の盾』の中央には、ウリエルのAユニットである、菱形の、紫色の宝石が、輝いていた。

「行くぜっ！ ミカエル！」

「ヘーイ！ ボス！」

杏子が、ペンダントの形をした、自分のデバイスに合図を送る。

杏子の制服が弾け飛び、彼女のスレンダー・ボディが、外気にさらされる。

そして、杏子の体は、あっという間に、以前の魔法少女服と同じ

形態の、
赤いバリアジャケットに包まれた。

その手には、真っ赤な、天使ミカエルの、炎の槍。

「行くわよ！ ガブリエル！」

「ガブガブッ！」

マミが、黄色いカチューシャ型のデバイスに語りかけるが、返事がおかしい。

「なんで、あなたは、
いまだに、ガブガブしか、言わないの？」

ちゃんと、人の言葉をしゃべりなさいっ！」

「ガブリ?! ガブウ?!」

「もう良いわ！ 後で、マリエルさんに見てもらってから！」

今は、——

セツト・アープ！」

「ガブ!!」

制服が弾け飛び！ 4人の中では、一番みごとな
マミのバストがあらわになる。

すぐに、衣服が光となり、——

マミの体を、黄色を基調としたバリアジャケットが覆う。

その手には、ガブリエルが変形した、マスコット銃型の魔導ガンが握られていた。

ティアナ達、元、機動六課メンバー、4人も、バリアジャケット装着を終えている。

「それでは、——チーム戦形式——模擬戦、——スタート——！」

なのはの、号令に、従い、8人は、戦闘態勢に入った。

「なのは！」

模擬戦は、もう開始してるの?！」

練習場を目指して、走って来たのは、フェイトだった。

「フェイトちゃん！」

うん！ もう、始まってるよ！

皆、良い動きしてる！」

模擬戦用の、結界の外部から、——なのはの、指し示す、その先を見たフェイトが見たモノは、——

「いくぜっ！ 真・眩惑魔法ファントム・ストーム！！」
「OK！ ボス！」

9個の魔力光を核にして、9人の杏子が出現。

そして、超音速で、エリオに向かって、空中を、
滑空していく9人の杏子！

9人の杏子は、それぞれが、爆走しながら、二重分身、三重分身！
さらに、四重分身！！

エリオを取り囲む、36人の杏子！！

「噛み砕けっ！

龍のアギト！！

ドラゴン・スクリュー・クラッシャ——！！！！」
「へーイ！ ボス！」

36人の杏子が、横向きの、巨大竜巻と化して、エリオを飲み込
んだ！！

「エリオ？！」

フェイトが、息を呑む。

激しい砂埃が、晴れると、そこには、……………

「くっ！！

あたしの、本体を見破って、しかも――
この攻撃を防ぎきるとは！

やるじゃねえか？！

さすがは、フェイトの教え子ってところだな！」

杏子は、エリオの実力に驚きつつも、彼を素直に褒めた。

2人の持つ槍タイプのデバイスが、ぶつかり合って、
激しく火花を散らしていた。

エリオのバリアジャケットは、基本的に、
管理局の制服に近いデザインで、その上に白い
大きな目のマントにも見える上着を着ている。

エリオは、2年前、杏子達を、支援に来た時より、
さらに身長が伸びて、立派な体格の『青年』になっていた。

彼の体力・体術・魔法技術、どれをとっても、凄腕の戦闘魔導師
である。

――エリオは、キャロと共に、フェイトの養子のような立場であ
る。

そして、彼もまた、ある人間の記憶転写型クローン（遺伝子コピ
ー）であり、
その苦しみと心の痛みを一番理解出来たのは、同じクローン体であ
る、

フェイトだったのだ。――

「杏子さんこそ！」

ボクをここまで、追い詰める事が出来たのは、今までは、フェイトさんや、

なのはさん達、それにヴォルケンリッターと、このチームぐらいのものですよ」

押し合っている、2つの穂先で、衝突する火炎と、電撃！

——エリオが、バックステップで、距離を取り、

「サンダー・ブレイド！」

エリオが、槍型デバイス・ストラダーから、撃ち出した、——
金色の長剣型の魔力弾が、電撃を伴なって、杏子を
ホーミング（自動追尾）する！

「おお?!」

杏子の目が見開かれて、——

最初、8人の魔導師は、一箇所に集まって、集団戦闘をしていた。

だが、桜並木のあちこちで、戦ううちに、一対一の戦いを、
エリアの4カ所で行う形に変化していったのだ。

空飛ぶ竜、『フリードリヒ』に乗る、キャロと、

まどかは、空中戦を行っていた。

キヤロは、まどかと同じくらいの身長で、——そのバリアジャケットは、やや薄めの紫色の上着に白いスカート・薄いピンク色のマントと、とても、かわいい女の子っぽいデザインだ。

キヤロは、地方の召喚部族の出身である。

だが、あまりに強力過ぎる真竜召喚のチカラを恐れた同族の手により、たった一人で旅に出され、——各地を放浪の末に、管理局に保護された。

しかし、彼女自身が、戦いに怯えていた事もあり、竜のコントロールが

うまく出来なかった為、どの部隊から、たらい回しにされた。

そのキヤロを暖かく迎えたのが、フェイトだったのだ。

彼女は、エリオと同様に、フェイトの養子の立場になった。

そのためエリオとは、兄妹のようなモノだが、出会ったのは、機動六課入隊の時である。

「アンジェラ・アロー！」

ホーミング・レイン・シフト！」

「ホーミング・アロー！」

まどかが、魔法の矢を発射する。

その魔法の矢は、高高度で、分裂し、無数の矢が、

マミの声に従って、10台の大型魔銃が彼女の正面に、――
さらに、マスキット銃が、彼女の左右に80丁ずつ出現する。
――そして、

「落ちなさいっ!!」

マミの叫びと共に、大小の魔銃が、連続射撃を始めた。

15秒程で、射撃を停止するマミ。

「はあっ！ はあっ！ はあ！

どう、これだけ、撃ち込めば、――」

息を整えながら、攻撃の成果を確認するマミ。

大きなクレーターだらけの、桜並木。

だが、――

「そう、当たればね、――」

無傷で、背後から現れるティアナ。

「なっ?!」

「ファントムブレイザー!!」

ティアナの銃型デバイスから、撃ち出された、茜色の砲弾が、
マミの体に直撃した。

「きゃああああああっ?!」

反動で、吹っ飛ばされ、桜の木に叩きつけられたマミ。

「ごめんね、——これが、あたしの得意技、
幻術魔法フェイク・シルエツト」

ティアナが、説明したが、——
すでに、バマミには意識が、——なかった。

「はあああっ！」

ストライク・ドライバ——ッ!」

「いやあああああ——っ!」

——ガッギイイイ——ンッ!——

超高速で、跳んで来たスバル・ナカジマの、とび蹴りを、
真正面から、ミドルキック、で迎撃するほむら!

「こ、この人、強いっ?!」

ほむらの格闘戦の強さに舌を巻く、スバル。

スバルは、短い青紫の髪の毛と、グリーンの瞳で、顔だけみると、
元気の良い少年に見えなくもない。

しかし、意外とバストは、大きいので
男性に間違えられる事は無かった。

彼女のバリアジャケットは、ブルーのシャツに、短パンと、
セパレート・タイプの為、腹の部分は、大きく素肌が露出している。

その上から白い短めの上着状のチョッキに、白いスカートのついた
腰のアーマーガードと、格闘戦特化型のスバルに適した、
動きやすい形になっている。

スバルは、その足には、AI（人工知能）内臓の
ローラースケート型デバイス、マツハキヤリバーをはき、
右腕には母親の形見の、装着型アームド・デバイス、
リボルバーナックルを着けていた。

彼女は、昔、臆病者で、消極的な女の子であった。
しかし、姉とともに、管理局勤務の父親に会いに、行った際、
大規模な空港火災に巻き込まれ、死にそうになった時、
偶然出勤していた高町なのはに、救出され、それ以来なのはに憧れ
て、

魔導師の道に進んだのだ。

「で、でも、どうして?！」

事前のデータで確認すると、ほむらさんは、
どちらかと言うと射撃タイプなのに。

なぜ、格闘戦に、こうまで、こだわる?」

疑問を口にするスバル。

「管理局の魔導師になったからには、どっちみち、質量兵器は、基本的には、使えない。」

さらに、言えば、私は、どんな条件でも、勝てる強さを手に入れる必要が有る。

この世界に帰って来たまどかを、守るために！」

良く見ると、ほむらの足は、先の激突で、傷だらけとなり、大量に出血していた。

スバルは、戦闘機人（戦闘用サイボーグ）である。

サイボーグの足を、人間であるほむらが、まともに、蹴ったのだ。

ほむらの足が、ただで、済む筈が無かった。

「以前の私は、射撃武器にたより、筋力も体力も弱かった。

だから、私は、この4カ月間、自分の弱かった部分を鍛えに鍛えた。

いつだって、どこでだって、私の大切な、まどかを、この手で守れるように！

それが、出来なければ、私は、——認めた事になる。

守ってもらってばかりで、——まどかに、何もしてあげられなか

った自分を！

美樹さやかに負けた事を！」

ほむらの全身から、異様な闘気が、立ち昇った。

「う？！」

思わず、気圧されるスバル。

「スバル・ナカジマさん。

あなたは、確かに、強い。

だから、こそ、一番の強者と思われる、あなたを、この私の手で、倒すために、誘い込んだ」

ほむらの、目が異様に光る！

「くっ！ デイバイーン・バスタ——ッ！！」

スバルは、右腕の格闘用デバイス

リボルバー・ナックルから、一撃必倒の砲撃を撃つが、——

「時間流、制御、——タキオン・ドライブッ！」

「タキオン・ドライブ！」

ほむらの、左腕の菱形シールド「ウリエル」の宝石が光ると、ほむらの姿が忽然と消えた。

ほむらの居た場所を通過していく、スバルの、
砲撃魔法ディバイン・バスター。

「き、消えたっ?! どこへ?!」

敵の居場所を捜すスバル。

ほむらは、すでに、スバルの背後に、回り込んでいた。

しかし、超高速で、動くほむらは、戦闘機人の目でも追い切れない。

ほむらは、『魔導師として、獲得した特殊能力^{レア・スキル}』を使い、――

魔力エネルギーを、超光速粒子タキオンに変換し、――
その特性によって、相対的、加速状態を可能としたのだ。

ウリエルは、その持続時間や、エネルギー変換を
サポートしているだけだ。

この状態では、他の人や、機械の動きが、
ゆっくりとした、スローモーションになって見える。

超加速状態のまま、必殺技を発動するほむら。

「タキオン・インパクト!」

超光速粒子タキオンが、物理的な破壊エネルギーへと、
変換されて、ほむらの足の、特殊アーマーへ、充填される。

「ワン! ― ツー! ― スリー!」

ほむらが、ウリエルの安全装置を解除していくと、ウリエルが、解除レベルを伝える。

そして、ほむらは、最後に、ウリエルの

「タキオン・インパクト」発動スイッチを入れる。

「タキオン・インパクト！」

「はああああああ——ッ！！！！！！！」

足のアーマーに、エネルギーの満ちたほむらは、思い切り、強烈な、回し蹴りを、——
制御された、時間流の中で、動きのスローな、——
スバルに、容赦なく、叩き込んだ。

「ぐふっ?!」

見えない相手に、突如、背後から蹴り飛ばされた、スバルは、そのまま、意識を失った。

『魔導師養成訓練』卒業式後の、模擬戦に関するレポート

発案者 高町 なのは

監督責任者 高町 なのは

《 戦闘結果報告 》

「 戦闘時間 30分 」

佐倉杏子 v s . エリオ・モンドリアル

両者、健闘したが、 — 時間切れ、引き分け

鹿目まどか v s . キャロ・ル・ルシエ

両者、決め手に欠け、 — 時間切れ、引き分け

x 巴マミ v s . ティアナ・ランスター

マミは、善戦するも、ティアナの、
フェイク・シルエットに敗れる

o 暁美ほむら v s . スバル・ナカジマ

タキオン・ドライブと、タキオン・インパクトで、
ほむらの、勝利（ほむら、右足を複雑骨折）

《 チーム戦としては、『引き分け』の結果と言える 》

（ 結果の、o x は、まどかサイドを基準とした ）

「ヴィータ、——戦技教導官として、お前は、この模擬戦の内容を、どう思う？」

シグナムが、ヴィータに質問する。

「うーん。

細かい問題点は、いろいろ有るんだけど、——

ほむ・まど組は、わざと、一対一の状況を作ろうとして、それに、ティアナ達が、うまく乗せられて、——そんな流れだったよな。

結果としては、全員よくやった、と思うんだけどなあ？」

ヴィータは、首を捻っていた。

「やはり、そう思うか。しかし、——」

シグナムは、監督責任者であるなのはを、見つめた。

「ああ、問題は、——なのはが、何故、怒っているのかって事だ」

ヴィータの言う通り、あの『高町なのは』は、ご立腹である。

だが、誰にもその理由が、分からなかった。

なのはが、——鹿目まどかに近づいた。

「まどかちゃん。

どうして、あなたは、――」

なのはが、まどかに何か言おうと、した時、――

「納得できねえ――！！！！！！」

杏子の怒鳴り声が聞こえてきた、――

「????」

杏子のあまりに、大きい声に、

なのはも、驚いて、会話を中止してしまった。

「何よ！　あなた、エリオ君に、何か文句でもある訳?!」

その杏子に、逆に噛み付いているのは、ティアナだった。

「あたしは、別に、エリオに文句が、有る訳じゃねえよっ!」

つばを、飛ばしそうな、勢いで、反論する杏子。

「じゃあ、一体何が納得出来ないって、言つのよ?!」

ティアナも、また怒鳴り声で、聞き返す。

「あたしが、文句言いてえのは、あんただ、あんた!!」

「あたし?!」

「そうだ! あたしは、あんたが、
幻術魔法を使うなんて知らなかった!

知ってたら、マミじゃなく、

あたしが、あんたの相手をしたのに!」

杏子は、自分が相手をしてたら、
負ける事は、無かったと、言いたいらしい。

「ナンセンスね」

杏子の言い分を、鼻で笑う、ティアナ。

「ああん?!」

「あなた達は、『魔獣』とか言う、モンスターを
相手にしていたらしいけど、私達、時空管理局の魔導師の
相手は、ほとんどが、犯罪者よ。

汚い手しか、使ってこないような敵が、最初から自分の能力を
教えてくれるなんて実戦である訳ないじゃない!」

正論を杏子にぶつけるティアナ。

「そんな事は、言われなくても、分かってんだよ!」

だが、尚も、主張を曲げない杏子。

「だから、あんたの方が、言ってる事が正しいって事は、あたしにだって、分かるさ！」

けどな、こう言うのは、理屈じゃねえ！

気持ち的に、納得出来ねえって言ってるんだ！」

「じゃあ、どうしろと、言うのよ?!」

「もう一度あたしと、勝負しやがれ！」

「?!」

「もう一度、模擬戦やれって事だ！」

今度は、あたしと、あんたの、一騎打ちでな！」

ファントム 対 フェイク、の戦いつて事さ！」

「……………いいわ。その勝負、受けて立とうじゃないの！」

「ティ、ティアさん？」

その場にいるエリオが驚いた。

（『ティア』は、『ティアナ』の愛称）

「このところ、大した事件がないから、体がなまっていたし、同じタイプの魔法を使う相手との戦いは、あたしも、今まで経験した事がないから、良い機会だと思うわ」

「へえ？ その、ところは、あたしも、同感だぜ」

「……………あなた、ひょっとして、本音は、そっちなんじゃないの？

良く似た魔法の使い手と試合したいって言う、——」

「どうだかな？

なんか、自分でも、どっちが、大事な理由だったか、
分かんなくなっちまったよ」

「変な人ね」

「良く言われるぜ。

それで、試合と言うか、模擬戦は、いつやる？

あたしは、別に今からだって構わないぜ」

「あたしも、大して疲れてないし、——」

2人は、すぐにでも、やりたそうだが、——

「だめよ、——今すぐは、さすがに許可できないわ」

2人に釘を刺すのは、高町なのはだった。

「自分で、気付いていないと思うけど、今は、戦闘終了直後で、
気分が高揚してるから、体の痛みや、疲労感が、感じられない事が

良くあるの。」

実戦形式の模擬戦をやったら、少なくとも一週間は、時間をあけるべきだわ。

なので、模擬戦リベンジは、一番早くても、来週の同じ曜日と言う事。

2人の予定は、どう？」

なのはは、模擬戦をやる事には、許可を出して、2人の予定を尋ねた。

「あたしは、大丈夫です。」

今のところ、大きな事件は、担当していませんから。いつでもやれます」

ティアナが、そう答える。

「あたしも、いつでも良いぜ。」

あ、ただ、寝るところと、食い物は――」

杏子が、大事な事を思い出す。

「それは、心配しなくてもいいの。
ここの、施設を使ってもいいし、何なら、私の家に泊まってもいいわよ」

なのはは、好意で言ったのだが、――

「うへえー！」

い、いえ、ここを使わせてもらえば！」

なのは家の、お世話になるなんて、——なにか、恐ろしい気がする杏子だった。

「では、杏子ちゃんと、ティアナの、模擬戦は、一週間後。場所は、この練習場。

開始時間は、午前9時を予定。

そして、同日、——午後2時頃から、——

まどかさんと、この、私で、一対一の模擬戦を行います！

——見学したい人は、自由参加を認めます。

見学者は、午前8時半には、ここに、集合してください。

模擬戦用の結界を張る関係がありますので、遅刻厳禁。

一応、お昼の食事休憩は、入れるつもりです」

この、なのはの宣言に、皆が、驚いた。

「な、なのは？！」

フェイトも、親友の真意を理解出来ずにいる。

「理由は、言われなくても、分かっているよね？」

まどかちゃん」

まどかを、じっと、見つめるのは。

「はい、……………」

まどかは、ただ、そう答えた。

狐に包まれたような、気分の一同。

だが、かくして、——次の模擬戦の予定は、決定した。

第13章 幻の支配者（前編）

『卒業式』から、一週間は、あっという間に過ぎた。

この一週間、杏子と、まどかは、元、機動六課の本部隊舎だった施設に

寝泊りして、マミと、ほむらも、それに付き合った。

そして、疲労を溜めないように、注意しながらも、杏子と、まどかは、

——ほむらと、マミの協力のもとで、

——体力増強と魔法戦闘の、基礎トレーニングを、続けたのである。

——そして、模擬戦当日の、午前6時、食堂に集合した4人の姿があった。

全員、時空管理局の制服が、意外と、似合っている。

「皆、おはよう！」

少し眠い目をこすりながら、まどかが挨拶する。

「おはよう、まどか」

ほむらも、まどかに挨拶をする。

「よう、まどか！

きのうは、良く眠れたかい？」

杏子が、まどかに尋ねる。

「うん。」

「まあまあかな？」

返事をする、まどか。

「2人とも、今日は大事な模擬戦なんだから、朝食はちゃんと食べないと、駄目よ」

「マミが、2人に、注意する。」

「へいへい！」

さてと、今日の朝食は？」

杏子が、自分の食事分を取りに行く。

「まどかは、ここで待っていて。」

あなたの分も、私が取ってきてあげるから」

ほむらが、まどかに、そう言うが、――

「ううん。」

一緒に取りに行こう、ほむらちゃん」

そう言うて席を立つまどか。

「じゃあ、私は、席を確保しておくから、私の分をお願い出来るかしら」

「マミが、2人に、依頼した。」

「はい！ ちょっと、待っててくださいね」

まどかと、ほむらは、朝食を取りに行った。

この施設は、現在、管理局に就職予定の、新人魔導師の育成・訓練を目的とした総合センターとして使用されており、食堂も、早朝から、かなり混んでいたのである。

食事を始めたものの、この後の模擬戦の話題で、なかなか食の進まない4人。

「あたしの件は、ともかくさ、なんで、まどかが、また模擬戦やらないと
いけないんだ？」

杏子の頭の上に、『？』マークが、7個は浮かんでいる。

「やはり、気付いている？」

ほむらが、まどかに、小声で尋ねた。

「たぶんね。」

なのはさんは、歴戦の勇者だし、

気付いていても、おかしくないよ」

まどかも、ほむらにだけは、はつきり聞こえるような小声で答える。

——ほむらと、まどかが、2人だけにしか、分からない話をして
いた。

当然、杏子と、マミは、面白くない。

「もう、さつきから、何？」

私達にも、分かるように、ちゃんと説明して欲しいわ」
マミが、正直な気持ちを打ち明ける。

「そうだぜ。」

あたしら、は、……………

何なんだろうな?」

杏子が、固まった。

「え?」

マミが、杏子に視線を向ける。

「いや、――

ほむらと、まどかは、間違いなく、友達っつか、親友だろ。

でも、あたしと、マミを入れて、この4人組って、

改めて考えると、一体何なんだろうなって、

今、そんな事を思っちゃってよ」

杏子が、食堂の天井を見つめながら、そんな事を言った。

「バカね、――」

マミが、つぶやく。

「へ?」

杏子が、マミの方を見た。

「そんなの、決まってるじゃない!

友達！　そして、仲間よ！

大切な、ね」

マミが、はつきり言い切った。

「友達・仲間、……」

まどかが、マミの言葉を繰り返す。

「そうか。」

そっぴや、そっぴやな。

………へへっ

それじゃ、今日は、その友達と仲間の名誉のためにも、頑張りますか！

なあ、まどか！」

杏子が、いきなり、まどかに話を振る。

「え？

う、うん、頑張ろうね、杏子ちゃん」

慌てて、返事をするまどか。

「まあ、鹿目さんの、模擬戦は午後の予定だけど」

単なる練習だからと、少々、のん気な、マミ。

「でも、——無理は、しないでね、まどか」

心配な表情のほむら。

「うん、ありがと、ほむらちゃん」

まどかは、笑顔で答える。

「まったく、ほむらは、まどかに対して、少し、過保護過ぎんだよ。まどかだって、あの、なのはさんの、4カ月の特訓に耐えたんだぜ。」

もう少し、自分の親友を、信頼しろってえの。

もぐもぐもぐ」

管理局、特製の大盛りスパゲッティを、頬張りながら、杏子が、ほむらに苦言を呈する。

「それは、分かっているんだけど。」

「……………」

朝食をつつきながらも、まだ、心配しているほむら。

「ああ！　そう言えば、急いで、食べないと！

時間は、待ってくれないわよ」

マミが、大事な事を思い出した。

「私、まだ半分も、食べてないよ」

まどかは、少し食欲がないようだ。

「だ、がら、皆、急いで……食べる、っで。——
もぐもぐもぐもぐもぐもぐ」

スパゲッティを食べ終わる杏子。

——そんな、事をやっている内に、時間は過ぎて、——
模擬戦の開始時間がやって来た。

午前8時45分、練習場の前には、すでに、杏子とティアナ・
監督責任者の高町なのは、それに、見学者達が集まっていた。

ただし、辺境自然保護隊の仕事が忙しく、
時間が取れなかったらしい、エリオ・キャロの姿は、なかった。

ネコみみたいな名前の、某提督の奥様も、

今日は家事が忙しいので、来れないと、連絡あり。

まだ学生であるヴィヴィオと、アインハルトも、
今日は学校があるので、来ていない。

そして、フェイトも、任務で出張中との事だった。

「フェイトは、また例の助っ人探し、ですか？」
ほむらは、友人の、事が気になるようだ。

「うん。今度はちょっと時間が、かかる——かな？」
なのはが、ほむらに、答える。

「本当なんですか、あの噂。
今回の候補者が、自分の自意識を持つ『ロボット戦士』だって？」
ほむらが、最近耳にした噂の真偽を、なのはに質問した。

「本当だよ。すごいパワーと、強い正義感を持ち、それでいて、
あたたかな心、——やさしさも、ちゃんと、有る子だって聞いている」
なのはが、真相を話した。

「そ、そんな感じのロボット戦士？　なんか全然、想像出来ない」
マミの顔に、珍しく『？』マークが浮かぶ。

「まあ本来、戦闘用ではないらしい、から、戦士って言うのは、
こっちの勘違いかも」

なのはが、さらなる、事実を暴露する。

「それで、戦闘の役に立つんでしょうか？」
ほむらは、疑問を持つ。

「卒業式で、まどかちゃんの、答辞に有った通り、チカラだけでも、
想いだけでも、駄目なんだよ。

実際に、そのロボット君に会ってみたいと、何も分らないと、
思うよ」

なのはは、自分の考えを、ただ説明した。

「……………」

何かじっと、考えているほむら。

「さあ、そろそろ時間だ。」

見学者は、もう少し後ろに、下がろうね。

ティアナと、杏子ちゃんは、バリアジャケット装着！」

全員に指示を出す、なのは。

今日の練習場の、エリア設定は、どこかの異世界の荒野だった。

岩がごろごろしていて、丘や山もあり、遠くには、湖も見える。

「セット・アップ！」

先に、準備をすませたのは、ティアナだった。

ティアナの髪の毛は、綺麗な茜色のロング・ヘア。

瞳は、スカイブルー。

スタイル抜群であり、そのバストは、スバルよりでかい！

ティアナのバリアジャケットは、管理局の制服のような、雰囲気がある。

全体が黒い短めのワンピースは、胸元と、スカート下部を赤いアクセントが彩る。白い上着状のチョッキ部分と、

同じく白い腰カバーの組み合わせは、かなり動きやすい印象がある。

「絶対、勝つぞ！ ミカエル！」

「ユー キャン メイク イット！」

（あなたなら、やれます！）

相棒と、短い会話を終えた杏子も、戦う準備をする。

「セーット・アアップ！」

「レッツ・ゴー！」

杏子の制服が、一度分解して、その綺麗な裸身が、外気に触れる。

そして、粉々になった衣服が再構成されて、――

杏子は、以前の魔法少女服と同じデザインの赤いバリアジャケットに身を包まれた。

「それじゃ、2人とも準備は良い？」

最終確認をするのは。

「いつでも、どうぞ！」

ティアナが答える。

「いけるぜ」

杏子も、返事をした。

「では、模擬戦、――開始！」

――なのはの宣言と、同時に、無造作に、ティアナ、目がけて、

突進していく杏子。

「クロスミラージュ！」

シュート・バレット！」

「ファイヤー！」

ティアナは、2丁の、クロスミラージュ（ティアナ専用の銃型デバイス）

を手に持ち、射撃魔法を連射する。

この、ティアナの射撃を、ギリギリで、かわしながら、接近していく杏子。

——いきなりの、格闘戦。——杏子の、下段回り蹴り！

——それを、小さなジャンプで、よけて、

——バックステップして、後ろに下がるティアナ。

——ティアナは、クロスミラージュを、接近戦用のダガーモード（日本古来の、十手と言う武器を、イメージさせる短剣型の魔力刀）2本に変形させると、

——その武器を両手に持ち、杏子に斬りかかった！

杏子も槍の、高速突きを繰り返して応戦。

しかし、ティアナのダガーに、全て防がれる。

——杏子は、一度後ろに、下がってから、槍を構えて、突進！

——杏子の槍に貫かれるティアナ！

——しかし、そのティアナの体が、崩れて消える！

それは、ティアナのフェイク・シルエットによる幻術だった。

——本体のティアナを感知して、回し蹴りで、ふっ飛ばす、杏子！

——ふっ飛ばされながら、ティアナは、再び、

クロスミラージュを銃に戻して、連射！ 連射！

——この、ティアナの銃弾をよけて、上空へ高く上昇していく杏子！

ティアナは、腰に装着した高機動ブースターで、高くジャンプして、接近しながら、杏子を狙って大きな魔力弾を放つ。

——槍で、この弾を弾き、連結槍で、ティアナを地面に叩き落とす杏子！

「ぐっ！」

なんとか、着地するティアナ。

「はあああああ！」

上空から、急降下して、『斬りかかる』杏子！！

ティアナに、槍の先が、刺さって、——

だが、そのティアナも、フェイク 〃 幻術魔法によるニセモノだった。

背後にいるティアナの方を向く、杏子。

「へへっ！」

楽しそうな、杏子。

「なかなか、やるじゃない！」

杏子を褒めるティアナ。

「まだまだ、これから、——だぜ！」

「フル・パワーで、来る?!」

「真・眩惑魔法ファントム・ストーム!!」

10個の魔力光を核にして、10人の杏子が現れた。

そして、10人の杏子は、高速で、ティアナに向かって、猛突進していく。

突進しながら、五重分身する、それぞれの杏子。

50人の杏子が、ティアナを包囲した。

「くらえっ！」

ドラゴン・スクリュー・クラッシャ——!!!」

杏子達は、竜巻のような、回転スピン状態で、ティアナに突っ込んだ！

砂煙が、おさまると、——そこに、倒れているティアナ。

しかし、そのティアナの体は、崩れて消えてしまう。

「くそっ！ また、フェイクかよっ！ ぐっ？！」

もがく杏子。彼女の体は、捕縛魔法の光るロープでグルグル巻きにされていた。

「少し、——頭、冷やそうか？」

死角から、現れて、ティアナは、微笑む。

「よく、見てなさい！」

クロスミラージュ！」

「スタンバイ！」

射撃魔法をチャージするティアナ。

「ティアナさん——？！！」

まどか、絶叫。

「クロスファイア・フルバーストッ！！」

ティアナのクロスミラージュから、発射された数十発の射撃魔法は、

螺旋型に回転しながら、杏子を襲う！

「やべえ！」

「ラウンド・シールド！」

ミカエルのサポートで、ミッド式防御シールドを張る杏子。

——だが、射撃の威力で、シールドごと、ぶっ飛ばされた！

「うあああああああ！」

縛られているせいか、かなり遠くまですっ飛んで行く杏子。

「ぐっ！」

大きな岩に体が、激突して、杏子は、ようやく止まった。

「杏子ちゃん、無事かなー？」

杏子の身を案ずる、まどか。

「大丈夫よ。」

杏子は、まだ、本気を出していないから

ほむらが、まどかを、安心させようと、そう答える。

「本気を？」

まどかが、ほむらを振り返る。

「ええ。」

杏子は、まだ切り札を出していないわ

ほむらは、事も無げに、そう言う。

「切り札って？」

マミも、ほむらに視線を向けた。

「見てれば、分かるわ。」

そろそろ杏子は、それを使うはず」
ほむらの言葉に、全員が静かになる。

ふらついているが、それでも立ちあがる杏子。

「へえ？」

なかなか、タフじゃない」

杏子の体力と根性に、驚くティアナ。

「へへへっ！

褒めてくれて、ありがとよ！

そんじゃ、……………」

……………」 四神旋風陣！」

杏子の姿が、4人に見える。

そして、高速接近した4人の、杏子は、ティアナの周りを、すごいスピードで、ぐるぐると、回転し始める。

「な、なんの、つもり？」

訝しげな顔をしているティアナ。

さらに、4人の杏子の、スピードが、上がり、まるで、ティアナの、

の、周りには、赤いドーナツが、出来たようである。

「なんや、主人公の周りを、回るトラが、出てくる、昔話みたいやな」

はやてが、そんな事を言う。

「ああ、最後に、トラが、なぜか、バターになって、それを、ホットケーキにつけておいしく食べると言う?。」
マミも、その話を知っているらしい。

「なんだっけ、その話?。」
首をかしげる、まどか。

しかし、もちろん、昔話?のトラとは、違って、杏子がバターになるはずがなかった。

さらに、杏子のスピードが上がる!

すでに、普通の人間には、姿や動きが見えないぐらいまで、加速していた。

「さすがに、スピードは、たいしたものね……」

自分の、周りの杏子を見てそう言うティアナ。

「だけど……」

「スクランブル・イレイザー!」

4人の杏子は、カーブを描きながら、中心に、いるティアナに突っ込む!

ティアナを、4本の槍が、突き刺した、ように、見えたが、そのティアナは、やはり『幻術魔法』によるシルエットだったのだ。

「単純なのよ！」

あんたはっ！！

ファントムブレイザー！！！！」

死角にいたティアナの銃型デバイスから、撃ち出された、茜色の砲弾が、本体の、杏子の体に……………

——直撃したように、見えた。

だが、ティアナの、砲弾は、杏子の体をすり抜けてしまう。

その、杏子の体は、透明になり、消え去った。

「後ろ?!」

ティアナは、背後にいた、本物の杏子を見た。

「なるほどね。」

あんたも、あたしと、同じことが出来る」

ティアナは、そう言うが、——

「全部、同じと言うわけでもないぜ」

「?!」

「実は、さっきの技は、いわゆる、ウォーミング・アップ、練習みたいなものさ。」

本番は、これからなんだよ」

「なんですって?」

「……なんか悪役っぽい技なんで、こいつを、使うのは、イヤだったんだが、――」

あんたが、悪いんだぜ!

あたしを、本気にさせたから!!--」

杏子の目が、『ギリリ』と光る。

「う?!--」

杏子のプレッシャーに気圧されるティアナ。

「ファントム・ワールド!!--」

杏子の声とともに、再び、彼女の体が4つに増えた。

しかも、4人の杏子は、何故か、全員が、体操服姿だった。

――白シャツに、伝説の『ちようちん・ブルマー』!

紺色のブルマをはいている4人の杏子が、ティアナを中心に、丸く陣を描く。

「な、何をやる気なの?!」

ティアナは、警戒するが、技の内容が、見当付かない。

すると、――

「いっくわよ――!」

やけに、明るい平和な声を出す、杏子の1人。

見ると、なにやら、赤いボールを手に、持っている。

「そーれっ!」 「レシープ!」 「トス!」

杏子達は、なんだか楽しそうに、その赤いボールをバレーボールの要領で、次々にパスしていく。

そして、最後に、――

「アタ――クッ!」

他の杏子が、高く跳ね上げた、――赤いボールを、最後の杏子が、ジャンプして、手で叩き落とし、――ティアナの方へ、弾き飛ばした!

「?!」

ティアナは、一瞬、躊躇した。

赤いボールの正体が分からなかったからだ。

とっさに、ボールをかわすティアナ。

しかし、――

―― パンツ！！――

「きゃ?!」

空中で、赤いボールが破裂し、そこに生じた、強い赤色の光が、ティアナを包みこむ。

―― そして――

―― ガバツ！――

跳ね起きる、ティアナ。

「こ、ここは、どこ?!」

私は、誰?!

―― って、あたしは、ティアナ・ランスターに、決まってるじゃない!

しっかり、しなさい、あたし!

あたしは、……………

あたし？

そうだ！

あたしは、模擬戦をやつて、その相手は、佐倉杏子！

それで、……………ここは、つて？

ええええええ——ッ？！」

ティアナは、自分の目が、信じられなかった。

——と言うより、自分の五感が捉える全てが、信じられなかった。

「ど、どこよ、ここ——ッ？！」

ティアナが、現在いるのは、猛吹雪が荒れ狂う、雪原の様な所だった。

「さ、寒いっ？！ど、どうなっているの？」

ティアナは、叫びながらも、周囲を、見回してみた。

吹雪によって、見通しが、すごく悪いが、遠くには、かすかな輪郭から、

雪山が有るように、思える。

周囲には、雪が、積もつて、真っ白になった、森林が広がってい

た。

「お、落ち着いて！

落ち着くのよ、ティアナ！」

ティアナは、自分に言い聞かせるように、大声を出す。

「今の今まで、あたしは、ミッドチルダにいた。
そして、この景色。」

さらに、模擬戦の相手、佐倉杏子は、
眩惑魔法と幻覚魔法の使い手だった！

と、言う事は、——こ、これは！

し、しまったぁ——！」

自分が、完全に、敵の術中に落ちている事に気付いた、ティアナ
は、悔しがる。

「杏子？ 杏子！ どこにいるの？ 出てきなさい！」

だが、ティアナの言葉に、返事はなかった。

「うかつ、だった。」

あの赤いボール、——あれが、幻覚魔法のいわば、
発動キーだったに違いない。

いえ、もしかすると、杏子が、変な恰好で、
分身した時から、もう、幻覚魔法を、発動していたのかも？

しかし、これは、――

この世界、全てが、魔法による幻、
『ファントム』なの？」

ティアナは、驚いていた。

杏子の魔法は、自分の使う、『幻術魔法』に
良く似た魔法だろうと、漠然とそう思っていた。

しかし、――

「あたしの『フェイク・シルエット』は、人間の姿や、車両サイズ
までの
大きさの、物体の、幻影を、魔法で作り出し、それを本物のように、
動かして錯覚させる魔法。

だけど、杏子のこれは、魔法の質が、根本的に違う！

恐らく、対象者の五感に直接干渉して、幻覚を引き起こす術なん
だわ！」

相手の、能力を推測するティアナ。

だが、それが分かってても、杏子の魔法を、打ち破る方法が、分か
らなければ、
どうしようもない。

「と、とにかく、動かないと！」

相手の居場所も分からないままで、止まっていたら、攻撃される
！」

そう、言っ、吹雪の中を、歩き出す、ティアナ。

しかし、一歩、歩くごとに足が、深い雪の中に、沈み込む。

足を上げて、前に進めば、進むほど、足に雪がくっついて重くなる。
る。

そして、靴の中に入り込んだ雪が、ティアナの体温で解けて、水
となり、
靴の内側を、ぐっしょりと、濡らす。

その、水が、また凍り付いて、氷となり、足にへばりつく。

ティアナは、体の筋肉が寒さで痛くなり、
段々と足先の感覚が無くなっていくのを感じた。

もう、何分歩いただろう？

「誰か、——誰か、いないの?!」

大きな声で叫ぶティアナ。

すると、——

「ウ——ッ」

なにか、獣のような、うなり声が、聞こえた。

「？ 何？ 何かいる？！」

クロスミラージュを手にして、警戒するティアナ。

だが、さらに、強くなる吹雪が、ティアナの視界を遮る。

風は、冷たく、身を切るような寒さ。

この体が、感じる全てが、幻覚とは、いまだに、信じられなかった。

口を開くと、冷たい雪が口の中に飛び込んで来る！

大体、ティアナの装着しているバリアジャケットは、熱さも寒さも、

その保護バリアーで、遮断してくれるはずなのだ。

それなのに、耐えられない程の寒さを感じるとは、やはり五感が、魔法で狂わされているとしか、思えなかった。

「な、何も、見えない！

ク、クロスミラージュ？」

ティアナは、相棒のデバイスに声をかけるが、彼のAI（人工知能）は、
だんまりを続けて、何も言ってはくれない。

「本当は、反応しているのに、あたしの感覚が、狂わされているの？ それとも？」

ティアナが、クロスミラージュの機能チェックをしようかと、考えた、その時、――

「ウ・ウ――ッ!!」

「きゃあああああああ?!!」

樹氷の影から飛び出した、伝説の『雪男』にも似た、真っ白な、毛むくじゃらの、――人型の怪物が、ティアナに襲い掛かった!!

「グオオオオウ!!」

「ぐっ!! うっ、……」

怪物は、ティアナの首を両手で締め上げ、物凄いチカラをこめた。徐々に、ティアナの体が、持ち上げられ、その両足が、宙に浮く。

じたばたと、もがき、怪物の腕を、足で蹴り上げるティアナ。

だが、怪物の手は、緩むどころか、さらに、ティアナの喉に食い込む!

「うっ。は、放して! ぐっうっうっう!!」

話して、分かるような、相手では無いだろうが、ティアナは、思わず、そう言っていた。

「は、放して、くれないのなら！」

ティアナは、クロスミラージュの銃口を、なんとか、毛だらけの怪物の胸に、

向けて、その引き金を、――

だが、怪物に、さらに強いチカラで喉を絞められて、ティアナの意識は、――そこで、闇に飲み込まれてしまった。

第14章 幻の支配者（後編）

「よ、よかった、——暖かい？」

いえ。

むしろ、——

アツイ！」

再び、目を開けたティアナが、見たものは、——

熱帯雨林のジャングル。

『地球』という惑星の、『アマゾン川』流域のうつそうとした、ジャングルのような、森林地帯だった。

「こんどは、暑さ？！」

ここは？」

ティアナが、辺りを確認すると、旅客機のような、飛行機の残骸らしき、

モノがあちこちに散乱しているのが、見える。

旅行中に、乗っていた飛行機が、運悪く『地球の南米のジャングル地帯』に墜落した、という、シチュエーション（舞台設定）らしい。

「スバルじゃあるまいし、センスないわね、杏子」

悪口を言えば、リアクション（反応）が有るかと、思ったが、雪原と、同様、ティアナに答える声はなかった。

「さーて、また、移動してみましようか？

ここで、雪男は、ないだろうし、――」

どこぞの、探検隊のように、さっさと歩きだす、ティアナ。

――やっかいな、肉食性のアリの群れ。

――アナコンダと言う、チカラの強い大蛇に、毒蛇。

――その牙に、恐ろしい細菌やウィルスのいる吸血コウモリ。

――言語の通じそうにない、危険な目をした原住民。

その他もろもろを、うまく避けながら、ジャングルを進むティアナ。

「そ、それにしても……暑い！

暑すぎるっ！

サウナどころじゃないわ！

……そ、そう言えば、

もう、5時間は……歩いているような、気がする。

模擬戦の戦闘時間は、1時間と言うルールのハズ。

杏子が、まだ、この魔法を解かないと、言う事は、

あたしの、時間感覚も、狂わされていて、

時間は、あまり進んでいないと、言う事なのかも」

しかし、――

「にしても、歩きにくい場所だわ。

地面は、ドロだらけ。

しかも、軟らかいコケと、植物の根が、多いから、
いざと言う時、素早く走れそうにないわね。

どこから、何が出てくるか、分からないのに」

一度、立ち止まり、周囲を見回すティアナ。

「大量の植物の葉が、太陽の光を遮っているから日中でも、
この森の中は、暗いままなのね。

もっとも、前の吹雪よりは、まだ視界は、良いけれど」

その時――

「グルグルッ――」

どこからか、獣のうなり声が、してきた。

「また、怪物？ クロスミラージュ！」

相棒のデバイスは、まだ、無言のままだった。

銃の形の彼を、握り締めて、耳を澄ますティアナ。

「うーん。

クロスミラージュの状態が不明だし、撃つと、魔力がもつたいないけど、

撃てるかどうかは、確認しておきたいし」

ティアナは、そう言って、クロスミラージュを地面に向けて、――

「モード・非物理破壊――スタン・ショット！」

クロスミラージュのトリガーを引き絞るティアナ。

だが、相棒のデバイスは、魔力弾を撃ってくれない。

「発射されない？」

これじゃ、危険なモノから、身を守れない！」

ティアナが、落胆していると、――

「グルルルオオ――ッ！！！！！」

大木の後ろから、大型の猫科の動物が、ティアナに向かって突進

してきた！

「あたしは、おいしくないわよー!!」

脱兎のごとく、逃げ出す、ティアナ。

追ってくるのは、ピューマと呼ばれる猫科の、猛獣らしい。

ティアナは、うまく、ジャングルを斜めに、
突っ切って、獣の追跡を、――

「わっ?!」

走っているうちに、川に接近していたティアナは、崖の先に、
追い詰められてしまった。

「グルルルッ」

ティアナに迫ってくるピューマ。

「こうなったら、一か八か!」

言うなり、崖の下の川に、飛び込むティアナ。

幸い、ピューマは、川には、入ってこない。

「た、助かった？」

.....

ひゃあっ?!」

ティアナの足に、『ぬるっ』とした何か、触れてすぐに、離れていった。

「な、何?

何か、水の中にいる?!

.....

ひ?!」

正体不明の『魚』が、ティアナの下半身に、群がり、なんと、彼女の下着を食い破ろうと、していた。

「さ、魚が?!

な、何なのよ?!

こいつら?」

ティアナは、あわてて、川から出ようとしたが、足元がぬるぬるしており、なかなか、移動出来ない。

水の流れも結構速く、泳ぐ事も難しかった。

そこで、問題の『魚』を追い払おうと、したが、数が多く、一匹、追い払っても、他のヤツが、すぐに群がる。

「くっ！ このー！

クロスミラージュ！ モード・ツー！」

モード・ツーとは、格闘戦用のダガー・モードである。

しかし、――

「ダガー・モードへの変形も出来ない？！

こ、これじゃ、完全に、お手上げだわ！

きゃあっ！！

パ、パンティを、やぶかないでー！！」

知らない人が多いだろうが、『地球のアマゾン川』には、

動物の体の『穴』から、その体内に侵入して、内臓を食いまくり、しまいには、食い殺してしまう、恐ろしい、『ヤツメウナギの一種』が、

生息しているのだ。

（狙った動物に穴が見つからないと、むりやり皮膚を食い破る）

そのため、この『魚』が多い、『地球のアマゾン川』の地域にくらしている原住民の女性は、この『魚』の攻撃から、身を守るために、『貞操帯』のような、頑丈な木製の下着をはいているのである。

以前、この『魚』が多く生息している川の水域で、

大勢の観光客を乗せた、客船が、転覆事故を起こした事があった。

すぐに、救助隊が、現地に向かったが、生存者はおるか、『人間の体の一部』さえ、発見出来なかったのである。

（南米の現地では、この『魚』は、その性質から、『ピラニア』以上に

危険な魚として、恐れられている。外見は、ウナギと言うより、ナマズに近い）

「ひ?!

や、やめて!

何するのよ!」

『魚達』は、ティアナの下着を破ると、彼女の『下半身の2つの穴』から、体内に侵入するために、自分達の頭を、その『穴』に突っ込もうとしていた!

「きやあああああああああ!

や、やめて!

い、いやー!

やだあ!

や、やめて、——！！！！！！！！」

だが、物言わぬ、『魚達』が、彼女の言う事を、
聞いてくれるはずも、なく、——

——ぐぐぐぐぐつ！——

「ひい——ッ——！」

ティアナの叫び声が、ジャングルに木霊した瞬間、世界は暗転した。

「どうなつとるんや、一体？

もう、かれこれ、20分は、過ぎとるで！」

はやてが、模擬戦用の結界の中を見て、首を捻る。

戦闘エリアの荒野の真ん中で、失神して倒れているらしい
ティアナの近くで、杏子が、座り込み、目をつぶっている。

「一対一の、個人戦だから、戦闘タイムは、
1時間と設定してあるし、もう少し様子を見るよ。

でも、このまま、後10分、動きが無かったら、
ドクター・ストップも、考えるかな？」

状況を、静観しているのはが、答える。

「その場合、勝敗の判定は、どうなるんや？」
再度、はやてが、尋ねる。

「ティアナは、意識が無いみたいだし、逆に杏子ちゃんは、目をつぶってるだけで、ちゃんと意識がある。」

従って、このままなら、杏子ちゃんの勝ちだね」
なのはは、事も無げに、そう答える。

「ティア！ どうしちゃったの？ ティアー？！」

（『ティア』は、『ティアナ』の愛称）

結界の外で、親友のスバルが、心配して
大声を出す、——ティアナは、「ぴくり」とも動かない。

スバルの見つめるティアナの腕には、大きな傷が有り、
そこから、出血していた。

—— 一方、

「ティアナさんに、何が起こったのかな？」

杏子ちゃんは、一体、何を？

それに、ティアナさんの、あの、腕の傷、——

さっきのは、一体？」

まどかの、指摘した通り、そこにいる全員が、

不可解な現象を目撃していた。

——ティアナの腕の傷は、杏子との直接戦闘によって出来たモノでは無かったのだ。

その後、——赤い光が、輝いて、ティアナが失神した後で、ひとりでに、出来た傷である。

まるで、『目に見えない何か』に、傷つけられた様に、——

「あれが、杏子の、切り札よ。」

たぶんティアナさんは、悪夢か、良い夢か、そのどちらかを、見せられている。

心だけが、まったく別の世界に、閉じ込められている、と言って
もいいわ」

ほむらが、分かりやすく、解説する。

「あ、あれが佐倉さんの、——

本当のチカラ、——」

マミも、驚嘆している。

「すごいんだろうけど、何をしているのか、他の人からは全然分からない技だね。」

後で何されたか、聞くのは、なんか、怖いね」

まどかの、言う通り、外からは、
2人とも、すやすや、寝ているようにも、見えた。

しかし、2人の意識の中では、――

「ランスターさん！　ランスターさん、ってば！」

誰かが、ティアナの名を呼ぶ。

「ううーん。

い、いやだー！

『初めて』を、変な魚に奪われるのなんか、いやだあ――！
「！」

寝言を言っているティアナ。

「何、エロい夢見て、うなされてるかな、この人は？！

ええかげんに、おつきろー！！」

大声を出した、誰かが、ティアナの、口と、鼻の穴を、手で塞ぐ！

「ふ、ふがふが、――ふがー！！

もがぁ――！！！！！！」

誰かの、手を振りほどく、ティアナ。

「な、何するのよ、スバル！」

あたしを殺す気なの？！」

真っ赤な顔で、怒るティアナ。

しかし、――

「誰なのよ、スバルって？」

もしかして、ティアナの知り合いの外人さん？」

そう聞くのは、ティアナの目の前にいる、短いブルーの髪の、知らない女の子。

「え？ あなたは、一体？」

目の前の『制服を着た中学生』に質問するティアナ。

「あなたは一体って！」

1ヶ月前に、自己紹介したでしょうが！

あたしは、美樹さやか！

あんたの、クラスメート！

この、見滝原中学校に、転校してきて、もう1カ月経つんだから、いい加減、憶えてよ！

留学生のティアナ・ランスターさん！」

『美樹さやか』は、怒った口調でまくし立てたが、顔は、笑っている。

何故か、自分の無二の親友に、良く似た笑顔だと、ティアナには、感じられた。

しかし、今は、そんな事は、問題ではない。

「中学校つて、ええええ?!」

よく見ると、ここは、学校らしき、教育機関の施設内で、自分も、周りの生徒も、学校の制服らしい服装をしている。

「こ、これは?!」

あ?!

か、鹿目まどかさん?!」

ティアナは、頭が混乱している、さなか、見た事のある顔を見つけて、

名前を呼んだ。

「はい。

なんですか？

ランスターさん？」

そう、答える、まどか。

「あ、あの、あたし達、ミッドチルダにいたよね！

それで、模擬戦の、真っ最中だったよね！」

まどかの腕をつかみ、彼女をぶんぶんと、前後に揺り動かしながら、叫ぶティアナ。

「ふえええええ？！

ちょ、ちよつと、落ち着いて！

ランスターさん！

まったく、訳が分からないよ！

によわー！！！」

目を回しながら、答えるまどか。

「あの一、2人とも！

もう、早乙女先生来たから！

漫才は、また、あとでっ！」

さやかが、2人に、注意を促がす。

「あ、あうー」

ようやく、まどかを解放するティアナ。

（こ、これも、全部、幻覚？）

（一体いつまで、続くのよ？）

ティアナは、いい加減、頭が痛くなってきた。

すると、――

「あら？

ティアナ・ランスターさん。

その腕の怪我！

どうしたんですか？」

担任の先生らしき女性が、ティアナに尋ねる。

「え？」

ティアナが、自分の腕を見ると、かなり大きな切り傷がある。

（これは、ジャングルで、獣から、逃げる時に、木の枝に引っ掛けて、

切った時の、怪我だ。

でも、本当に痛みを感じる？ どうして？

（まさか？）

ティアナの顔色が変わる。

人間は、暗示によって、体に大きな変化が、生じる場合がある。

たとえば、被験者を、深い催眠状態にしておいて、『今、八ちに刺された』

と言う暗示を与えてやる。

すると、被験者の腕には、実際に八ちに刺されたような、腫れや、炎症が起きる事が、報告されている。

もちろん、これには、個人差があり、人によって

『被暗示性』（暗示に対しての、かかりやすさ）

が違うので、全ての人にこのような、

反応が起きる訳ではない。

また、催眠をかけられた状態でも、本人の『自我』が活動しているので、その意志や倫理に反して、

『ドロボウをしてこい』とか『人を殺して来い』などの命令的な暗示には、従わない。

（『いつそ、ドロボウしちゃおうか』とか、

元から、考えている人は、『例外』である Ⅱ

実際、事件が有った）

だが、『例外』は、存在する。

本人の『自我』が、心を守っているのなら、

——その『自我』の働きを弱めるか、

——その『自我』そのものを、『破壊』してしまえば、良い。

——これが、いわゆる、——悪い意味での、

『マインド・コントロール』である。

分かりやすい例では、酒を飲み、『自我』の働きが弱くなった人物が、

とんでもない行動をしてまった、と言う事であり、これが時には、暴力事件や性犯罪などを引き起こす。

悪質な、新興宗教の団体などでは、対象者を長時間、監禁して、
——効果的な宣伝ビデオを見させ続けたり、説教し続けたりして、
——精神的に疲労させて、——

『自我』の働きを弱めておいて、催眠暗示をかけ、『洗脳』するのである。

そして、『自我』そのものを、『破壊』する具体例として、強力な薬物を使う事が、考えられる。

『地球』という惑星の、国家の秘密組織では、薬物を利用した『マインド・コントロール』が、研究され、実際に、非合法な行為を、

一般人にさせるのに、使われたと言う情報が存在する。

また、薬物以外にも、『自我』を弱めたり、コントロールするモノがある。

その1つが、テレパシーと呼ばれるいわゆる『超能力』のたぐいである。

旧ロシア時代、つまり今のロシアが、まだソビエト連邦だった時、ソビエトの権力者スターリンに認められた超能力者に、
ヴォルフ・メッシングと言う人物がいた。

（彼の名前を、ウルフと表記している本や資料があるが、ウルフは、英語読み）

彼は、強力なテレパシー暗示によって、他人の五感を操り、自分を別の人間に見せたり、単なる紙切れを、大金に換金可能な小切手に

見せる事も、出来た、と言う記録が残っている。

（前述の2つの例は、実際に行われた、スターリンによる能力テストである。

このテストをクリアした、ヴォルフは、スターリンによって、——国家にとって、大切な人物だと、認められ、ソ連領内なら、どこでも行ける許可証をもらった、と言う資料が存在する）

そして、『超能力』以外の、もうひとつが『魔法のチカラ』である。

ティアナも、強い催眠状態の中で、『私は、怪我をした』と言う暗示を受け、

彼女の体が反応したのだ、とすれば、——

「この世界で、もっと、
ひどい怪我をしたら？」

いえ、もしも、死んだりしたら？」

ティアナは、最悪の結果をイメージして、身震いした。

しかし、これは、あくまで、模擬戦である。

あの佐倉杏子が、そこまでするだろうか。

そんな事をティアナが、考えていると、――

「ランスターさん？」

腕の怪我も手当てしないといけないし、
なんだか、顔色も悪いわよ。

保健室に行つてらっしゃい！」

担任の、早乙女先生が、そうティアナに言ってくれた。

「あ、はい。

行つて来ます」

席を立つティアナ。

「あ。

私、保健係だから、一緒に行きます」

そう言って、同じく席を立つ『鹿目まどか』。

「いいわよ、鹿目さん。」

あたし、1人で行けるから」

そう言って、すばやく、生徒手帳で、保健室の位置を確認するティアナ。

「大丈夫？」

ランスターさん？」

心配そうな、まどか。

「ええ。」

ちよつと1人に、なりたいから」

そう行つて、教室を出るティアナ。

「では、——今日は、皆さんに大事なお話があります。
心して聞くように！」

ハムエッグに、かけるのは、——」

ティアナは、早乙女先生の、良く分からないお話を、
背中に浴びながら、廊下を急ぐ。

（対策を練るにも、1人にならないと、落ち着いて、考えられない
わ。

幸い、こう言う状況なら、怪物は、ともかく、
猛獣とか、怪魚は、ないでしょ）

そう考えながら、保健室へと、向かうティアナ。

そして、保健室のドアを開けると、――

「よう!」

「?!」

そこには、――体長20センチぐらいの、小さな『佐倉 杏子』がいた。

何故か、赤いバニーガールの服を着て、保険医用の机の上に立って、腕組みをしている。

「杏子?!」

「だいぶ、まいってるみてえだな?」

「この!」

制服の内側ポケットから、カード形態のクロスミラージュを抜き、すばやく銃タイプに変形させて、チビ杏子の額に突きつける、ティアナ。

「無駄だ、無駄無駄!」

前の世界でも、撃てなかっただろ?

それに、この姿は、単なる虚像だよ」

眼前から、ティアナの銃口をどかして、偉そうに、胸をそらす、チビ杏子。

「それで——どうよ、ティアナ。」

「この世界は？」

「なんなのよ、これは？！」

「これが、あたしの世界、——ファントム・ワールドさ」

「……まさかと、思ったけど、やはり、あんたが、この世界を、魔法で創ったって訳ね。」

眩惑なのか、幻覚なのかは、分からないけど、対象者の五感を支配する、魔法能力」

「」名答！

それで、——どうするよ？」

「『』どうする『』って、何を？」

「あんたが、『参りました』って、言っ、って、負けを認めるんなら、この魔法を解くぜ。」

どうする？」

「お断りよ」

「へえ？」

「なのはさんは、いつも、言ってた。

これさえ有れば、絶対無敵と言う、完全な戦法など、有り得ない。
必ず、攻略法は、存在するってね！」

「ほほう！」

おもしれえ！

この、杏子様の『ファントム・ワールド』！

破れるもんなら、破ってみな！」

「言われなくても！」

「とは、言え、『悪夢』ばかりでも、つまんねえな」

「え？」

「このまま、現在の状況を進めて、あたし達の『魔法少女の物語』
を、

あんたに見せてやってもいいんだけど、それも結構面倒だし、
まどか達の、プライバシーもあるしな。

てな、訳で、そろそろ『ナイトメア・シフト』は、終了だ。

『ハッピー・ライフ・シフト』で、良い夢、見るんだな!」

「な?!」

今まで、普通に見えていた、目の前の、世界が歪んで、ボロボロに崩れていく。

まるで、ゲーム稼動中のゲーム・マシンが、異常を起こしているようだ。

「次は、一体何?」

「へへっ!

幸せな夢なら、ずっと見ていたい、
——人間なら、誰しも、そう考えるもんさ。

誰も、その誘惑には、勝てないぜ!」

杏子が、そう言うと、世界が暗転した。

「えっ?

こ、ここは?」

ティアナは、自分が、夕方の、どこかの街角に立っている事に気付いた。

警戒しつつ、周囲を見回してみる。

「この景色、……どこかで見たような？」

さらに、良く見ると、遠方まで、町並みが続いている。

「まさか、ここはミッドチルダ？」

でも、この町は？

この場所は？

何か、懐かしさが有る？」

首を捻るティアナ。

ふと、おかしな、事に気がついた。

ティアナの近くを、買い物や用事で、先を急ぐ、人々が、道を歩
き、

或いは、走っていく。

その人達の誰もが、ティアナより、一回り、いや、二回り以上身
長が、

高く見える。

「ええっ？

ま、まさか？」

ティアナは、自分自身の体を、良く見てみた。

身に着けていたのは、バリアジャケットでも、中学生の制服でもない、

彼女の髪の色に、似た薄い茜色のシャツと、紺色のミニスカート。

足には、サンダルを履いている。

どうみても、一般人の普段着だった。

そして、周囲の人たちより、かなり小さな、身長と、——子供の胸。

「10歳ぐらい？」

でも、どうして？」

ティアナは、深呼吸をして、気持ちを落ち着かせてから、もう一度、

周囲の景色を、良く観察してみた。

「そうか！」

見覚えが有るはずだ！

ここは、あたしと、——ティード兄さんが、一緒に暮らしていた町だ！」

ティアナが忘れるはずもない、唯一の家族。

——ティアナは、両親を早くに無くし、そのため、親代わりとなった、

兄のティードによって育てられた。

しかし、ミッド首都航空隊の、魔導師であった兄は、逃亡中の犯罪者を追跡中、逆にその犯罪者によって、殺害され、殉職した。

まだ、ティアナが10歳の時の事である。

任務中に死亡した、彼女の兄は、死者にムチ打つ形で『犯人を逃したのは、失態だ』と批判されたのだ。

ティアナは、兄の『執務官になる夢』を、自分が代わりにかなえるために、人一倍努力を重ね、——機動六課解散後に、その夢を実現したのである。

——懐かしい、風景を前にしたティアナは、思考停止する。

どうする？

どうしたい？

どこへ行きたい？

自分は何を考えている？

——とてもではないが、すぐに『懐かしいあの家』に直行する気には、なれなかった。

そこで、ティアナは、町を散策してみる事にした。

——兄と一緒に入ったレストラン。

——行きたいと、何度もせがんで、
やっと取れた兄の休暇に、連れて行ってもらった動物園。

——ティアナが、それを欲しがっていて、彼女の誕生日に、兄が、
オモチャのピストルを買ってくれた玩具店。

——泣いていやがったティアナを、兄がむりやり
連れて行った歯医者。

どれも、今となっては、かけがえの無い思い出だった。

——段々、辺りが暗くなる。

「とにかく、いってみるしかないか。
あの我が家へ」

良く知る、近道を通り、やがて、見えてきたのは、——

ティアナが、少女時代を過ごした、——かなり大きな家だった。

両親が、残した不動産を、兄妹が受け継いだので、
二人暮らしには、少々広すぎる家である。

ティアナは、家のドアを恐る恐る開けてみる。

すると、キッチンから、すぐに兄のティードが、出てきた。

「ティア！　だめじゃないか！　」

こんな、おそくまで、１人で出歩いたりして！

悪い人に捕まったりしたら、どうするんだ？！　」

そう、妹の為と思えば、ちゃんと厳しく叱ってくれる、
——本当の意味でやさしい、——ただ１人の家族だった。

「……………ごめんなさい。」

お兄ちゃん。

それから、……………ただいま」

すっかり子供に戻ってしまったティアナは、素直に兄に、謝る。

「分かれば、よろしい！　」

お帰り、ティア」

兄も、すぐに笑顔になった。

「じゃあ、すぐに、晩ご飯にするから、——着替えたら、すぐ降りておいで」

「うん」

「今日は、ランスター特製ミックス・シチューだよ！」

「わあ！」

ティアナは、この兄の作ってくれる、シチューが大好きだった。

しかし、実は、何と言う事もない。

単純に、二種類のレトルト食品を混ぜたモノだ。

1つは少々、塩味の濃い、クリーム・シチューで、芋と、鳥肉が入っている。

もう1つは、黄色いつぶ状の穀物を使ったスープで、こっちは、かなり甘口の風味である。

この二つを加熱して混ぜ合わせたので、ミックス・シチューと言っているだけなのだ。

しかし、塩味と、甘い味付けが、うまく重なり、かなり、いける味となる。

だが、それだけでは、栄養バランスに問題があるので、ティーダは、

さらに、繊維質補給のシリアル粉末製品を二袋入れる事になっていた。

出来上がったモノを、さらに、もう一度、加熱しなおすが、ミソである。

——ティアナは、小さかったので、憶えていないが、兄によると、

この
ミックス・シチューは、2人の母親の手料理の、シチューと、
似ている味と内容だ、と言う。

「もつとも、味は母さんの手料理の方が、全然上だったけどね。
お芋も、鳥肉もすごくいっぱい、入っていたし」

兄は、そう言って笑うのだった。

しかし、——母親の手料理の記憶がない、ティアナにとっては、
兄の作ってくれるこのミックス・シチューが『母の味』である。

ティアナは、自室へ上がり、大急ぎで、着替えを済ませ、1階に
下りてきた。

テーブルには、大好物のミックス・シチュー。

「ちゃんと、手は洗って来たかい？
ティア」

兄が尋ねる。

「もちろん！」

元気良く答える妹。

「では、——いただきます！」

「いただきます」

スプーンに、シチューをのせて、口へと運ぶ。

そして、—— ティアナの口一杯に、『懐かしいあの味』が広がった。

「!?!」

「ど、どうしたの？ ティア、——

ま、まだ、熱かったかな？」

妹を、心配して、声をかける兄。

それは、——妹の目から、涙がこぼれた、からだ。

「うっん、ちがうの、……

おいしいの、……

お兄ちゃんの、シチューが、すごくおいしい、——

うっ、うっ、う……」

涙があふれて、止まらなかった。

妹の様子に、オロオロする兄。

「う、ごめんね、何でもないの、——

心配させて、ごめんね、お兄ちゃん、……」

涙を拭いて、懸命に笑顔を作るティアナ。

でも、……もう、一滴、……涙がこぼれた、……

……

「本当に大丈夫かい、ティア？」

兄は、心配そうに、妹の顔を覗き込む。

「大丈夫だって！」

もう、心配性なんだから、——お兄ちゃんは！」

ティアナは、精一杯元気な自分を演じる。

「そう？」

じゃあ、冷める前に、急いで食べないと！」

「うん！」

——楽しい食事は、あっと言う間に、終わり、

——あたたかな、時間は、無情にも過ぎ去る。

——もう、子供は寝る時間であつた。

「さあ！ 寝るのが遅くなると、朝も起きられなくなって、学校に遅刻するぞ！」

「うん、……」

「おやすみなさい、……お兄ちゃん」

「おやすみ、ティア……」

やさしい兄が、妹の額に、キスしてくれた。

しかし、――

『自分の部屋』へ、向かいながら、ティアナは、考える。

（だ、駄目だわ！ このままじゃ！）

（完全に、杏子の術中に、はまってるじゃない！）

（と、言うより、はまっている事を、――あたしは、喜んでいる）

ティアナの、脳裏に、杏子の言葉が、蘇る。

『幸せな夢なら、ずっと見ていたい、

――人間なら、誰しも、そう考えるもんさ。

誰も、その誘惑には、勝てないぜ！』

（こう言う、――事か）

（誰でも、悪夢ではなく、良い夢なら、目が覚めない方が良いと、
思ってしまう）

（永遠に、夢の中にいる事を望むようになる）

（何とか、杏子の魔法を、打ち消さないと！）

（本当に、ここから、抜け出せなくなる！）

（——でも、どうすれば？）

答えの出せないまま、『自分の部屋』のドアを開ける、ティアナ。

「?? あれは？」

10歳の、女の子らしい、かわいい内装の部屋の、
床の上に、——とても見慣れた、しかし、場違いな物体が置かれて
いる。

ティアナは、その物体を手にとってみた。

ずっしりと、重い、黒光りする金属製の機械。

「これは、スバルの『リボルバーナックル』?!」

この、感触！ 間違いない！

ほ、本物だわ！

『あの時』に、あたしが、つけてしまった傷も、ちゃんと有る？

でも、どうして、これが?!

夕食の前に、この部屋に入った時は、確かになかった――」

――その時、ティアナの、耳に、いや、心に届く、友の声。

『ティア――ティア！ 立ち上がって！

頑張つて！ 負けちゃ駄目だよ！

ティア――！！！！』

「スバル？ 確かに、スバルの声だ！」

部屋を見回すが、そこに、親友の姿は無い。

「そうか。――スバルの念話が、かすかに、あたしに届いたんだ。

そして、スバルの魔力が、リボルバーナックルの虚像を造り出したのかも。

――まったく、心配性なんだから」

ティアナは、親友の顔を思い出して、微笑む。

――その時、ティアナの目に、不思議な光が、映りこんだ。

部屋の机の上に、ある物、それは、――

「あれは、――ティーダ兄さんが、あたしの誕生日に、買ってくれたオモチャのピストル？

でも、あの光は？」

それは、——ティアナの色と、同じ、美しい茜色の、魔力光を放っていた。

「！！———そうか。

そうなんだね。

そこに、いたんだ。

あたしの、——大切な、相棒」

茜色の光に包まれた、兄の形見を手に取り、それを、胸に抱きしめる、ティアナ。

「お願い！

あたしに、チカラを貸して！

クロスミラージュ！

そして、——動けえ！

あたしの、——本当の体！！

.....

クロスミラージュ！———

シュート・バレット！

モード・物理破壊！

レベル・対人殺傷！」

自分の腕に、オモチャのピストルの銃口を、押し当てて、
——トリガーを引くティアナ。

——ガギユ——ンンン！——

突然、鳴り響いた銃声に、見学者達の間には、緊張が走る。

「ティ、ティア？！」

スバルが親友の姿に驚く。

練習場エリアの、荒野のほぼ中央。

腕を押さえて、立ち上がるティアナ。

その、腕から、大量に出血している。

ティアナは、クロスミラーージュで、自分の腕を、撃ち抜いたのだ！

——もちろん、魔力弾は、物理破壊の設定で、人を殺せる威力が、
有る。

ティアナと、同じく立ち上がって、彼女から、すばやく距離を取る杏子。

「へへっ！

まさか、自分の腕に、銃弾をぶち込んで、

——その痛みで、あたしの幻覚魔法を、打ち破る、とはねえ。

恐れ入ったよ」

『ニヤリ』と、笑う杏子。

幻覚魔法を、長時間持続したので、結構魔力を消費したらしく、その顔には、疲労感が見えた。

「よくも……よくも……よくも——！！」

よくも、あたしの大事な思い出を——！

『変な魚』の事も含めて、——

もう完全に、あたまに來た！

覚悟しなさい！

杏子！」

高高度に、ジャンプした後、空中に停止するティアナ。

「ええっ?!」

ティアナが、空中戦?

どうやって?」

目が、点になっている、マリエル技術官。

「そ、そう言えば、ティア、……ここしばらく、『地球』の『ギアナ高地』で修行してたって、言ってた、——」

解説するスバル。

「佐倉さんも、『地球の中国、奥地』で何かの修行をしていたとか、……?」

巴マミも、呟く。

「2人とも、一体何の修行しとったんや?

今、ティアナ、空中に静止しとるで?」

はやてが、空に止まっているティアナを見つめる。

本来、陸戦魔導師だったティアナは、空中浮遊さえほとんど、できなかったはずである。

「こりゃ、ほとんど『マンガ』の世界や!」
信じられないと言う顔のはやて。

それは、杏子も同じであった。

「な、何する気だ?」

杏子が、上空のティアナを睨む。

「行くわよ! クロスミラージュ!」

ティアナは、相棒に声をかけた。

「ザ・ファイヤリング・ロック イズ キャンセル！
ロードカートリッジ！」

クロスミラージュが、3発、魔力カートリッジをロードする。

「咎人^{とがひと}に、滅びの光を！」

ティアナが呪文を詠唱すると、彼女の足元に、茜色のミッド式魔法陣が、展開した。

「星よ、集え！ 全てを撃ち抜く光となれ！」

「ザ マウント スタート！」

（魔力集束、開始！）

周囲から、茜色の、魔力光が、——流星の様に、ティアナの両手の、銃口に集まっていく！

それは、巨大な魔力球（魔力砲台）となった。

「お、おい！ あれ、まさか？！」

ヴィータが、叫ぶ。

「しゅ、集束砲撃？！」

息を飲むシャマル。

「や、やめんか、ティアナ！」

そんな、位置と、角度で、集束砲なんて撃ったら、見学者達まで、巻き込んで、まうで！

結界も、持つかどうか分からん！

ウチらは、まだ防御出来ても、

魔力耐性の低い、一般人も、おるんやで！」

はやてが、上官として、命令口調で警告するが、ティアナは、魔力の集束を続行している。

「う、撃てる訳がねえ！」

は、はったりだ！」

杏子も、そう叫んだ。

しかし、――

「撃つつもりだ！」

ティアは、本気で、撃つ気だよ！」

親友の、スバルが、確信を持って発言した。

「まさか、――じよ、冗談だよな。」

う、撃てる訳が、――」

呟く、ヴィータ。

しかし、――

「いや、本気のようにぞ」

シグナムが、スバルの発言を肯定する。

「スターライト・ブレイカー！」

さらに、クロスミラージュの、AIの音声で、それを、証明した。

「ひょっとして、ティアナ、――

怒りで、我を忘れてるんじゃない？」

青くなっているシャマル。

「お、おい！」

杏子が、目を見開いた。

「スターライトオ、――」

ティアナの声が、空に響く。

「や、やめやがれっ――！」

びびる、ヴィータ。

—— その、瞬間、

—— ヒュン　ン　ン　！！！　——

「へ？」

バカみたいな、声を出す杏子。

上空のティアナの姿が、一瞬で消え去り、彼女は、杏子の眼前にいた——！

「し、しまっ　——！！」

「ブレイカ——！！！！！！！！！！」

「ぽぎゃああああああああっ！！！！！！！！！！」

ゼロ距離射撃による、——茜色の巨大砲撃に、文字通り、ぶっ飛ばされた杏子。

そして、——

—— どっぱ——ん！！！！！！——

杏子は、丁度、背後に位置していた湖の中（実際には海中）に、大きな波しぶきを上げて、突っ込んでいった。

——
「か、かっこ、わりー。」

ちくしょう！

こ、これで、終わりかよ！

この、杏子様ともあるう者が、なさけねえー」

水中深く、沈みながら、心の中で独り言を呟く杏子。

「でも、ま、少しは楽しかったから、まあ、いいか……」

『杏子！ 杏子！

……… 杏子！

杏子ってば！』

「うつせえなあ！

誰だよ？

あたしは、今、

敗北の味をしっかりと味わってんだからって、

………？

！！

まさか！

その声！！」

杏子が、驚く。

「ご明察！ はい、みんなの守護天使、
さやかちゃんです！」

「つて、おい！」

「あははははは！ 驚いた？

『こつち』から、ずっと、模擬戦の様子は、見えてたから！」

「そうか！ まどかの言ってた、事、――

やっぱ、本当だったんだな、――

あたし達の事、ずっと、見守ってて、くれたんだな」

「当然だよ。だって大切な友達で、仲間だから。

そうでしょ、杏子？」

頭の中に、響く友の声。

杏子は、それを、聞いている内に、
体中に、チカラがみなぎってくるのを感じる。

「そうだな。さやかの、言う通りだ」

「それで、どうするの？」

「このまま、負けてもいいの？」

「……………気が変わったぜ！」

まだだ。

まだ、あたしは、負けてねえ！」

「もし、良ければ、あたしも、少しは、チカラを貸してあげるけど」

「あー、いや。」

それは、——やめとくわ。

さすがに、それは、フェアじゃねえ。

あいつに、——ティアナに悪いからな」

「……………うん！」

その方が、杏子らしいや」

「それじゃ、ちゃんと、見てろよ！」

さやか！」

「うん！」

ちゃんと、見てるから、——

ずっと、……

ずっと、見てるから！

ずっと、みんなを、見守っているから、……」

「ああ！」

「ねえ、シグナム」

シャルが、口を開く。

「何だ？——シャル」

質問で、返すシグナム。

「そろそろ、杏子ちゃんを、助けに行かないとまずいんじゃない？」

「何を言っている？ 魔力反応を良く探ってみろ」

「え？ ああ？」

驚く、シャル。

「……出てくる！」

なのはが、叫んだ。

湖の水面が、渦を巻いた直後、水中から何かが、飛び出した。

飛び出した、何かは、空中で弧を描き、荒野の真ん中に、着地した。

それは、新人魔導師——佐倉杏子であった。

「杏子ちゃん！」

「佐倉さん！ 無事だったのね！ よかった！」

まどかと、マミが、手を取り合って、喜ぶ。

「相変わらず、タフな子ね。」

でも、あたしにも、負けられない、理由が、有るのよ！」

ティアナは、そう言うと、杏子を睨みつけた。

「それは、——はあ、はあ、はあ——

こ、こっちも、一緒なんだよ！」

足元がおぼつかない杏子も、そう言って、ティアナを睨む。

「とは、言っても、——」

「全力の一撃は、……」

「あと、——一回が、限界……」

「これ以上は、魔力と体力と、……」

「それに、精神力が、」

「もちそうに無い！」

「お互いにな！」

苦しそうに、笑う杏子。

「へへへ、……」

受けてみる、……これが、あたしの、新奥義！」

杏子が、全身にチカラを入れた後、突如脱力した。

「な、何を？」

ティアナは、訝しい顔で、考える。

（——杏子には、まだ隠し玉が有るの？）

「ドラゴニック・オーラ……！」

——ドン　ツツ　……！！——

杏子の体から、強い魔力とともに、金色の『闘気』が、立ち昇る。

「わ、分からん！」

ここまで、来ると、ウチもう訳分からんわ！」
目を回している、はやて。

「あれは、『闘気』?!」

魔力だけじゃなく、大地の『気』のチカラを
応用した格闘術みたいだね」

なのはが、事も無げに、解説する。

「ホント、どこで、誰に、——何、習ったんだ？」

あいつ等は？」

ヴィータも、首を傾げる。

「くっ? こ、こいつ！」

クロスミラージュ!

もう一度行くわよ!」

「ロードカートリッジ!」

ティアナの意志に反応して、クロスミラージュが、
魔力カートリッジを3発、ロードする。

「ま、まさか、スターライト・ブレイカー、2発目?」

目が点になるシャル。

「さ、さすがに、無茶だよ！ ティア！」

スバルが、親友を心配して、叫ぶ。

だが、ティアナは、発動準備を進めた。

彼女が持つクロスミラージュの銃口に、茜色の光が、集まっ
ていく。

「そう来ないと、おもしろく、ないぜ！」

杏子は、歯をむいて、笑っていた。

杏子は、体の、わき腹の、辺りで、——何か両手で、
玉の様なモノをつかむような、動きと、姿勢を取る。

すると、彼女の両手の間に、白い小さな光の玉が、出現した。

「なんや、あの光の玉は？」

思わず、はやてが、なのはに尋ねた。

「魔力だけじゃなく、『闘気』を実体化させてる！
たぶん、『仙道気功法』を魔法技術にミックスして、——」

なのは、は真面目に答えるが、——

見学者のほぼ全員の頭に『？』マークがついた。

見ていると、杏子の手の中の、——光の玉は、色が金色になり、大きさも増して、強く輝きだした。

「あれは、もう、別次元とか、他の時間軸とかの、話とも違う様な、気がするで。」

——それは、ともかく、2人の、あの技が、ぶつかり合ったら、結界なんぞ、消し飛ぶんと、違うか?」

はやてが、気になってきた、事を、なのはに、伝える。

「そうだね。」

——見学中の魔導師は、全員、ワイド・エリア・プロテクション（広域防御魔法）を発動！

魔力耐性の低い人達を、中心にして、防御してあげて!」

なのはが、そこにいる全員に指示を与える。

慌てる見学者達を、尻目に、対峙する2人は、魔力を極限まで、高めていく。

「うおおおおおおおっ!」

「はああああああ——!!」

杏子も、ティアナも、もう対戦相手しか、見えていなかった。

「あたしの、ダチ（友達）は、——」

「あたしの、兄さんは、——」

.....

「みんなの、生きてる、宇宙を、——」

「みんなが、暮らしている、この世界を、」

.....

「今も、ずっと、見守って、くれているんだ！」

「かつて——命がけで、守ろうと、していた！」

.....

「さやかは、——」

「兄さんは、——」

.....

「今も、——あたしらを、ずっと、見ている！」

「今でも、あたしの事を、きつと、見ている！」

.....

「「だから、——絶対に、負けない!!!」」

.....

「.....ドラゴン・ソウル——」

「.....スターライト——」

.....

「ブラスタ——！！！！！！！！！！」

「ブレイカ——！！！！！！！！！！」

.....

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ティアナの茜色の、『スターライト・ブレイカー』と杏子の、金色の巨大魔力砲が、2人の真ん中の地点で、激突し、そこに、——とても美しい、夕焼けのような、こがねいろ黄金色の球体が出現した。

そして、黄金色の球体は、徐々にその大きさを増し、はやてが、危惧した通り、練習場の結界を、

跡形も無く、破壊して、周囲のモノを全て飲み込み、

——最後には、大爆発を起こした。

ただし、この爆発は、純粋な魔力爆発だったため、そこにいた人間や、施設への、影響は、安全なレベルですんだのである。

特別希望者の模擬戦（午前の部）に関するレポート

発案者 佐倉 杏子

監督責任者 高町 なのは

《 戦闘結果報告 》

〔 戦闘時間 60分 〕

佐倉杏子 v s ・ ティアナ・ランスター

両者、ともに、魔力・体力・精神力を使い果たし、
戦闘不能と、判断

よって ―― 引き分け、とする

杏子と、ティアナは、ボロボロの状態で、
練習場の中に、大の字で、寝そべっていた。

2人とも、もう、体力も、魔力も残っていないらしい。

練習場の戦闘エリア用の――立体映像も切れて、

そこは、タイル状の構造がむき出しの、人工島の上だった。

周囲の海から、聞こえてくる、波の音が、
疲労した体と心には、心地よかった。

「な、なかなか、やるじゃねえか」

「あ、あんたもねー」

互いの健闘を称え合う、2人。

「それで、――1つだけ、聞きたいんだが」

「何よ？」

「上空にいた、あんたが、消えて、いきなり、目の前に、現れたア
レ。」

アレは、やっぱ、『幻術魔法』だったのか？

それとも……」

「……企業秘密よ！」

（実は、ティアナの『幻術魔法』には、『オプティックハイド』と
言う技が有り、
これを使うと、自分や他人を不可視の状態、いわゆる、透明人間に
出来るのだ）

「はーん。」

それで——会えたのかよ、兄貴には？」

「?!」

……杏子！

あんた、まさか?!」

「へへっ」

「よけいな、マネを——!」

杏子は、シグナムから、ティアナの家族に関する話を聞いていたらしい。

「でも、——あの、最後の幻だけは、

——楽しかったろ？」

「うっさい！」

バカ杏子！」

「あんだと！」

もういっぺん、やるか、「コラ——!」

「上等よ——!——!」

「言ったな！」

「言ったが、どうしたあ……！」

「……！」

「……！」

「……！」

「……！」

「誰か、止める——」

あの、バカタレどもを……！」

シグナムの声が、ミッドチルダの空に響いた。

その青い空を見上げ、杏子は、思った。

（……引き分けだったけど、

……これで——いいよな！

さやか！）

第15章 まどか vs .なのは

午前中の模擬戦で、——負傷した、杏子と、ティアナは、シヤマルの治癒魔法で、怪我を治してもらった。

さて、——昼食である。

まどか達4人は、食堂のテーブル席についたのだが、——

暴れまくって、——お腹がすいたらしい、杏子が、さっそく、騒ぎ始めた。

「は、はら、減ったあ——！！」

さあ！ メシ！ メシ！

……お？

チャーハンだあ！

あたし、チャーハンな！

チャーハンくれ！

チャーハン！ チャーハン！ チャーハン！

「ここに、そんなメニューは、無いわよ」

巴マミが、メニュー表を確認して、そう言った。

「じゃあ、あれは、何だよ?!」

他の席で、食事している、局員達の、前にある、食べ物を指差す、杏子。

「あれは、『ピラフ』よ!

と、言うか、他の人の、食べ物を、指差すの、やめなさい!

お行儀の悪い!」

マミは、杏子に、注意したが、――

「だから、――チャーハン!」

「だから、――ピラフだってば!」

大騒ぎの、杏子と、マミ。

思わず、他人のフリをしている、ほむらと、まどか。

―― 食堂にいる、局員や、魔導師達が、―― 一体、何事かと、

彼女ら4人に、注目していた、からだ。

「ほむらちゃん……私、もう帰りたい」

赤くなって、うつむいている、まどか。

「杏子のバカ」

ほむらも、下を向いていた。

それから、しばらくして、4人は、昼食を始めたのだが――

「佐倉さん！」

ケガが治っても、体力と、魔力は、ほとんど、ゼロに近いんだから、

無理しちゃだめよ！」

マミが、杏子に、注意した。

「分かってるよ！」

だから、『チャーハン大盛り』食べて、元気つけてんじゃねえか！

……まぐまぐまぐ」

「だから、それは『ピラフ』……もう、いいわ」

マミは、何かを諦めた。

―― そんな、こんなで、昼食は、終了。

ちなみに、――杏子は、『チャーハン大盛り（本当はピラフ）』を、

さらに、おかわりして、満足した。

結構、美味しかったらしい。

午後の模擬戦は、2時からの予定だったが、——杏子達の、必殺技のおかげで、

結界などが、壊れてしまい、——結界システムと、立体映像装置のメンテナンス（本来は、点検。この場合は、修理と作動確認）が必要となったので、——模擬戦の開始予定を、午後3時に変更した。

そこで、——施設内の、談話室で、しばらく、暇つぶしをする事にした、

まどか達だったが、——そこには、なのは達がいた。

これから、模擬戦で、戦う事になるためか、まどかは、なのはに、
近寄る事を、
躊躇ちゅうちゆしている様である。

この、まどかの様子に、気付いたほむらが、気を利かせて、——
4人は、なのは達から、少し離れたテーブル席についた。

一方、——

「はやてちゃん、この後の、模擬戦に関して、ちょっと、お願いがあるんだけど」

なのはが、はやてに、話しかけた。

「んん？」

「何や、お願いって？」

アイス・コーヒーを飲んでいた、はやてが、返事をする。

「私は、模擬戦の当事者でしょう。」

だから、監督責任者は、別の人がやってくれと、
ありがたいんだけど……」

なのはは、ちょっと、遠慮がちに、そう言った。

「ああ、なんや。それか。」

ええよ、別に。

次の模擬戦は、ウチが監督責任者、やったる」

即答する、はやて。

実は、昔は、時空管理局には、模擬戦に、監督責任者をつける
規則など無かったのだ。

ところが、なのは達が、一度、模擬戦によって、管理局本局の建
物に、

大穴を開けると言う、アクシデントを起こし、——その後、必ず、
模擬戦には、

監督責任者を決めておくと言う、規則が作られたのである。

「ごめんね。」

フェイトちゃんが、今日、都合が合えば、

やってくれる事になってたんだけど」

「まあ、しゃあないやん。

助っ人さがしも、大事な仕事やし」

「うん」

そのテーブルには、フェイトが、いない代わりに、スバルと、ティアナが同席している。

スバルは、昼食の際のティアナの行動が、気になっていた。

「そう言えば、——ティアは、今度、ここに来たら、絶対、白身魚のフライ定食を食べてみるって、言ってたのに、今日、別のメニューを、選んだよね。」

どうしたの？」

質問する、スバル。

「気が変わったのよ！

魚は、しばらく、食べられそうにないわ。

と、言うか、——魚類は、もう見るのもイヤー!」

「????」

首をひねる、スバル。

当のティアナは、杏子の方を睨んでいた。

「うえ？」

ティアナのヤツ、あたしを、睨んでやがる、――

ひょっとして、まだ、『魚の事』で、怒ってんのか？」

杏子は、ティアナが、怖い顔をしている事に、気付いた。

「何したか、知らないけど、――あの魔法で、ひどい事したのなら、

あとで、ちゃんと、謝っておきなさい！」

マミが、苦言を呈する。

「分かったよ……」

いや、前に、あたしらの『日本』のテレビ番組で、『危険生物特集』って言うヤツを、見た事が、あってさ。

その内容を、元にして、――いろいろと。

ちょっとした、オチャメのつもり、だったんだが、――少々、やり過ぎたかな？」

少しは、反省している様子の杏子。

「だけど、ティアナさんは、執務官なのよ。

大きな事件が、発生したら、かなり忙しくなって、会うのは、難しくなるわ。

ちゃんと、謝罪するのなら、もたもたしてないで、急ぐ事ね」

ほむらが、杏子に、忠告してやった。

「分かったよ！ 分かりましたよ！

行くよ！

行きゃいいんだろが！

ちゃんと、あやまって来る！」

言うなり、立ち上がって、ティアナ達の方へ、歩いていく杏子。

まどか達が、見てみると、ティアナに、ペコペコ頭を下げて、なにやら、謝罪しているようだった。

しばらくすると、話の終わったらしい、杏子が、まどか達の、席に帰って来た。

「どうだったの？」

マミが、椅子に座った、杏子に尋ねる。

「あいつ、いいヤツだな、――

ちゃんと、謝ったら、すぐに、許してくれたよ。

ティアナの『魚アレルギー』が、治ったら、何か、魚料理を、お
ごれってさ。

……その時には『日本』の、うまい刺身か、寿司でも、おごって
やるか！」

杏子は、笑いながら、そう言った。

—— 一方、

「ええっ？

それ、本当なんですか？

前の、模擬戦の時、まどかちゃんが、手を抜いていたって、——」

スバルが、なのはに質問していた。

そこで、話に、割り込んだのは、ティアナだった。

「そう言えば、……まどかちゃんと、直接戦った、キャラも、
何か違和感を持ったとは、言ってたけど、……」

「まあ、このあと、直接、戦ってみれば、はっきりすると、思うよ」

断定を避ける、なのは。

「乱暴な、確認法やな、まったく。

まずは、言葉で聞いてみたら、ええやんか。

なのはちゃんは、どんな相手も、殴りあわんと、友達には、なれんと、思つとるんと、違うか？」

はやてが、苦笑する。

「別にそうは、思わないけど。

でも、この場合、……

いや、私が、直接、相手してみたい、と言うのは、本当かな？」

なのはは、自分の頭を、ポリポリかいている。

「『こん人は、戦^{いくさ}が、好きで、困^{こま}り申す！』とは、『日本』の『西郷隆盛』の言葉やねんけど。

まあ、何にしても、——練習場の準備が、完了せんとな」

はやてが、作業現場の、マリエル技術官に、連絡して、状況を確認する。

（西郷隆盛の言葉は、実際には、幕末を舞台にしたテレビドラマのセリフ。

はやての言葉は、一文字変更した。

オリジナルは、『こん人ら、戦^{いくさ}が、好きで、困^{こま}り申す！』 〃

《解釈》この人達は、戦争が好きで、困ります）

「……………ふんふん？」

さっきの、変更した予定通り、午後3時には、準備完了する筈？

……うん、了解や。

ああ、それと、なのはちゃんからの、頼みで、次の模擬戦では、ウチが、監督責任者やから、よろしゅう。

うん、じゃあ、あとでな

念話による通信を、終了する、はやて。

「聞いている通り、やはり、午後3時やね」

「分かった。

私は、ちよつと、ウォーミング・アップしてくる。

気は、抜けない相手だから、――」

なのは、そう言って、談話室を出て行った。

「まったく、なのはちゃんも、戦いばっかさんと、少しは、色気出して、

ユーノ君とデートでもしてくれば、ええねん。

ウチら、今年で、もう24歳やで」

苦笑している、はやて。

ユーノ君とは、なのは達と、同年代の考古学者で、なのはの友人

の事である。

「話は、変わりますが、――」

あの噂は、真実なんでしょうか？

『魔導師量産計画』って、――」

ティアナが、はやてに尋ねた。

「ま、魔導師量産計画う――?!」

話を聞いていた、スバルは、思わず、飲んでいた、オレンジ・ジュースを、吹き出してしまった。

「まだ、単なる噂の域を出とらんが、火いの無い、ところに煙は、立たずや。」

ウチや、フェイトちゃんも、情報は、収集しとるが、――
姿の見えん、妖怪のごとく、計画しとるらしい連中の、
尻尾は、おるか、気配すら捉えられん。

結局、計画そのものが、有りもしない、
妄想言っんやったら、別にええんやけどな」

はやてが、現在判明している事だけを、説明する。

「ねえ、ティア。」

その、『魔導師量産計画』って、一体、何なの?!」

スバルは、親友に、尋ねた。

「あの、スカリエツティが、魔法少女を、人間の魔導師に変化させるシステムを、開発した事は、知ってるわよね？」

ティアナは、基礎的なところを、スバルに確認する。

「それぐらい、知ってるよ！
まどかちゃん達は、そのシステムのおかげで、人間に戻れたんでしょ？」

スバルが、答えた。

「じゃあ、まどかちゃん達みたいな、魔法少女が、どうして、誕生したかは、知ってる？」

次の質問をするティアナ。

「それも、ほむらちゃんから、話を、聞いているってば！

確か、インキュベーターとか言う、異星人と、魔法少女の契約をして、……？」

???

.....

!!!!!!!!!!

ま、まさか、ティア！！」

重大な事に気がついた、スバル。

「頭の回転が、カタツムリな、スバルでも、ようやく理解出来たみたいね」

ティアナは、親友に頷いて見せた。

「つまりは、そう言う事や」

はやてが、ティアナの言葉を引き継いだ。

「対象者、もしくは、希望者やな。」

その誰か、——契約とやらの、条件からすれば、第二次成長期の少女を、
まず、インキュベーターと、契約させて、『魔法少女』を1人、
『造り出す』。

そして、次に、例のスカリエッツィのシステムを使って、
『最初に造った魔法少女』を、『人間の魔導師』に変化させる」

はやては、まるで、何か料理の作り方の、
説明でもするように、淡々と解説した。

「そ、そんな！」

そんなバカな事を？」
驚愕の表情のスバル。

「そんな、——バカな事を本気で考えとる連中がいるらしいっちゅ

う事や。

よくよく、考えてみると、魔力資質が低くて、魔導師になりたくても、

なれん人、にとつては、まさに、『夢のような』お話やし、

そう言う事を実行したいと思うんは、やむを得んかも、しれん。

おまけに、1つ、何でも、願いが叶うと、言われると、誰でも欲が出るやろ」

はやては、事実を指摘する。

「で、でも。

それじゃあ」

スバルは何か、納得出来ない。

「人の夢、人の理想、そして、人の欲望、

——それには、限りが無い。

良い方向に、技術や、能力が、生かされるんやったら、誰も文句は言わん。

そやけど、『生体兵器』を大量生産するような、考え方で、人間を魔導師に『改造』するんやったら、それは、『人の罪』言うもんや！

かつて、スカリエッティがやっとな事と、何ら変わらんと思う
！」

はやては、自身の考えを吐露する。

「そうですね。そんな想いで、魔法を扱って欲しくない、――」

ティアナも、はやての意見に同意した。

「うん！ そんな事させないように、頑張ろうね！ ティア！」

スバルは、自分もと、言いたいようだが、――

「――って、あんたは、防災士長としての、仕事があるでしょうが！ 悪い人たちを取り締まるのは、あたしや、八神司令のお仕事！」

ティアナが、あきれて、言う。

「そ、そうでした！

あ、あはははははは」

スバルは、すっかり、人命救助と言う、今の自分の、役割を忘れていたらしい。

「まあ、今の件は、調査中やし、元機動六課をまた集めなあかんよ
うな、

事態は出来るだけ、避けたい。

しばらくは、様子見っちゅう事や！」

はやてが、話をまとめる。

「はい、……」

はやてに、ティアナが返事をした。

「でも、必要な事なら、すぐ声をかけてください！
すぐに、飛んで行きますから！」

スバルが、軽く胸を叩いて、そう言つと、――

「分かつた。期待しとるよ」

はやては、心の中で別の事を思う。

（『魔導殺し』の件もある）

（その要請を出すのは、意外と早そうな気がするで）

―― その頃、まどか達は、――

「まどか、何度も言うようだけど、――」

ほむらは、まどかが、心配だった。

「絶対、無理はするな、――でしょ」

ほむらを、安心させるため、笑顔を見せる、まどか。

「……………」

「ほむらちゃんの、気持ちは嬉しいけど、

…………… 私にも、託されたモノが、有るから」

「うん、……………」

そして、そんな少女達の想いを、よそに、——運命の時は、来る。

「どないや？ マリエルさん？」

はやてが、マリエル技術官に、確認する。

もうじき、午後3時であった。

「待たせて、ごめん。今、最終チェック終了。」

戦闘エリア、構築、スタート！」

マリエル技術官が、練習場のシステムを作動させた。

見る間に、魔力エネルギーが、結晶化して、実体を構成していく。

今回の、戦闘エリアは、——

どこか、異世界の山麓地帯。

所々、円形ピラミッド型の、遺跡らしきモノが有り、
周囲の数箇所には、小屋なども有って、人が生活している
場所のようであった。

『聖地』のような、地域かも、しれない。

高い山や、深い谷が、存在し、土地の高低差が、激しい。

身を隠す、所は、たくさん有りそうだ。

「よし！」

見学者は、あまり、結界に近づかんようにな。

模擬戦を行う、両者、バリアジャケット装着っ！」

はやてが、全員に指示する。

「レイジング・ハート！」

「ラファエル！」

「セーット・アープッ！」「」

なのはと、まどかが、同時にバリアジャケット装着の手順に入っ
た。

あらわになる、なのはの、美しい裸身！

その、見事なプロポーションは、そこらのグラビア・アイドルなど
問題ではない。

—— 出るべきところは、出ていて、それでいて、——
余計な贅肉や、脂肪なんぞ全く無いのである！

—— そして、誰もが、
顔をうずめてみたくなるような、——

思わず、直接、触ってみたくなるような、――

――その、ふくよかな、胸！

バスト！

乳房！

やわらか過ぎず、引力に逆らう、
適度な弾力を持つ！

ばいんばいん、であります！

そして、なのはの体を、『エクシード・モード』の
バリア・ジャケットが、覆っていく。

時空管理局、最強の空戦魔導師の、堂々たる、戦^{いくさ}の白きドレス姿
であつた。

まどかも、ほんの一瞬、裸体を外気にさらす。

いまだ、少女と大人の中間的な、発展途上の『女の肉体』である。

だが、将来、なのはをも越える、ナイスバディとなる事を、
信じようではないかっ！！

まどかを、彩る衣服は、以前と同じ可憐なるピンクの魔法少女服、
それと同デザインのバリアジャケットである。

長き時を戦い続けた、魔法少女達に、敬意を払った技術者達が、

まどか達の、バリアジャケットを、以前の魔法少女服と全く同じデザインにしてくれたのだ。

しかしながら、かわいい衣服に、彼らは、萌えあがり、ノリノリだったとの、噂もある。

互いを見つめる、まどかと、なのは。

「両者、ええかつ？」

最終確認をする、はやて。

「いつでも、どうぞ
なのはが、答える。

「私も、——行けます」
返事する、まどか。

「それでは、——模擬戦スタートやつ！」

「アンジェラ・ミサイルッ！」

まどかの体の、周りに、小さな白い魔力光が6個出現した。

その魔力光は、白い小鳥の様な姿、（『地球のツバメ』の様なシルエット）

に変化して、——なのはを、目がけて、飛んで行く！

「アクセル・シューター、シュートッ！」

なのはも、誘導魔力弾を撃つ！

——空中で、ぶつかり合った、魔力弾が、いくつもの、小さな爆発を起こす。

だが、なのはの、魔力弾の方が、数が多い！！

まどかの、魔力弾をかわした、なのはの、誘導魔力弾が、まどかに、迫る！

「くっつ！」

まどかは、魔力弾を避けて、上昇するが、その後を、誘導魔力弾が、

ホーミング（自動追尾）して、追いかける！

上空で、まどかは、ユー・ターンして、山の陰に、回りこむ。

いくつかの、魔力弾が、山の側壁に着弾して、炸裂した。

しかし、接近してきた、なのはが、追加の、誘導弾を発射してくる。

それも、すごい、弾の数だった。

深い、谷に入り込み、飛翔しながら、柔らかい、その体をひねって、

誘導弾を、うまくかわす、まどか。

だが、なのはは、誘導弾に、細工を施しており、

谷の壁に当たった誘導弾は、炸裂せずに、はね返り、まどかの、背中や、その綺麗な足に直撃した！

「きゃああ？！」

たまらず、バランスを崩す、まどか。

そこへ、――

「ストライク・スターズ！」

なのはは、動きの鈍った、まどかを狙って、容赦なく、魔力砲撃と、

高速弾の、合体技を撃ち込んだ。

「ワイド・エリア・プロテクション！」

「うあああああ！」

まどかの、パートナーであるラファエルが、防御バリアーを張ってくれたが、
なのはの砲撃は、半端ないパワーで、そのバリアーごと、まどかを、谷の壁に、
叩きつける！

「ぐっ！！」

激しい痛みにも、顔をしかめる、まどか。

「ま、まどか？！」

ほむらが、思わず、大声を出した。

「や、やはり、なのはさんは、強い！ 強過ぎる？！」
マミも、声が自然と、大きくなっていた。

「さすがに、戦いなれてるな！」
杏子も、マミに同意する。

「ラファエル！ アンジェラ・ブレード！」

まどかは、弓型だったデバイス・ラファエルを、リング状に、変形させて、それを、自分の右腕に、装着した。

リング状のラファエルは、一部が発光すると、そこから、桜色の魔力刀が、まどかの腕の、延長の様に伸びて、輝いた。

「いやああああ——！！！」

バックハンド式に、右腕の『アンジェラ・ブレード』を振りながら、

なのはに、接近戦を挑む、まどか！

なのはの、誘導弾は、ラファエルが、オート・ガード式の、魔力シールドで、防いでくれていた。

しかし、——

「ショート・バスター！」

近距離用の、速射砲を放つ、なのは。

まどかは、この砲撃を、至近距離から、カウンター気味に、――
まともに、胸のあたりに、もらってしまった。

「ぐはぁ!!」

撃墜され落下していく、まどか。

しかし、谷の底まで落ちる前に、持ち直して、再度、上昇する。

「アンジェラ・バード!」

高速飛行しながら、手足を広げる、まどか。

その、まどかを、白い魔力光が、包み込み――その魔力が半実体化していく!

――その、姿は、『白いタカ』のように、攻撃的なフォームだった。

実際、『タカのツメ』に見える部分も、有った。

「アタークッ!!」

まどかは、全力加速して、なのはに、体当たりをしかけた。

「アクセル・シューター!」

なのはは、誘導弾を発射したが、今度は、まどかの、『白いタカ』によって、
はね返される。

「行けるっ!!」

さらに。スピードを上げ、なのはに、迫る、まどか！

だが、――

「A・C・S・ドライバー!!」

「チャージ！（突撃！）」

レイジング・ハートから、紅色の魔力刃
ストライク・フレームが、飛び出る。

そして、レイジング・ハートの前面に螺旋状の、魔力フィールド
が、

形成され、なのはは、そのまま、突撃する。

――防御を固め、突撃して、敵陣を突破する為の、単純な魔法だ
が、

『破壊しながら突き抜ける』ための、ケタ違いの、パワーを誇る。

空中で、激突する、まどかと、なのは！

「――あああああっ?!」

まどかの、『白いタカ』は、レイジング・ハートのストライク・
フレームに、

粉碎され、まどかは、再度、谷間に、ふっとばされた。

なんとか、体勢を整え、中距離から、攻撃をしかける、まどか。

「念動光線！ アンジェラ・デルタ！！」

まどかの、額から、電光の様な、魔力ビームが発射され、
なのはに向かって、直進するが、魔力シールドで、苦もなく、
それを、はね返す、なのは。

——そして、再び、

「エクセリオン・バスタ——！！！！」

「がはあっ！！！！！！」

なのはの、中距離用、大威力砲撃に、直撃され、今度は、
円形ピラミッドに激突する、まどか。

「容赦ねえな、なのはさんは。」

『管理局の、白い悪魔』の異名は、伊達じゃねえってか？」

戦場を睨む、杏子が、つぶやく。

「あれじゃまるで、——イジメだわ！」

あまりに、一方的な内容の、模擬戦に、目を背けるマミ。

「まどか、……」

祈るような姿勢の、ほむら。

「はあっ!! はあっ!! はあっ! ……ふうっ」

空中で、停止し、息を整える、まどか。

「まどかちゃん、……」

まどかの名を、呼ぶ、なのは。

「???」

なのはは、まっすぐ、まどかを、見つめた。

「まどかちゃん、——」

どうして——

……

どうして、本気を出さないの?」

「!?!」

「悲しい出来事、理不尽な痛み、どうしようもない運命、——

そんなのが、嫌いで、認められなくて、

撃ち抜くチカラが欲しくて、私は、この道を、選んだ。

……

同じ想いを持った子達に、技術と、チカラを伝えていく仕事を選んだ」

なのはは、言葉を選び、ゆっくりと、話す。

「……………」

まどかは、なぜ、なのはが、この模擬戦を、望んだのか、なんとなく、分かってきた。

「この手の、魔法は、大切なモノを守るチカラ、

想いを貫き通すための、必要なチカラ！

だから、——まどかちゃん！

あなたも、自分のチカラを、

大切な友達に託された希望を、

信じてあげて！」

「なのはさん、……………」

私……………」

分かりました！

私も、全力全開で行きます!!」

まどかの、目つきが、変わる。

「レア・スキル、

デステイニー・マスター始動！！

ラファエル！

デストロイ・フォーム・チェンジ！！！」

「デストロイ・フォーム！」

まどかの、背中から、巨大な天使の翼が展開する。

彼女のバリアジャケットも、純白の女神のドレス形態に変化した。

「ま、まどか？

だ、だめよ！

そのチカラを使つては、だめ！！

もし、使ってしまったら、あなたは、——！！！」

ほむらが、顔色を変えて、叫び声を上げる。

「ほむら？！」

驚く杏子。

「曉美さん?! 一体何が?!」
事態を飲み込めず、マミも叫ぶ。

まどかのデバイス『ラファエル』は、腕輪の形から、
超大型ボウガンの形態に、変形して、輝きだした。

（ボウガンとは、弓矢の構造を利用した
銃型の武器の事。正式名はクロスボウ。
今では、スポーツ用の物が一般だが、
古代では戦争に使用された）

「お、おい、あれは?!」

あの技は?!

まさか!」

杏子も、叫んだ。

「11年前に、『ロストロギア融合魔獣』を消滅させた、
あの、超魔力砲?!」

マミにも、見覚えが有った。

——気がつけば、なのはも、集束砲の発動態勢を開始しており、
彼女に、桜色の魔力光が、流星のように、集まりだしていた。

——そして、なのはに、呼応するかのように、
まどかの放つ、ピンク色の魔力光も輝きを増していく!

「オイオイオイ!

なんなんだ？

あの、魔力のでかさは？」

ヴィータの顔に、恐怖が、浮かぶ。

「だめだわ！

やめて、まどか！

お願い、—— やめてー！！」

青い顔で、叫び続けるほむら。

「あ、あたしと、杏子は、確かに全力を出していた！

それでも、あの子から感じる魔力は、

——あたしと、杏子、2人を合わせたモノより、
ケタ違いに大きいわ？！」

ティアナも、驚愕していた。

「じよ、冗談じゃねえぞ！

あんな、パワーが、なのは、集束砲と、まともにぶつかったら
！」

完全に、びびっている、ヴィータ。

「結果が、壊れた、ぐらいじゃすまん」

シグナムは、ただ、静かに、物事の推移を見守る。

「だめ——!!!!!!!!!!!!!!」

ほむらの、絶叫が響いたが、——

2人は、もう、止まらない！

「スターダスト——！」

「スターライト——！」

——

「デストロイヤー——!!!!!!!!!!!!!!」

「ブレイカー——!!!!!!!!!!!!!!」

2人が、放った2本の、巨大砲弾は、空中で、衝突して、——
美しい桜色の大爆発を、起こした。

が、——それだけ、だった。

「????????」

見学者達は、全員、姿勢を低くして、中には、目をつぶっている者もいた。

「えっ？ な、何がどうなって？」

ヴィータの頭の上には、『？』マークが、10個は、浮かんでいる。

「ああっ？ あれを、見て！」

そう言っつて、空の一点を、指差したのは、シャルだった。

つられて、ヴィータも、そのポイントを凝視してみた。

「あれは？」

「高町一尉？」

シグナムが、そう呟いた。

見ると、高町なのはが、上空から、降下してくる。

その腕の中には、――

「まどかあ――！！！！」

ほむらの、悲鳴が、響き渡る。

「なのはちゃん、一体これは？」

はやても、異常事態の発生に気付く。

なのはの、腕の中の、――まどかは、顔面蒼白で、体の、あちこ

ちが、
ひどい痙攣を起こしていた。

「た、体内の魔力が、暴走しかけてる！！」

なのはが、大声で、答えた。

「な、なんやてえ？！」

「シャル先生、早く！」

それと、はやてちゃんは、施設に、連絡して、
メディカル・ルーム（ここでは、
治療と検査用の部屋）の準備を！」

なのはが、指示をとばす。

「分かったわ！」

シャルが、なのはにかけよる。

「これは、ひよつとすると……」

はやては、すばやく施設への連絡を済ますと、1人、考え込む。

「ええっ？　ちょ、ちよつと」

慌てる、シャル。

——まだ、痙攣が続けている、まどかを、
——ほむらが、シャルや、なのはから、奪うように、かつさら
い、
抱きしめながら、こつちを睨んだからだ。

「ほ、ほむらちゃん？」

シャルが、呼びかけるが、ほむらは、答えない。

ほむらは、まどかを、抱きながら、なのはを、
ものすごい、形相で睨みつけて、――

「なのはさん、――

もしも、――

もしも、まどかに、

何か有ったら、――

私は、あなたを、許さない!!!!!!!!!!!!!!」

特別希望者の模擬戦（午後の部）に関するレポート

発案者 高町 なのは

監督責任者 八神 はやて

《 戦闘結果報告 》

〔 戦闘時間 45分 〕

鹿目まどか vs ・ 高町なのは

戦闘中、なのはの、集束砲と、まどかの、形式不明の魔力砲撃が、激突、その直後、まどかは、原因不明の魔力暴走状態を起こし、意識を喪失。

そのため、戦闘継続は、不可能と判断。

急遽、模擬戦を中止して、鹿目まどかを、メディカル・ルームに搬送した。

よって —— 判断保留とする

『鹿目まどかに、一体何が起こったのか？』

その疑問が、解けぬまま、すでに2時間が経過しようとしていた。

その後、皆は、——と言うより、佐倉杏子と巴マミが、中心となつて、

暁美ほむらを何とか説得し、施設内の、メディカル・ルームに、失神していた鹿目まどかを運び込んだのである。

まず、まどかに対して、治癒魔法と通常処置による応急の治療を行い、

次に、状態確認と、原因究明の為の、精密検査をする事にした。

現在、まだその検査が継続中である。

その、中心になっているのは、医療部門の専門家であるシャマルだった。

メデイカル・ルームには、関係者以外、立ち入り禁止と、なっている為、なのは達も、ほむら達も、談話室で、待機しているしかなかった。

「ほむらには、分かっていたんじゃないか？」

まどかが、全力で、戦うと、ああなる事が」

杏子が、ほむらの方を見て、疑問をぶつけた。

今にして思えば、2人の、——まどかと、ほむらの、様子は、変だった。

「……………」

だが、ほむらは、無言のままだった。

「黙っていたんじゃない、分かんねえよ！」

「杏子、……………」

怒鳴る杏子をマミが、制止する。

「くっ！」

友達で、仲間なんじゃねえのかよ!」

悔しい顔の、杏子。

その杏子の顔を見た、ほむらは、しばらく、躊躇していたが、やがて、

静かに、しゃべりだした。

「確かに、……私には、分かっていたわ。

だから、——なのはさん達に、事情を説明して、模擬戦を中止してもらうようにって、何度も、まどかに、言ったのだけれど、——

でも、まどかは、——

——自分が、さやか、から、託されたチカラを試してみたいって、

——正面から、なのはさんと、戦ってみたいって、

どうしても、言う事を、聞いてくれなくて……。

こんな事になるのなら………

もっと、強く止めておけば、良かった!

こうなる事は、分かっていたのに!」

ほむらの、目には、涙が光っていた。

少々、バツが悪い様子の杏子。

「それにしても、——あのチカラは、一体？」

マミは、ほむらには、悪い思いながらも、質問せずには、いられなかった。

「まどかが、言った『デステイニー・マスター』とは、まどかが、魔導師となった後でも、保有していたレア・スキルなのよ。

それは、太陽系全域程度の範囲なら、自由に因果律を操る能力。

神をも超え、悪魔でも、倒せるチカラ」

ほむらは、事も無げに、解説する。

「と、とんでもねえな！

オイ」

驚く杏子。

「だけど、大問題が有るの。

まどかの体内には、ハイパー・アルティメット・まどか、だった時の
約半分の魔力エネルギーが、存在してる。

まどかが、『魔法少女』だった時は、魂と体が、分離されてた事
と、

『ソウルジェム』の特性によって、その膨大な魔力も、なんとか、

制御が出来ていた。

それが『人間の魔導師』となつてからは、この巨大な魔力のコントロールが、うまく、出来なくなつてしまった。

このままでは、――

大きすぎる魔力エネルギーによって、

まどかの、体細胞が、破壊されてしまつわ！

――特に、『デスティニー・マスター』は、使用するたびに、まどかの、命を縮める、危険な技、言わば、『両刃の剣』なのよ」

ほむらは、自分だけが知る、重大な秘密を話し、少し肩の荷が下りたような、顔になった。

「ごめん。

もっと、早く気づいてあげるべきだった。

今日の一件は、私の、せい。

本当に、ごめんなさい」

ほむらに、頭を下げるなのは。

「いえ。

私も、さっきは、言い過ぎました。

私の方こそ、——すいません」

ほむらは、なのはを、まっすぐ見て、謝った。

「ほむらちゃん、……」

「それに、——模擬戦を望んだのは、まどか自身です。

なのはさんに、責任はありません。

まどかにも、結果は、分かっていたと、思います」

「……………」

「あー皆、ちょっと、ええか？」

いつから、そこにいたのか、はやてが、話に割り込んだ。

「八神司令、……………」

はやてを見る、ほむら。

「話は、聞かせてもらた。

それと、シャルルから、一応の中間報告的なモノも出た。

ほとんど、ほむらちゃんの、説明通りやな。

——まどかちゃんの、不調の原因は、やはり、
大き過ぎるその魔力みたいや。

人間の魔導師だと、キャパシティ（許容量）が足りん、
と言つのも、原因の、ひとつやな。

実際、この世界に、帰還してから、一年以上、異常が無かつた訳
やし。

今んとこ、考えられる、対処方法としては、そのキャパシティを
増やす事、程度やな」

はやてが、事実のみ皆に伝える。

「と言つ事は？」

マミが、はやてに、尋ねる。

「基礎体力作りから、魔力制御技術の向上、
と言つたところかな？」

なのはが、自分の推測を口にする。

「そんな、ところやね。

まどかちゃんや、ほむらちゃん達には、つらい話やけど、根本的
な治療は、
ちよう、難しい、と思つ」

残酷な現実を、解説する、はやて。

八神はやての顔には、深い苦悩が、にじみ出ている。

なぜなら、彼女には、鹿目まどかや、ほむら達の苦しみが、痛いほど理解出来たからだ。

——はやては、まだ幼い頃に、『闇の書』の所有者になった。

しかし、彼女は、『闇の書』の強大な魔力を制御しきれず、危うく死にかけたのである。

「あ？

そう言えば、八神司令。

練習場で、何か言いかけて、ましたね。

あれ、何だったんですか？

『これは、ひよっとすると……』って「

ママが、はやてに、質問した。

「ああ、聞こえとったんか？

ウチが考えたんは、『初代リインフォース』の計算ミスや。

さっき、ほむらちゃんが、『魔法少女』なら、巨大な魔力も制御出来るて、言うとったやろ？

まどかちゃんを、こっちの世界に帰す時、リインが、その巨大な魔力の半分ずつをまどかちゃんと、さやかちゃんの2人に、

分けたそうや。

そやから、リインは、まどかちゃんが、人間に戻れた時の事まで、計算しとらんかった、っちゅう事や」

はやてが、頭をボリボリかきながら、言いにくそうに、解説した。

「……………だけど、

それって、本当に、リインさんの、計算ミスなんでしょうか？」

マミが、眉間にしわを寄せて、何かを考える。

「んん？」

どう言つことや？」

聞き返す、はやて。

「必要だから、そのチカラを鹿目さんに、託した。

そうは、思いませんか。

たとえば、神様の半分のパワーが、必要になる程の危機が、この宇宙に迫っているとか、……………」

マミは、自分の懸念を話した。

「それは、……………絶対に、単なる妄想であって欲しいわ」
はやてが、正直な気持ちを言葉にする。

「もし、その通り、だとしても、まどかちゃんが、巨大な魔力を

制御出来んと、どうしようも無い」

そこまで、はやてが、話した時、――

「私、……………頑張つて、

……………みます、

……………このチカラを、かならず、

……………コントロールして、

……………みせます」

それは、――鹿目まどか、だった！

「まどか?!」

だめよ！

まだ、寝てなきゃ！

シャルル先生？」

病人用のパジャマを着て、まだ、ふらついている、

――鹿目まどかのところに、慌てて、ほむらが、駆け寄る。

「私も、まだ、安静にして、寝てなさいって、何度も注意したんだけど、

みんなに、元気な顔を見せるって、言つて」

白衣姿の、シャルも、困った顔をしている。

「ほむらちゃん。」

私は、——大丈夫だよ。

こんな事で、くじけてたら、

——きっと、

きっと、

さやかちゃんに、笑われる」

まどかは、笑顔を、ほむらに、見せた。

「!?!」

さやかの名前を聞いて、一瞬、複雑な表情になる、ほむら。

そして、ほむらは、まどかを、強く抱きしめた。

「まどかの事を、笑うような人は、たとえ、神様でも、この私が、許さないわ！

たとえ、美樹さやかだって！

「……………」

「……………」

さて、なのはちゃん。

まどかちゃんの、為の、リハビリ・強化メニューの
プラン作り、頼んで、ええか？」

はやてが、信頼出来る、友人に、尋ねる。

「もちろんだよ！

と言うか、他の人に、やらせるつもりは、皆無だけどね。

たぶん、スバル達、機動六課メンバーを育てた時の、メニューが、
再利用出来ると、思うんだよね。

少し、アレを、手直ししてやれば、……………」

なのはは、頭の中で、すでに強化プログラムを作りだしていた。

「私も、もちろん、参加します」
そう言うのは、ほむらである。

「おっ。もっと強くなれるんなら、あたしも、やるぜ！」
参加希望の、杏子。

「ちょうど、良かったよ。
あのプログラムは、4人用だから、これで、大きな変更を加えず
に済むから」

なのはも、やる気、満々であった。

はやては、少々浮かない顔をしている。

「そやけど、いくら、努力を重ねても、……」

「それには、——限界が有る、であろうな」

「誰や？」

今の声は？」

はやては、聞きなれない声に、周囲を見回して、声の主を捜した。

しかし、それらしい人影は、見当たらない。

「ここじゃよ、最後の、夜天の主よ！」
あるじ

はやてが、声のした方を、見ると、そこには、——

「カ、カラスう？」

思わず、声のトーンが、変になっていた、はやて。

はやての言う通り、どこから、入ったのか、談話室のテーブルの上、

黒い鳥が、いた。

「はやてちゃん、

ミッドチルダにカラスは、いないよ。

それに、この鳥、………

凄まじい、魔力の気配、……

ただの、鳥じゃ、なさそうだよ」

なのはが、すばやく、珍妙なる侵入者の分析を行った。

「ほう？」

さすがは、高町なのは。

的確な分析力じゃな。

安心せい。

ワシは、おぬしらの、敵ではない」

人の声で、言葉を話す、黒い鳥。

「こ、この鳥、私の事を知ってる？」
驚くなのは。

「誰でも、知つとるわ！

おぬしは、自分の立場を、良く知るべきであろうな」

変な鳥に、怒られるなのは。

「はあ」

なんとなく、素直に答えるのはだった。

「——って、その声！」

サリーさんじゃないですか？

どうしたんですか、その姿は？」

まどかが、鳥の声に気づいた。

「そう言われると、——そうだな」

言われて、初めて気づく、シグナム。

「やっと、気づいたか？」

元気そう、……では無いな、鹿目まどか、よ」

まどかの様子に気付く、『鳥のサリー』

もしくは『サリーの鳥』？

「はい。——」

サリーさんは、知っていたんですか？

こうなる事を？」

まどかは、サリーに尋ねた。

落ち着いて、話が出るように、シャマルが、まどかを、談話室の椅子に座らせる。

「ワシは、後から、リインに聞いたのじゃ。

リインは、お前の、魔力を全て、吸収した時、全ての能力が、一時的に、
極限まで、増幅され、未来を見たらしい。

リインが、お前に、説明しなかったのは、
余計な、不安を与えたくは、無かったためじゃ。

未来とは、常に変動し、不安定な、モノであるからな。

例えば、リインと同様に、——お前も、最初に、魔法少女になった際、
過去と未来の全ての事象を、見たと思うが、——その時に、今の状況を、
予知していたか？」

「そう言えば……今の状態は、全く見ていませんね。

——そして、私は、なのはさん達との、出会いさえ、予知していません」

「うむ。

お前さん——つまり鹿目まどかを、中心とした魔法少女のグループ。

そして、高町なのはが、中心である魔導師のグループ。

この2つのグループは、本来、宇宙の歴史の流れとしては、出会う予定では、無かったのじゃ」

「歴史の予定が、無かった？」

「それが、実際には、11年前に、最初の接触が起こり、その後も、互いに大きく影響しあった。

双方とも、巨大な魔力を有する者達だったため、この2つのグループが、

出会った事により、多次元宇宙の、因果律に『ゆらぎ』が、生じて歴史の流れ、時間の流れ、そのものが、大きく変わってしまったのじゃ」

「そんな？ そんな事が？」

「これは、ワシの勘なのじゃが、全く別の世界からの、何らかの干渉が有ったように、思える」

「全く別の世界ですか？」

多次元宇宙における、別の宇宙、と言う意味ではなく？」

「ワシらが、今いる、この多次元宇宙の集合体とはまた別の集合体
が、

『外側』に有るかも、——と言う、話じゃ。

こればかりは、実際に『行つて』みないと、分からんがな」

「でも、本当に、別の世界からの干渉が有ったとして、

「一体誰が、何のために？」

「それは、ワシにも、分からぬ。

まあ、その誰かの、おかげで、お前達は、人間に、戻れた訳じやが」

「そうですね。

その誰かさんには、お礼を言うべきですよね」

「だが——分からん事を、あれこれ考えても、しかたあるまい。大事なのは——今、何をすべきか、じゃ」

「はい——」

「では、話を元に戻そう。

——結局リインの予知は、現実のモノとなった。

そこで、このワシの出番となった訳でな。

この『黒い鳥』は、ワシの生体端末でな、名前は『ゾラ』。

お前の、サポートをするために、創りだした。

こやつを、通せば、ワシの『超次元システム』のチカラを、かなり、こちらに伝える事が出来る。

しかも、この『ゾラ』の内部には、細菌サイズの
小型版では、あるが、『超次元システム』の
レプリカ（複製品）も、搭載してある。

これを、活用すれば、お前は、自分の巨大な魔力を自在に
制御出来るように、なるじやろう」

サリーの説明に、一同の表情が、明るくなる。

「そ、それじゃあ！」

一番、明るい顔に変化したのは、もちろん、ほむらである。

「だが、自分の体と心を鍛えるのも、必要じゃ。

強い魔力に、振り回されぬ、ためにもな！

予定通り、皆、鍛錬に励むが良いぞ！

これから先、この世界に迫る危機から、宇宙の平和と、人々の幸
せを、

守るためにもな！」

サリー、いや、黒い鳥『ゾラ』は、最後に、えらく気になる、事を
しゃべった。

「サリー殿、いや『ゾラ』殿？

それでは、やはり？」

シグナムは、さっき、巴マミが話した、事を思い出した。

「うむ！」

危機は、そこまで、迫っておる。

皆、精進するが良い！」

『ゾラ』は、まどかの肩に、飛び乗って、そう言った。

「はい！」

私、頑張ります！」

笑顔の戻った、まどかであった。

「私も、まどかと一緒に戦うわ！」

ずっと、そばで、あなたを、守る！」

改めて、まどかを守る事を決意するほむら。

「まどかを守るのは、ほむらだけじゃないぜ！」

友達で、仲間だからな！」

笑いながら、宣言する杏子。

改めて、自分は、とても、幸せだと思うまどか。

「やっぱり、皆がいてくれて、良かった。――」

私は、幸せ者だよ。

それじゃ、――

これから、よろしくね、『ゾラ』！

「うむ！

よろしくな、まどか！

頼ってよいぞ！」

即答するゾラ。

「私を忘れないでー。

ぼっちは、いやー」

最後に、慌てて、存在をアピールする、巴マミ。

第16章 黄金魔王の逆襲

今、再び、高町なのはは、苦戦していた。

「な、なんで、こんな事に！」

そこは、大地も、星も無い、不思議な霧の漂う、無重力の異世界だった。

「滅びを与えてあげるよ。」

高町なのは！

——お前の望んだ、その通りにね」

黄金色の魔王が、なのはに、襲い掛かる！

「うああああ——っ?!」

——話は、5日程前に、さかのぼる。

「なんで、報奨金が、出ないのよっ!!!!」

ここは、時空管理局、ミッドチルダ地上本部の、玄関ロビー、

——一般人用の受付窓口だった。

RPGゲームか、ファンタジー映画から、飛び出した魔道士にし

か、

見えない少女が、管理局の局員を捕まえて、怒鳴っている。

その後ろでは、――露出の多すぎる、黒服の、あやしい

『やたらと、胸のでかい女』が、同じくふくれっ面をしていた。

「そう言われてもですねえ、――ええと、リナ・インバースさんとサーペント・ナーガさん？

あなた方が、言われる『まどか軍団』の事件なんて、――聞いた事もありませんよ。

そんな『なかった事件』の報奨金をくれ――と、言われてもねえ」

対応している局員は、リナではなく、ナーガの『プリンプリン』とゆれる

バストを見ながら『もう早く帰れ』と言いたげな顔で、説明する。

「その事件は、2年まえに、実際に、起きたのよ！

あたし達は、フェイトさんとか、なのはさんと、一緒に戦ったんだから！

こうなったら、（ちょっと、こわいけど）シグナムさんでも、良いわよ！

誰か、あの事件の関係者は、いないの？！」

ツバを飛ばしながら、質問するリナ。

「と、言われましても、皆さん、とても、忙しい方々ですから。

私にはどうにも、——なりませんねえ」

とても、真面目な対応とは、言えない、中年の男性局員。

「ふっ！

これは、陰謀の香りが、するわね！

あの事件を、隠しておきたい、理由が、この人達には、有るのよ
！」

大きな胸を『ゆっさ！ ゆっさ！』と揺らしながら、ナーガが、
でかい声で、自分の推理を披露した。

（ぴ、ぴくう！）

痛いところを、突かれたのか、目の前の、局員の、まゆが、ぴく
ぴく動いた。

「と、と、とにかく！

有りもしない事件の、報奨金など、絶対、払えませんか！」
局員は、主張を変えない。

「あーもう！

なんで、フェイト執務官は、いないのよー！」

泣きたい気分のリナ。

「それは、——しょうがないでしょ。」

来るまでに、2年もかかってしまったんだから」

少し、しょげているナーガ。

そう、『まどか軍団』との戦いから、約2年。

あの時、——フェイトは、リナと、ナーガに、報奨金を、支払うと、約束していた。

そして、リナ達が、ミッドチルダに来るのに、2年もかかったのには、ふかーい、訳が有る。

リナ達が、住んでいる世界は、文明レベルの低い、管理外世界である。

そして、リナとナーガ以外の、——その世界の人間は、他の多次元世界の存在も、知らなかった。

当然、そんな世界に、次元船や次元艦が、行く事は無い。

そのため、リナとナーガは『自力』で、ミッドチルダに来るしかなかったのだ。

問題は、その方法である。

同じ世界内で、長距離を、魔法で空間転移するだけでも、高度な

技術と、
膨大な魔力を必要とする。

ましてや、リナ達の目的地は、遠く離れた全く別の宇宙であり、その難しさは、半端では無かった。

結果として、リナとナーガは、手分けして、強い魔力を持つアイテムとか、
その他、必要な様々な物を、入手するのに、
えらく時間がかかってしまったのである。

そして、苦勞して、来てみれば、——頼みの綱の、フェイト執務官は、
他の世界への出張任務で不在。

やむを得ず、自分達で、なんとか、管理局のミッド地上本部を探し出して、
やっと、到着したら、この有様である。

——怒るなと言われても、——
怒りたくなるのが、人情と言うモノだろう。

「そんな事、言うんだったら、——」

なんか、リナの顔色が変わった。

「はあ〜?」
相変わらずの、局員。

「暴れるぞお〜!!!」

リナは、本気で怒っているようだ。

「ちょ、ちょっと、リナ？」

ナーガも、こんなリナは、初めて見たらしい。

「いいぞ！ まどか！

動きもいい！

魔力のコントロールも、上達してきた！」

シグナムが、まどかを、褒めていた。

「は、はいっ！

まどか、行きますっ！

アンジェラ・ブレード！」

〔ブレード・フォーム！〕

ラファエルを、右腕に、装着して、魔力刀に、変形させる、まどか。

——きいん！ がきいん！ ——

——ずががががががっ！！ ——

シグナムの、魔剣レヴァンティンと、まどかの、
ラファエル・アンジェラ・ブレードが、激しくぶつかり合う。

ここは、新人魔導師の訓練施設。
その、練習場である。

——戦闘エリア設定は、ミッドチルダ都市部の、市街地だった。

レイヤー建造物である、ビルの屋上で、まどかと、シグナムの模
擬戦は、続く。

「やるな！」

なら、これは、どうだ！」

「シュランゲ・フォーム」

シグナムは、レヴァンティンを、連結刃形態にして、まどかに、
刃を、振り向ける。

鎖でつながれた、小型の、カッターは、生物の様に、獲物を狙い、
まどかを、取り囲んだ。

「そこっ！」

一度、ばく転してから、ジャンプして、体をひねりながら、
飛翔し、刃と刃の、間をすり抜け、シグナムに、接近するまどか。

「はあっ！」

「むっ！」

—— がきいいいん！！ ——

シグナムは、レヴァンティンの鞘を使って、——『喉を狙った』
まどかの、魔力ブレードの、突き攻撃を、止めていた。

「ふむ、——悪くない。」

まだまだ、だが、——短期間で、この私をここまで、追い込むよ
うになるとは。

エリオ程ではないが、——なかなかの、成長速度だ」

シグナムは、お世辞ではなく、まどかを、褒める。

「はいっ！ ありがとうございます」

シグナムに、礼を言う、まどか。

「私は、この後、用事が有るので、出かける。
まどかは、自主練か、他の者に、相手してもらってくれ。

ではな、——」

そう言うと、練習場を出て行く、シグナム。

「はい！ 行ってらっしゃい！」

シグナム一尉」

シグナムを、見送るまどか。――

「まどかちゃん、――元気になって、本当に、よかったわね。」
そう言うのは、テーブル席で、紅茶を飲んでいる、シャマルだった。

「はい。私達も、一時は、どうなる事かと、思いましたが」
笑顔で、答える、巴マミ。

ここは、窓から、外が見える、談話室の、テーブル席だった。

「まどかちゃん用の、強化メニューが、始まって、もう4カ月が、経つのね。」

『マミちゃん』は、体の方、つらくない？

なのはちゃんの、訓練メニューは、すごくハードでしょう？」

シャマルが、尋ねると、――

「う。」

うつうつ、……ぐずつ……うえええ」

なぜか、突然、泣き出す、マミ。

「えっ?!」

そ、そんなに、いつも、つらいの？

今度、なのはちゃんに、もっとレベルを下げるように、私から、言った方が、良いかしら？」

シャルは、心配して、そう言ったのだが、――

「ち、違うんです！」

実は、私だけ、なぜか、なのはさん達から、いつも、『ママさん』って、

呼ばれてて、――私の方が、年下なのに。

今、シャル先生に、『ママちゃん』って、呼んでもらえて、

それが、――

それが、――

すごく、嬉しくって、――

ふえー……うえー……

うああああーん！」

そんな理由で、泣いている『ママちゃん』だった。

「ヴィータ姉さん！ 早く特訓を、――」

杏子は、練習場で、ヴィータを捕まえて、頼んでいた。

「姉さんは、——やめる！」

——と、言うか、お前は、ザフィーラあたりに、
相手してもらえば、いいじゃねえか！」

「ザフィーラの兄貴は、今、ほむらの、相手しているんですよ。

ほむらのヤツ、格闘戦を極めるって、はりきっているらしく」

「ああ、そんな事言ってたな。

元々、射撃型なんだから、——まずは、そっちを、強化すればいいのに」

「あいつは、『どんな状況でも勝てる強さ』に、こだわっているんです。

絶対に、——自分が、まどかを、守るんだって」

「別に、万能型を求めるのは、間違っちゃいねえ。

だけど、お前らは、魔導師になって、まだ、日が浅いんだ。

接近戦なら接近戦、射撃なら射撃と、まず、1つを極めてから、
の方が、効率が良いと、あたしは、思うんだがなあ」

「じゃあ、あたしが、接近戦を極めるのを、手伝ってくださいよ！

なんで、ヴィータ姉さんは、あたしと、模擬戦やるの、嫌がるん

ですか？

あまり、話もしてくれないし」

「その、姉さんは、——やめろっ、っつてんだろ！

あたしと、お前が、話、してると、

キャラが、かぶっちゃまって、

どっちが、どっちだか、——

分かんなくなるんだよ！」

「????

何の話ですか？

それ？」

「なんでも、ねえ！

ああもっ、分かったよ！

今日は、あたしが、お前の、模擬戦の相手してやらあ——！」

「!!!!

お願いします！

ヴィータ姉さん!!」

「姉さんは、——やめろおお!!」

どっちかと、言つと、ヴィータの方が、杏子の妹の様に、見える。

ヴィータの着ている騎士服は、ミッド式魔導師のバリアジャケットに相当する防護服である。

ヴォルケンチーム4名の騎士服は、八神はやてのデザインによるものであるが——

特にヴィータの騎士服は、赤を基調とした、ちよつとゴスロリ風の意匠であり、『かわいい』と、管理局内でも、評判であつた。

（ヴィータの騎士服には、帽子も含まれるが、この帽子には、少し不気味なウサギのヌイグルミがついている）

（また、ヴィータが、2代目リインと、ユニゾンすると、ヴィータの目や髪の色が、変色し、その騎士服も、赤から、白に変化する）

杏子のバリアジャケットも、かつての、赤い魔法少女服を、完全再現したものであり、そのかわいさでは、ヴィータのモノに負けない
人気がある。

そして、この2人が、一緒にいると、赤い2輪の花が咲いたように華やかであり、どうしても、コスプレをしている、仲のいい姉妹に見えてしまうのだ。

しばらくすると、赤い服の2人は、模擬戦を開始した。

2人の戦闘エリアの設定は、どこかの、砂漠地帯である。

「ええっ?!」

リナさんと、ナーガさんが、ここに来た?」

管理局ミッド地上本部で大声を出しているのは、フェイト執務官だった。

彼女は、別の世界への出張任務が終わって、たった今、帰って来たところである。

「も、申し訳ありません！」

ま、まさか、フェイト執務官の、知人の方とは、つゆ知らず、その、失礼な対応を、——」

そう言ったのは、リナとナーガを結局は、追いついてしまった、あの局員だった。

「例の『まどか軍団』事件の話が、出ましたので、——ここでは、一般人やマスコミの、目や耳も有り、早々に追いついた方が良く」と、

思いまして」

冷や汗をかき、戦々恐々の、中年の、男性局員。

「それにしたって、——私に、連絡してくれば、こんな事には。

彼女達の、協力のおかげで、——あの時、どれだけ私達が、助かったか」

フェイトは、自分の、タイミングが、悪かった事を悔しがる。

彼女は、管理局の関係各所に、『こう言う人達』が来たら、自分に連絡を
ください——と、伝えていた。

しかし、一年以上も、相手が現れなかったのでデータ処理をして
いた者が、
この注意事項を抹消してしまったのである。

そして『まどか軍団』の事件は、——当時、はやてが、予想して
いた通り、
情報が全て、隠蔽され、その真相は、トップシークレット（最高機
密）扱い
となった。

やはり、最新鋭の次元艦が、数千隻単位で、実質たった1人の、
魔法少女に沈められた事実は、『恥ずかしくて』（名誉に傷がつく
ので）

隠すしかなかったらしい。

「腹が立ったからって、——

とんでもない事を、しでかさないと、良いんだけど」

シグナムから、リナとナーガの、人となり、を聞いていた、
フェイトは、不吉な予感をぬぐえずにいた。

（人となり、とは、生まれつきの
性質を意味する言葉。——ここでは、
対象となる人物の過去の経歴の意。
最近は、この意味で使う場合が多い）

そして、フェイトの、この嫌な予感は、すぐに、的中する事になる。

ミッドチルダの、ネオン輝く、夜の街に潜む、
『とつても』&『すごーく』あやしい影2つ。

「ねえ、リナ、……………本当にやるの？」

顔色の、悪いナーガ。

「やるったら、……………やるわよ！」

このリナ・インバースを怒らせたら、どうなるか——

目にモノ見せちゃる——！！」

こめかみに、青筋立てて、マジに怒っているリナ。

（こわひー！）と思いながらも——ナーガは、自分の口に指を、立て、『しーっ！ しーっ！』と、『小声で話せ！ と言っ合図』を送ってから——

「と言っても——やる事は、貴重なロストロギア（古代遺産）の強奪——ようするにドロボウじゃない……………」

リナに、小声で文句を言うナーガ。

「じゃかあしい！ 売られたケンカは、残さず、買うのが、あたしの、生き方よ！

それじゃ、あたしは、北東の目標に向かうから、あんたは、南西の目標を狙うのよ！

その薄着の服のために、暖かい南の方へ、行かせてあげるんだから、——
ちゃんと、やりなさいよね！」

『北東』の方角を、睨むリナ。

「はいはい、分かったわよ。

もう腹を、くくるしかないわね」

「それじゃあ、——」

「「レイ・ウィングス！！（翔封界！！）」」

これは、風の結界を、身にまとい、高速で飛行する為の——
リナ達の世界の魔法である。

2人とも、最初から、フルスピードの、低空飛行で、ターゲット
を目指した。

「どうしたの、一体？」

深夜の為、そろそろ、就寝しようと、思っていた、フェイトに、
マリエル技術官からの、緊急連絡が入った。

「ミッド北東部と、南西部にある、2つの、
管理局所属の研究所に賊が侵入したの！」

被害としては、——ロストログアを、北は4つ、南は3つ、盗ま
れたわ！」

慌てた口調で、説明するマリエル技術官。

「ええっ?! ま、まさか!」

その、まさかだった。

「誰も追っては、来ないようね。よしっ。

リナとの、合流ポイントまで、もう少しっ?！」

魔法で飛行中のナーガは、前方の空中に、人影を発見した。

「止まりなさい！」

サーペントのナーガさん！

時空管理局、フェイト執務官です。

あなたと、リナさんに、窃盗の容疑が、かかっています！

おとなしく、私に同行してください。

抵抗しなければ、弁護の機会が、あなたには、有ります。

もし、同意するなら、武装の解除を？」

フェイトが、ナーガを説得しようと、したが――

「エルメキアランス！（烈閃槍！）」

ナーガの手から、黄色い光の矢が、発射され、フェイトに向かって、

飛んで来る！

「くっ?！」

とっさに、横によける、フェイト。

これは、相手の精神にダメージを与える魔法で、直撃しても、ケガなどはしないが、その特性を知らない、フェイトらミッドチルダの魔導師にとつては、やっかいな魔法だった。

「管理局が、約束したお金を、くれないのなら、——同じくらいの価値を持つ品物を頂戴したって文句を言われる筋合いは無いわね！」

これは、正当な取立てなのよっ！」

ナーガは、そのでっかい胸を張り、夜空に叫ぶ。

やはり、説得に応じるような、ナーガでは無かった。

「そんな道理が、有りますかっ！」

プラズマ・バレット！」

フェイトの誘導式魔力弾が、金色の放電をともなって、闇夜をかける！

「はああっ！」

風の結界をまとったナーガが、高速で上昇し、フェイトのプラズマ・バレットをかわす。

「ほーっほっほっほー！」

この、サーペントのナーガに挑むとは、108年、早いっ！

我に与えん、氷結の痛み！

ダイナスト・ブレス！（霸王氷河烈！）

「うああああ？！」

ナーガが、魔法によって生み出した氷の塊を、飛ばしてきたので、フェイトは、とっさに、魔力シールドをはったが、――氷の塊は、直進しながら、大きくなった。

結果、氷は、フェイトのシールドよりも、大きくなり、――フェイトは、防御した際、硬い氷の欠片と、凍気を、手足に、くらってしまっただ。

あやうく、バランスを崩しかけるフェイト。

そして、追撃をしかけるナーガ！

「我が手につどいて、閃光となれ、
深遠なる闇より来たれ！

フェルザレード！（螺光衝霊弾！）

ナーガの手から、魔力ビームのような、白い光が、発射された。

これを、W字ターンで、高速回避するフェイト！

「ほーっ！」

実体を持つ普通の剣を手にして、上空から、フェイトに斬りかかるナーガ！

「ザンバー！」

フェイトは、バルディッシュを、長剣型の魔力刀に変形させて、ナーガを迎え討つ！

「はああああっ！」

「いやあああーん！」

フェイトの方が、スピードも、剣術も、全然上で、――
連続斬りを、カウンターで、モロにくらって、夜のネオン街に落下していくナーガ。

しかし、ナーガの着ている衣装は、風俗店に勤める女性にほとんど近い、

とっても、いかかわしいモノなので、なんか、

そのまま、そこで、夜のお仕事が出来そうである。

だが、幸か不幸か、人の少ない路地裏に落ちた、ナーガ。

そのナーガには、まだ、意識が有り、すぐに立ち上がった。

彼女は、頭を押さえて、ふらふらしている。

落下の衝撃が、かなり、でかつたらしい。

「トライデント・スマッシャー！！」

とどめと、ばかり、中距離用の、大威力砲撃を放つフェイト！

金色の3本の、光の柱は、空中で、1本の太い柱にまとまり、ナーガに迫る！

「ひっ？！」

恐怖に、すくんでいる、ナーガ。

「紅蓮の炎を、司る——暗黒の竜よ！

その咆哮を、もちて——

我が敵を、焼き尽くせ！

ガーヴ・フレア！（魔竜烈火砲！）」

——真っ赤な、火炎の柱が、飛んできて、フェイトの砲撃と、正面から、ぶつかり、

巨大な爆発を起こして、相殺した。

「リ、リナー！！」

べそをかきながら、ケンカ友達を見上げるナーガ。

「何やってんの、ナーガ？」

と言うか、そこに居るのは、フェイト執務官よね？

一体どう言つつもり？」

冷たい目で、フェイトを睨む、リナ・インバース。

「どう言つつもり——とは、こちらのセリフです。

リナさん——どう言う理由が有ろうと、盗みは、犯罪です！

そのぐらいの事は、別世界の住人である、

あなた達にも、分かりますが——」

きつい目で、リナを見つめるフェイト。

「ほほう？

自分達は、約束を反故（ほご） 〃 約束を一方的に破る事）
にしておいて、その約束した相手を、盗人呼ばわりとはね！

いい、根性してるじゃないのっ！」

リナは、歯をむいて、怒っている。

「何を言っても、建設的な話し合いは、出来そうに、有りませんね」

「建設的な話し合いを、拒んだのは、そっちでしょうが！」

「それは——運悪く、私が不在だったから——」

「そんな理由で、あたしが、納得すると思ってんの？」

「思いません——思いませんが——」

「だったら——これ以上、あたしを怒らせない事ね！」

へたをすると——この街が、消し飛ぶぐらいじゃすまないわよ！」

「?!」

リナの異様な気迫に、恐怖すら感じるフェイト。

その時——

「フェイトさん！ 伏せて！ ——」

アルティマ・シュー——

突然、背後の死角から、リナとナーガを狙って、実体弾と、魔力弾の、複合射撃が、大雨のごとく、飛来した！

「!!! ナーガ！」

後は、よろしく——！」

超音速で、とつとと、逃げるリナ。

「へ？……ぷぎゃああああー！！！」

飛んで来た、魔力弾の直撃を受けて、ビルの側面に、衝突して、
気絶するナーガ。

「リナさんっ?!」

フェイトが、叫んだが、リナの姿は、もう、どこにも、見えなかった。

「フェイトさーん」

上空から、降下してきたのは、マミだった。

「マミちゃん?! どうして、ここに?」

フェイトは、思いがけない、援軍の登場に驚く。

「なのはさんの、指示です。」

戦闘訓練の、一環としてフェイトさんのお手伝いを、皆でやりましょうって

「そうだったの。なのはが——」

「それより、——今は、リナ・インバースさんと、——そこで、失神しているのが、ナーガさん、ですよね？」

「一体何が?」

ナーガは、ビルとビルの間で、——目を回して、まだ、気絶していた。

「リナさんの、搜索をしながら、説明するね。

私の後に、ついて来て！」

「はいっ！」

ナーガに、捕縛魔法を三重にかけてから、——2人は、夜の街を高速飛行し始めた。

ちなみに——ナーガには、

『超キケン！

さわるな！ さわると死ぬぞ！
死にたいなら、すぐ、さわれ！

《時空管理局 捜査部》』と、
書かれた紙がはってあった。

——そろそろ、太陽の、昇る時間である。

早朝のミッドチルダ市街地。

「……ナーガは、捕まったか。

もう少し、オトリをやってくれれば、良かったんだけど……。――

まあ、いいか！

さーで、1人で、逃げ切れるかな。

後は、次元艦とか言う船を、入手出来れば――？」

街の上空を、飛翔しているリナ。

その前に――立ち塞がる者がいた。

「！！！！

あんたは、ええと、確か――」

リナは、相手の顔に、かすかな、記憶が有った。

「時空管理局――高町なのは一等空尉です。

リナ・インバースさん。

あなたを――窃盗の容疑で、逮捕します！」

まっすぐ、リナの目を見て、明確に用件を伝える、なのは。

「やれるもんなら――やってみなさいよっ――！」

まれに見る、対決が始まった！

――

「フレアー・アロー！」

フレアー・アロー！」

高熱を発する、小型の魔力弾を撃ちまくるリナ。

「A・C・S・ドライ……」

リナの、魔力弾をさけて、突撃しようとした、なのはだったが――

「アホかぁー！」

―― すっぱーん！――

「?!」

一瞬、リナに、何をされたのか、分からない、なのは。

リナを見ると、その手には、『スリッパ』が？

「……どこから、出したの？」

意味不明の攻撃に、戸惑う、なのは。

―― そりゃそうだろう。

どうやら、なのはは、リナに、『スリッパ』で、頭を、ぶつ叩か
れたらしい。

「ボム・ディ・ウィン！（風魔咆裂弾！）」

近距離から、風の魔法による、高圧力の強風の弾丸を放つ、リナ。

しかし――

「ラウンド・シールド！」

レイジング・ハートが、発生させた、魔力シールドに、阻まれる。

「A・C・S・ドライバー！」

「チャージ！」

「きゃあああー?!」

今度は、なのはの、突撃が、リナに、クリーンヒット！

街中に、落ちていく、リナ。

「うわ！ な、なんだ?!」

街の人達が、空から落下してきた、変な恰好の、女の子に、びっくりしている。

「うるさいわね！」

近づいて、巻き込まれても、知らないわよ！」

リナは、仰天している、通行人に、怒鳴り散らすと、再び、上昇して、

なのはに、急接近する！

「まだまだ、やれるわ！」

ボム・ディ・ウィン！」

「ショート・バ……きゃああ？！」

今度は、リナの方が上手だった！

風の魔力弾で、吹き飛ば、なのは。

「我が手につどいて、チカラとなれ！」

ファイヤー・ボール！」

吹き飛んでいく、なのはに、火炎魔法を発射する、リナ。

——どがごおおん！！——

起きる、大爆発。

しかし、これを、魔力バリアーで、防いでいる。なのは。

「はあー……ふうっ……」

なのはは、呼吸を整えた。

そして、リナを見つめる、なのは。

「デバイスのサポートが無いのに——

頭のとっぺんから、足の先まで、ドロまみれの、なのはの、
恰好を見て、大笑いする、リナ。

なのはの、美しい、バリアジャケットが台無しだった。

「あ、あ、あのね……………」

怒りに、ブルブル震えている、なのは。

「はい？」

「ちょっと——頭、冷やそうか？」

「フープバインド！」

「へ？」

——ばしゅっ！——

レイジング・ハートが、捕縛魔法を発動し、リナは、光る輪によ
って、——

体を縛られて、——動きを止められた。

「エクセリオン・スターズ……………！」

——どいどいおおおお……………！！！！！！——

「のあああああ——っ？……………！」

なのは、桜色の、複合砲撃に、飲み込まれる、リナ。

「はぁー。」

こ、これで——」

体のチカラを抜く、なのは。

だが——

「?!」

気を失って、街中に、倒れている、リナ。

その、リナの体から、禍々しい——強大な、魔力が、放射されている。

『ふわり』と、空中に浮き上がる、リナ。

そして、その、髪の毛が、黄金色に、変化していく。

——ずいじいじいじい！——

「何?! こ、これは?!」

「我が意志こそ、我がチカラ——

我がチカラこそ、我が意志——

我は混じるモノ無き意志にして、

純粹なるチカラ。

.....

——この数年間は、

気持ち良く、眠りについていたものを——

私の心地よい眠りを妨げし、愚か者は、お前か?!——」

その声は、リナの体——リナの口から、発していたが——
明らかに、リナの声では、なかった。

まるで——深い——『深い闇』の底から、響いてくるような、その声——

「ならば——」

——ぶああああん!——

リナ・インバースを中心に、『闇』が広がり、街を、おおいつくしていく!

「こ、これは、一体?!」

叫ぶ、なのはの体も、黒い闇に、飲み込まれ——

「な、なんや、アレは?!」

緊急事態発生のを、聞いて、フェイトとともに、現地に飛んではやては、信じられない光景を、目撃した。

街の一角に、『球状の闇』が、発生しており、その『球状の闇』は、

少しずつ、大きさを増しているように、見える。

「まるで『闇の書』の闇だ!」

はやての隣を飛ぶ、フェイトも驚いていた。

マミは、フェイトの依頼で、遠くで、探査中のまどか達呼びに向かったので、
ここには、いない。

しばらく前から、なぜか、仲間同士の『念話通信』が、使えなくなっていた。

「い、いや、アレからは、『闇の書』の闇より、もっとでかい、魔力反応を感じるで。」

これは、まるで、どこかの、ゲームとかに出てくる、『伝説の魔王』やな」

「伝説の魔王……………」

フェイトは、幼い頃、彼女の教育係だったリニスに良く読んでもらった、

ある、おとぎ話を思い出した。

それは、世界を滅ぼそうとする、暗黒の魔王と、それに立ち向かう、

—— 七人の勇者たちの、物語。

まだ、小さかったフェイトは、この物語に、夢中になり——

『いつか、自分と、使い魔の、アルフが、勇者の仲間となって、母親とリニスを守るため、魔王を倒すのだ』と言っては、リニスを困らせていた。

「……あそこらへんは、なのはと、リナ・インバースが、接触したと、

推定されるポイントだね。

一体何が？

それに——なのはは？」

フェイトは、はやてに尋ねた。

「想像もつかん。

普通やと、リナ・インバースが、何か未知の魔法を発動させた、としか思えんが——

結局、憶測の域を出えへんし、対処法も分からん！

あの、『球状の闇』の内部の様子が判明すれば、あるいは——」

「と言う事は、——あの中に、飛び込むしか、手は無いよ！

恐らく、なのはも、あの中にいる！」

言っが早いか、フェイトは、『球状の闇』を目掛けて、突進していく。

「ああもっ、こうなったら、ウチも行くしか、ないやんか。

昔のSF映画みたく、外側にぶつかって、『ボンッ！』にならんよう、

祈るしかないわ！」

フェイトに続いて、闇の中に、突入する、はやて。

闇の球体の中——そこは、大地も、星も、無く、
不可思議な、霧の漂っ、無重力の異世界だった。

「アクセル・シューター—— シュート！」

「無駄な、事を——」

「うわあああっ?!」

なのはが、誘導魔力弾を発射しても、その弾は、全て、『黄金魔王』の
発生させる、六角形の、薄紫のシールドに防がれてしまう。

厄介な事に、『黄金魔王』は、このシールドを張りながら、攻撃する事も、可能であるらしい。

そして、魔王の起こす、黒い爆発に、なのはは、翻弄された。

「滅びろ！」

「ああうっ！」

さつきより、大きな黒い爆発によって、なのはは、上空まで吹き飛ばされる！

もつとも、周囲には、霧が立ち込めるだけで、何も無いので、どつちが、

上なのか、下なのか、良く分からない。

——『黄金魔王』と言っても、その体は、紛れもなく、リナ・インバースのモノだった。

しかし、その肉体は、完全に、『黄金魔王』に支配されている。

リナの意志は、まったく、感じられなかった。

『黄金魔王』は、ただ、なのはの方に、手を伸ばしているだけで、——呪文も唱えないし、魔力光さえ、見えなかった。

ただ、一言、『無駄だ』とか『滅びろ！』とか、言っているだけで、チカラを振るう事が、出来るらしい。

魔王の言葉が、引き金なのか、それとも、魔王の意志、そのものが、引き金なのか、なのはには、分からなかった。

「エクセリオン・バスター！」

なのはの、中距離砲撃が、発射されるが、これも、魔王の、六角形シールドで、防御されてしまう。

「我が前に、立ち塞がりし、

滅びを望む者よ。

我がチカラをもって、

お前には、滅びを与えん」

「きゃああああー！！！」

魔王の両腕から、撃ち出された、闇の魔力砲撃とも言つべき、黒い光線が、なのはを、吹き飛ばした！！

さらに、魔王は、両手から、黒い魔力弾を、連続で撃つ！

「ぐっ！　がつー！！　ぐはあっ！！！」

次々と、魔力弾の直撃を受けて、痛々しい、悲鳴をあげる、なのは。

なのは、防御シールドも、魔力バリアーも、全て、打ち砕かれ、防御力が、極度に低下した状態だった。

「滅びを与えてあげるよ。」

高町なのは。

お前の望んだその通りにね。

滅びを望むなら従うがいいっ！！」

巨大な『闇の爪』が、なのはに、迫る！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3195y/>

魔法少女リリカル マギカ（第2話）緊急指令 鹿目まどかを抹殺せよ！！

2011年11月8日03時03分発行